別冊宝島
552

音楽誌が書かない Jポップ批評 10

CamScannerでスキャン

別冊宝島552号
音楽誌が書かない「Jポップ」批評10

目次

表紙イラスト▶[illegible]
表紙デザイン▶中山デザイン事務所
本文デザイン▶[illegible]
撮影▶[illegible]
写真提供▶[illegible]

流行音楽時報 J-POP WAOOH!!

#1 矢井田瞳
林檎似、林檎似と言われるヤイコだけど、ホントに似てるのは…意外やアノ人？……4

#2 HYPER GO号2／dream／安西ひろこ／キーヤキッスぱにっく
なんでもありのパラパラ大戦。天下を取るのはどいつだーッ！……6

#3 ザ・ドリフターズ
音楽を楽しむ方法は、すべてドリフから学んだ！……8

#4 浜崎あゆみ
Ayuの強すぎる声と〝リミックス〟は、相性がわるい？……10

#5 RIZE
第2のドラゴン・アッシュ？　いえいえ、1年半で隔世の感あり……11

「流行り歌」の心象風景……176
松任谷由実「ニッポンの女神」としてのユーミン

使える音楽スペシャル
下半身で追った「Jポップ」の記録……44

ぼくの、愛すべき「100円CD」コレクション
過去『オリコン』1位になったシングルCD編……97

〝癒し音楽〟が再ブーム？
話題のヒーリング・アルバム『image』『Nature』をめぐる一考察……166

【連載】

極私的らんきんぐ・グルメ……40
◆21世紀に是非とも復活して欲しいバンド

偏差値40からの音楽ライター予備校……88
◆編集てがけてステップアップ

覗き見〝メディア時評〟……92
◆「Jポップ」と「Jポップ批評」の未来

このビデオ・クリップがすごい！かも……100
◆今年のマイベストVC発表！

【歌版三面奇事】

①佐野元春の〝現在〟とJポップの〝未来〟……170

②中村一義。カルトをシステムと意識しちゃあ、つまらなくなるだけ……172

③室井滋&山崎ハコ……174

「英語詞論争」を総括する！……90

コラム

木村重樹の〈見るレビュー〉CDジャケット観光⬇SMAP……12
ブラウン管発今月の〝アジな発言〟……42
Jポップ経済学……46
吉田豪の「スバラしきアーティスト本の世界」……48
顔で選ぶJポップ⬇OLIVIA……85
平成演歌〝秘境めぐり旅〟⬇アイドル演歌……86
杉作J太郎の「俺のしあわせCDコレクション」⬇村下孝蔵……165
愛なき新世紀の「純音楽鑑賞講座」⬇Aiko……168
ヒットチャート〝トップ30〟シングル作品&ランダム・ノーツ……182

CamScannerでスキャン

流行り歌"斬り捨て御免"

CD&ビデオ 「丸裸」レビュー21 ——49

ゆず／倉木麻衣／ザ・イエローモンキー／鈴木慶一・矢野顕子・大貫妙子・宮沢和史・奥田民生／BLANKY JET CITY／キリンジ／KAB.／釈由美子／LOVE PSYCHEDELICO／hitomi／キーヤキッスばにっく／スガシカオ／安西ひろこ／スーパーカー／ティンパン／椎名純平／Cymbals／GO!GO!7188／ノーナ・リーヴス／ダンス☆マン／Hysteric Blue

世紀末・2大スペシャル企画

特大特集1

20世紀最後の"勝者"は、この人に決定!!

「浜崎あゆみ」をめぐる大疑問

◆"理解不能"なアナタのための短期集中・初級講座
浜崎あゆみをめぐる「大誤解」！——14

◆現役女子高生に突撃取材!!
ここが好き　ここが大好き——18

◆歌詞で見えてくる浜崎あゆみ
Ayuは何を歌わなかったか？——22

◆吉村智樹の「夜の歌謡曲」 番外編
浜崎あゆみの魅力は絶対！ そのコワさにある——28

◆正統派アイドル・ファンが斬る"アイドル"としてのAyuの現在
アイドルになれなかった女——30

◆メイク論
"ツーカーセルラー東京"のCMで扮したサイボーグこそ、"今どきの女のコ"たちの理想の姿？——33

◆ファッション論
パリやミラノはカンケーない。ジャパンアニメのごときオリジナリティを確立——34

◆30代独身女性がAyuに惹かれる理由
"恋愛"ならぬ"脱・恋愛"の教祖としてのAyu——36

◆浜崎あゆみとキャバクラ嬢と「自分探し」——38

特大特集2

「懐古」と「反省」と「再評価」を交えながら……

20世紀で封印したい名曲・名盤150

#1 あの時代の"シンボル"をそのまま「冷凍保存」！——104
#2 名盤・名曲の"呪縛"から解放するために！——116
#3 新世紀に向けて、そろそろ「卒業」しましょ！——128
#4 ほろ苦い思い出とともに……——138
#5 俺以外、聴くの禁止でしょ！——148
#6 できれば、なかったことにしたいけど——157

CamScannerでスキャン

林檎似、林檎似と言われるヤイコだけど ホントに似てるのは…意外やアノ人？

なんだかんだと言われつつ、ファースト・アルバムをチャート1位にぶち込んだアメ村娘。じっくり聞いてみたら、オルタナな意匠や人のよさそな素顔の向こうに、思いもよらぬキャラが見えてきた。

文▼真保みゆき
［音楽評論家］
▼しんぼ・みゆき
ON対決以来、なぜかプロ野球萌えした音楽評論家(笑)。ダイエー城島、近鉄中村(紀)ときて、日ハムの大島監督にはげしく興味を抱く。来シーズンにそなえ、パ・リーグ観戦用にスカパーに加入すべきか思案中。

流行音楽時報
J-POP WAOOH!!
#1
矢井田瞳

先日、大阪に足をのばした知人によると、行くレコード屋行くレコード屋、矢井田瞳のサイン入り色紙がかならず店頭を飾っているのに出くわして、たいそう驚いたそうだ。ヤイコったら、英語版シングルをイギリスでリリースしてみたり、オルタナなイメージがあったけど、けっこう日本人的にマメな娘さんじゃありませんか。苦労人の演歌歌手さながら、ニコニコしながら色紙書いてる姿が目に浮かんできて、ミョ～にしみじみしてしまったよ。

あちこちですでに指摘されているように、メジャー・デビュー曲「B'coz I Love You」が歌い回しといいグランジーな演奏といい、所属レーベルの〝先輩〟にあたる椎名林檎に酷似。激怒した林檎が移籍を口にしたとかしないとか、真偽のほどは定かではありませんが、要するに下克上的ないきさつを背負って登場してきたわけである。どんな横紙破りの不思議ちゃんかと身構えていたのに、なんや、ええコみたいやん。TBS系「情熱大陸」でも、すっぴんにボサボサ頭という油断しきった姿を披露していたし、とまあ、こちらもつられて、単なるおばちゃんと化しております。

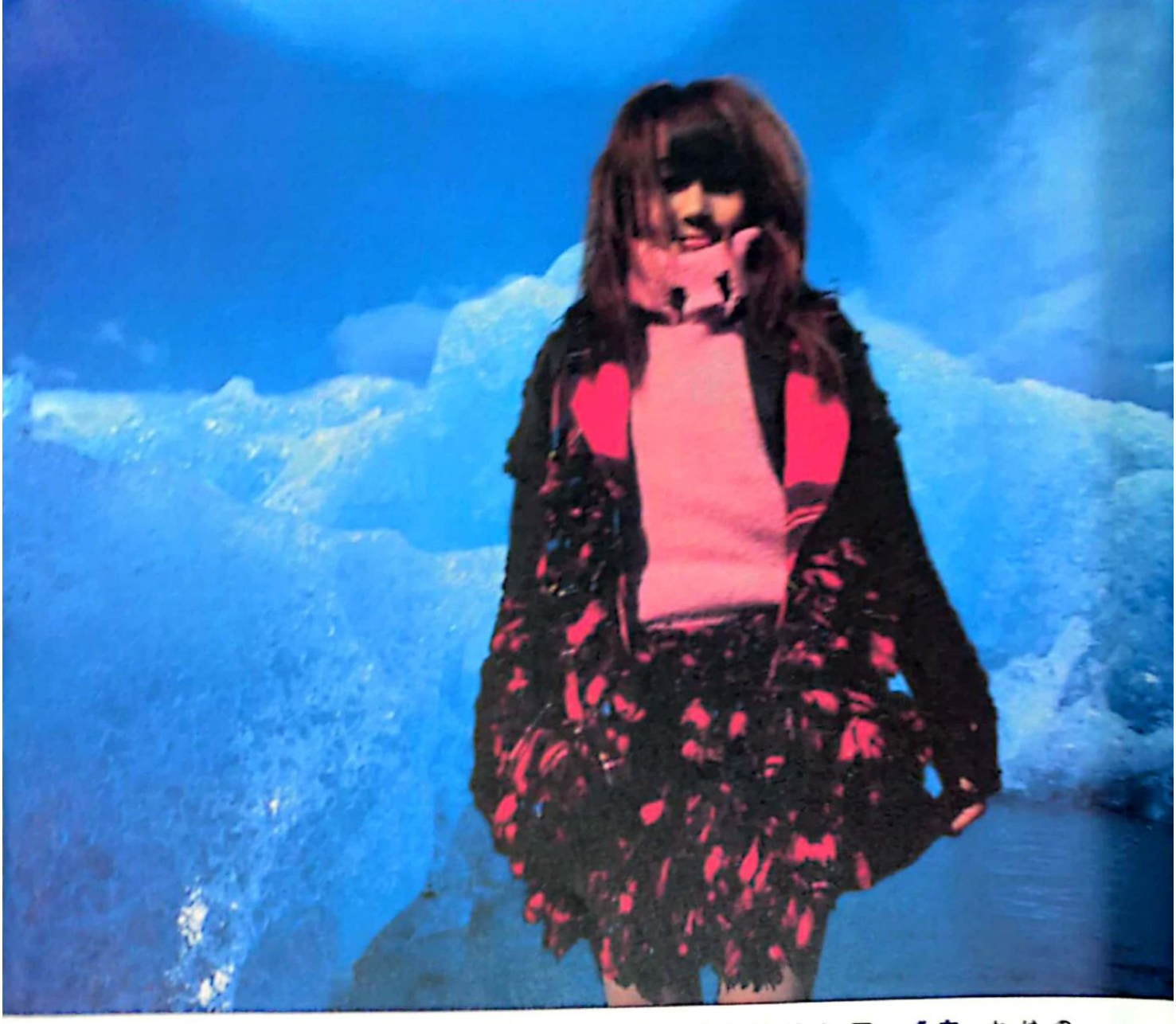
聞き手との関係の作り方が、林檎とはまるきり別物

どこからこうしたギャップが生じたのか、オリコン1位を記録したファースト・アルバム「daiya-monde」をとりあえず聞いてみる。

一聴して「やっぱアラニスなのね」。そううなずきたくなる、やかましいなりに整理がゆき届いた音作りである。いや、この場合フィオナでも(ヤイコ最近のお気に入りらしい)ジョーン・オズボーンであってもかまわない。要は最近の女性歌手がトンガった路線を標榜する場合、まず避けては通れない洋楽的意匠がきっちりフォローされているということで、その意味では林檎に似てるっちゃあ似てるわね、そもそもネタ元が隣接している以上。ことに問題の「B'coz I Love You」は、ア・カペラで歌い出す導入部から急転直下、ヨーデル系の裏声をまじえながら絶叫するというジェットコースター的展開で、こりゃ林檎の「罪と罰」を連想するなというほうが無体かもしれない。

あやうしヤイコ。そう勝手に手に汗にぎっているわけだが、でもやっぱりなにかが違う。そう反駁したい気分が、同時に私の中にはある。人のよさそうな寝起きの顔を「情熱大陸」で見たからだけじゃあ、かならずしもないんですよ。同じ迫り倒しているような歌に聞こえても、聞き手との関係

CamScannerでスキャン



の作り方が、ヤイコと林檎では、まるきり別物に思えてしかたないのである。

自己充足という名の〝やすらぎ〟の中で

「♪ダリダリン」という歌い出しが「ザリガニ」だ、いや「砂利砂利」に聞こえるぞと周囲で話題騒然だったセカンド・シングル「My Sweet Darlin'」が、そんなヤイコ独自の芸風を象徴していると言えそうだ。歌いながらどんどん気持ちよか状態になってるじゃないですか。歌詞の内容に比して歌声に切迫したところがいまひとつ希薄というか、これが林檎だったらもれなくついてくるのっぴきならない雰囲気が、まったく感じられないと言っていい。

人前に出て歌う以上、「一対一」の関係を聞き手に強いずにはおかない（という幻想を与えてくれる）林檎に対して、よくも悪くも自分が一番、歌っている自分が好き。そう聞こえるわけなのだ、ヤイコの歌って。たしかに寝起きの顔でもへっちゃらなはずですな、その伝でいくと。

我ながら意外だったが、そうしたヤイコの歌キャラには、林檎、あるいはヤイコ自身お手本にしてきたであろうアラニス・モリセットやフィオナ・アップルといったアメリカの女性歌手以上に、ドリカムの吉田美和を連想させるものがある。「あたしがあたしであたしなのっ♥」。時としてそう歌っているように聞こえる吉田の歌でありヤイコの歌。日本人て、缶コーヒー同様、オルタナ的なものの中にも自己充足という名の〝やすらぎ〟を求めるんだなァ。そんなことまで考えちゃいましたよ。

「dalya-monde」（東芝EMI）
デビュー以来ヤイコの音作りを手がけているのは、自身ソロ・アーティストとして活動していた片岡大志を含む〝ダイヤモンド・ヘッド〟。見事で心勝を女の子歌手に託すこの構図、マイラバ以降まだまだ健在みたいです。

CamScannerでスキャン

良い子・悪い娘・OYAJIまで何でもありのパラパラ大戦。天下を取るのはどいつだーッ！

いつの間にやら国民的ステップ。オイシイ市場にヒットを狙う武者たちが絶賛乱入中！　ここからゴキゲンな国産ダンス歌謡は生まれるか？

流行音楽時報 J-POP WAOOH!!

#2 dream／安西ひろこ／キーヤキッスぱにっく／HYPER GO号2ほか

文▼丸目蔵人
［評論家］
▼まるめ・くらんど
音楽、映画、アジアのサブ・カルチャーをメインに評論。衛星デジタルラジオ「MUSIC BIRD」にて、「アジア大作戦」紹介（参照 www.tfm.co.jp/MB/）。

「みんなの体操」よりも国民に浸透？

くすぶり続ける山火事のように、ときおりあちこちの草むらがパッと燃え上がる。そんな散発的盛り上がりを続けながら、いつの間にかミッキー・マウス、志村けん、怪人ゾナーから、天童よしみまでがフォローするに到ったパラパラ。すでにユーロマッハなお姉さんばかりじゃなく、各年代にも普及し、小学校の運動会を伝えるニュースでは親子そろって楽しそうに踊る光景もレポートされていた。ひょっとすると、新生「みんなの体操」よりも国民に浸透しているのだろうか。

実際、J-ポップとしても、[illegible]あゆみのリミックス集「SUPER EUROBEAT presents ayu-ro mix」だけで60万枚を越えるセールスを記録したというから、すこぶるおいしいマーケットなのだが、「これだ！」と言えるオリジナル・ヒットが思い浮かばないのも不思議な話。てなわけで、既存曲のユーロ・リミックスに限らず、パラパラを視野に入れた新譜をリリースする動きがようやく盛んになってきた。

ポストSPEEDの筆頭と見なされ、アイドルの枠にも組み入れられてきたdreamは、NIKOのメガ・ヒットをカバーした「NIGHT OF FIRE」で本格的にユーロ～パラパラ・シフトを取った。とはいえ、メンバーの松室麻衣が手掛けた日本語歌詞は無難なところに収まっていて、全体に原曲との違和感も強く、まだまだ可愛らしいというイメージが先行。本来、ターゲットとしたいはずの女性よりは、オトコ受けしているのも痛し痒しってところである。

いっぽう、dream結成の元となったオーディション（応募者12万人）から敗者復活した3人組キーヤキッスは、コギャル的な存在感を強めて差別化を図ったが、dream以上にコアなファンに支持されるという状況。ストリートのカウガールを意識した前作「Lucky Girlでいこう」などは、うたかたの歌謡ファンには要チェックな出来映えなのだが、どうしてもモーニング娘。に対するメロン記念日（それともTMCボンバーか）のような位置づけに甘んじてしまう。

そこで、心機一転メンバーを7人に増やし、ユニット名も「キーヤキッスぱにっく」と控えめにチェンジ（バカルディがサマーズに改名するよりは分かりやすい）。シングル「私の彼は石油王」はダンス☆マンが編曲を手掛けただけあって、それこそモー娘。の「LOVEマシーン」に近い仕上がりになっている。まぁ、代替品、パチもの、リサイクルがゴッチャに流通しているシーンだから、全然ヘーキというか、これが戦略ということになるのだろう。

伏兵、野武士も斬り込んで、めざすは下克上！

ほかにも、女性メンバーだけとなったFolder5、ファッション誌関連のオーディションで選出されたユニットHappie、一過性にせよタメロ、

CamScannerでスキャン

野放しぶりが存在価値となっているHYPER GO号2など、伏兵、野武士も戦場に斬り込み済み。よく見ればバブル期のセクシー・ユニット並みの乱立ぶりだ。

構図の悪いスナップ写真が蛍光マーカーで隙間を埋められるように、アマチュアのつたないボーカルも高速BPMで独自のトリップ感は演出できる。ステップに重きをおかないバラバラ自体、素人臭さを武器とする傾向が強いので、フロア・ディレクターのカンペを棒読みしていた安西ひろこの「True Love」も、それなりに商品化されている(裏声部分にはちょっとハマる)。

また、ダンシング・ベビーが忘れ去られた今となっては遅きに失した感もあるが、西岡純也によるCGでキショイ魅力を押しつけてくるN.W.O.(NEW WAVE OYAJI)の「Oyaji Para Para」も、時代のあだ花という扱いで、そこそこ遊べるはずだ。

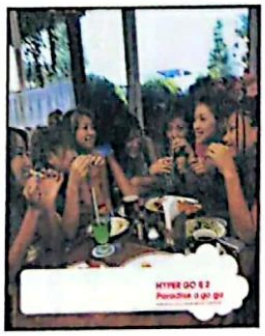
ともあれ、まだまだ下克上の余地は残っている。70年代ディスコ全盛時の浅野ゆう子「セクシー・バス・ストップ」、ドクター南雲とシルバーヘッドホーン「ソウル若三杉」に匹敵するキャッチーな国産ダンス歌謡が、今後ガンガン出てくることを期待したい。

HYPER GO号2、イェーイ!

OYAJIもイェーイ

キーヤキッスばにっく「私の彼は石油王」(エイベックス)
中東情勢とは何の関係もない脳天気ソング。下地にボニーMもあるが、むしろMAX「恋するヴェルファーレ・ダンス」を連想。新旧メンバー混交というだけに、ユニット内でインティファーダが無いよう願う。

安西ひろこ「True Love」(エイベックス)
同じフィールドに立ったHYPER GO号2の面々もカリスマと仰ぐ存在。東京ドームのイベントで見せたバック・ダンサーつきパフォーマンスはぎこちなかったが、それも当人の魅力か。孝行娘だから応援しますよ。



HYPER GO号2「paradise a go go」(エイベックス)
音はユーロじゃなくて、「YMCA」タイプのディスコ・サウンド(これもダンス☆マンの作、編曲)。「初期出荷が少なくて、家族が買うのも苦労した」なんて自らバラしてしまう情報公開性もご愛嬌。

N.W.O「Oyaji Para Para ~いーんじゃない 2001~」(ワニーレコード)
キャラの強さに押されそうなところを、ヨレ気味のボーカルでうまくフォロー。本当に居たら、同じ車輌に乗りたくない加齢臭のしそうなオヤジだが、「ウゴウゴルーガ」のボディコンOLのCGと対決させてみたかった。

CamScannerでスキャン

音楽を楽しむ方法はすべてドリフから学んだ

「ドリフのズンドコ節」から「東村山音頭」まで全51曲。初CD化曲はなんと、23曲。ドリフ究極のコンピレーション『ドリフだョー！全員集合（赤盤）』と『同（青盤）』は20世紀の音楽遺産だ！

流行音楽時報 J-POP WAOOH!!

#3 ザ・ドリフターズ

文▼小川真一
［音楽ライター］
▼おがわ・しんいち
愛知県生まれ。戦前前後あちゃらか音楽偏愛家。最近のマイ・ブームは、〝後ろ向きのジョーカー〟荒木一郎『絵本』奇跡の再発に狂喜ランバブ。

「音楽を楽しむ方法はすべてドリフから学んだ」。そう、僕らのセンセーはドリフターズだった。

土曜日の8時からは親の目を気にしながらTVの前にかじりつき、学校では「チョットだけヨ」を真似して副級長にニラまれる。「ドリフの英語塾」で英語を覚え、「ドリフの早口ことば」を聞いてラップに目覚め、ファンク・ビートが妙に懐かしく響いてくるのは「ヒゲのテーマ」で一緒に踊ったからなのだ。「歯磨けよ」「ハイ・ポーズ」「いーっす」「ちょっとだけヨ」。これらの言語感覚もドリフから学んだはず。

J・POPのアーティストの中で影響を受けたミュージシャンにストーンズやジミヘンの名前をあげる奴もいるだろうが、そんなもの後からとってつけただけの話、音楽初体験はすべてドリフに捧げているはず。イギリスにビートルズが、アメリカにエルヴィス・プレスリーがいたように、日本にはドリフターズが堂々と存在していたのだよ。

ドリフの多彩な音楽性の全貌が解明される

そのビートルズとの共演体験をもつドリフターズだが、「お笑い」の部分にばかり目がいってしまい多彩な音楽性について語られる事が少なかった。その神秘のベールがベリベリと剥され、全貌が解明される時がきた。

『ドリフだョー！全員集合（赤盤）』『同（青盤）』として一挙に発売。これがまた恐ろしく超スゲぇ内容。「ドリフのズンドコ節」の〝荒井注ヴァージョン〟と〝志村けんヴァージョン〟の2種類がきちんと収められているのに始まり、雑誌『小学四年生』のオマケについたソノシートやら、酒造協会のPR盤として出された非売品レコードなんていう世紀末的なウルトラ・レア・トラックまで収められているからビックリ。全51曲中、世界初CD化の音源が23曲。もし、これが海賊盤CD4枚組3万2千円で出たとしても、躊躇なく買ってたろうな。ま、それだけ貴重なアルバムというわけだ。

最高視聴率が50%を越えたというオバケ番組『8時だョー全員集合』で人気者になったドリフターズだが、もともとは全員がミュージシャン。ジミー時田のマウンテン・ブレイボーイズのベーシストだった碇矢長一（いかりや長介）を筆頭に、カントリー&ウェスタン、ハワイアン、ロカビリーで活躍していたスゴ腕ぞろい。所属していたナベプロの先輩、クレージーキャッツの影響もありコミック・バンドに転身。ドリフも最初の頃は全員が楽器を持ってステージにあがっていたんだけど、さて、それぞれの担当楽器を答えられるかな？ さぁイッテみようぉ～（答えは左ページ下に）。

曲は素材、キャラクターしだいのビバノン原理主義

クレージーキャッツが〝日本のフィル・スペクター〟萩原哲晶という希代の作編曲家をパートナーにヒットを連発

していったのに対して、ドリフは俗曲やカバー曲をドリフ風にアレンジした曲が多い。初期のヒット曲でいうと「ミヨちゃん」は平尾昌晃のカヴァー、「ドリフのほんとにほんとにご苦労さん」や「ドリフのズンドコ節」は軍隊歌謡を再アレンジしたもの。

「曲なんてぇのは素材よ、キャラクターしだいでどうにでもなるんじゃ」

これがドリフのビバノン原理主義。この汎ジャンル没日本的思考に拍車がかかったのは、やはり志村けんが加入してから。ファンキー音頭の傑作「東村山音頭」を始めとして、JBばりの「ゲロンッパ」が飛び出す「ドリフのバイのバイのバイ」、必殺「ヒゲのテーマ」(リフレインはテディー・ペンダーグラスの曲をアナログ・サンプリングしたもの)まで、不条理なグルーヴが炸裂していく。

こうしてみると本当に色んな音楽の要素が詰まっているのがドリフターズ。そういえば加藤茶には「加トちゃんのスキャットマン」があったし、筋肉少女帯のネタになった高木ブーは、最近になってウクレレ・マンとして評価を得た。〝歌って踊って大笑い出来る〟この混浴ヘルス・センターともいえるドリフターズ・ワールドこそ、日本の音楽の原点のような気がしてくる。

「ドリフだョ!全員集合(赤盤)」(東芝EMI)

「いい湯だな」「ミヨちゃん」「ドリフのズンドコ節(荒井注バージョン)」「ほんとにほんとにご苦労さん」「誰かさんと誰かさん」など、初期の名曲を収録。初CD化の「八木節」「会津磐梯山」も収録している。

「ドリフだョ!全員集合(青盤)」(東芝EMI)

「チョットだけよ」「全員集合東村山音頭」「ゴーウエスト」など、後期の名曲を収録。「ドリフのズンドコ節」の志村けんバージョン、97年に10年ぶりに全員集合し、録音した、日本石油(現・日石三菱)のCM曲も収録。

【答え】いかりや長介(ベース)、加藤茶(ドラム)、高木ブー(ギター)、仲本工事(ギター)、荒井注(キーボード)。

CamScannerでスキャン

Ayuの強すぎる声と〝リミックス〟は、相性がわるい？

近頃の浜崎あゆみのシングルには、破裂寸前かっちゅー勢いで多数のリミックス・ヴァージョンが押し込められています。しかし彼女に限って、このスタイルは功を奏さないのではないだろうか。

流行音楽時報 J-POP WAOOH!!

浜崎あゆみ

文▼ムードマン
[DJ]
▼むーどまん
2001年1月1日は、大阪で行なわれるEYEさん主催のパーティー「EEP」で迎える予定。

「AUDIENCE」は浜崎版「上を向いて歩こう」

古くは「女岩窟王」の三原葉子さんとか、アニマル柄を身につけている女性にめっぽう眼がない小生でして、浜崎さんの3rdアルバム『Duty』のジャケおよび販促物には久しぶりに眼が、いや心が奪われました。松下由樹さんが同様にアニマル柄で出演していた某TVCM以来、数年ぶりの万歳三唱。浜崎さん、ありがとうございます。

さて、その「Duty」から通算18枚目のシングル「AUDIENCE」がカットされました。この「AUDIENCE」という曲は浜崎さん版の「上を向いて歩こう」、ある

いは「365歩のマーチ」…ですね。「さあ両手を広げて一緒に手を叩いて歩こう」という激ポジティブなフレーズが、アッパーなアレンジに身を包み幾度も幾度もループします。

トランス、ハードハウス、ビッグビート…いつものように、表題曲のバージョン違いが8曲も収録されて

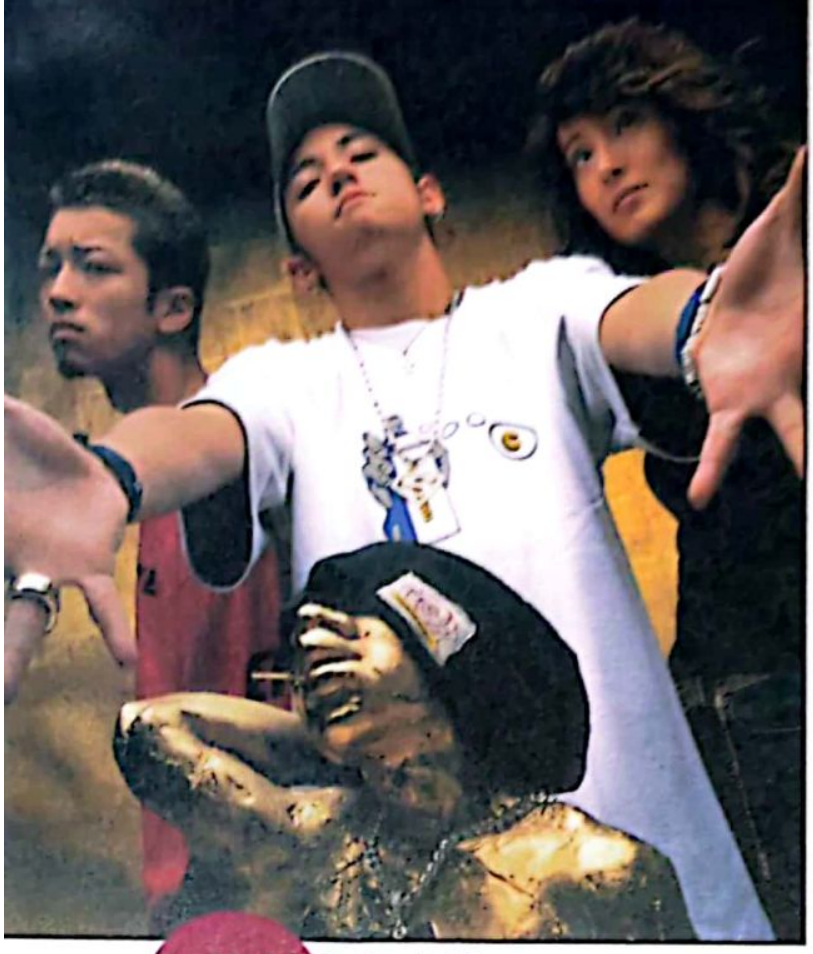
の声のみでした。ボーカルにピッチトランスポーズやフィルターをガンガンにかけても、あまり普段と変わらなく響く声。恐ろしい声ですね。声が強すぎるから、たいていのリミックスがほぼ同じように聴こえてしまう。つまり、1つのパッケージ内であ

まり差異のないバージョンが幾度も幾度も繰り返される訳で、プチ洗脳状態に陥ります。小生も眼を閉じたままついつい「両手を広げて」おり、あれ、両手を広げたままだと「一緒に手を叩」けないじゃん…と思ってハッと我に帰りました。

浜崎さんの作品がリミックス三昧になったのは、

べてのシングルに、10タイプ弱の別バージョンが付いています。シングルCDからマキシシングルへという時勢の変化に沿って、単純に収録曲を増やす必要がでてきた…のでしょうか、うむむ。浜崎さんのように声が強いアーティストには実は似合わないスタイルでは…と思うのですが、いかがでしょう。

CamScannerでスキャン



流行音楽時報
J-POP WAOOH!!
#5
RIZE

第2のドラゴン・アッシュ？・いえいえ、1年半で隔世の感あり

Jポップ＋ヒップホップなミクスチャーロックも、新世代の登場で洗練の時代に入った？

2ndシングル「Why I'm Me」の〝オレを支えてくれてたジモティーズ〟というフレーズにグッときた。郷愛の念にかられた、ジモティーズ。

この単語一つあるのとないのとでは大違いだと思う。

RIZEは、ギターのJesse、ドラムの金子統昭、紅一点ベースのTokieの3ピース。JesseはCharの息子、金子は金子マリ&ジョニー吉永の息子で「金田一少年の事件簿」出演などの俳優歴あり。ネタとして申し分ない大型新人である。

有名人の息子ということで、ドラゴン・アッシュと重ねて見られる向きもある（Charと古谷一行ではかなり趣が異なるが）。だが、ドラゴン・アッシュはJポップにヒップホップ的精神を定着させようと闘ってきた、いわば開拓者だ。一方のRIZEはその第2世代といえる。

わずか1年半だが隔世の感あり。「Greatful Days」では失笑しても、「Why I'm Me」はなんてことない。むしろかわいい。いくらヘヴィな音目指しても、漂ってくる坊っちゃん感、アイドル感、どメジャー感は、第2世代の余裕がなせる業か。ヒップホップ＋ロックのいわゆるミクスチャー的な自分たちの音を〝RIZE音〟と定義したり、ファンのことは〝RIZER〟と呼んだり、「（音楽で人を）救えます。（中略）みんなの父親になりたいですよ、俺」（『ロッキング・オン・ジャパン』9月号by Jesse）なんて放言も、本来ならツッコミを入れるべきところだが、もうどうでもいい。ヒップホップ魂とはそういうもの。わかってるって。

ZEEBRAを聴くときの、「これ笑っていいのかしら？」という戸惑いは、ここにはもうない。共闘は終わった。その安心感が物足りなくはあるが、そこを〝ジモティーズ〟が補ってくれた。今後もこの感性を貫いてほしい。

文▼安楽由紀子
［ライター］
▼あんらく・ゆきこ
73年千葉県生まれ。編集プロダクション勤務を経て、今年4月からフリーライターに。月刊誌「サイゾー」、週刊誌「SPA!」などで芸能、インターネット関連の記事を執筆。

「ROOKEY」（エピック）
デビューシングル「カミナリ」、SONYのRED HOT2000キャンペーンCMソング「Why I'm Me」を含む11曲を収録したファーストアルバム。全曲作詞はJesse、作曲はメンバー3人。

「Why I'm Me」作詞・作曲／Jesse

CamScannerでスキャン

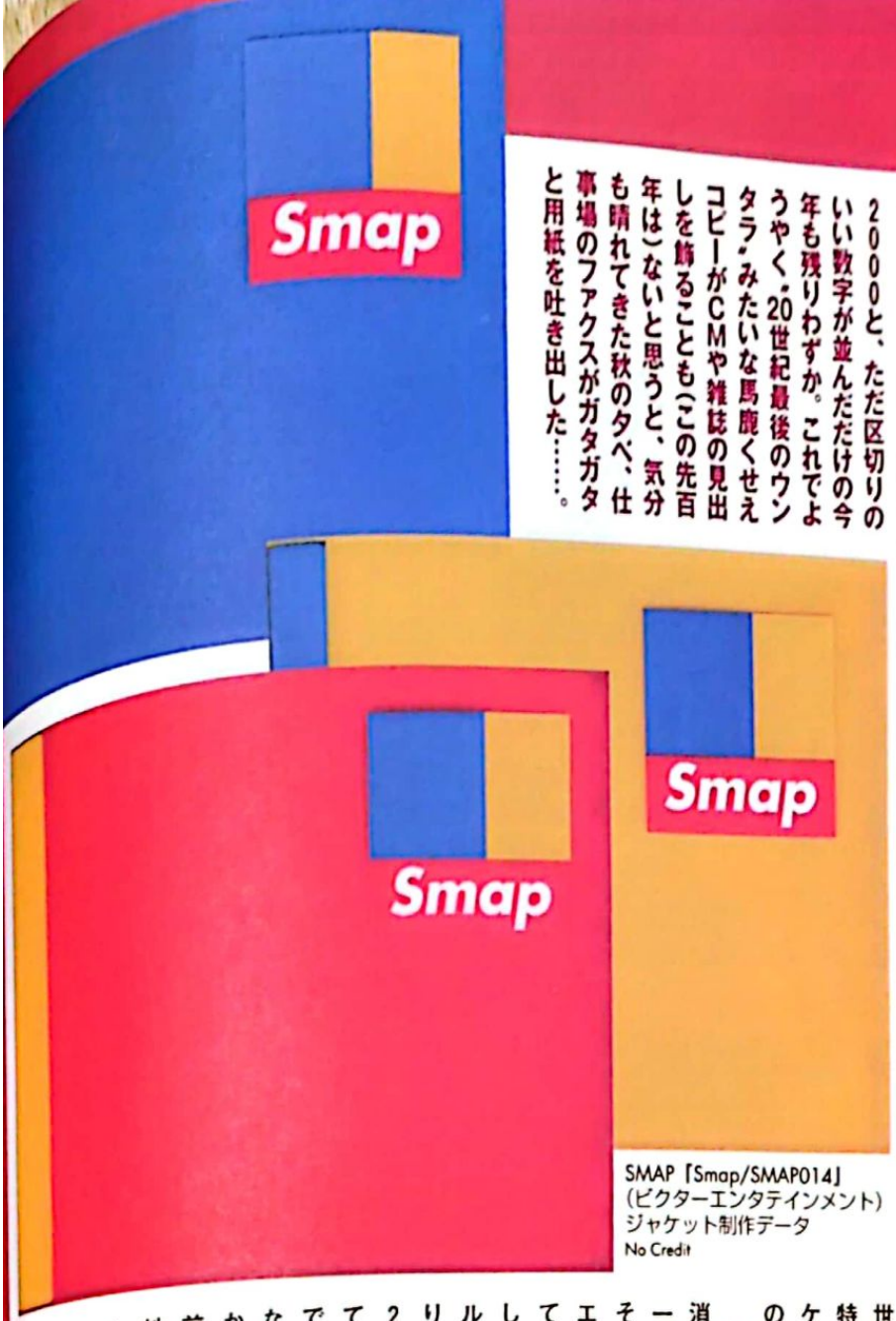
見るレビュー

CDジャケット観光

文▼木村重樹
［編集者&ライター］

テーマ8 どんなに売れても〝次世紀〟まで残らないジャケ？

2000と、ただ区切りのいい数字が並んだだけの今年も残りわずか。これでようやく〝20世紀最後のウンタラ〟みたいな馬鹿くせえコピーがCMや雑誌の見出しを飾ることも（この先百年は）ないと思うと、気分も晴れてきた秋の夕べ、仕事場のファクスがガタガタと用紙を吐き出した……。



SMAP「Smap/SMAP014」
（ビクターエンタテインメント）
ジャケット制作データ
No Credit

超人気グループの余裕が生んだ〝意味のなさ〟？

（上から続く）見れば「お世話様です、別冊宝島編集部です。さて次のJポップ批評は〈21世紀に残したくない／20世紀に封印したいこの1曲〉特集なんですが……あ、ジャケット観光も〈封印したいこのジャケ〉なんてドーデスカ」。

うっうーん（汗）。そもそも消費財としての大衆音楽の一端たる「Jポップ」において、そんな〝次世紀にまで残る＝エバーグリーンな作品〟なんてそうそうあるもんじゃないし、仮に2002年ならヒカルも林檎も（恐らく）それなりに聴かれ続けているとして、2098年にどうか？、なんてねえ……と、（たぶん）正論ではあってもさして面白味のない話を続けてもアレですか？　でもでもでも、ですよ、前の話がJポップの〝刹那性〟→ヨイショして言い換えれば〝歴史性との断絶〟を（肯定的に）示すものだとして、ならばジャケットにおいてはどうか？と思い直してみたとき……世紀なんて大風呂敷広げずとも、10年後〝このジャケが凄い！〟とばかりに衝動買いを余儀なくさせるCDがあるかね君？、ハイ、ありません（溜め息）。要は（個の基準で）封印したいという思惑と、世紀越えという（ユニバーサルな）評定……そこの齟齬、なんだろうけどね。

……という前振り（長過ぎ！）を受け、今世紀最後の〝CDジャケット観光〟が高見で見物したいのが、SMAPの最新アルバム「Smap／SMAP014」。見どころは赤・青・黄の原色プラスチック素材による初回限定プラケース3種類（中身はイッショ）。レゴのような幼児玩具のポップさを体現？、モンドリアンはだしの抽象モード？い、いや、これ（歴史性はおろか、刹那的にも）ほとんど意味ないんじゃ、ない？（だってファンのお姉さんたちだって、彼らの顔が出ていたほうが、二千倍は嬉しいでしょ？）

▶きむら・しげき▶62年東京生まれ。今年は仕事絡みで洋画をしこたま観つづけた一年でしたが、かのヨーロッパ映画界においても〝Jポップ化〟的な現象が顕著あらわれつつあったりでオールドファンとしては寂しい限り。映画監督は全員コカインを吸え！（今世紀最後の暴言）

CamScannerでスキャン

総力30ページ特集

「浜崎あゆみ」をめぐる大疑問

世紀末のJポップ・シーンにおける「勝者」は、宇多田ヒカルでも、椎名林檎でもなく、浜崎あゆみだった!?

下は中学生から上は30代の独身女性にいたるまで、気がつけば、世の女性たちの「教祖」として、時代のシンボルとして君臨する彼女だが、そもそも我々は、「浜崎あゆみ」というアーティスト(というか商品)に関して、どれほどの知識と理解があるのだろう。

……なんて、眉を寄せて真剣に考えていたら、こんな特集記事に仕上がってしまいました。

さあ、Ayu嫌いも、Ayu信者も、みんな一緒に「浜崎あゆみ」という現象をお勉強しましょ!

イラスト▶甲斐崎圭

CamScannerでスキャン

浜崎あゆみをめぐる「大誤解」!!

初心者が誤解しやすい9つのポイント!?

彼女の何が〈癒し〉となるのか？
アーティストしての才能はどの程度のモノ？
彼女の作風が変化したのはナゼ？
世の「カリスマ」「教祖」との決定的な違いとは？
意外に知られていない作詞法の盲点ってナンダ？……etc.
Ayuに関する「一般常識」を、まずはちょっとだけ覆してみたい。
Ayu信者にも認識されていない彼女の隠れた魅力って、
実は、こんなところにあった!?

特別講師▶川口瑞夫〔ライター／編集者〕

●其の壱 浜崎の日本語は崩れているか？

浜崎の歌詞に英語がひとつも出てこないのは有名な話だが、出てこないのは英語だけではない。新語、流行語、しゃべり言葉、おおげさな比喩表現といったものも出てこない。たとえば、「そういう」を「そーゆー」などと書いたりはしない。このことは浜崎本人も認めている。

〈Ayuは回りくどい表現の詞や語り系の詞はよくわかんないし、あまり好きじゃなくて…〉（「JUNON」99年10月号）

これだけを読むと、単に浜崎の頭が悪いだけのように思えるが、そうではない。浜崎の書く日本語は、今のJポップの中でも、めずらしいくらいオーソドックスで教科書的なのである。

文章術の本などを読むと、わかりやすい文章を書くための注意事項が書いてある。センテンスの構造を複雑にしない、抽象的な言葉や「あれ」「それ」といった指示語を使いすぎない、なるべく視点を固定させる――などであるが、浜崎の歌詞はそうしたルールに忠実なわかりやすい文章だ。そのまま作文コンクールだとかNHK「青春メッセージ」に応募できそうだ。

●其の弐 ファッションに興味のない浜崎ファンがいる!?

浜崎ファンの言葉を集めてみると、音楽とファッションの間にさほど相関性がないことがわかる。実際、ファン層もこれに合わせて2つに分けることが可能だ。CDを買った約250万人の中には、彼女のファッションに興味がない人も多い。

たとえば、安西ひろこのファッションが浜崎に酷似していることが、最近ネット上で論争になったが、その中には以下のような意見もあった。

〈いっそのこと、安西ひろこちゃんには、アーティストとしてのAyuにとって余計な付属物（女子高生のカリスマだとか、ファッション系、外見の話題）を全部肩代わりしてもらうに限るね〉（じょいじょい）

このことについては、社会学者の宮台真司も〈コンサートに足を運ぶと、観客の大半がアダルトチルドレンと思われるスッピン女性〉だと指摘している。

浜崎について考える場合、音楽とファッションは切り離して考える必要がある。浜崎に対するイメージが混乱してしまうのは、両者を関連付けて解釈してしまうからである。

CamScannerでスキャン

●其の参

浜崎の歌詞は"ありがち"か？

いまどきの女性ファンが、浜崎の歌詞をよく自らに重ねて、「それはいい」というのがあるが、浜崎の場合はどうだろうか。

解釈者・研究者である浜崎が、ストレートに、それはいい、と表明するとはおもえない。あったとしても、浜崎らしいクールな距離感が含まれている。

〈君にとって僕が必要なんだと思ったらウソじゃない／僕にとって君が必要だと思ったからそばにいる／いつかは君がいなくなるような気がして怖くてたまらない／夜もあるけど／それでも僕は信じてみる／単に決めたよ／そうだねこれはひとつの賭けさ〉「ぜんぜん」

他人の心の中「君にとって僕が必要かどうか」は最終的には不確かなものだから、「賭け」なのであるが、すっきりそばにいられるかどうかわからない――という不安を、浜崎は、きっと大丈夫、などと行為消しとりはしない。

●其の四

何が浜崎ファンを癒すのか？

――（1）気持ちの言語化

歌詞に優しい言葉があるわけでもないのに、結果的に浜崎に癒されてしまう人が多いのは、どうしてだろうか。

〈最近色んな事があり何も考えられない時に浜崎あゆみさんの歌を聞いて現実を冷静にとらえる事が出来ました〉（相川）

〈Ayuの影響もあって、詩を書くことをはじめたよ。（中略）自分の書いた詩に励まされたりもするんだ。Ayuはそんなことない？「ああ、こんな風に考えてる自分もいるんだ」って思うことないかなあ？〉（ゆきえ）

これらの発言を読んでいると、どこかの心理療法を連想する。自分の気持ちを言語化（対象化）することによって、気が楽になるというヤツである。浜崎のポリシーは〈客観性〉だから、自分の気持ちを言語化・相対化するのに、ちょうどいい"お手本"になるのだろう。

〈もう戻れないよ／どんなに懐かしく想っても／あの頃確かに楽しかったけど／それは今じゃない（「End roll」）

このように、〈それは今じゃない〉と感傷をばっさり断ち切ってしまうところに、一種の解放感――新しい世界が見えてくるような感覚が生まれる。

99年2月ゴールドディスク大賞授賞式で▶

CamScannerでスキャン

●其の五.

何が浜崎ファンを癒すのか?——(2)暗さの肯定

浜崎に癒されるケースにはこういったものもある。

〈「ネガティブ=悪いこと? 否定するのは私 肯定するのも私」この言葉はその中でも一番心に残ってる。何か今までの私の考え方を180度変えてくれた言葉だから…〉(未来)

〈現代の世の中ではポジティヴなもの、前向きなものを賛美する風潮があると思うのですが、あゆの歌を聴いて、楽しい時は楽しい、悲しい時は悲しい、つらいときはつらい、そのような素直な感情表現が出来る人間になりたいと思いました〉(せつか)

いわゆる〈癒しソング〉とか〈励ましソング〉と呼ばれるものは、不可避的に、暗い自分を克服すべき対象として見てしまう傾向があるが、浜崎は違うというわけである。浜崎の場合、気休め(根拠のない楽観)を否定するから、暗い過去や自分の限界を受け入れて生きていく——という諦観志向が強くなるのだ。

浜崎の歌詞が持つこうした傾向におおげさなキャッチコピーをつけるなら、「自己了解の哲学」となるかもしれない。浜崎の歌詞に過去形が多い理由も多分その辺にある。

◀TUKAの浜崎あゆみオリジナル携帯電話発表会にて

●其の六.

ちょこっと分析——浜崎サウンド

セカンドアルバム『LOVEppears』以降の作品に顕著なのは、メランコリックな曲調にテクノ系のダンスビートを配したスタイルだが、これはニューロマンティックに代表される80年代のイギリス音楽の影響だと思われる。特に、ウルトラヴォックスが持っていた叙情性に非常に近いものがある。浜崎の「monochrome」はギクシャクした感じのドラム・パターンが魅力になっているが、これはニュー・オーダーの作品によく見られたスタイルである。

また「vogue」に見られるスパニッシュ風味は、マドンナ(イギリス音楽ではない)のヒット曲「ラ・イスラ・ボニータ」を思わせるサウンド・コンセプトだ。浜崎の作品を手がけているスタッフの多くは、80年代の洋楽を聞いて育った世代だから、こうした共通点があっても不思議ではない。

浜崎には、70年代歌謡曲を思わせる部分もある。不幸な生い立ちが一種の"売り"になっているところなどは、山口百恵や藤圭子のイメージと重なってくる。現に、「SEASONS」などは、山口百恵のカバーだと言われたら信じてしまいそうな曲調である。70年代歌謡風というのは、椎名林檎やつんくの作品にもあてはまる傾向である。

CamScannerでスキャン

●其の七.

歌唱がニュアンス不足に聞こえるわけ

浜崎がわかりづらい理由の一つに、声質・唱法の問題がある。彼女の声はどこか無機的であり、表現としてのニュアンスが不足しているように感じられるからである。

比較的に感情表現がストレートな曲に「POWDER SNOW」があるが、そこで歌われる言葉は〈泣きたいだけ泣いてもいい?〉である。つまり、まだ泣いていないのである。さらに、この直前では〈そんなこと間違っていると責められようと〉と、わざわざ注釈をつけているが、「泣く」前に、ここまでエクスキューズしてしまうのは病的だともいえる。

浜崎は、母親に厳しくしつけられ、子どものころから人前で親に甘えたり泣いたりしなかったというが、そうした極度にストイックな態度が浜崎らしさを形作っている。こうした傾向を指してアダルトチルドレン的だと言えるかもしれない。浜崎の声質を理解する上で重要なのは、「感情を抑えて日常を過ごしている」という感覚なのである。

●其の八.

新作『Duty』で浜崎あゆみが変わった!

新作の評価をめぐって、10月中旬、インターネット上のファンサイト『Ayu! love! Ayu!』で活発な議論が交わされた。声質がハスキーになって、巻き舌風の唱法が増えていることに対して、違和感を唱える書き込みが多かったが、声質以外の変化に言及している発言もいくつかあり、浜崎の作風が確実に変化していることをうかがわせる。

〈(以前の作品では)あゆ自身も結構執拗に自分の傷を見せていたように思います。あゆが血を出しながら書いた詞は心を打つものがあり、傷つきながら表現された「歌」には他のアーティストのそれとは一線を画すものがありました。(中略)でも今は1stの頃さえも「過去」であり、そろそろ傷付かずに表現できてる(している)のかな?なんて思ってしまいます〉(mako)

〈「Duty」はあゆが初めて他人に自分の意見を押し付けた(言い方悪いけど)詞ですね。(中略)私はメッセージ色が強い「AUDIENCE」も受け入れにくい詞です…(とてもポソ)〉(KUMI)

多分、自伝的な色彩の強いファースト・アルバムと同じものを作るのは不可能だ。しかし、浜崎だったら〈それは今じゃない〉と答えるかもしれない。"痛み"だけが、浜崎らしさではないと。

●其の九.

浜崎が作曲をする可能性

2000年元旦の「オールナイトニッポン・コム」で浜崎はこんな発言をしていた。自分としてはもっと上の世代の人に認められたい。自分で作曲するようになれば、周囲の見方も変わってくるかもしれない――と。

もちろん、これは間違っている。浜崎に作曲の才能があるのならそれでもいいが、現在の作曲スタッフに匹敵する曲を書くのは至難の技である。

時代に鈍感な浜崎に商才があるとは思えない。そういう戦略的なことを考えるのは松浦専務にまかせておいた方がいいと思う。

◀今年3月に行われたKOSEの新口紅発表会出席時

▼かわぐち・みずお▼64年生まれ。編集者/ライター。Eメールはbatao@anet.ne.jp 最近「Jポップ批評」のファンサイトを見つけたので紹介しておきます。(http://www.kcn.ne.jp/~tsurunai/index.html)

CamScannerでスキャン

現役女子高生による浜崎あゆみのここが好き、ここが好き

ここが大好き

ギャルから原宿系まで――浜崎あゆみの『Duty』は、あらゆる女子高生のハートをガッチリつかんでしまった！

取材／構成▼本田珠男　撮影▼[illegible]　イラスト▼にらにら

コギャルの教祖から女子高生のカリスマへ――最近さらに株を上げた浜崎あゆみ。でも一体浜崎のどこがいいんだ？　わからん。そこで青島刑事を見習い「事件は会議室で起こってるんじゃない。現場なんだ」（笑）ってことで、複数のファッション、嗜好がまったく異なる浜崎ファン女子高生に取材。彼女たちが浜崎のどこにハマっているのか探ってみた。んじゃ、行ってみよう。

僕はここ最近仕事でティーンの女の子、特に女子高生に取材する機会が多い。で、10月以降女子高生に“最近お気に入りのCDは？”と聴くと、もうあらゆる子の返答が“浜崎の『Duty』！”。ギャルもヤンキーもノーマルな子も原宿系の子も。校則が厳しくギャルが壊滅状態のとある女子高でも、今年10月に「好きなアーティスト」アンケートをやったら、ダントツで浜崎あゆみが全校生徒の人気ナンバーワンだったそうだ。以前浜崎は一度やってみたいことに「ヤマンバメイクでマルキューに行きたい」を挙げ、「私がもし今高校生だったら自分もガングロにしてる」と発言していた。そういう浜崎を以前ギャルの子が「やっぱ私たちのことを理解してくれている」と熱く語っていて、なるほどねと思ったもんだ。今も、あくまで浜崎は“コギャル”の教祖的存在でしかないと高を括ってた。しかしどうやら浜崎は、女子高生大陸をほぼ完全に制圧している。

カリスマ以前の浜崎はどう捉えられていたか？

[illegible]

「浜崎ってあんまりギャルっぽくないよね」[illegible]

「浜崎がテレビに出てる時は[illegible]」

「[illegible]時、[illegible]ってしゃべってるのを見ると、ほっとする。私はよく知らないけど、[illegible]」

「浜崎パパ」が一般的な私たちの[illegible]期。ひとりは浜崎のどんな音楽性に注目してんの？

「歌詞ですね。最初のアルバムの曲じゃないけど、たとえば『I'D』の、自分をカラクリにたとえた部分とか、『君がいるからどんな時も強くいるよ』っていう詞にグッと来ちゃう。女の子の恋心をすごくよくわかっているんじゃないかな。特にバラードは全部いい」

「浜崎の何が好きって、クールだってことかな。曲調はバラードものが最高。『来ないで』、『ヒル』／非ギャルを問わず、取材したファンのほとんどの人が多数の意見。浜崎はファッション・リーダーとして、[illegible]

[illegible]

元気系ギャルAさん
公立女子高1年

●ファッション
ギャル指数100パーセント。夏はキャミ、パンツは当然ベルボトム。靴は厚底。髪は金髪。洋服は原色が多い。マルキュー（＝109）に入っている「アルバ」「ミジェーン」などのギャル系ブランドが大好き。浜崎のファッションは当然好きで雑誌とか見て研究している。浜崎が着ていたブランドの服も買ったことがある。

●好きな雑誌
「エッグ」「ポップティーン」

●クラスメイト
ギャルい子が半数ぐらい。でもギャルと普通の子の境界線は微妙（ガングロ&ヤマンバの子は絶滅状態とか）。クラスメイトの浜崎支持率は70%。原宿系の子やB系（ヒップホップ／R&B好き）、オタッキーも浜崎を聴いてる。

[illegible]

「TO BE」[illegible]

[illegible]

同様、歌い方を真似ているかもしれない。
「むかしのあゆは、しゃべりかたがブリッコっぽくていやだった。[illegible]
[illegible]
んじゃない」（＾＾
「むかしのファッションは[illegible]
[illegible]

脱ギャル系Bさん
公立共学高2年

●ファッション
[illegible]

●好きな雑誌
[illegible]

●クラスメイト
[illegible]

[illegible]

AYUは何を歌わなかったか？

歌詞で見えてくる浜崎あゆみ

文▼川口瑞夫

ファッション・リーダー、カリスマなどといった冠が表わす〝現象としての浜崎あゆみ〟を隅に置き、ここでは彼女の言葉だけをたよりに、〝詩人・浜崎あゆみ〟の実体（らしきもの）に接近してみよう。と、案外そこから聞こえる声は、〝何がカリスマだ！〟なんて声よりよっぽど個性的だったり!?

浜崎がわからない!?

浜崎のどこが良いのかわからない。個人的な好みを別にしてみてみても、浜崎が受ける理由に思い当たらない。そもそも、熱狂的な支持を集めるほどの個性が浜崎にあるのか――といった疑問を持つ人は多い。

こうした疑問に答えることは難しい。ひとつだけ言えることは、浜崎が無個性だと断定してみたところで何も見えてはこないということである。いつの時代にも浜崎みたいなガラクタ商品に熱狂するバカがいる――という、それこそ無個性な結論に落ち着くくらいだろう。

とはいえ、浜崎が無個性だという見方にもそれなりに理由がある。たとえば、以下の一節などは、あたりまえのことを何のヒネリもなく言葉にしているように見える。

〈今日がとても悲しくて／明日もしも泣いていても／そんな日々もあったねと／笑える日が来るだろう〉（『SEASONS』）

しかし、ここではもう少し確認してみたわってみたい。

◀2000年ベストジーニスト賞も受賞。

こういう場合、もっとも一般的なのは「明日はきっと笑えるさ」と歌うことである。しかし、そのように歌ってしまったら「浜崎らしさ」はなくなってしまう。「嘘をつかない」ことをポリシーにしている浜崎にとって、明日のことを安易に楽観するのは嘘であり、「過酷な現在も必ず過去になる」というのが、唯一許容できる答えなのである。

もし「明日は笑えるさ」などと歌われたら、浜崎らしくないと思うファンもいるかもしれない。〝安直な甘さ〟を排除するのが、浜崎の魅力のひとつだからである。

――浜崎の魅力に迫ろうとすると、こうした微細な差異にこだわらざるをえない。とはいえ、むやみに重箱の隅をつつくことに意味はない。意味があるとするなら、微細な差異（量的な差異）の向こう側に質的な差異が存在する場合である。ここでは、微細な差異の向こう側を見極めてみたいと思う。もちろん、浜崎本人やファンの気持ちを代弁するつもりはまったくない。そもそもそんなことは不可能だ。

まず、椎名林檎のことを念頭において、以下の引用を読んでみてほしい。

〈それと知りつつ戦略的に失望と戯れ、制度としての文学を相手に自分の役割をとりあえず演じてみせること。それは、文字通り聡明な姿勢というべきものだ。あるいは成熟したレアリスムとしてもよい、すぐれて現代的な視点だといえるだろう〉

「文学」という言葉を、「Jポップ」とか「自分探し」といった言葉に置き換えてしまえば、そのまま椎名林檎論として通用してしまう文章である。世にあふれる椎名評のほとんどは、これと同じものだ。

もちろん、この一文は椎名林檎について書かれたものではない。蓮實重彦が『凡庸な芸術家の肖像』（88年・青土社）の中で、マクシム・デュ・カンについて述べた文章だ。デュ・カンはフロベールと同じ時代（19世紀中盤）に活躍した芸術家で、当時はそこそこ有名だった。しかし、現在では本国フランスでも忘れ去られている「凡庸な芸術家たち」の一人に過ぎない。蓮實は、そのデュ・カンの姿勢をフロベールと比較して次のように評している。

〈文学をいまだに才能の問題だと信じきっているギュスターヴ（・フロベール）のそれ（姿勢）に較べてみた場合、時代の歩みというものをはるかに正確に反映しているものといえるだろう。ギュスターヴが選択したのは、時代遅れの愚鈍きわまりない姿勢だ〉

椎名林檎もデュ・カンと同じように〈時代の歩みを正確に反映して〉いる。戦略に長けていたデュ・カンは最初の長編小説に『遺著』という題をつけたが、椎名が同じことをしても誰も驚かないだろう。実際「やっつけ仕事」なんて曲があるくらいなのだから。さ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

くわしく説明するなら、こういうことである。戦略の重要性を知るデュ・カンは、努力を積めば大作家になれると信じているフロベールに忠告の手紙を書く。「われわれはもはや、一夜にして有名になれたような時代には暮らしていない」と。これにより2人の友情は破滅してしまうが、皮肉なことにフロベールは5年後、処女作『ボヴァリー夫人』で「一夜にして有名」になり、デュ・カンの名前を文学史からかき消してしまう。現在、デュ・カンはフロベールに嫉妬し続けた文才のない野心家として、一部の研究者に知られるのみである。聡明な時代認識などというものは、流行の一種にすぎないのかもしれない。

とはいっても、浜崎がフロベール並みの才能の持ち主だとか、浜崎の音楽には普遍性がある――などといいたいわけではない。そんなことは誰にもわからない。ただ、次のようにはいえるだろう。浜崎の鈍感さや時代錯誤性を指摘して、それで安心してしまうわけにはいかないと。

浜崎の歌詞の稚拙さを笑う人たちは、「気の利いた表現」に価値があると思っているにすぎない。それらは、つきつめれば「人と違っていたい」という凡庸な欲望にすぎないのである。現に、浜崎はこう歌っている。

〈別に誰より先を歩いて行こう／なんて気持ちはなくってね／だからと言って誰かの後ろから／ついてくワケでもないけどね／君らの誰かが／YESだ！って叫んだ時には／僕は並んで／YESだ！って叫ぶだろう〉（「AUDIENCE」）

もちろん、聡明な人ならこう反論するだろう。こう歌うことによって、浜崎の「人と違っていたい」という欲望も満たされている――と。この指摘は正しい。多分この矛盾を解消することは不可能だ。こういうところに浜崎の《正直さ＝鈍感さ》がある。しかし、以下ではその《鈍感さ》から何が生まれてくるかを考えてみたい。

浜崎は想像の世界を否定している。《想像》の反対概念は、普通に考えるなら《現実》とか《事実》だが、浜崎にとって《現実》とはどういうことを指すのだろうか。少なくても、浜崎にとってのそれは生活のことではない。彼女の歌詞は日記的ではあるが、日常の具体的な出来事を書き記しているわけではないからだ。その証拠に、彼女の歌詞から生活感がある言葉（「シャンプー」とか）を見つけ出すことは困難だ。

たとえば、浜崎は「僕らは幸せになるために生まれてきた」とは歌わない。それらはあくまでも《想像》であって、《事実》のように真偽の判定ができないからだ。実際には、浜崎は次のように歌っている。

〈僕らはきっと幸せになるために／生まれてきたんだって／思う日があってもいいんだよね〉（「immature」）

浜崎にとって現実的なのは「僕らは幸せになるために生まれてきた」という《想像》ではなくて、そのような《想像》を思い浮かべている自分自身なのである。同じような傾向は他の曲から見つけることができる。

〈昔どこかの誰か顔も覚えていないような誰かにね／聞いた話を何故だか今頃ふっと思い出している／（中略）／不完全なまま　生まれたボクらはいつか完全な／ものとなるために／なんて言いながらla la la...〉（「And Then」）

この詞においても現実的なのは、過去の会話を思い出している自分自身である。浜崎自身は「不完全なまま……」というレトリックに対して、冷ややかなスタンスをとっている。

こうした姿勢を指すのであれば、浜崎のことを哲学的と形容するのは間違いでないかもしれない。たとえば、デカルトは『方法序説』で《考えている自分》を疑っている。浜崎が《想像》の世界を避けるのも、彼女が《考えている自分》を疑う視点を持っているからである。

デカルトは真理を探求するにあたって〈感覚は時にわたしたちを欺くから、感覚が想像させるとおりのものは何も存在しない〉と仮定したが、浜崎も同じようなことを考えている。

〈思い出なんて　いつも都合のいい様に蘇るじゃない〉（「SIGNAL」）

デカルトと浜崎に共通しているのは、自分の感覚を疑う姿勢であり、探求や作詞にあたって自身に制約を課してい

CamScannerでスキャン

る点である。デカルトは若き日の決意を以下のように書き記している。

〈知らないことまで知っていると言いふらす人間どもの手管（てくだ）や広言にも、もうだまされまい、と思っていた〉（『方法序説』）

デカルトには〝無責任な言葉〟にだまされたという苦い経験がある。それは浜崎も同じだ。

〈悲しみも苦しみも何もかも分け合えばいいんじゃないなんて／カンタンに言うけどねそんなこと出来るならやってる〉（「And Then」）

〈たいして意味ない言葉たちばかり紙にならべてる／詞でも書いたかのような気になってla la la…〉（同）

これが「詩」ではなく歌の「歌詞」を指していることは明らかだ。ここで

浜崎あゆみ オリジナル・アルバム・レヴュー

『A Song for XX』（99年1月発売）

ファースト・アルバム。自伝～私小説的な傾向が強く、自意識過剰な少女の思春期を綴った半生記といった趣きを呈している。3枚のアルバム中でもっとも、生身の浜崎が見えてくる作品なので、浜崎ワールドを理解するためにはマストのアイテム。浜崎は当時、シングルで出せなかったネガティブな自分を表現したと発言していた。ブックレットの内容も、現在のグラマラスなビジュアルと比べるとノーマルな印象で、地方出身者のマンション生活を切り取ったようなドキュメンタリー風の写真が並んでいる。星野靖之の作品を中心とした楽曲群も、サウンドより曲の良さを重視している感じだ。

『LOVEppears』（99年11月発売）

「TO BE」から曲提供をはじめたD・A・Iの作品が大半を占めるセカンド。直前に発表された「Boys & Girls」や「A」には、各10種類以上のリミックスが収められていたが、本作でもほとんどの曲にダンスビートが導入され、ファーストに比べるとサウンド面での充実が目立つ。歌詞も、私小説的な傾向が弱くなり、恋人たちの姿を観察した「appears」など、匿名的なテーマが増えている。ジャケットの〝白あゆ〟や、同時発売シングルの〝黒あゆ〟など、

CamScannerでスキャン

浜崎がこだわっているのは、言葉に対する責任感である。一度は書けない、録音の世界ではだめ、という浜崎のポリシーには、無責任な言葉を発したくないという思いがある。だから浜崎はデカルトがそうであったように、（責任ある言葉＝正しいこと）を探求する。

科学的な思想から生まれたリアリティ

デカルトは一般に近代合理主義の開祖といわれている。彼は『方法序説』に示された方法論にしたがって、数学、医学、物理学、天文学、気象学などの理論を作り上げている。[illegible]するなら、浜崎の[illegible]も「科学的」と呼べるかもしれない。ちなみに、小学校時代の担任教師は、浜崎は理数系の得意な子どもだったと証言している。そんな浜崎の理数系の頭脳は、本質の表面について問われたときに、以下のような言葉を導き出す。

「未来っていうのはね、未来はね、未来じゃなくて過去にあると思うの。（中略）だから、浜崎みたいな人間には、未来はないかなって。過去を知ってるから、その過去があるからこそ未来があるわけで、過去を捨てた人間には未来っていう言葉はないわけよ」（2000年5月31日『オールナイトニッポン・コム』）

浜崎は、未来について考える前に、「未来という観念を持つ人間」の構造について考えたわけである。この発言に現象学の影響を感じ取る人もいるかもしれないが、それはどちらでもいい。これが現時点における浜崎の科学的な思考なのである。

20世紀末の現在において（科学）という言葉は評判が良くない。その大もとであるデカルトに対する批判も多い。しかし、そうした時代の流れに[illegible]係であるところに、浜崎の独自性がある。浜崎の言葉が他のJポップにないリアリティを持っているのだとしたら、そのリアリティは浜崎の科学的な思考から生まれているのである。

【参考資料一覧】

※以下に、本文を書くにあたって、参考・引用させていただいた書籍とWWWサイトを挙げておきます。

❶ [illegible]『浜崎あゆみサクセス』（00年・[illegible]）
❷ [illegible]『浜崎あゆみ[illegible]』（00年・[illegible]）
❸ [illegible]『[illegible]』（00年・[illegible]）
❹ AYUMI WORLD研究会『浜崎あゆみ[illegible]』（00年・[illegible]）
❺ [illegible]
❻ [illegible]
❼ デカルト『方法序説』[illegible]（[illegible]・[illegible]）
❽ 【[illegible]】 http://www.jah.ne.jp/~takidani/Ayu/Ayu.html
❾ 【AYUMI WORLD】 http://village.infoweb.ne.jp/~Ayumi/
❿ 【Ayu! love! Ayu!】 http://www.fureai.or.jp/~poichi/poipoi/Ayu/
⓫ 【[illegible]】 http://www.softixs.com/~music/
⓬ 【[illegible]】 http://members.tripod.co.jp/setsuka/

[illegible]

ビジュアル面での話題性を強調したが、多くの人を浜崎に[illegible]イメージは、この時期に確立した。

[Duty]（00年9月発売）
通算3枚目、オリジナルとしては「SEASONS」をはじめとする[illegible]

吉村智樹の「夜の歌謡曲」……番外編

浜崎あゆみの魅力は絶対！そのコワさにある

自分に課すものが多すぎて、目一杯膨らんで破裂寸前の風船みたいな浜崎あゆみ。彼女の魅力はいつ割れるかコワイけど見てしまう、風船ゲームに似ている。

TEXT▼吉村智樹（フリーライター／放送作家）

たとえ寿命が縮もうとも聴かずにはおれない

僕は浜崎あゆみがコワイ。そして浜崎あゆみの魅力はそのコワさにあると思う。

彼女にしか見えていない人間を凝視するような目、メールが文字化けしたような言語感覚、そういった〝見たまんま〟のコワさは、もちろんある。しかし僕が一番コワイのは彼女の「偏執的なまでの律儀さ」だ。

98年4月に歌手デビューしてからこちら、彼女はほぼ2カ月間隔で新譜を発表し続けている。だから歌手デビューしてまだ約2年半しか経っていないのにシングルだけで18枚もリリースがあるのだ！（そのなかには1枚にタイトル曲だけでも4曲、収録時間75分55秒という前代未聞の「A」もあるから表題曲はもっともっと多い）。短期間にシングルを連発して話題作りをするアーティスト戦略は珍しくもないが、ここまで律儀にハイペースをキープし続け、そのどれもが売れているアーティストは浜崎あゆみをおいて他にいないだろう。その姿はまるで〝短い周期で必ず現れる、〝全力疾走しながら恐怖新聞を配達しにやってくる女〟のようだ。

恐怖新聞などと書いたのはなにもファンを煽りたいからではない。浜崎あゆみの曲にはたとえ寿命が縮もうとも聴かずにはおれない魔な魅力がある。

彼女の曲には「タイトルは必ず英語。歌詞には「ゴール」とか「ストーリー」とか小学生でも日常使う単語以外、英語は使用しない」という鉄の定義があり、それが小賢しい理由からではなく「歌詞に英語を使わないのは、あゆが20年間以上日本語に親しんでいて、英語には馴染みがないから。タイトルが英語なのは、日本語にすると曲の意味が単一的に受け取られそうでイヤだから」という実にわかり易い訳合いからなのだが、さりとて18枚ズラリ並べて、この鉄則がえんえんと貫かれているのを見ると眩暈に似たものを憶える。

デビュー曲「poker face」から今日まで作風がまるで揺るがない。漫画でも2年半も連載すると主人公の顔が変わってしまうものだが、彼女の曲にはそれがない。線を引く時は必ず定規を使うと決め、定規がないと線がまったく引けなくなる人がいると聞

いたことがあるが、彼女の作風はまさにそれで、ファンの求める「あゆ像」からは

破綻してゆく危険性を常にはらんでいる

新曲「AUDIENCE」など律儀の極致である。たぶん長期にわたる大仕掛けの

コンサートで耳を傷め中断したにもかかわらず、待っていてくれたファンのありがたみが沁みいってできた感謝の曲なのだろうが、なにもアーティスト本人がそこまで曲のなかで深々とおじぎをしなくても。これはもうお歳暮、いや「快気祝い返し」である。30万枚限定という販売方法が、それをよりリアルなものにしている。

また、同時期に放映が開始された某社のマロンチョコレートのCMに悲鳴をあげた方も多いだろう。浜崎あゆみが寿司屋のカウンターにひとりいて、ケースの中のウニを指さして

「栗……」

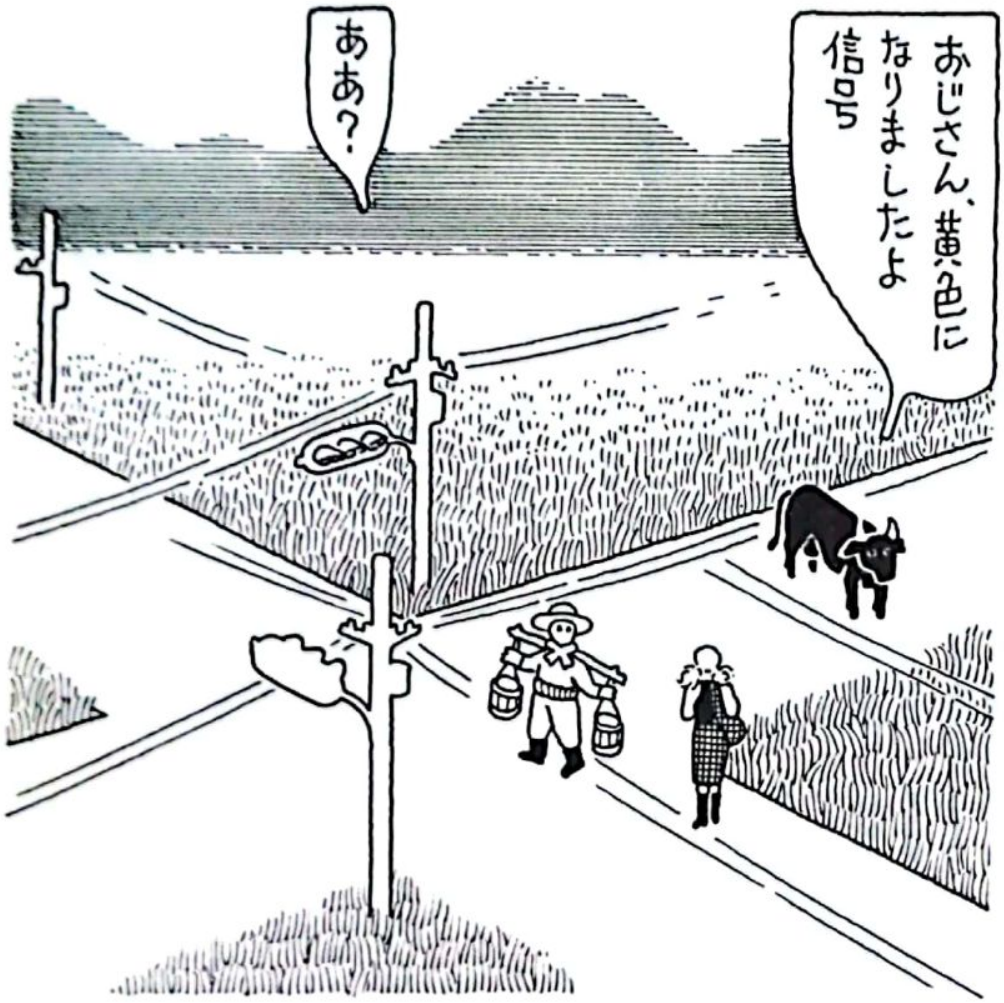
とだけ呟くあのCM。タイアップ曲など一切なし。静寂のなかで、ただひとこと「栗……」とだけ独語するあのCMは、サイコホラー映画のワンシーンのような恐怖がある。誰しもが実は思っていた「浜崎あゆみって、なんかコワイ」が最悪にして最良の形で昇華している。「浜崎あゆみはファッションリーダーである」なんていう凡庸な視点に括縛されていては絶対に成立しなかった傑作CMである。

アーティスト・イメージになんらプラスにならないであろうあのCM。彼女がそれを引き受けたのは「自分がどう思われ、何を求められているのか」が完全にわかっており、それをまっとうしようとしたからではないか。

「いい意味でファンを裏切りたい」と言いながら本当にファンを裏切ってしまうアーティストが多いなか、彼女は決して誰も裏切らない。そして裏切らないと決めたがゆえ、自分に課すものが大きすぎて破綻してゆく危険性を常にはらんでいる。自分を愛し、ファンを愛し、自分を拾ってくれたavexを愛し、愛するものが多すぎて浜崎あゆみという風船は2カ月ごとにパンパンに膨らんでゆく。

いつ割れるか、コワイけど見てしまう。浜崎あゆみの魅力は風船ゲームに近しいコワさだと思う。

だ。これは「完璧主義」というのとは、またちょっと違うだろう。



イラストレーション／ひさうちみちお

▶よしむら・ともき▶12月16日(土)、22日(金)、東高円寺のUFOクラブでDJやります。新刊「ビックリ仰天！ 食べ歩きの旅」(鹿島出版)が12月中旬発売予定。表紙は友人ミミヨさんです。http://kimi-plan.to/usr/mkgif.cgi?41264126

CamScannerでスキャン

正統派アイドル・ファンが斬る
"アイドル"としてのAYUの現在

"アイドル"になれなかった女

文▼宝泉薫【著述業】

「アーティスト」として語られることの多い浜崎だが、元々は、男性ファンを当てこんでのアイドル・デビュー組。では、「アーティスト」ではなく、あくまで「アイドル」の進化系として彼女を眺めたとき、そこではどんな表情が読み取れるのだろうか?

浜崎あゆみは、ジョン・レノンに似ている。――と書けば、大抵の人が褒め言葉だと思うだろうが、世の中にはジョン・レノンのような存在を疎ましく感じる人もいる。ポップスの無名性を重視するなら、ポール・マッカートニーのあり方及び受け容れられ方こそより健全な気がするのだ。

ひと昔前、巷ではユーミンとジョン・レノンが師走の風物詩だった。筆者はどちらも嫌いだったが、特に後者には辟易し、ある友人はその心理をこう分析してみせた。

「資本主義は無視できるけど、宗教となるとそうもいかないもんなぁ」

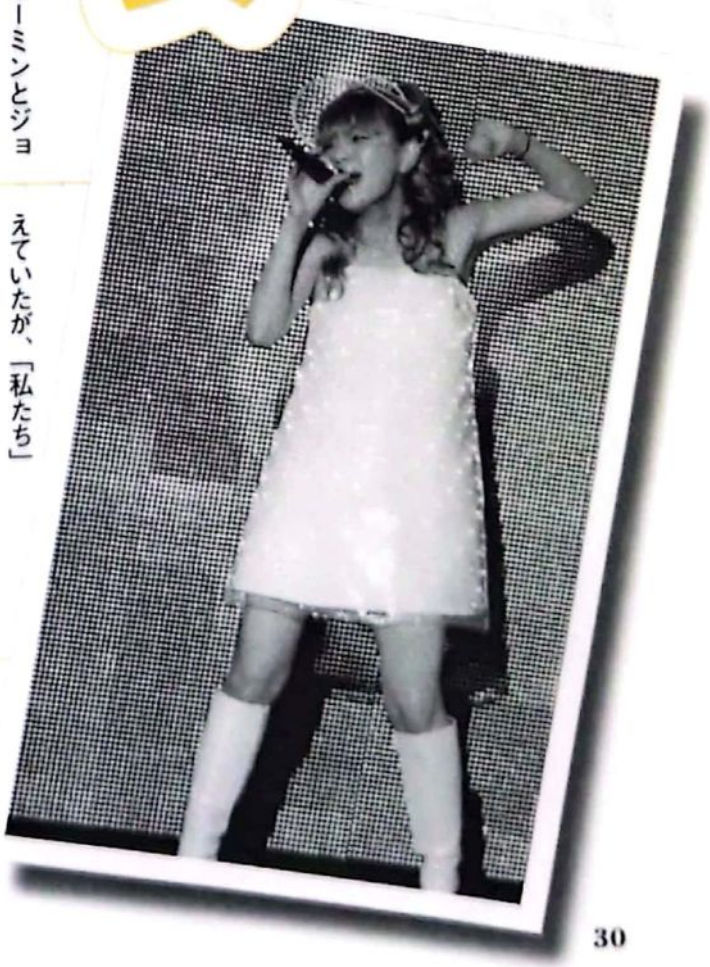
そう、日本人のジョン・レノン好きには多分に宗教的なところがある。音楽を聴くだけでは飽き足らず、テレビで生前の映像を崇めたり、埼玉新都心にミュージアムという名の教会まで作って詣でる――という具合に。先日、オノ・ヨーコ未亡人(=女教祖!?)がワイドショーの取材に「私たちは今でも彼のことを愛している」などと答えていたが、「私たち」なんて言い方ができるのも、多くの信者の存在を確信できているからだろう。

芸能が生み出した疑似宗教――じつは浜崎あゆみにも、同じにおいを嗅ぎとってしまうのである。

いわゆる"アイドル"とは似て非なるもの

とまあ、大仰な入り方をしてみたが、編集部の注文は"アイドルとしてのハマサキを論じてくれ"というものだ。が、それには少々無理がある。彼女はいわゆる"アイドル"とは似て非なるものだからだ。

今さら言うまでもないことだが、彼



CamScannerでスキャン

女は〝アイドルになれなかった女〟である。七歳のときから地元・福岡でモデル活動を行ない、十四歳のとき、ドラマ『ツインズ教師』で女優デビュー。当時の雑誌には、その頃サンミュージックで一緒だった安達祐実を彷彿させる愛くるしい表情で、ロリータ体型に水着をまとい「人なつっこい性格なんです」などとぎこちない媚を売る姿が記録されている。その後、ドラマ『未成年』で多少注目されたり、ユニットという形でラップのCDを出したりしたものの、アイドルとしての本格的なブレイクには至らなかった。

この挫折体験が、芸能人としてのトラウマになったことは想像に難くない。もともと彼女は、中学の体育祭でウンコ座りをしてメンチを切る（のち、写真誌が発掘）ようなヤンキー系で、不良がぶりっこアイドルとして更生するというのは、芸能界ではむしろ正攻法の自己実現にあたる。裏を返せば、正攻法に失敗してしまったことが、彼女の芸能人生を屈折させていくわけだ。

こうして、スタアになるのをあきらめかけた彼女。だが、〝奇蹟〟が起きる。エイベックスの実力者・MAX松浦に認められ、歌のレッスンを開始。十八歳の夏には、NYに単身滞在してヴォイストレーニングを行なうという〝修業〟を命じられ、彼女はこのとき〝神の啓示〟のような出来事を経験したらしい。現地の貧しい男の子に、無気力な人生観を語ったところ、「それはいけない。今は二度と来ないんだから」と諭され、それ以来、つまらなかったトレーニングも「もっと上に行くためっていう気持ちで受けたら、時間がすぎるのを早く感じるくらい」面白くなったというのだ。

翌春、B級アイドル時代の歴史をプロフィールからは抹消して、〝転生〟した彼女は、

「歌を〝うたわされる〟んじゃなくて、自分から積極的にやれるようになったんです」

と告白している。とはいえ、正攻法で一度失敗しているだけに、目指したのは〝アイドル〟ではない。それは、〝アーティスト〟もしくは〝異形のアイドル〟とでもいうものだ。

宗教としての浜崎あゆみ

と、ここで、思い出されるのは小泉今日子。彼女もまた、ヤンキーからぶりっこアイドルへという自己実現を目指したが、レコ大新人賞の五人から漏れるという挫折体験が引き金となって、髪を刈り上げ〝本音のアイドル〟を標榜するに至る。これが思いのほか上手くいったので、その後も変容を繰り返し、アイドルともアーティストともつかない奇妙な形でしぶとく生き残ってきたわけだ。

ついでながら、小泉はオノ・ヨーコの曲などもカヴァーしている。さらに、夫・永瀬正敏の〝カップヌードル〟CFや、夫婦で行なったエセ芸術的パフォーマンスを思うと、夫婦で日本のジョン&ヨーコを狙っているのではという、うがった見方すらしたくなる。だが、これも当然といえば当然で、ジョン・レノンこそ〝脱アイドル〟から〝カリスマ〟への道を歩んだ世界的先駆者なのだ。

そして、小泉とジョンの両要素を備えているのが浜崎あゆみなのである。

例えば、筆者は『Jポップ批評2』において、ガールズ・ポップを三つの傾向に分類してみた。日常をそのまま表現する生身系、振付やコスプレを駆使した人形系、そして生命的躍動感を排除することで死の香りを漂わせる屍体系だ。小泉の場合、それらをつまみ食いしていくことで命脈を長らえてきたわけだが、浜崎の場合には同時進行でやっているような感じがする。本音を綴りながら、着せ替え人

▶ほうせん・かおる▶64年岐阜県生まれ。〝演歌〟連載では久々に「よい子の歌謡曲」ノリの原稿を書いてしまいました。〝封印名盤〟特集も含めて、今回は多少〝加藤秀樹〟が入っちゃってますね（苦笑）。

CamScannerでスキャン

形かサイボーグの如きパフォーマンスを続け、ついには喪服を着てヴィデオを制作……。そこに、ジョン・レノン的な宗教性まで加わるのだから、鬼に金棒だろう。

その〝宗教〟についてはすでに指摘されているように、相田みつをみたいだと評される自作詞にしても、現代の念仏踊りというべきパラパラとよく合うユーロビート調のサウンドにしても、宗教が信者を獲得するには不可欠な、わかりやすいファッション感覚にあふれている。

むろん、その中核にあるのは〝教祖〟である彼女自身が発散するアダルトチルドレン的な雰囲気だ。幼い頃に両親が離婚し、自分の居場所を求めてさまよってきた少女が、自己愛を満たすための救済を求めて歌う姿は、どこか〝自称・生きるのが下手な人〟たちが書く癒し本にも似ていて、同じような人たちを安らがせているのかもしれない。宮台真司あたりが浜崎に関心を抱くのも、つまりはそういう関係性に惹かれるからだろう。

筆者にとっての浜崎は、まるで着メロのような存在

しかし、浜崎を〝宗教〟たらしめる最大のカギは、あの声にある。ヴィブラートの少ない金属的な質感は、なんだか携帯電話の着メロみたいだ。同じ系統の鈴木あみ（どちらもお腹よりノドで歌っている感じがする）よりは性能がよさそうだが、昔は本人ですら嫌っていたほどのアクの強い声である。

とはいえ、ファンにとってはたまらない魅力らしい。勝手な推測になるが、無機質で冷たく、ともすれば凶暴性すら感じさせるあの声が、現代人の殺伐とした気分に合うということなのだろう。それでいて、彼女は外部との関係を遮断するのではなく、むしろその声を振り絞り、顔をゆがませながら、自分を愛し、他人につながりたいと訴える。それはまさに、一人でいることを志向しながら携帯電話が手放せないという、現代にありがちな矛盾的構図と同じだ。浜崎のファンには少年やコギャル以外に、二十代後半から三十代にかけての独身女性がついているといわれるが、そういう女たちにとって、浜崎の歌は友人や恋人からの携帯電話と等価であり、その声は着メロ同様、一種の〝福音〟と化すのかもしれない。

だが、筆者はあの声が、どうにも駄目なのである。そればかりか、浜崎型の〝つながりたい〟という叫びにもついていけない。そういえば最近、コーヒー会社が〝ジョン・レノン・ケータイ〟プレゼントなどという企画をやっているが、〝癒しビジネス〟とでもいうべきその手の世界に取り込まれやすい音楽とはなるべくおつき合いしたくないというのが、本音だ。

もちろん、〝信教の自由〟を邪魔するつもりはない。音楽を聴いて救われる人がいるなら、けっこうなことだ。しかし、最後に一言だけいわせてもらおう。携帯電話にハマる人の気持ちはわからぬでもないが、街なかで鳴る着メロはやはり疎ましい。筆者にとって、浜崎あゆみとはそういう存在である。

CamScannerでスキャン

ヘアメイク論

"ツーカーセルラー東京"のCMで扮したサイボーグこそ、"今どきの女のコ"たちの理想の姿？

AYUのメイクが、若い女の子たちに支持される、最大の理由とは？

TEXT▶マーガレット／小倉東［ドラァグクイーン／ヘアメイク］

浜崎あゆみの顔の特徴といったら、やっぱり離れた目と長い鼻ね。それに、エラ張り顔。いわゆる「魚顔」ってヤツかしら。

ヘアメイクをする立場から言わせてもらえば、この「魚顔」っていうのが、結構、作りがいがある顔なのよ。顔の変化をつけやすいし、化粧映えのするタイプ。だから、白AYU・黒AYU・豹AYU……って、AYUは自分の「魚顔」を最大限に利用して、いろんなイメージを演じられるわけね。そこらへんが、今どきの女のコに受けている秘密かも。それが証拠に、「白AYU」は、ガングロを一掃したほどの影響力があったというものね。

かつてメイクは、それをする人の個性を引き立てる手段と考えられてきたけれど、今どきのコはメイクで引き立てるべき個性、つまりその人の"実体"なんてまったく信じてない気がするの。彼女たちの関心は、もっぱら表層、作り上げられるイメージに向かってる。"コギャル"であれ、"ヤマンバ"であれ、"アムラー"であれ（古いか）、彼女たちはなりたいモノになるだけ。ある意味、確信犯的ね。

必要なのは、"ルーズソックス"や"茶髪"、"奇抜なメイク"……といった記号。で、それらは出来うる限りマスの方が、作り上げられるイメージは堅牢になるわ。だから、彼女たちへ「みんな均一で個性がない」という批判は無意味よ。彼女たちには、人と違うこと＝個性的＝「私」なんて発想はないもの。それよりは、なることの出来るイメージの数こそが自分の存在証明よ！とばかりに、さまざまな「私」を演じ分ける。きっと、それが今をサヴァイヴするために必要な「私」の持ち方だということを、感覚的に把握してるのよ。あっぱれね。

そんな今どきの女のコたちのカリスマであるAYU。マスカラを何度も重ねて、まるで化学繊維のようになったまつ毛。ファンデーションを丁寧に、完璧に作り上げられた肌は、あたかも樹脂で出来ているかのよう。"ツーカーセルラー東京"のCMでAYUが扮したサイボーグこそ、結局は彼女たちの理想の姿なんでしょうね。つまり、操られている、もしくは操られている振りをしている限りは、けっして傷つかないで済むってことかしら、ね？

イラストレーション／ゴッホ今泉

▶まーがれっと／おぐら・とう▶たぶん日本で一番美しいとされるドラァグクイーン

CamScannerでスキャン

ファッション論

パリやミラノはカンケーない。ジャパンアニメのごときオリジナリティを確立

ギャルのしたいファッションを、いつもジャストのタイミングで見せてくれる浜崎あゆみ。常に半歩先をゆく彼女のセンスの秘密。

ナビゲーター▼イマーム今村【女性誌編集者】

鋭いメンチに気合いで勝ってきた女

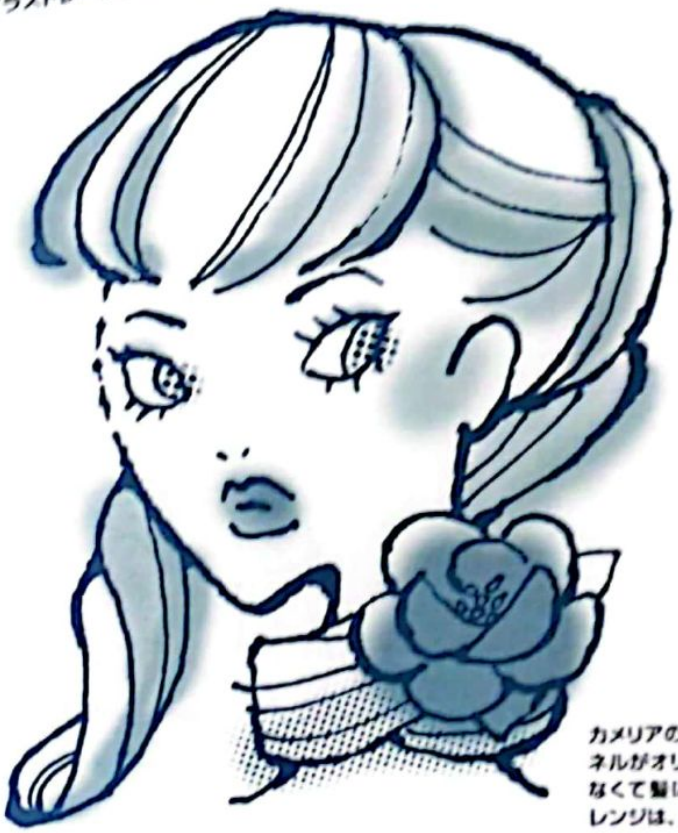
最近、ファッション関係の仕事が増えて、そのスジの方々と会う機会も多いのだが、目に目に強くなっていく私の思いは「ファッション業界はヤンキースピリッツの濃度が濃い」。

日本のアパレルメーカーの社員、スタイリスト、ヘアメイク。みな洗練された装いで、一応、ビジネスというシステムの中にはまりこんではいるものの「あんた、絶対昔ワルかったよね！」と言いたくなる顔つきと強い視線は数多い。相対する人間を「おしゃれかどうか」「自分の仲間に入れてやってもいいかどうか」瞬時に判断するため、きり気なく切られるビジネスメンチ。気合いと気合いのぶつかり合い。これ即ちヤンキー魂、イッツ・ア・ヤンキーワールド。

浜崎あゆみがファッションリーダーであるという状況を考えていると、日本社会におけるヤンキー魂の重要さ、根強さがクローズアップされてくる。ファッション関係者にもおしゃれっぷりが評判だというあゆは、鋭いメンチに気合いで勝ってきた女。ヤンキーの心、ヤンキーのみぞ知る、といった感もある。

いっぱうそれを取り上げるマスコミ側には、「不良と仲良くはできたけど、自分は悪になりきれなかった」タイプが多いと思われ、果たし得なかった憧憬みたいなものが手伝い、あゆというリーダーをもてはやす。支持するギャ

イラストレーション／飯刀由美



カメリアのコサージュはシャネルがオリジナル。胸元じゃなくて髪につける渋谷風アレンジは、あゆのアイディア。

▶いまーむ・いまむら▶JJガールになれていたら、こんな不幸な身の上にはなっていまい、と思う32歳、独身。

CamScannerでスキャン

カラフルなプリントが再評価されてるブッチのワンピース。「TO BE」のジャケットで着ているのはレア・アイテム。

ルはギャルだから、露出が多いほど好きになっちゃうし、目が大きいとかバービーみたいとかいってるうちに思うツボと真ん中だ。

弱者系の女の子たちが選んだ、身の丈に合ったリーダー

しかしひとくちにギャルといっても、顔グロに代表される、強面なギャルばかりが信奉者ではないらしく、9月27日発売のニューアルバムのプロモーションもあったと思うが、たて続けにあゆを見かけた雑誌は「popteen」「non-no」「nicola」「V-V-i」。「V-V-i」では連載も持っており、「JJ」じゃなくて「V-V-i」ってとこがミソ。梅宮アンナのお嬢ぶったファッションリーダーぶりを、じつは心よく思っていなかった「どちらかというと弱者」系の女の子たちが選んだ、身の丈に合ったリーダーなのかもしれない。あゆが雑誌で着用したため、問い合わせが殺到したという「クレージュ21」のニットは、ライセンス契約の国内生産で7000円程度。あゆが髪に付けて流行らせたコサージュも、お小遣いでじゅうぶん買える値段だし、すでに渋谷の街では花つけてた過去もあり、取り入れやすかったはずだ。

たとえあゆが高価なヴィンテージのクレージュを纏い、カルティエやブルガリを身につけようとも、そのファッションはバリやミラノとは遠く隔たったもの。しかしそんなもんは大内順子先生に任しておけ。ニッポン古来のヤンキー魂、プロフェッショナルなサービス精神、カジュアルなショーバブ感覚を武器に、ジャパンアニメのごときオリジナリティを確立すべきあゆなのだから。いずれ小林幸子にとって代わって、紅白の舞台で暴れてくれることを、ひそかに願ってやまない。

今あゆがいちばん気に入っているスタイルは、ちょっとワイルドなロック・ガール。古着のロックTシャツにスタッズの革小物。

CamScannerでスキャン

独身30代女性がAYUに惹かれる理由

"恋愛"ならぬ"脱・恋愛"の教祖としてのAYU

自身の「セックス依存症」体験をきっかけに、現代の女性の"脱恋愛"状況をテーマに取材活動をしてきたフリーライターの二本松泰子さん。最近では、雑誌やテレビなどで浜崎あゆみについてのコメントを求められることが多いという。今や「浜崎あゆみ評論家」を肩書きにに持つ(?)彼女が語る、"恋愛"ならぬ"脱・恋愛"の教祖としての浜崎あゆみ論――30代"脱・恋愛系"女性にとって、浜崎あゆみとは、どんな存在?

文▶二本松泰子〔フリーライター〕

浜崎にあって、林檎にないモノ

同年代の女性記者からの、浜崎あゆみに関する突然の取材の依頼。正直、驚きとともに、とまどいは、感覚的なものだった。

日本一の人気モデル、児童虐待的なタレント修業、暴走レイプに遭うお嬢様役、Vシネマの常連ジーンズ、二枚目に貢いだ

く応えると、改めて会って取材させてくれと言うので、会う日時を決めた……。

日本一の人気モデル、児童虐待的なタレント修業、暴走レイプに遭うお嬢様役、Vシネマの常連ジーンズ、二枚目に貢いだ

でのデビュー失敗を隠しての再デビュー…。20歳に満たない女のコの過去にしては、実に「ヨゴレ」だ。

「アイドルではなく本人がアーティストを志向した」とは浜崎を賞賛するときによく使われる惹句だが、これらの過去を引き受ける覚悟が、この言葉に現れていると私は思った。

〈責任なんて取りようもない 背負う覚悟の分だけ可能性を手にしてる/いらないモノならその同情心 まるで役にも立たないね〉(SURREAL)と歌える同もから。

葉だが、アダルト・チルドレン的な自家中毒お嬢チャン、椎名林檎とは違い、浜崎には、不良、たたき上げ、不遇を跳ね返すためにのし上がろうとする女の意地が感じられる。私はそこに惚れてしまう。

「自分探しを続けてきて、いったんは白馬に乗った王子様が現れたんだけれど夢破れた。その後の退屈に身を置くお姫様、という感じでしょうか。それが、30代くらいの脱恋愛の女たち――恋愛にまつわるプライオリティを大事にしようとする。でもココロの奥底では愛や信頼もほしい――に受ける理由の一つではないか、と分析する」(「AERA」00年7月17日号)

にわか評論家を気取る私の言葉は、こんなふうにキレイにまとめられた。脱恋愛にはいろいろ種類があり、私が指摘する脱恋愛とは「恋愛への執着が強すぎ、堕落した経験を持つがゆえ、恋愛感情を絶てた。セックスは愛や

CamScannerでスキャン

ことを指す。

本誌連載の「愛なき新世紀の「純音楽鑑賞講座」」も、愛や対幻想の呪縛から自由になろうとして音楽に救いを求める女を描くことに挑戦している。そして、私自身も「愛なくしても生きる知恵」を探っているつもりだ。

脱恋愛道を極めた者の境地

「愛なんてそんなものはない」。だから「手に入らない」ことはわかっちゃいるけど、やっぱりないと苦しい。浜崎の詞を借りて言えば、

〈人を求めてやまないのは一瞬の解放が　やがて訪れる恐怖に勝っているから〉（「Trauma」）。

そう、浜崎は教えてくれる、未来に何もないことを。

幻想を何度も掴んでは失い、その繰り返しの中を滑って漂い、自分がナニモノであるかなんてことはもう考えなくていい、浮遊して暮らしていこうと呼びかける浜崎―。

これぞ脱恋愛道を極めた者が手にする境地ではないだろうか。私は10年余の修業を経て、36歳にしてやっと辿り着いたが、浜崎は20歳にしてもうここへ来ている。

「歌詞に昔を懐かしむような内容のものが多い。それが、10代の女性より、30代にピンとくることが多いんですよ。コギャルの教祖、恋愛の教祖などと呼ばれているが、実は30代のほうが共感しているのかもしれない」（「週刊宝石」00年10月12日号）

再び私は浜崎に対し、こうコメントした。

同誌98年4月30日号で「ボランティア精神で2000人の男に抱かれた25歳美女」という記事でかつて私にコメントを求めてきた記者が、「いやー、二本松さんが音楽評論をやってるとは知りませんでしたよー」と訪ねてきた。

え？　オンガクヒョーロンなんてオソレ多いっす。私はハズカシながら井上陽水の曲すら知らなかった音楽無知で、本誌の仕事をやらせてもらうようになって、やっと音楽鑑賞の楽しさを知った人間である。何か肩書きが欲しいというので、どうしても必要なら「浜崎あゆみ評論家」というのはどうだろう、と答えた。年齢は違うが、浜崎に拮抗するくらいの「疵」を私は持っているはずだから。

「あゆマネ」の快感

音質には何のこだわりもない感じで、どの曲も同じに聞こえるためじっくり聞き込むには耐えないが、新曲が出るたびに衣装だけは激しく変わるのは素晴らしい。「Duty」の「約あゆ」に私は「おおーっ、一度やってみたい」という気持ちにさせられてしまった。

いくらなんでも約の着ぐるみはムリだが、「あゆテイスト」なギラギラ服を着てみると浜崎演じるところの「ワルぶっているつもりはないが、何となく社会の規範からズレた感じ」を身に纏うことができるのだ。

浜崎がスタイリストにトラックいっぱいの服を買ってこさせることは有名だが、「洋服ジャンキー」は男にモテたいとか自分をよく見せたいとかそういうことは目指さない。私も40歳近いというのに、総金色ラメのおへそちょい出しルックなどをしてみる。

好意など持ってくれなくていい。なぜなら、それが失われた後の孤独が恐ろしいから。誰にも誉めてもらわなくていい。けれども「自分がここにいる」という存在だけは認めてほしい。

若くないことで男から恋愛対象としてはじかれ、友人も嫁いで孤立していく私も「あゆマネ」をすることで、「好かれなくてもOK」を前提にコミュニケーションを持つことが出来るようになった。

もっとも、その後、深夜の音楽番組「AXEL」でもコメントを求められもしたが、私の「浜崎あゆみ評論家」としての仕事も先が見えている。所詮は、"才能"ではなく"システム"によって支えられているだけのことだからだ。それは、浜崎も同じだろう。

「SURREAL」（作詞／浜崎あゆみ・作曲／菊池一仁）、「Trauma」（作詞／浜崎あゆみ・作曲／D・A・I）

浜崎あゆみ"脱・恋愛系"ソング　ベスト5

1、「appears」（作詞／浜崎あゆみ、作曲／菊池一仁）
▶〈恋人達は　とても幸せそうに〜〉。見かけだけで中味は違うんじゃないのと洞察する紙拓妄想系の内容が恋に疲れた30女を癒やす。

2、「Boys＆Girls」（作詞／浜崎あゆみ／作曲・D・A・I）
▶〈"イイヒト"って言われたって　"ドウデモイイヒト"みたい〉。まさに物事の本質をつく詞。浜崎の無知性ゆえの鋭い勘を身につけろ。

3、「SEASONS」（作詞／浜崎あゆみ／作曲・D・A・I）
▶絶望三部作の代表曲か。ギャル誌においても「心に残る恋愛ソング」第1位。30女もギャルも「あの頃」をオカズに涙を出しきれ！

4、「Trauma」（作詞／浜崎あゆみ／作曲・D・A・I）
▶あゆは心的外傷後ストレス障害者か？　それとも自意識肥大症候群か？　過去の傷は武器だ！　30女よ、男を喰って喰って喰いまくれ！

5、「AUDIENCE」（作詞／浜崎あゆみ／作曲・D・A・I）
▶珍しくアップテンポなお気楽曲。〈ここへ来て共に始めよう　君達が僕の誇り〉と孤高の女王様気分を歌い上げ、周囲を呆れさせろ。

▼にほんまつ・やすこ▼64年東京生まれ。酒と精液にまみれたあばずれ修業経験を元に、性的依存心理を探く、昨今は完全まったりの境地で新宿に独り暮らすフリーライター。

CamScannerでスキャン

キャバクラ"雑誌編集統括"赤木太陽の現場報告！

文▼赤木太陽（ライター兼風俗誌編集者）　イラスト▼甲斐崎圭

浜崎あゆみとキャバクラ嬢と「自分探し」

キャバクラ嬢や風俗嬢の中には身も心も浜崎あゆみ化した"AYU隊"なる存在が急増している。彼女たちの生きがいは、いつか出会える「本当の自分」探しだ。その現場をキャバクラ雑誌『クラブアフター』の"編集統括"が報告する。

以前、『元気が出るテレビ!!』という番組内で、郷ひろみに憧れるあまりファッションから髪型、口調にいたるまで、本人のすべてを真似たイタい素人集団"郷ひろみ隊"が紹介されていたのをご存じだろうか。

スターに対する憧れが強くなると、本人に近付きたくなるのはファンの当然の心理。それはビジュアル系の追っかけを見れば一目瞭然なのだが、それが度を越すと滑稽でしかない。郷ひろみ隊は若人あきら隊でもあった。

現在では浜崎あゆみに憧れるあまり、身も心も浜崎あゆみ化した"AYU隊"なる存在が急浮上中。それも特に性風俗界、キャバクラ界にAYU隊が多いという事実がある。

「AYUはぁ～」などと、子供口調じゃいられないはずの20代前半女子に、妙な安心感とあまり現実味のない向上心を植え付けているAYU。昼は親の仕送りでバンタンのメイク養成科に通いながら、夜は中野あたりの激安キャバクラで小金を稼いでいるような女子にとりわけ信者は多い。私の周囲では。

「自分に正直に生きる。自分らしく生きる」なるポリシー

嫌いなものは「嘘つく人とあいさつしない人」。愛読書はファッション誌と相田みつを関連。このようにルックス以外に関しては、盛りのついた年頃の青年男子には手に負えない圧迫感で窒息しそうになるAYUが、彼女ら20代の水商売女子を魅きつけてやまない理由。それはAYUが歌詞や公式プロフィール、インタビュー記事などで散々語りつくしている「自分に正直に生きる。自分らしく生きる」なるポリシーにあることは間違いない。

そんなAYUの歌詞や発言をそれこそ人生の哲学書とばかりに何度も読み返し、「息のくさい酔っぱらい客を相手にしてる私は、本当の私なんかじゃない！」と、目を泳がせながら必死に語る女子を筆者

CamScannerでスキャン

は何人も知っている。彼女らがカラオケで唱うのはもちろんAYUオンリー。全身を香水からアクセまでAYUの好きなブルガリで固めた、実はどこにでもいるような快楽主義者たちだ。

風俗嬢、キャバクラ嬢といった姿はあくまで世を忍ぶ仮の姿だ

AYU隊の選別法は簡単だ。

まず彼女らは詩を書くことを常としている。そして何らかの形でそれら作品を発表するメディアを持っていることがあげられる。

いちばん多いのはネットの個人HPで、次に風俗誌が続く。実にお恥ずかしい話で恐縮なのだが、筆者が編集統括を務めている「クラブアフター」なるキャバクラ雑誌にも、なぜか風俗嬢が詩を連載するページがあったりする（実際はそのAYU隊にホレた某三流ライターが持ち込んできた企画なのだが当然のようにノーギャラ。他の風俗誌で見られる業界女子の連載の経緯も編集者が気を揉んでるだとか、ほとんど似たようなものだろう）。

彼女らにとって風俗嬢、キャバクラ嬢といった姿はあくまで世を忍ぶ仮の姿だ。あくまでアーティスティックに詩を書いてる時が「本当の自分」で「正直に生きている」時間ということになる。「今の自分は自分らしくない！」と思う（願う）、現状では恵まれていないと自覚してる女子たちが、本来あるべき姿（本当に自分らしい姿）を想像して書いたそれら電波な作品は、涙なくして読むことはできない。この世紀末の旬のモノとして、ぜひとも一読をお勧めする。

「自分らしく生きる」

まさにどこかの自己啓発セミナーで聞くような胡散くさい言葉だが、それもAYU独特の地声ボイスに乗ると、夜の帳を根城とする彼女らの耳にはすんなりと馴染んでしまう。AYU隊の生きがいは、いつか出会える「本当の自分」を追い求めること。毎日接しているボクらのような常連客は、彼女らの視界には入っていない。

悲しいかな、男が欲望丸出しで「自分らしく生きている」姿は、まるで認めてくれないのである。

▶あかぎ・たいよう▶「週刊プレイボーイ」「ホットドッグプレス」「週刊宝島」でそれぞれ月1回連載中という微妙な立ち位置の歌舞伎町系ライター。趣味はポーカー喫茶とサウナ通い。現在、禁治産者に向けて着々と落下中……。

CamScannerでスキャン

今月の"アンタが一番!"　ソムリエ▼ミヨ荻原　イラスト▼松本英子

極私的らんきんぐ・グルメ

第5回　21世紀に是非とも復活して欲しいバンド

何かを始めることよりも、終わることのほうがずっと難しい。

始めはというと、これはもう、勢いだけでなんとかなってしまうものだが、なぜか物事の終わりというのはグチョグチョになりがちだ。立つ鳥跡を濁さずなんていう状況は、通常はほとんど見られない。憧れに憧れてやっとかなった希望業種の就職が、辞める時には精神も肉体ともにボロボロという事態のほうが普通だ。"夢にあふれた就職"というのは、そのまま倒産家にも当てはまるだろう。売れれば売れるほど、経済的、人間的しがらみに取り囲まれて「解散=活動休止」は難しくなる。

そして、もっと難しいことは「復活」だ。

実際には新規結成と変わらない程度の労力と勢いで出来るだろうが、「復活」には条件がある。この条件を満たしていないと、『ドラクエ』の復活呪文のように身体半分しか復活出来ず、せっかく生き返ったのにあっけなくまたやられてしまう……なんてこともありうる。

これはファンによるニーズの問題ではない。まず第一に、解散後にも十二分に通用するカリスマがあることだが、残念なことに永室京介らを見ればわかるように、十二分に光を放っている"元メンバー"はいまさらグチャグチャになって辞めたバンド(推定)を復活させるなどというしちめんどくさいことはしたがらず、せいぜいよくって、一昨年のラッシュスター復活のようなイベント的要素の強いものになるだろう。

もちろん、いまBOOWYが復活したら是非見たいと思う。そして、たった一夜の復活劇にファンは酔いしれ、また新たな伝説を生む。真に理にかなった復活がこれだ。

もうひとつ、別にカリスマ性もないのだけれど、現時点で代替え品がないもの。「ああ、○○みたいなバンドが見たいな」と思った時に、別の新人が出ていれば、ファンはそちらに移行すればいいのだから、現場に居ったとしてもすでにかつての栄華は取り戻せないことを知る。

1位　BOOWY(氷室・布袋つき)

いまさらどうゆう顔をして集まるのか、新曲を作るとしたらまさかまたあんな感じなんだろうか……等、意外と期待するものがデカいことに気づいた。絶頂期で解散した人々はこうゆう時に強いと改めて思う。

2位　ユニコーン

本文参照。21世紀は、なんだか音楽界が"イヤでにアメリカチックにリッチ"になりそうなイヤな予感がする。日本的な貧乏くささを残したミュージシャンがひとつはいないと、大変なことになりそうだ(なんなわけないか)。関係ないが千葉でEBIを見た。カネは持ってるだろうに貧乏そうだった……。これが大切だ。

3位　TCR横浜銀蝿RS(Coffeeをつけて)

3年前に復活した時は、ローマ字部分が抜けて、私のトラウマ"遅弾きジョニー"ことキングレコード浸泡事務がバックした。世紀末に、さんざん言葉だけで「頑張れ!」とかゆう"相田みつをイズム"にはもう飽きた。身体で成り上がりを果たしたヅッパリ会社役員を正直いって見てみたい!

4位　キャロル

ジョニー大倉が「矢沢はメンバーの(生活の)ために、キャロルを復活させるべきだ」と言っていた。相当、貧乏がこたえているようだ。「成りあがり」では、彼らのことは絶対に許さないと矢沢は言っていたが、もうそろそろ勘弁してやってはどうか。またビルの5階とかで懸垂されたら面倒だし……。

5位　シャ乱Q(解散してないが)

カネは持ってるだろうに、なぜか不幸せそうなつんくが、唯一、イキイキとするのが"ボーカリスト"としてメンバーに絡んでいる時だと気づいた。新たな時代の子どもたちに、「おカネだけが幸せのもとではないのだよ」ということを教えるためにも、積極的な露出を希望。

6位　SPEED

いや、これは予言。21世紀半ばもちょい前くらいで、土建屋帝国の名にかけた"沖縄万博"が開かれ、そこで「伝説の沖縄ー」みたいな感じで復活するのでは。その頃、仁絵ちゃんはもっとブラックに近づいてるのだろうか。

7位　X(JAPANじゃないほう)

hide は鬼籍に入ってしまったし、TOSHIは放送禁止だし、TAIJIは住所不定だが、こんな状況でかつての栄華を取り戻せて、初めてYOSHIKIのワンマンプロデューサーとしての真価が問われるのでは。待ってるファンも予想以上に多いし、ま、個人的には"あーあー、あんなんなっちゃって"という感じの方を味わいたい気もする。ソッちゃったBOOWYOSHIも見たいし。

ARB復活の間違いは、リーダーが俳優になりたいという訳のわからない"跡の濁し方"に加え、すでに代替えの男気バンド（MODSもあるし）が充実していたせいではないかと私は思う。なまじ復活などしなければ"日比谷野音満員解散"の伝説で終わったろうに。ちなみに、筆者がこの復活パターンに当てはまると思うのは、現時点ではユニコーンだ。あんな、メンバー全員が死んだ魚のような瞳をしたバンドは他にはない。

もちろん、これら条件にタイミング等も加わるだろう。人間、誰しも懐古主義は少なからずある。かつて聴いたバンドの音楽を再び味わえるとなったら、無条件で喜んでしまうのが人情かもしれぬ。そういう意味では、新世紀、かつて栄華を誇った人々に新しい姿を見せて欲しいとも思う。が、えてして、そういう場合は失敗がありがちなのも事実だ。最後の条件は「まったく変わってないこと」。××というバンドは××だからいいのであって、今風のアレンジやジャンルの変更は、まったく新しいバンドとイコールになる。老舗が最先端と張り合って何になろう。

いま生きている人間が、おそらく初めて味わう新世紀。「何かを始めよう」と張り切っている人も多いはずだ。その中には「もうひと花咲かせる時が来たな」とか、秘かに復活のチャンスを待つ音楽家もウヨウヨいそうである。ま、新世紀といっても、所詮は今年の続き、張り切りすぎには注意して欲しいのだが。

8位　聖飢魔Ⅱ

ノストラダムスと五島勉による最大の被害者。本気で99年までに日本は消えるとでも思ってたのだろうか、98年頃からあからさまに動揺が隠せなかった。それはそれでしょうがないから、戻って来なさい。ってゆうか、素顔（人間の顔）で「DRUM MAGAZINE」とかに出られても……。わざわざ、KISSの二の轍を踏むことはあるまい。

9位　本田美奈子with ワイルドキャッツ

こないだ、イベント的に復活していたが、改めてみると結構カッコいい。あのまんまいけば、アン・ルイスにはなれたと思うのに、どう間違ったのだろうか。もう一度やり直すのもいいかも。アイドルが「なんとなくバンド組みたいわぁー」とワガママ言って、事務所に手配してもらう先駆けだ。いま、流行ってる元アイドルボーカリストは、美奈子の血と汗の上に立ってるようなもの！

10位　ヘビイメタル全般

アースシェイカーとか44マグナムとか、あのへんだ。いるのかもしれないが。パンクは手を替え品を替え、すっかり若者文化に取り入れられたが、ヘビメタは……。カラスみたいにたくさんいすぎるとうざったいが、トキみたいに絶滅寸前の生き物は保護、増殖させてあげたいのが人情というもの。よく考えれば、パンクのようにファッションだけに取り入れることが出来ないからこそ、本物、のような気がしてきた。レッツ、エアギター！

10位　ラッツ&スター（もちろん田代つきで）

本当は、来年春くらいに、またワンナイト復活をする予定があったと聞き、マジで悔しい。いや、敢えて田代こと予定通り、何事もなかったかのように、あるいは再び名前を替えて予定はこなして欲しい、ファンなんだもん、私は。当日の会場のヤジも楽しみだ。もちろん、ビデオチェックは欠かさずに。女性ファンはケツの見えそうなミニは必須だぞ。

《番外編》

「復活しないほうがいいかも」、または「しないほうがよかったね」ランキング（順不同）

黒夢（休止中）

"無期限活動休止"というアレでSADSを始めたのはいいが、「黒夢でよかったじゃ～んー」という声も。いま再開したところで「えっ、SADSでいいんじゃないの!?」とファンは混乱する。というより、いままでの過程で人時と清春ってスンゲー仲悪かったんだろうなあと思ってしまったという点では、また2人の絡みが見たくないわけではないが。

レベッカ（復活済み）

いくら可愛くても、若くても、NOKKOはずっとアメリカにトンズラしていて欲しかった。過去のモノをひきずるなんて、そんなのイヤよう！

ARB（復活済み）

本文参照。他のロックバンドにも言えることだが、大げさに引退した後はこっそりと復活するのが望ましい。きれいに辞める勇気と潔さ、そして、過去を一切ひきずらない男気ってなかなか難しいことだ。田中一郎はエライと思う。

LUNA SEA（12月27日解散予定）

解散のタイミングを思いっきり逃したのがイタすぎた。RYUICHIがソロになった段階で解散するならともかく、この時期に解散するくらいなら、気がむいた時にいつでも組めるように、「活動休止」で細々と糸だけつないでおいたほうがよかったかも。これで2002年くらいでちゃっかりと復活したら、気のいいファンでも黙ってはいまい（ってゆうか相手にしないんじゃない!?）。

NO.1

福山雅治

「(ヤワラちゃん)可愛っすよ、マジで」

(『HEY!HEY!HEY!』10/30 フジテレビ系)

この発言から想起するのは、詩人・室生犀星が晩年に到達したという「世の中の女性が皆美しく見える」という境地だ。そのために「花園でむせかえるようで、とても電車に乗っていられない」と漏らしたそうだが、怪訝な表情のダウンタウンを前に「ナマで見たことないでしょ!?」と田村亮子への愛を嬉々として語れる福山もまた、ただ者ではない。そして、彼を当代一の"スケコマシ・シンガー"にしたのも、この常人離れしたストライクゾーンの広さにある。

反町隆史みたいに自分の我を押し通すのではなく、どんな女性をも満足させようとする徹底したサービス精神。悪球に手を出しながらも、フォームはまったく崩れない。"女にモテたい"というミュージシャン精神にあくまで忠実にJポップを供給する姿には頭が下がる。ストライクゾーンが狭くて、内角が打てない清原みたいな筆者としては見習いたいほどだ。ま、田村亮子までカヴァーしようとは思わないけど(笑)。

NO.2

梅原恵理(0930)

「私たち、ブスですよね」

(『うたばん』11/2 TBS系)

女性ゲストいじりのチャンピオン・石橋貴明が"固まる"のを初めて見た。無名の挑戦者・0930に対し「Kiroro以来の衝撃だな」と自信満々のジャブを放ったところ「それは、ブスっていうことですか!?」とフックを返され、さらにこのカウンターパンチが顔面に命中。"本物のブスにブスと言うことはできない"という真理を楯に、身を挺した攻撃でKOしてしまった。

そこでふと、思い出したのが同じ"ブスかわいい"系の花＊花。ただし、こちらは本人たちの意識が"かわいい"に寄っている分、そのうち芸能界的な媚びを身につけ、Kiroroみたいに飽きられる可能性も大だ。その点、0930はとことん"ブス寄り"なので、バカ売れはしなくとも、細々と生き残っていけるかもしれない。あっ、それって売れ残りってことか!?

NO.3

及川光博

「すぐれていることは、悪なのか」

(『おしゃれカンケイ』11/5 日本テレビ系)

と、言われてもねぇ……。じつはこれ、子供の頃から並外れてモテたことによるヒガミやイジメといった"ミッチー王子の受難"を嘆いたものだが、ネタではなく、本気で悩んできたのだという。そして「去年、美輪明宏さんとお会いして、こういう生き方でいいんだなと涙が出ました」とも。その気持ちはわからないでもないが、マジで告白してしまうのはどうか。むしろ、"すぐれていることは悪なのさ"とうそぶき、世間の異端視を逆手に取って、コアなファンを恍惚へと導いていくことが、生き残るための唯一の手段であるはずだ。キミの敬愛する美輪明宏も、そうやって生き残ってきたのだから。

NO.4

ZEEBRA

「オレ、夢だったんですよ。日本のシーンのヤツらでね、ここのテレフォンショッキングを転がすっていうのが」

(『笑っていいとも!』10/31 フジテレビ系)

国民的お昼の人気番組に登場し「食えない頃はいろいろなことをしましたよ。結婚とかもしたし、離婚もしちゃったんですけど」と苦労話を披露したZEEBRA。別れたあとで引き取った子供のために深夜おにぎりを作ったりする、という話も微笑ましかったが、一番印象的だったのが、この"夢"だ。彼らに共通する、勝ち上がりへの願望と連帯を重んじる感覚とが両方垣間見られた気がして……。ヒップホップを得体の知れないものとして見ていたお茶の間も、親近感

CamScannerでスキャン

ブラウン管発
今月の"アジな発言"

解説▶宝泉薫［著述業］

を聞いたことだろう。"友達の輪（古い!?）"がラッパ我リヤへとつながれたこの日、ヒップホップは市民権を得たのかもしれない。

NO.5 TAKURO（GLAY）

「よくアジアの方からもお便りもらったりしますが、いずれはコンサートという形で行きたいなと思ったりします」（『ポップジャム』11／18　NHK総合）

番組宛てに届いたベトナムに住む日本人女子高生からのメールに対し、こんな思いを語ったTAKURO。ここには、かの「キャンプファイヤーで歌える曲を作りたい」という名言以来のGLAY流"ここではない、どこかへ"精神が息づいている。ロック的上昇志向というものは、内にこもるとLUNA　SEAみたいにしかならないが、外へ膨らむ分にはこの上なく幸福なのだ。

以前、筆者は「これ以上ファンが増えたら、どこでキャンプファイヤーやるんだ!?」とチャチャを入れてみたことがあるが、"ここではない、どこか"は国内とは限らない。海を渡れば、アジアという人口、面積ともに巨大なマーケットが……。20万人ライブの次に目指すのは、万里の長城10億人ライブだ!?

NO.6 Peachy

「んー、いくつでしょう!?」（『HEY！HEY！HEY！俄に2時間スペシャル』11／20　フジテレビ系）

peachyなる、ロックアイドルがいる。フリフリのピンクの衣装で、元気と愛嬌をやたらとふりまく20歳（自称!?）。見たことのない人には申し訳ないが、とにかく説明不能なほど"さむい"のだ。理由としては、本人のルックスに"無理"があることと、プロデューサー・奥居香がアイドルを"誤読"していること、そして何より致命的なのは、プリンセス・プリンセス型の"元気で可愛い女の子ロック"がすっかり古びてしまったことだろう。奥居香が手がけたデビュー曲「スーパージェットシューズ～未来を歩くくつ」にしたって全盛期のプリプリが演ればそれなりにサマになったはず。Jポップも、年をとるのだよ。

NO.7 石川梨華（モーニング娘。）／華原朋美

「モーニング娘。に入れてよかったです」（『スーパースペシャル00　第33回全日本有線放送大賞グランプリ今夜決定』11／18　日本テレビ系）

「お客さんの前で歌えるんだよ。ここだよ、こんなステージ、このステージが欲しかったんだよ、朋ちゃんは」（『進ぬ！電波少年』11／5　日本テレビ系）

いきなり朋ちゃんから入るのも重いので（苦笑）まずはモー娘。・石川梨華のお気楽なコメントからいってみる。"読売テレビ特別賞"を受賞した際、いつものアニメ声で叫んだ彼女。賞レースに昔ほどの権威がなくても、年末に大勢のファンや視聴者の前でスポットライトを浴びるのは格別な気分のようだ。盗聴騒動なんてものに巻き込まれても、モー娘。に入れてよかった、というのだから。

で、一方の朋ちゃん。騒動後を任された事務所が少しでも元を取ろうとしてか、『電波』御用達の米国進出企画なんてものに挑戦されられているけれど、調子っぱずれな歌が本場で通用するはずもなく、クラブ支配人から最後のチャンスとして実際にステージで歌うように命じられた。が、本人は絶体絶命のピンチにも大ハシャギ。人前で歌える喜びを高らかに宣言したのだ。そういえばあれ以来、母親が経営する店が唯一のステージだったんだもんねぇ。そんな無防備で危うげな存在感を『智恵子抄』のヒロインにたとえた知り合いがいたが……。朋ちゃんは異国で"ほんとうのうた"に出会えるだろうか――。

CamScannerでスキャン

マン赤木大陽

使える音楽スペシャル

下半身で追ったJポップの記録

女子の心のすき間をつかないでどうする！

■▼上野千春

実もたけなわな宵の口、突如鳴り響く16和音の着メロ。「これ誰？」「いや、実はさ……」「えーっ、それ私も興味あったの！」

最近では着メロという便利なモンが登場し、それとなく自分の音楽的趣味を露呈する場が増えた。だが、そこで浜崎あゆみを登録するのはバカだ、インポだ、素人童貞だ！　このチャンスに音楽的マイノリティな女子の心を隙間を突かないでどうする。Jポップの趣味さえ合えば（合うと思わせれば）男女の下半身も結合したと同じ……。

そんな持論を本誌連載「使える音楽」にて展開してきた筆者であるが、ここにその総集編とも言うべき拡大版をお届けしようと思う。それぞれリスナー同士を妙な連帯感で繋ぐ、[illegible]な立ち位置の作品群である。

2月21日

佐野元春『The 20th Anniversary Edition 1980-1999 his words and music』発売。

30歳前後の洋楽知らずで育ったニューミュージック世代の女子に未だに信奉者多し。同窓会で「Someday」を歌って当時のマドンナちゃんに泣かれたひにゃ、思わず中腰になったものである。かといって良いことなかったのだが。余談だが本作の販促ブックレットには筆者も寄稿。

2月23日

m-flo『Planet Shining』発売。

やや非行はいったギャルに人気。とりあえずイマドキ女子のHIPHOP入門編になりつつある。アメリカンスクールで知り合った韓国人ラッパー、DJ、ラテンハーフ女というのもファンタジーを増している。カラオケをマスターしてるオヤジでも尊敬される。

3月29日

中村一義『90's』発売。

自称音楽好きの中野＆高円寺系サブカル女子と中村ネタで盛りあがることがやけに多い。それも彼女らはかなり熱いので話を合わせるのに一苦労だが、口説きの確実性は高い。

3月31日

椎名林檎『勝訴ストリップ』発売。

筆者にとって彼女が"使える音楽"だったのはこの日で終焉。

4月8日

ジョビジョバ『J・SIX・BABYS』発売。

お笑い＆演劇ファンのイタい女子と話を合わせないといけないような状況に使える一枚……ってなんだよ、それ？　ま、そんな機会は歌舞

CamScannerでスキャン

伎町のお見パブ周辺に多いのだが。

4月19日

THEATRE BROOK『I AM THE SPACE, YOU ARE THE SUN』発売。

筆者にとってもっとも使えた一枚。関西出身のデザイナー、スタイリスト、ヘアメイクといった業界女子にすこぶるファンが多かった。ボーカル・佐藤タイジの文化系活動も代官山方面女子の人気を集める要因に。

5月24日

片寄明人『HEY MISTER GIRL!』発売。

J-WAVE周辺の寂しいOL、ファッションから音楽に入る女子大生と是非とも語りたい1枚。セールスが芳しくないのも音楽通ぶるにはかえって好都合。

6月14日

Cocco『ラブンツェル』発売。

歌舞伎町の外れにあった某ノーパン喫茶Bでは、Coccoが常にノーパン嬢のカラオケ・リクエスト1位だった。ただそれだけ。

6月21日

平井堅『THE CHANGING SAME』発売。

「やっぱり、男は中身ですよ。外見は関係ないですー」と潔く断言した某巨乳アイドルの好きな男性のタイプは平井堅……「楽園」ヒット中は、

そんな矛盾した女子だらけだった。下積み時代のファンを自称すると一瞬だけ尊敬してもらえた。

7月26日

MONDO GROSSO『MG4』発売。

birdから流れてきたアーランビー好きのごくごく一部が大沢伸一まで辿り着き、なんとなくマンディ満ちるに流れ、わけもわからないままライブに行き始める。自分の趣味に疑問を持ち始めた歌舞伎町某おさわりキャバ嬢の音楽的自我の芽生え例。

8月9日

カジヒデキ『You will Love me』発売。

なんとなく自分の品性に自信が持てなくなった時にさらりと話題に。東横線沿線デートのマストアイテム。

9月27日

スケボーキング『magic moment…』発売。

今年の使える品質保証マーク"降谷建志"をフィーチャー。話題に持ち出す際は「あ、そういえば降谷も参加してたんだっけ?」。当時はシュガーソウルも同じように使えたが……。

10月21日

N-GO『Shadow of Ape Sounds』発売。

聴かずともN-GOがアルバムを出すというネタだけで、バンタン系女子に対する間は5分もった気がする。

▼あかぎ・たいよう▼『週刊プレイボーイ』『ホットドッグプレス』『週刊宝島』でそれぞれ月1連載中という微妙な立ち位置の歌舞伎町系ライター。趣味はポーカー喫茶とサウナ通い。現在、禁治産者に向けて着々と落下中……。

CamScannerでスキャン

数字を読むと、音楽が聞こえてくる！

Jポップ経済学

"東京コアポップ"時代の終焉 ～歌舞伎町化するJ-POPを救え！

文▶篠原章［大東文化大学経済学部教授］

外国人女性準婦女暴行・織原城二容疑者についての一連の報道と、「J―POPのひとつの時代」の終焉

外国人女性準婦女暴行の容疑で逮捕された織原城二容疑者についての一連の報道を見聞きして、「J―POPのひとつの時代」が終わったんだな、というある種の感慨を禁じえない。

関西の金持ちのボンボンとして生まれた織原容疑者は、高校時代から慶應義塾で放蕩三昧の学生時代をおくった。たぶん、その頃から田園調布に屋敷を構え、ポルシェを乗り回していたにちがいない。

ドルがまだ高い時代にアメリカ遊学を経験して帰国、親から受け継いだ資産を管理しながら、夜は銀座、赤坂、六本木と派手に遊び回っていたのだろう。日本で最初の本格的な高級リゾートマンションである逗子マリーナに一室を購入したのも、女性を口説く小道具にしようと思ったからだと邪推できる。誰もができるというわけではない、憧れのブルジョア生活である。カネだけあればいい、というのではない。ちょっとした血統とハイブラウなセンスがなければ成り立たないライフスタイルである。

こうしたブルジョア生活への幻想は、J―POP創成期を創ったアーティストたちを牽引する大きなパワーとなった。

例えば、まだ長れを知らぬ少女だったユーミンは、ブルジョア生活者やその周辺で遊ぶスノッブ（高級遊び人）たちの世界に憧れて、東京の片田舎・八王子から都心の六本木や青山に夜毎通いつめた。例えば、まだハナタレ小僧だった桑田佳祐は、ブルジョア生活者たちが湘南海岸のあちこちで開いた華やかなパーティを覗き見しながら、茅ヶ崎で多感な少年時代を過ごした。

六〇年代・七〇年代前半というのは、ホントに新しいモノ、カッコいいものが、東京のブルジョアとその周辺のスノッブからしかもたらされなかった時代である。彼らはアメリカに近く、ヨーロッパにも近かった。今のように誰もが海外旅行ができるという時代ではないから、海外からの情報をいち早くキャッチできる人間は限られていたのである。だから新しいポップも、彼らの暮らしや遊びの場がある都心部（とくに米軍基地と米国大使館のあった港区近辺）から生み落とされた。湘南生まれに見えるもの（例えば加山雄三の湘南ポップ）もあるが、湘南はブルジョアやスノッブの息抜き（リゾート）の場または寝床にすぎず、都心部とのつながりがなければ、たんなる漁港にとどまっていただろう。

以上の点から、ぼくは六〇年代・七〇年代前半の日本に生まれた新しいポップを、東京都心部で育まれたポップという意味で「東京コアポップ」と呼んでいる。この時期に海外から持ち込まれた代表的なポップはロックだから、J―ROCKこそ東京コアポップと見なしていい。この系列は、加山雄三やグループ・サウンズから始まり、はっぴいえんど、ティン・パン・アレー、サディスティック・ミカ・バンドなどを経てYMOにいたっている。

「擬似東京コアポップ」のサザン&ユーミンの時代の後に、歌舞伎町的カルチャーだけが、東京に残った！

ぼくはJ―POPのパイオニアをユーミンとサザンだと思っているが、彼らは、東京コアポップをベースに自分たちのポップを創りつづけてきたアーティストである。輸入カルチャーであるロックは、六本木・青山に象徴される「東京」という都市文化によって磨かれ、東京コアポップとして確立していくのだが、ユーミンとサザンはこれをよりわかりやすいかたちに加工し、

CamScannerでスキャン

大衆化させたのだ。

その意味で彼らの音楽を「疑似東京コアポップ」と呼びたい。東京コアポップは本質的にスノビッシュだから大衆化しにくい。売上げ枚数でいえば数万枚の世界である。だが、スノビッシュな部分を薄めた疑似東京コアポップなら、数十万から百万はいける。ユーミンもサザンも、七〇年代末には十分な数字を達成した。

●「東京コアポップ」をベースに自分たちのポップを創り、大衆化させたJ—POPのパイオニアともいえるユーミンとサザン。

以後八〇年代は、東京コアポップと疑似東京コアポップが、ともにマーケットに浸透していくプロセスであった。東京コアポップの系列は、ピチカート・ファイヴやフリッパーズ・ギター（小沢健二・コーネリアス）にいたり、疑似東京コアポップの系列は、その後もユーミンとサザンに先導された。

が、九〇年代以降、東京コアポップの勢いはしだいに衰えていった。というのも、かつて皆の憧れだった東京のブルジョア的生活が、時代を導くほどの説得力をもちえなくなったからである。言い換えると、六本木や青山はもはや新しい都市カルチャーや都市像を発信できなくなっているのだ。街としてのパワーを失っているのである。渋谷や原宿や代官山を含めて見ても、おそらく事態はあまり変わらないだろう。

実は、疑似東京コアポップが一時代を築いた八〇年代から九〇年代初めにかけて、日本全国に青山や原宿が生まれ、渋谷や新宿が生まれた。疑似東京コアポップの隆盛とともに、疑似東京的な都市文化が日本中に普及したのである。その結果、逆に東京の個性は薄められることになった。インターネットの普及も、東京というイメージの拡散・衰退に一役買っているはずである。

その間に、埼京線（埼玉—東京）、京成線・京浜急行線（千葉—東京—神奈川）、武蔵野線（千葉—埼玉—東京）などが開通したことで、東京には首都圏の各地から大挙してガングロ軍団が押し寄せるようになった。東京のスノビッシュでスタイリッシュな都市文化は彼女たちのラディカルなパワーに圧倒され、その欲望を吸い込むことができる新宿歌舞伎町的なカルチャーだけが東京に残った。渋谷や六本木だってすでに歌舞伎町化しつつある。

つまり、かつての東京はもはや消滅しつつあるのだ。このまま行けば、東京コアポップも、地下に潜行してクラブなどで細々と生きるほかなくなるだろう。すでにユーミンもサザンも、疑似東京コアポップではなく、J—POPという世界に一括りにされてしまった。東京に足場のないポップを歌う宇多田ヒカルや東京をぶった切るようなポップを発信する椎名林檎が人気を集めるのも、たんなる偶然ではない。

織原容疑者は、バブル崩壊をきっかけに資産を失い、経済的・精神的に追いつめられるなか、外人女性の漁色に励むようになったという。確かにそれもあるだろうが、バブル崩壊と前後してスノビッシュな都市だったはずの東京が失われ始めることによって、彼自身も追求すべきライフスタイルを見失ってしまったのだ。ブルジョア生活・スノビズムに裏打ちされていた彼自身のアイデンティティは、倒錯した性の世界にしか逃げ込めなかったのだ。それは、道しるべとしての東京コアポップの衰退に伴って、J—POPが変質し始めたのと軌を一にしている。

＊

二〇〇〇年時点での日本のレコード業界の市場規模は、生産額ベースで推定七一〇〇億円である。うちJ—POP市場は五〇〇〇億円あまりだ（筆者推計）。バブル期（一九八五年～九〇年）に二倍に膨らんだこの業界が、水膨れ部分を吐き出すのにはまだ数年かかるだろうが、その間に東京コアポップに代わる新しい都市ポップを見つけないと、J—POPも活気を失って、二十一世紀に迷走しかねない。この点、ぼくはあまり悲観はしていないが、古きよき東京カルチャーの再生を期待するのは、やはり禁物だろう。

▶しのはら・あきら▶56年生まれ。大東文化大学経済学部教授。財政学が専門だが、音楽や沖縄に関する評論でも活躍。目下、2000年度に開設される環境創造学部という怪しげな名称の学部の準備に追われている。新学部ではロックや沖縄についても講義する予定。近著に「熱烈！沖縄ガイド」（宝島社文庫）、「アジア大バザール」（講談社文庫）、「はっぴいな日々」（ミュージック・マガジン）など。

CamScannerでスキャン

聴く前に読むか？　聴いてから読むか？

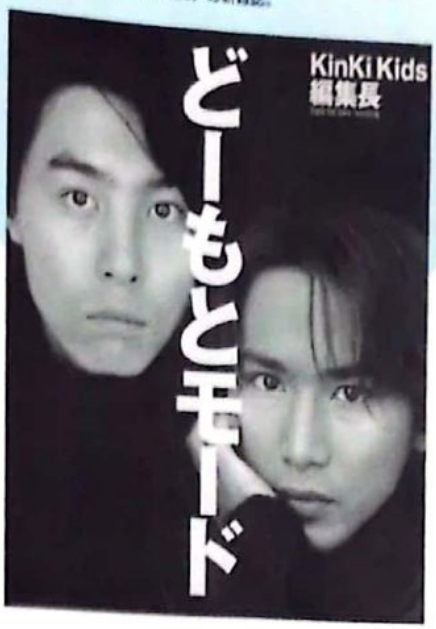
スバらしきアーティスト本の世界

第8回　KinKi Kids

「KinKi Kidsが編集長で新雑誌創刊！」とワイドショーもにぎわせた1冊まるごとKinKi Kids本。ふたりが上半身ハダカで横たわってたり、林真理子宅訪問、米倉涼子を撮影、とバラエティに富みすぎているこの雑誌の本当の読みどころをガイド。

文▶吉田豪
［プロ書評家］

「KinKi Kids編集長　どーもとモード」（新潮社）1429円（税抜）
明石家さんま、三谷幸喜、林真理子、山下達郎、米倉涼子も登場する、KKK（KinKi Kids）の新雑誌。



「自分は無防備すぎると思ってるんだ。『ボクは心が弱いから』って」と堂本剛の愛犬にこんなことも言わせていたり

なぜKinKi Kidsが編集長？　なぜ版元が新潮社？　なぜ誌名が下から読んでも『ドーモともーど』？　なぜ堂本光一がアレクサンダー大塚のTシャツ姿？……と、かなりの騒いで「なぜ？の嵐」が吹き荒れたものの初刷22万部（公称）があっさり完売になったという、この雑誌。

業界内を飛びかう風い噂によると「ファーストプレス（新潮社）が

ジャニーズ結みの物騒なスキャンダルを掴み、それをウヤムヤにすべく記事を潰すためのバーターとして事務所側が確実に売れる新雑誌の創刊を提案したらしいのだが、そんな裏話なんかいまさらどうだっていいだろう。

なにしろ、実はオアシス好きらしい堂本剛が三谷幸喜相手にUKロック賛歌を派手にブチ上げているというし、たたされたけで全面支持できる次第なのだ。

「音楽でいうとアメリカン・ロックは、とにかくポジティブな音や言葉で『走ろうぜ！』っていう感じじゃないですか。それは僕、すごく疲れるんですよ。で、UKは淋しさに浸ってるんだけど、でもかすかな光を求めながらゆっくり歩いていく、みたいな歌が多かったりで、どっちかっていえばUKの方が好きなんです。でも結局、音楽は『撒なこともみんな忘れて……』というふうにはならないんですよね」

こうして堂本剛はボン・ジョヴィ好きというアメリカンな音楽性を持つ相方・堂本光一へのアンチをブチ上げつつ、同時に椎名林檎好きらしく心の弱さも剥き出しにしていくのであった。

「社会人になってあらゆる"権力"を見てきた。見せられてきた。その権力と闘うには、自分は無防備すぎると思ってるんだ。『ボクは心が弱いから』って」

なぜか堂本剛の愛犬にこんなことを言わせるコーナーまであるからとんでもないのだが、その"権力"とはおそらくジャニーズ事務所の首領・ジャニー喜多川氏のことでもあるのだろう。

とにかくジャニーさんに「YOUたち、暗いよ、暗いよ」「もうYOUたち最悪だよ」と吠えられまくっていたというキンキ。

「あんな人いないです。尊敬しています。僕らのプロデュースをするというか、最高司令官はジャニーさんなんです」（光一）

そうフォローしつつも、ジャニー・イズム丸出しのコンビ名には「初めてグループ名を聞いたときは『最悪だなあ』と思いました」（光一）、「自分たちで変えられるものではないんや……。いまもあまり好きではないけど」（剛）と不満を覗かせていたりするのだから、ついつい不仲説が頭に浮かんでしまう次第なのだ。

どれだけ不満があろうとも、ジャニーさんには誰も言えない。

そんな状況下で、なぜか謎の占い師がジャニーさんに対して「この人、すごく気が変わるのが早いでしょ」「この人、変わっているの。見かけや名前より地味めなの。失礼ですけど、ケチっぽいでしょ」などと衝撃的なことを言い当てているのが、この雑誌最大のポイントなのである。

▶よしだ・ごう▶70年生まれ。「紙プロ」「BURST」「TVチョップ」「relax」「TITLE」「音楽生活」などの媒体で活動するプロ書評家。e-mail:go-go@pdx.ne.jp

CamScannerでスキャン

流行り歌“斬り捨て御免”

CD&ビデオ「丸裸」レビュー23

TARGET

ゆず➡倉木麻衣➡ザ・イエロー・モンキー➡オムニバス『LIVE Beautiful Songs』➡
ブランキー・ジェット・シティ➡キリンジ➡KAB.➡釈由美子➡
LOVE PSYCHEDELICO➡hitomi➡キーヤキッスばにっく➡スガシカオ➡
安西ひろこ➡スーパーカー➡ティンパン➡椎名純平➡Cymbals➡GO!GO!7188➡
ノーナ・リーヴス➡ダンス☆マン➡Hysteric Blue

今月の流行音楽マンガ3連発

作：村松栄一画伯

CamScannerでスキャン

ゆず

見崎鉄[ライター]

北川の作品と岩沢の作品の、この歴然とした差はなんだ?

進化する北川が停滞ぎみの岩沢を追い抜いて、ゆずは第2期に突入した。北川から「自然に」出てきたものは、意外にも社会への怒りだった

TARGET 01

▼「トビラ」

『ゆずの素』『ゆずマン』『ゆず一家』『ゆずえん』『ゆずマンの夏』というふうに、今までアルバムのタイトルにはずっと『ゆず〜』を冠していたのが、今回はそれが取れてシンプルに『トビラ』となっている。

実は後二者のときもすでに『ゆず〜』とつけるのは抵抗があったという。さすがにもう、そういう自己紹介ふうの名乗りは必要ないと思ったのだろうか。蓋し、それまでのアルバムは路上でやったもののいわば再演で、路上ライブの延長といってよいものだったが、プロになって技量も上がると、作品そのものの自立性が高まった。路上のパフォーマーから作品重視のアーティストへの変化が、タイトルの変化にあらわれたといえる。

では内容的にはどうだろうか。

いつのまにか北川悠仁と岩沢厚治にはこんなに歴然とした差がついてしまっていたのか、ということを認めざるをえないアルバムだった。

岩沢ファンの私としては大変残念

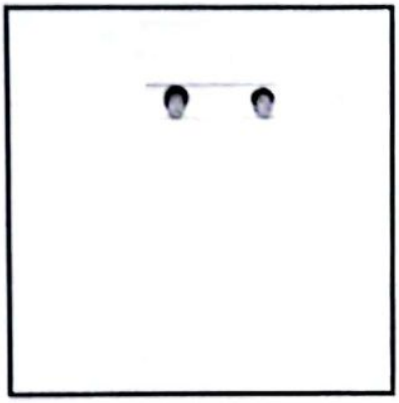
意欲とパワーに溢れた北川の歌に比べ、岩沢の作る歌は、歩きながら時候の変化を感じている俳句的な「お散歩ソング」とでもいうべきもので、北川の迫力に押されて、『飛べない鳥』以外はアルバムの埋め草になってしまっている。岩沢ファンの私としては大変残念である。

たとえば、岩沢が作詞・作曲した『ガソリンスタンド』は、知人の死を歌ったものということだが、つかみ出してきたシチュエーションは悪くないのに、構成がユルいうえに言葉の選択も甘いから、曖昧模糊として状況が的確に伝わってこない。もっといい歌になる可能性はあったのに、ひとりよがりに終わっている。

一方、このアルバムの主役である北川も意外な展開をみせている。世の中にもの申す社会派の看板を挙げたのだ。『嗚呼、青春の日々』に代表される熱っぽさで、〈腐った世界〉に怒りをぶつけている。『何処』と『午前九時の独り言』という歌もそうである。この国は物質的に豊かになったがどこか狂っている、人は自分のことしか考えていない、というような内容である。北川は、こういう怒りの歌が自然に出てきたという、その「自然さ」を強調する。

こういう歌を作るとき、自分らしさをどう出すのかがポイントになる。どうせ、システムが悪い、救えるのは愛だけだ、というところに落ち着くのはわかっている。愛がすべて、みたいなウソつき歌はいい加減やめてもらいたいが、たった5分の歌で答を出すには絶

CamScannerでスキャン



「トビラ」（トイズファクトリー）
収録曲▼①幸せの扉②日だまりにて③仮面ライター④飛べない鳥⑤ガソリンスタンド⑥何処⑦ねぇ⑧嗚呼、青春の日々⑨気になる木⑩シャララン⑪新しい朝⑫心のままに⑬午前九時の独り言

▼みさき・てつ▼65年生まれ。ライター。著書に「さだまさしのために」他。

いきり単純化するしかないから、仕方ないことにしておく（北川は「午前～」で〈愛こそは全て〉とジョン・レノンを引用する）。

大衆ナルシシズムを満たす安全な怒り

自分らしさとは、自分の立脚点をどこに据えるかということだ。

井上陽水は、傘がなくて雨にぬれることが嫌だった。遠藤賢司は、三島が腹を切ったときに平然とカレーライスを食っていた。もちろん架空のものだが、そういう市民生活を譲れない立ち位置にした。問題にしているマクロな状況に対比させる私的なミクロの領域の具体性がなければ歌の面白さは生まれない。北川の歌からはそういう立脚点は見えないから、この人の怒りや苛立ちはどこか公式的で、個人的なものとして伝わってこないのだ。

問題のとらえ方も平凡だ。本来ならその一つ一つがテーマになるような題材を、北川は〈どこかの親が自分の子供を傷付ける　どこかの子供が自分の親を傷付ける　どこかで少女の自由が奪われてる　どこかで少年の心が歪みはじめてる〉（「午前～」）と、十把ひとからげにズラズラ並べる。これではワイドショー的な見識を超えることはできない。

また北川は、〈あの戦争が終わり50年〉（同前）と言う。戦後55年なのになぜか5年端折る、この大雑把さ。また、歌の最後でなぜか突然〈ただの僕の独り言さ〉（同前）と付け加える、この弱気の姿勢。

これでも肚をくくったと評価してくれる人がいるからありがたい。たしかに、それまでのゆずのイメージを傷つけることになるのか、それとも幅が拡がることになるのかという心配はある。しかし歌の内容はどこかから苦情がくるようなものではない。大衆ナルシシズムを満たす安全な怒りである。マスコミをなぞって社会に向けてみせる怒りなど気晴らしにすぎない。それよりも、身近な人間に向けて発せられた怒りの方がホンモノである。たとえば恋愛関係において、それが上手くいかない場合、涙したり考えこんだりするよりも、実際には怒ることのほうが多いだろう。

そういう個人的な怒りは汚いから書かないのだろうか。隠された個人的な怒りこそ、人を強く動かし、時に誤たせる。それゆえ、歌にして対象化（客観化）すべきものである。ひきかえ、社会への怒りなどむしろタテマエとしての怒りである。こういうタテマエが「自然に」出てきて歌ができたといわれても、シラケてしまう。

★福冨2行情報★
映画「十五才―学校IV―」の挿入歌として岩沢が以前に作った「境界線」が使われている。アルバム収録中の一曲に過ぎず、それほど人気があるとも思えなかったが、私が最も好きな歌だ。山田洋次監督の眼識？に敬服。

「何処」「嗚呼、青春の日々」「午前九時の独り言」いずれも作詞・作曲／北川悠仁

CamScannerでスキャン

倉木麻衣

高橋道彦［音楽評論家］

クールなのが良いような、もっと爆発してほしいような

宇多田と比較しても仕方ない中庸路線の"集団芸"。それを支えるのは意外なポップ職人たちだった

02

▼「Reach for the sky」「FIRST CUT」

ザ・カーズのベーシストだったベンジャミン・オーが、この10月に癌で亡くなっちゃいましたね。カーズといえばリック・オケイセックの名がまず挙がるけど、ぼくはオーがリード・ヴォーカルを取る「ドライヴ」が一番好きだった。

そしていま、倉木麻衣の数多くの曲に参加しているグレッグ・ホークスは、その「ドライヴ」で幻想的なキーボードを弾いていたカーズのメンバーだ。もちろん新曲「Reach for the sky」にも参加している。倉木麻衣の曲にはボストン録音が多いけど、カーズの地元といえばボストンと答える人もいるだろう。ほかにも、ボストンといえばニュー・エディションやニュー・キッズ・オン・ザ・ブロック（松田聖子とデュエットしたダニー・ウォールバーグが在籍したグループ）でしょう？という人もいそうだ。いや、そう、それ正解。

倉木麻衣のメイン・プロデューサーを務めるボストン在住のペリー・ガイヤーはかなり不思議なキャリアを持つ人だ。80年代後半にはマニュファクチャーというグループで活動、シンガー・ソングライターのサラ・マクラクランをフィーチャーした曲もあったが、エレクトロニックというか、ディペッシュ・モードのような音楽を展開していた。かと思えばガイヤーは、バリバリのブルース・ギタリスト、スモーキー・ウィルスンのアルバムに編集で関わったりもしている。もともとMIDIなどデジタル音源の扱いを得意とする人だから、ジャンルを問わずにいろんな仕事をしてきたといったところだろう。要するにデジタル畑の職人さんだ。倉木の「NEVER GONNA GIVE YOU UP」の作者のひとりマイケル・アフリックも、昨年、ハリウッド・レコードからデビューしている。音楽性はニュー・キッズ・オン・ザ・ブロック〜マーキー・マーク〜トミー・ペイジ直系といったところ。倉木を支えるボストン・コネクションだ。

まず、本当にいまのR&Bに思い入れがあったら、ブラック・ミュージック不毛の地（ちょっと言い過ぎ）＝ボストンには行かない。R&Bっぽい音楽性は倉木麻衣にとってひとつの駒でしかないわけだ。加えて、たとえば宇多田ヒカルはどこを切っても"ひとりのシンガー"だと思うけど、倉木麻衣はガイヤーやホ

CamScannerでスキャン

流行り歌"切り捨て御免"
CD&ビデオ「丸裸」レビュー

「Reach for the sky」
(GIZA studio)
収録曲▼①Reach for the sky②What I feel③Reach for the sky GOMI REMIX ~Radio Edit~④Reach for the sky KEN ISHII REMIX ⑤Reach for the sky DJ HIYOCO REMIX⑥Reach for the sky ~Instrumental~

「FIRST CUT」
(B-VISION)
収録曲▼①Opening②Love, Day After Tomorrow③Stay by my side④Secret of my heart⑤making of Secret of my heart⑥NEVER GONNA GIVE YOU UP⑦delicious way ~select songs⑧Simply Wonderful⑨Stay by my side~Dream on ver.⑩Baby I Like⑪Discography

▼たかはし・みちひこ▼文化放送のBSデジタル局BSQR489「フィール・ザ・ガイア」のパーソナリティを務めています。毎週土曜日午後7時から11時まで、世界の音楽をかけまくる「ラジオ史上初」の4時間番組です。

ークスたちポップ職人を不可欠とする"ひとつの集団芸"という匂いが強い。倉木麻衣という名を持ったひとつのプロジェクトとでもいうか。

無邪気な表情とか良いです。やっぱ、可愛いッスもん

彼女の歌を聴いていても、本当に好きな音楽はどういったものなのかイマイチ伝わってこない。「Love, Day After Tomorrow」は、シャニースの「アイ・ラヴ・ユア・スマイル」に匹敵する最高のティーンエイジ・ポップだと思うけど、どの作品も16~17歳にしちゃクールですよね。だからこそ良いともいえるが、もっと歌う喜びを爆発させる曲があってもいいのに…とも思う。微妙なところだな。

今回の「Reach for the sky」は、そんな職人芸的な感覚が最も強いんじゃないだろうか。オリジナル・ヴァージョンのアレンジはビートルズ~ジェフ・リン系といったところ、メロディはまったくの歌謡曲、打ち込みのドラムの音がアナログっぽい感じを出しているけれど、それでも取り立てて新しいものではない。誰にも嫌われない、職人の粋を集めた中庸路線だ。倉木の歌を引き立てるための一歩引いたサウンド作りなわけだが、しかしそれを補って、尖ったイメージを印象づけるために、スタッフは「Reach...」のリミックスを3ヴァージョン用意している。

ひとつはゴミ・フォー・リズメディアと記された、王道の歌ものダンス・リミックス。ふ~ん、今度はミーシャに接近ですか…とクレジットを見て思ったが、そうでもなかった。GOMIこと五味一彦は、ジュニア・バスケスのプログラミングを担当してきたアーティストで、主にニューヨークで活動し、全米ダンス・チャートを制覇した曲も作っている。そして、ヴォーカルをほとんどカットしたケン・イシイによるテクノ・ミックスと、女性のDJヒヨコによるリミックスが続く。DJヒヨコは元の曲を崩し切れてない。遠慮がみえる。それが難点。

で、このシングル「Reach...」と同時発売になったのが、初の映像作品「FIRST CUT」。「Simply Wonderful」までのシングル曲のヴィデオ・クリップに加えて、メイキングなどを収録。はっきりいってファン向けでしかないが、「Baby I Like」のレコーディング風景における無邪気な表情とか良いです。渋谷公会堂を貸し切って撮った「Secret of my heart」のクリップも好き。やっぱ、可愛いッスもん。

★福耳2行情報★
「リーチ・フォー・ザ・スカイ」のCDに入っているGOMIのリミックスはラジオ・エディット・ヴァージョン。そのフル・ヴァージョンはアナログ盤に収録されている。ありがちなプロモーション手法だが、ネット・オークション無法地帯を盛り上げることを必至か!?

CamScannerでスキャン

THE YELLOW MONKEY

活動休止にめげずに贈る、大人のためのイエモン鑑賞法

真保みゆき［音楽評論家］

大言壮語の陰からにじみ出すやるせない味。吉井和哉って派手好きなはにかみ屋さん？

03

「BRILLIANT WORLD」

イエロー・モンキーの吉井和哉のヴォーカルには“ロック俺節”、いわゆるロック・ヴォーカリストにありがちなナルシシズムの発露が、どういうわけだかほとんど感じられない。そこは彼とて人の子、イエモンというイケてるバンドのフロントマンとして、それなりにいい気分になっている場合も多々あるとは思うのだが、そうした高揚の持っていきどころ、最終的な落ち着き先が、どうも他大多数のそれと違っているように思えてならないのだ。

なんかこの男はヘンだ。以前からうすうす抱いていたこうした不審の念（？）を決定づけたのが、最新シングル「BRILLIANT WORLD」である。中でも大サビの部分。初めて聞いた時の驚き、というか脱力感、これは忘れられないよ。

やる気がないようなあるような、吉井独特のつかみどころのない声で歌われるこの曲。本来盛り上がるべきクライマックスを聞いてみよう。

♪何十年？何百年？何千年？何万年？
何億年？何光年？
大変な風呂敷の広げようである。ま、熱烈なデイヴィッド・ボウイ・フリークとして名高い吉井のことだ、愛情の形容もスペーシー、宇宙規模なのかも。そう思いながら聞いていたら、続きはこうなのよ、あなた。

♪何秒間？何秒間？わかんない…

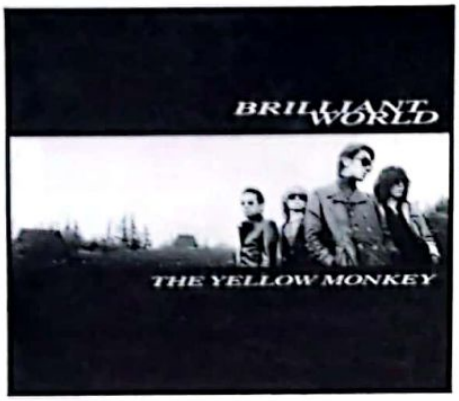
正直、ずっこけてしまいました。何光年からいきなり何秒間だもん。さんざん広げられた大風呂敷が、一瞬のうちに手のひらサイズにたたまれていくのを目のあたりにするようで、「あんたは手品師かい」というつっこみも思わず漏れる。かと言って腹立たしいというのとも違う。こうなったらキツネにつままれたような気分を味わわされるのがいっそ楽しくて、ついついシングルを聞き返している。はまっちゃったわけだ。

これってそもそもラヴ・ソングだったのか、とさえ思いましたね。最後の最後になって「♪だけど君とI WILL GO, BRILLIANT WORLD」、そうオチをつけることで、一応ラブ・ソングとしての体裁をなしているとはいえ、歌う当の吉井の声がこうやるせなくては。「どんなに盛り上がっても、いずれ醒めていくものなんだよなァ、愛だの恋だのって」。せっかくの大団円の向こうから、そんなぼやきが聞こえてくるような気がしてならないのだ。

CamScannerでスキャン

「BRILLIANT WORLD」(BMGファンハウス)
収録曲▼①BRILLIANT WORLD②GIRLIE(ORIGINAL MIX)③メロメ(DEMO)④BRILLIANT WORLD(KARAOKE)

●タイトル曲に伍して歌詞が"おもろい"のが、3曲目に収録された「メロメ」のデモ・トラック。メロメってなんやねん、という疑感もさることながら、「♪刺す息がなんとなくボサノヴァ」というたとえのオフビートさには、思わずめまいが…。



▼しんぼ・みゆき▼プロフィールは4P参照

ついついにじみ出てしまうやるせなさ、それをまぎらわすために大言壮語のかぎりを尽くしているのではないかという疑いすら湧いてくるくらいで、だとすれば吉井、および彼に喜々としてつきあうイエモンの人々は、相当"大人"ということになる。言い換えるなら、実はかなりの照れ屋さん。なァんだァ、だったらもっと早く言ってよォ。

民生ともども、ロック旗本退屈男としてますます精進してほしい

今年一足先にヒットした「SHOCK HEARTS」の性的なくすぐりや、「BRILLIANT WORLD」のカップリング曲「GIRLIE」で聞かれるお耽美なSM志向に刺激されてのことだろう、イエモンをある種"やおい"的な文脈で評価しようとする向きはいまだに少なくない。実際、「♪白い肌 青く浮く血管」(「GIRLIE」)などと歌ってはいるわけだから、そう認識されること自体、織り込みずみだろうと想像されるのだが、だとしても「SHOCK HEARTS」の「♪OH YEAH!!」で始まるサビが「♪あのさ」と続く、この展開はないでしょう。大の大人がよりにもよって「あのさ」って。よっぽどの○○か、さもなければカッコつけようと高まった瞬間、ついついはにかんでしまう体質なのに違いない…。というわけで、吉井すなわち派手好きなはにかみやさん説が、私の中で肥大していくのでありました。

実際「SHOCK HEARTS」を最初に耳にした時、めりはりの効いた曲調のわりにだらっとした歌い回しといい微妙な転調といい、「これって奥田民生の曲だったっけ?」そんな錯覚に幾度となくおそわれたものだった。たしかにこの2人、「邦楽であること」に対して実にいさぎよい。ロック的な言質をふりまわして聞き手をへいこらさせようという、ものほしげな様子がみじんもないのだ。

イエモン自体、年明け早々の東京ドーム公演を最後に、バンドとしての活動をしばらく休業するという。ロック・バンドに求められがちなかっこよさと芸人としてのわきまえのよさとの両立に煮詰まってしまったのかもしれないが、この際だ、吉井和哉には民生ともども、ロック旗本退屈男としてますます精進してほしい。アルバム「8」収録の「サイキックNO.9」なんて、あたかもロック都々逸。調子がよくってごきげんなんだから。

★福耳2行情報★
そんなイエモンの2000年最後のリリースは、ライヴ作品「SPRING TOUR」(12月9日発売)。「10年目の壁」についてコメントする関係者の姿には、そんなに正直にならなくてもなァ、という老婆心も湧く。目玉として、日大文理学部キャンパスでおこなわれたゲリラ・ライヴの模様を収録。

「BRILLIANT WORLD」「GIRLIE」「メロメ」「SHOCK HEARTS」いずれも作詞・作曲/吉井和哉

CamScannerでスキャン

大貫妙子・奥田民生・鈴木慶一・宮沢和史・矢野顕子

「うた」が、ただ「うた」として在ることの難しさ（とそのワケ）

栗原裕一郎［フリーライター］

04 ▼「LIVE Beautiful Songs」

鈴木慶一が「雲の上で」を歌い出した途端、初めて聴いたころの雑多な記憶が一時に溢り出し、しばらく身動きができなくなった。あのころぼくは17歳だった——。

……などと書き出して、あいだ繕い適当に締め括れば、もっともらしくも美しい感想文になるだろうが、大人になるとなかなかそうもいかない。この歌は本当に17歳のころから好きだけどさ。

『LIVE Beautiful Songs』は、大貫妙子・奥田民生・鈴木慶一・宮沢和史・矢野顕子の5人が、「うた」を届けたいと意気投合し実現したコンサート・ツアーのライヴ・アルバムである、という触れ込みになっている。疑うような言い回しになったのは、糸井重里が絡んでいるからだ。

糸井サンがここのところ注力しているホームページ「ほぼ日刊イトイ新聞」（＊）では、コンサートの半年以上前から、それとはなしの告知がなされていた。

〈夜、遠いところから電話がかかってきて、「お願いがあるんだけど、いい？」って。そりゃ、もう、その人のお願いはいいに決まってるわけ。（…）こんなうれしい頼まれごとってあるんだろうか！〉（「今日のダーリン」2／9）

「その人」と「お願い」が、3／29日付の記事「いよいよ発表です」で明らかにされる。その人＝矢野顕子、お願い＝作詞の依頼。

〈中学生になったような気分だよ〉〈生きててよかった、とさえ思ったよ〉と糸井サンは、この企画に参加できるピュアな喜びをことさら強調して見せる。

なるほど。しかし、糸井サンの商売のやり方をバブルの前から見せつけられてきた身としちゃ、こんなサッカリンみたいなセリフを額面どおり受け取れといわれたって、そりゃ無理な注文だ。

実際、このコーナーはその後、準備の進行具合、チケットの先行予約、各ミュージシャンへのインタビュー、関係者およびファンのコンサート・レビュー、CDリリース決定情報、サンプル・カセット・プレゼントなどなど、まるでオフィシャル・サイトのような様相となる。

ダンドリがやけに良過ぎやしないか？　作詞を依頼されただけだってのに。

CamScannerでスキャン

『LIVE Beautiful Songs』
(東芝EMI)
収録曲▼①たったった②Sweet Bitter Candy③月にハートを返してもらいに④横顔⑤Mon doux Soleil⑥遠い町で⑦突然の贈りもの⑧Rain⑨抜殻⑩二人のハーモニー⑪ビーターラビットとわたし⑫イオン、ほか全23曲収録

▼くりはら・ゆういちろう▼プロフィールは94P参照

あらためて眺めると、電通あたりがコーディネートしたかのような、つくづく周到なメンツである。

ふたつの世代にまたがる5人を並べてみたときに醸し出される、音楽に本質なんてものがあるとしたらそれをわかっている人たちってな雰囲気。それを増幅する糸井サンの、やけに心を強調した、ということはつまり広告っぽい物言い。

感動しないヤツは人間じゃないといわんばかりの居心地の悪さだ。たまたま見かけたレビューもこんな調子だし。

〈彼らの歌はことさらに感情を煽り立てたり、押しつけたりしない。(中略)しかしそれは、なにげない日常の中に潜む、面白く儚い生への深い愛情に満ちている。そしてそれなくしてはこのように、人の心の芯を甘くせつなく、侵食していくことはできないだろう〉(『ミュージック・マガジン』11月号)

不可侵な領域を無意識に(確信的に?)補強する、このズルズルベタベタの綴り方は、感動を"買い"に行った客の心情を、それなりに代弁しているだろう。その点ではこのズルベタにも存在意義はある。意味のあることは何ひとつ書いていないにしても。

そう、エンターテインメントとは、カネで感動を売り買いすることに他ならない。だから、きっちり感動さえくれりゃ、電通が噛んでようが「おいしい生活」がさらに潤おうが知ったこっちゃない。

ないのだがしかし、あらかじめ約束された感動を確認しに行くような行為が、はたして〈流行り歌の宿命とは別の次元で、大切にしたい「うた」〉を聴くことになるのだろうか? そんな加山雄三リサイタルみたいなもんが「うた」を聴く感動ってヤツなのか?

ねえ、どうなんです? 糸井サン。

止めよう。たぶん、おれの根性がネジくれ曲がりあさっての方を向いているせいで素直に「うた」に感動できない、それだけのことだ。

せめて最後くらいはきれいに締め括ろうか。このCDにそれなりに感じるところのある、かつてムーンライダーズ・フリークだった一リスナーとして(アタマとケツに合わせ真ん中を適当に入れ替えればフツーのレビューになります。お好みでどうぞ)。

——この美しい五つ魂の集いは、夏の一幕を飾ると、惜しげもなく散った。ぼくたちの心に「うた」という贈り物だけを残して。「うた」を求める人がいて「うた」を届ける人がいる、このCDは、そんな幸せな交流の記録である。

(*) http://www.1101.com/

★福耳2行情報★
IT絡みで政府がズルズルと押し進めてきたインパク(インターネット博覧会)。すかすかのコンテンツに焦ったか、開催3カ月前になって急遽編集長に迎えられた糸井サン。仕切りはもちろん電通。バブルのころと何ひとつ変わらない麗しい風景である。

CamScannerでスキャン

BLANKEY JET CITY

荻原魚雷（フリーライター）

ブランキーだからこそ、散り際が問われるのだ

高度成長の"白盤"、持続成長の"黒盤"で考えた、ロックにおける"進化の袋小路"について

05 ▼ [BLANKEY JET CITY 1991-1995] [BLANKEY JET CITY 1997-2000]

2作同時発売のベスト盤。白盤は1991-1995年の東芝EMI時代、黒盤は1997-2000年のポリドール時代の作品を収録。

*

3行で終わってしまった――。

なんさこんなの出すんだよ、レコード会社への最後の二発かい？　でも、9月に2枚組の「LAST DANCE」を出したばっかりじゃないか。最後からオリジナルアルバムが、かっちょええし、さすがはブランキーとか思ってたんだよ。しかも、このベスト盤、選曲&曲順に、まったく変情が感じられなかった。

とくに白盤がヒドイ。「B-3Cの歴史を綴るコンプリート・ベスト」だって？　あの曲もこの曲も入ってない、こんなB-3Cの歴史なんか知らんって感じだ。まず黒盤は後期のベストという形にはなっている。でもそもそもそんなにヒット曲があるバンドじゃないので、実質アルバム3枚からの選曲では、苦しい。ベスト盤なら、「国境線上の蟻」（93年1月）でそれでしょ、というのが本道な感想である。

とくに後期（東芝EMI）・後期（ポリドール）とひっくるめてブランキーをくくるというのもまずいと思う。

前期は高度成長、後期は持続成長といったらよいでしょうか。

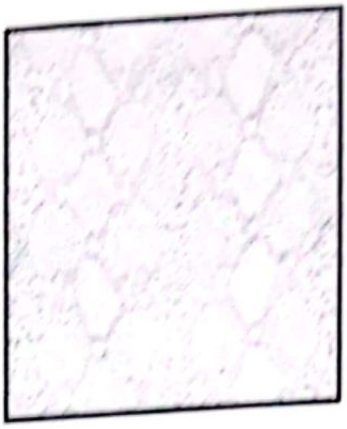
はじめて「イカ天」で、ブランキーを見たときの印象

はじめて「イカ天」で、ブランキーを見たときの印象は「ヨドウー入っている」「気合い入っている」だった。ちょっと懐かしい名古屋と関西の臭いのするバンド。それは当時流行していたおしゃれな洋楽とは対極にある音だった。

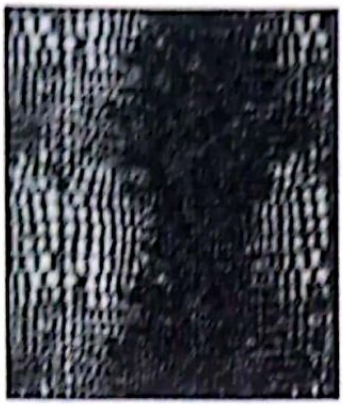
実っていてウェットで重厚。東京に攻め上がってきた地方のバンド特有のテンションがあった。

ベンジー浅井は、人になつかない野良犬みたいだった。ファンに媚びないし、流行とまったく無縁。心情吐露にしてもフィクションにしても、そこにはブランキーワールドとでもいうべき、ある種、自己完結した世界がある。しかし、その世界には、「そんなアホな」といったツッコミの入る隙がいくらでもあった。

（新しい国が出来た　人口わずか15人　それも全員セックスのない　無事乗りはかりが揃ってる（「RUN



「SEA SIDE JET CITY 1987-1988」
(ポリドール)



「PLANKY JET CITY 1987-1988」
(ポリドール)

▼おそはら・ゆうたい▼1961年、東京生まれ。ブランキー解散、ソライダーズ解散、ルナシー解散、この先一番心配なのはスライダーズのバリー。

ライブも面白かった。浅井とドラムの中村達也という強烈な"天然"がふたりいて、その間を、ちょっと情けそうな照井利幸が、ブンブン、ベースを弾きまくる。見ているほうが、ハラハラするくらいバラバラ。そこに浅井の乙女チックな感性で作った無国籍風のタフでワイルドな詞がのる。

とにかく、イカレクバンドだった。

ブランキーを形容するときによく使われるのは、「ナイフ」という言葉だろう。この言葉から導きだされる性格は「不器用」。かれらがナイフだからといって、リンゴの皮むきーメートルなんて芸ができるとはとても思えないからだ。

このベスト盤リリースはどう考えても失敗

田原俊彦にも通じる浅井の不安定な歌唱力は、かれ自身の不安定な情緒を表現するための最大の武器だった。そして不安定さゆえの"ダサ感"こそが、かれらをメジャーシーンに押し上げる原動力となった。しかし、不充足をモチベーションとしてきたロックバンドが、成功をおさめてしまうと、その輝きを失ってしまうのはよくある話である。

そんな中、ポリドール時代のブランキーは、「ガソリンの揺れかた」「Sea Side Jet City」などのヒット曲も飛ばし、高度成長から持続成長へという理想的なスライドを遂げたかに見えた。

ただ、そのことを本人たちがよしとしたかどうか。おそらくよしとしなかったのだろう。

黒盤のラストを飾ったのは、この曲——。

〈言葉より未来を信じたあの頃の僕たち二人　大切な何かを失くしてゆくような気がするよ　気付かないうちに　気づかないうちに〉(「ダンデライオン」)

かれらはなにを失くしていく気がしたのだろうか。身を削りながら加速していくスタイルでしか得ることのできない、切実さ、そして誠実さ……。

しかし、そんなスタイルを続けていけば、必然的に、進化の袋小路に行き着いてしまい、最終的には、「自爆するか」「フェードアウトするか」の宿命を免れることはできない。

だからこそ、散り際が問われるのだ。

という意味で、イージーライダーに憧れる浅井には、白黒つけないあっけない幕切れを期待していた。こんな手抜きのベスト盤を出したのはどう考えても失敗だったと思う。

さようなら、ブランキー。

★補足情報★
浅井健一のSHERBERTは、シビれました。「踊ってんじゃない?」、笑った。ドラムの中村達也とベースの照井利幸、ほしいバンドいっぱいいるだろうけど、でもLOVE　LOVE　オールスターズだけには入らないでね。

＊「PUNKY BAD HIP」「ダンデライオン」ともに作詞・作曲／浅井健一

CamScannerでスキャン

キリンジ

篠原章［大東文化大学経済学部教授］

「いつまでも、"はっぴいえんど"じゃないだろう」への返答？

はっぴいえんど信仰心篤い "70年代フェチ系アーティスト"の、これぞ新機軸！

06 ▼［3］

一年半ほど前のことだが、本誌第二号で、日本語ロックを確立したはっぴいえんどの影響下にあるバンドを取り上げ、「いつまでも"はっぴいえんど"じゃないだろう」という主旨の批判を展開したことがある。どうやら彼らも猛反省したと見えて（？）、サニーデイ・サービスなど見違えるようによくなったが、新世紀を迎えようという今になっても、相変わらずはっぴいえんど系列の音に対する憧れのようなモノが、J-POPシーンのあちこちに見え隠れしている。

このはっぴいえんどを信仰する者なら誰でも知っているユニットに"ティン・パン・アレー"がある。メンバーは細野晴臣、鈴木茂、林立夫、松任谷正隆、七三年から七七年にかけて、荒井由実、吉田美奈子、南沙織など実にさまざまなアーティストのサポートを務めた。八〇年代J-POPのベースとなる音は、この時期のティン・パン・アレーが創ったと言っていい。

そのティン・パン・アレーが細野、鈴木、林の上りオという形で"ティンパン"として再生され、十一月に二十三年ぶりの新譜『ティンパン』を発表した。往年のファンの懐古趣味をくすぐるような仕掛けもあるが、トータルでは自分たちの足跡さえ利用しようとする機動的な未来志向の作品だ。「はっぴいえんどイン・パン・アレー～YMO／ナイアガラ」という過去の音の系列が足枷となった音創りでお茶を濁す七〇年代フェチ系アーティストたちに突きつけた音だ。

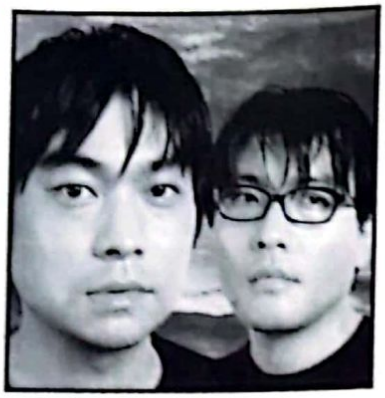
だが、七〇年代フェチ系アーティストに心情的量の余地があることに最近になって気づいた。そのきっかけはキリンジなる兄弟ユニットであった。

"おやじ、あんたの時代は終わったんだぜ！"

月光が降り注ぐ夜、川越から都心に抜ける国道二五四号線、いわゆる川越街道を都心方向へ向かって走っていたら、キリンジの新譜「エイリアンズ」がカーラジオから聴こえてきた。濃密で美しいラウ・バラッドだが、ちょっと聴くだけで、ティン・パン・アレーやその周辺にある、ぜんぜんはっぱいえんどの匂いの音がけばめられているとわかった。

が、「公園」「バイパス」「銭湯」といった、ぜんぜんはっぱいえんどの匂いの言葉が胸に突き刺さり、"おやじ、あんたの時代は終わったんだぜ"と語りかけてきたっけ。

思ってみれば、はっぴいえんどもティン・パ



▼しのはら・あきら▼プロフィールは47P参照

「3」
(ワーナー・ミュージック)
収録曲▼①グッデイ・グッバイ②イカロスの末裔③アルカディア④車と女⑤悪玉⑥エイリアンズ⑦Shurrasco ver.3⑧むすんでひらいて⑨君の胸に抱かれたい⑩あの世で罰を受けるほど⑪メスとコスメ⑫サイレンの歌⑬千年紀末に降る雪は

ン・アレーは、港区・渋谷区といった東京都心のポップ、いってみれば東京コアポップだった。エッジでスノビッシュなポップとして、われわれ田舎者を壮大なる虚像としての東京へと導く存在だった。七〇年代後半～八〇年代のJ-POPはこの虚像を追いかけ、郊外都市・八王子出身のユーミンや茅ヶ崎出身の桑田佳祐が、中心からちょっと離れた目線で虚像都市・東京を映し出す"疑似東京コアポップ"によって時代を席巻した。が、今や東京という虚像はずたずたである。埼京線、京成線などがもたらした〈東京〉の恐るべき拡散が、そのコアの部分を見えにくくし、時代を先導するスノッブたちを闇へと追いやった。東京なんてモノは、もはや虚像としてすら存在しないのだ。

かつて、埼玉も千葉も神奈川も東京によって支えられていた。東京がその周辺地域を従えるといった構図である。だが、二〇〇〇年の東京は埼玉と千葉と神奈川に挟まれた地域としてしか成立しなくなっている。埼玉・千葉・神奈川に東京は引っ張られているのだ。その結果、東京コアポップは、吐き出されたとたん消滅してしまう一部のクラブ系の音に残るのみで、疑似東京コアポップもJ-POPという名称の下に一括されてしまった(詳しくは本号の「Jポップ経済学」を参照)。

並の七〇年代フェチ系アーティストではこうは行かない

キリンジはこうした時代の潮流を自覚する希有なユニットである。彼らは埼玉県坂戸市出身だが、坂戸からの目線によって疑似東京コアポップを創っているのではない。ユーミンのような都心コンプレックスは彼らにはない。埼玉という場所で普遍的な都市ポップを創り上げようとしているのだ。

東京コアポップへの羨望や欲求ではなく、二十一世紀型都市ポップの創造という見方でキリンジを捉えると、十一月発売の「3」は、とてもすっきりと聴ける。ぼくらは東京をスノビッシュに生きているのではない、都市をスノビッシュに生きているのだ、という実感が湧いてくる。そこにはティン・パン・アレーだろうがなんだろうが音の素材でしかないという潔さもある。並の七〇年代フェチ系アーティストではこうは行かない。七〇年代東京幻想に囚われたまま、前に進めなくなる。だが、裏を返せば七〇年代フェチ系が囚われて前進できなくなるほど、東京幻想は強力だったのだ。未だに東京幻想を引きずるぼくも、七〇年代フェチ系と同じ穴のムジナだ。あぁ、自戒。

★福耳2行情報★
堀込高樹、奏行の兄弟デュオ、キリンジ。通好みの活動をしている彼らだが、ソングライターとしても注目されている。高樹はSMAPの新作「Smap～SMAP 014」に「愛の灯～君とメリークリスマス」を提供。

CamScannerでスキャン

ムードマン▼イラスト[illegible]

08 ▶「BUNSINラブソング」

釈由美子

ムードマン[文]

清純すぎる楽曲からは、しかし必要以上のフェロモンが溢れ…

「BUNSINラブソング」
(メディアリング)
収録曲▶1「BUNSINラブソング」2[illegible]
3「BUNSINラブソング」カラオケ

釈さんといえば、19[illegible]年[illegible]日本のセクシー[illegible]シンボルとも[illegible]ります。セクシーシンボルでも人気上昇期に放つ音盤にはいつも、清楚と清純、背反する2種の魅力が絡んだスリルを感じます。若い歳としてデビューするときも、セクシーシンボルという立場からの脱皮をはかるか。その立場からの脱皮をはかるか。昨今の日本では戦略的に清純を前面に押し出すケースが多い[illegible]ですが、[illegible]と名前に清純[illegible]。[illegible]を衣服を脱いでいく、そんな[illegible]のシ[illegible]ジネス[illegible]ではなかった。実は人気の路線は(彼女ら人)にはバッチリ沿っているセオリーが、流行り歌にも大きく影響しているのではありません。

釈さんの音盤を98年[illegible]リリースのセカンドシングル「セカンドチャンス」から一貫し、グラビアの大胆ポーズとは逆のアプローチです。つまり「衣服を着ていく」ことが目的の楽曲。そのトーン&マナーを作っているのが作曲の吉田[illegible]と作詞の[illegible]さんで、作詞のTOMMYさんとなります。

吉田さんといえば、TOOKUというバンドでボーカリストとしても活躍している方。釈さんのいくつかの作品を手がけていらっしゃいます(ファーストシングル「風を[illegible]」収録、「[illegible]」、「Phoenix」収録、「Just my love」、「[illegible]」収録「ガンバレ」等)。作詞のTOMMYさんは釈さんの所属事務所の社長・小林[illegible]さん…ですか。

そう、「[illegible]」を、[illegible]釈さんに与えられた「衣服」なので[illegible]。確かに楽曲は、清純すぎるほど清純。しかし清純に、釈さんの身体を押し込んだらどうなるかと思います。淫靡になりますよね、どうしても。3rdシングル「BUNSINラブソング」では、過去一枚で隠された素人っぽい、しかもハメ撮りっぽい淫靡な説明力が多少改善されているものの、あくまで清純なたたずまいの楽曲からは、またまだ、必要以上のフェロモンが奔放に溢れ出しておりました。釈さん、罪深すぎます。

▼読者の好奇心▼
「[illegible]」(日本[illegible]出版)[illegible]

LOVE PSYCHEDELICO

新進気鋭の男女2人ユニットで考えた、Jポップ界の"マナー"について

下井草秀［ライター］

我々は、いったいいつから、バンド内の男女関係を詮索することをやめてしまったのだろう？
コレってなんか、変!?

09 ▶『Last Smile』

[illegible]

なんでJポップ界の男女関係は話題に上らないの？

[illegible]

の言葉は、意味きゃくを多いに誘れたからだろうか、すんなりとしました。

そう、してない？

なぜ、第人称がしとり歌で命マジリスト上最賞の男女関係をうたっているこの時世に、なぜ「ポップ界の男女関係は簡単に上をいのか。

女性の自立が高まったのだろうか、音楽そのものに関心を向けるようになったのだの、「まりは民度がくらのだの、いろんな説明はそっち上げられるだろう。そんな話が好きな人は「アエラ」でも読んでください。

彼女が居りをいだ、彼女が一、と、「試みの地平線」の北方謙三先生、あるいは「ディリースポーツ」宮崎駿監督の宮部謙二先生のような論理を持ち出すのも二つの手ではあるが、いや、そんな社会的背景なんてどうでもいい。さあみんな、核心に入るよ。

LOVE PSYCHEDELICOの2人は付き合ってるのかな？

デリコの男女関係を邪推してみると……

——無理してここまで盛り上げてきたが、すまん。

やっぱ、俺も興味ないや。曲はキャッチーだし、アレンジも洗練されていると思うのよ。音楽的引き出しも豊富で、実きいつと評価したいと思ってます。ただ、なんでこの世話な点に興味がいかないのか。

で、前置き回。社会的背景の考察に戻ります。

まずは渋谷系以降の傾向ってことなんだろうか。確かに、ピチカート・ファイブの2人の仲を疑った人はいないだろうし。どこか、フィジカルな意味での音楽を通しての関係ってより、レコードという物体を通じての関係って印象を受けるのだ。

そして仮説をもう一つ。トーク中心の歌番組が増えて以来、アーティストもキャラクター勝負、といわれる。しかし、そこでいうキャラクターとは、トークの場を持たせる程度の刹那的な意味での一発芸としてのキャラクターであり、今や誰も、彼らのプライベートを深く知りたいとは思っちゃいないんだろう。男女関係に限らず、このへんの興味の減退が、J-ポップとそれ以前の分水嶺になるのかな、なんて思ったりもするわけだ。

とにかくマナーの復興を、俺は西部劇か。

最後に個人的邪推。デリコの2人は付き合ってなんだけど今は単なる音楽的パートナーになった、って感じがする。当たってない？

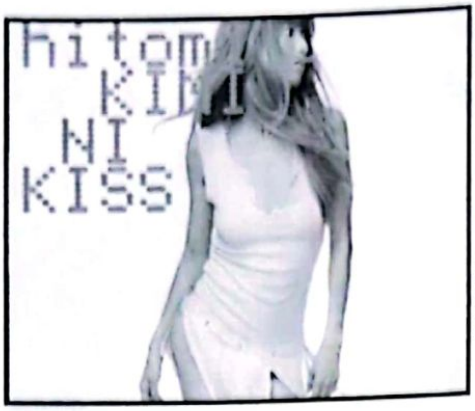
▲編集部注▲
1月11日発売予定のアルバム『FUN』の収録曲。『FUN』は、『Last Smile』『Moonlight Walk』の2曲を含む全8曲。ただしビデオの場合はクローズアップされる女性が問題視され、しかもレコード会社は同じビクター。

hitomi

アンタは声を大にして「hitomiが好き!」と言えるか?

基本的には癒し系な人だけど、劇的に変化球
複雑でわかり難い分、露出で攻める、仕事量増やす、と振りきったのは、正解です!

もうすでにこの女の賞味期限を感じ始めたわよ、アタシャ



「キミにKISS」
エイベックス
収録曲▼①キミにKISS②孤独な空

▼かんざき・てつお▼70年東京生まれ。ライター集団「線引き屋」特別顧問。某写真週刊誌記者を経て、現在マンガ誌編集が生業。

けあって、かなり多くの新規参入ファンを捕まえたんじゃないだろうか。マキシ・シングルで4曲入りは、お買い得感もある。パブリシティでもhitomiらしくない、なんだか前向きなコメント！　いやあ、オレが写真週刊誌で働いてる頃に噂で聞いた不倫はサッパリ精算して、新たな恋に目覚めちゃったのかなあ。幸福をお祈りしております。

そして、2枚目の「MARIA」。「LOVE～」が正なら、こっちは負。リリースのタイミングもセレクトもバッチリ過ぎ。発売を延期したのも、オリンピック効果で前のシングルが再び動いたせい？　完全に元気を失わない内に、ハードな曲調を持って来たのは、かなり戦略としてハマッてた。詞も割と王道だし、〈マリア～ッ〉なあんて、彼女にしては直球でマザコン男のハートをガッチリ掴みに行くあたり、もうすでに女の貫禄を感じましたよ、アタシャ。

で、3枚目に「キミにKISS」。ここで昔からのファンを納得させる曲を、ちゃんと持って来るところが憎い。まさにhitomiの本領発揮の楽曲。〈今信じたいから／明日を〉と歌では締めておきながら、ギターのメロディは「そう簡単には行かねェよ」と不安感を煽ってる（このリフがニルヴァーナっぽいとかは、言わないお約束！）。

24歳の開き直った自己肯定

でもhitomiの良さって実は、この神経症でも誘発させそうな独特の雰囲気なんだよな。基本的には癒し系なんだけど、絶対に変化球。希望と不安を両方混ぜ合わせて、一方的な曲調ではない絶妙なところでバランスをとっている。そこが、嘘と真実がブレンドされて成り立つ水商売の世界にダブるし、その匙加減の幅が、彼女が意外にも多くのファンを獲得している理由だ。一方で、絶対的な打ち出しが弱いところでもあるのだが。

そういう意味でも、今回の彼女の展開は、よくわかる。最近続けてる「渋谷デカ女ポスター作戦」や写真週刊誌へのパブリシティ以上に、今度はアルバムと同時で写真集まで発売！

〈サバよんでみたってあの頃に戻れやしないし／だから今を認めていたいの〉（「LOVE2000」）って、まあ素人さんが何処でサバ読む必要があるのか知らないけど（笑）、24歳の開き直った自己肯定がそうさせるんでしょう。彼女の良さが、少し複雑でわかり難い分、露出で攻める、仕事量増やす、と腹くくったのね。そういうhitomiは、見ていて楽しい！　やっぱりオヤジか？

★裏耳2行情報★
今回、レビューを書くにあたって、プロモビデオ集「9clips」を観直してしまったが、やっぱエエわぁ。あの脚がたまらん。クソ生意気そうだし。写真集も買うよ。アルバムには、今回のPV集めたビデオのプレゼントがあるらしい。応募してしまいそうな自分が怖いっス。

「キミにKISS」作詞／hitomi・作曲／多胡邦夫、「LOVE2000」作詞／hitomi・作曲／鎌田雅人

CamScannerでスキャン

キーヤキッスぱにっく

安田謙一［音楽評論家］

バブル終わった？　なら持ってこい！

この緩さ。どーでも良さ。行き当たりばったりさ。そのすべてが素晴らしい

TARGET 11

▼「私の彼は石油王」

山に登った事がありますか？

その山の高さに比例して規模も異なってくるものですが、頂上にはちゃんと「頂上」という表示があるものです。で、大抵の場合、え？　ここが、頂上なの？と、なんだか期待にそぐわぬ殺風景に軽く失望したりするものです。

どんな山にも頂上があるのと同じように、どんな現象にもピークはあります。

ただ、そこに至った次点で、あ、これがピークか、という自覚を持つ事は極めて困難です。ちょうど、あのバブル経済がそうであったように、盛りを終えた状態で、思い起こせばあの頃が、と、はじめて振り返るものが、ピークなのです。

ここで、バブル時のピークとも言える、具体例を挙げてみよう、と思い立ったのですが、いかんせん、バブルとは無縁だった我が人生。あの年、そういえば、クリスマス・イヴには恋人とヘリをチャーターして…、と、想像力の後が続きません。

さて、ここで私は、あるひとつの現象のピークを宣言します。頂上に「頂上」という看板を立てます。その山の名前は『Jポップ批評』です。

たった今が『Jポップ批評』のピークです。

何を根拠に？　と訝る貴方。説明します。

私は本誌編集部からの依頼で、キーヤキッスぱにっくの「私の彼は石油王」について、1800字の原稿を書いているのです。これをバブルと言わずして、何と呼べばいいのでしょうか。

1800字ですよ。キーヤキッスですよ。「私の彼は石油王」ですよ。この1曲にですよ。

もう一度、言います。20世紀最後にブームとなった「Jポップ批評」は、たった今、その「今」っていうのはアナタが本誌を読んでる瞬間ではなく、私がこの原稿を書いてる「今」、いや、もっと正確にいうなら原稿依頼を受けた「今」、もっと正確にいうなら、編集会議でページ割りが決定した瞬間。そこにピークがあったのです。

何度サビ前に「せくしーびーむ」と発しそうな口を押さえたことか

と、ここまで原稿を書いた時点で、我が家に試聴用テープが届きました。

CamScannerでスキャン

「私の彼は石油王」
(エイベックス)
収録曲▼①私の彼は石油王②デリデリ③私の彼は石油王(Y&Co. Euro Oil Mix)④私の彼は石油王(NEW GENERATION MIX)⑤私の彼は石油王(Original Karaoke)⑥私の彼は石油王(Radio Edit)⑦デリデリ(Original Karaoke)

●大ニュース! NAHOMI、TOMOMI、YUKIMIの3人に、HITOMI、ERINO、RUMI、NAMIの4人が追加されました。名前も「キーヤキッス」に「ばにっく」がついちゃいました!! 続けて「キーヤキッスばにっく」。

▼やすだ・けんいち▼Jポップ、買うだけ&聴くだけ&書くだけじゃ我慢出来ない、つーわけでフランク・ザッパのカヴァー曲でレコード・デビュー。芸名は、スーパーモコ・ウルトラビーバー&超オリーヴ! ライバルは、もち、キーヤキッスばにっく、でーす!!!!

★福耳2行情報★
私の彼は…、って曲名でJASRACのHPで検索したら、私の彼は(以下略)霊長類、宇宙人、午前様、サラリーマン、ジャイアンツファン、15年上、独裁者、パイロット、ヘビースモーカー、ミスター・シェベル、雪だるま、ラテン系、レゲエ漬け、ってなところが出たぞ。

では、楽曲について…、と、ここまで読まれた聡明な読者の方はもうお気づきでしょう。こいつ(私の事です)、字数を稼いでるだけだな、と。

更に、賢明な読者の方なら、きっと、こういう解釈をされることでしょう。こいつ(私の事です、念のため)最初に「バブル」の事を振っていたけど、それって、ひょっとして、この歌のテーマに繋げようと思ってるのでは、と。

そーだす。ジューダス。プリーストだす。

「私の彼は石油王」(ここで作詞のクレジットを入れよう、と思ったのですが、資料には記載されてません、さてはテイクイットイージー精神、ってやつですね)の主題は、30才前の恋人に「バブル」を持ってこい、とハッパをかけるギャルの歌なのです。1番、2番と、彼が石油を掘り当てて一攫千金、夢のような(とはいえ、インターネットでショッピングなど描写がトホホ…)生活を手に入れた、と思ったら夢で、3番でがんばれ! と、応援するという構成になってます。近来希に見る本当にわかりやすい歌詞で、感心しました。なんだか私が書いたのでは、というくらい波長が合うイイカゲンさが全編を貫いてます。

イイカゲンっていえば曲調もスゴイ。エスニック風味をちりばめたパラパラ歌謡…つーか、どう聴いても「恋のダンスサイト」です。しかも、何で今ごろ?って中途半端な時期に。サビ前に何度「せくしーびーむ」と発しそうな口を押さえたことか。更に、「ゴールドフィンガー99」から「アッチッチ」ってフレーズもいただいてます。何で今ごろ? って中途半端な時期に。この緩さ。どーでも良さ。3曲目にしてメンバー増員。この行き当たりばったりさ。

そのすべてが素晴らしい。これ、名曲ですよ。キーヤキッスばにっく、最高じゃないですか。こんなの音楽じゃない! なんて目くじら立てる輩もきっといるんだろうけど、私にとって音楽とは、こういう感じなんだからしょうがない。なんだったら、活字でこの曲の魅力を解き明かしたい。出来る事なら、1800字くらい使って。いや、まだまだ、ピークは先ですよ。最初の発言撤回。まだまだ、こういう語り倒したくなる「異形」が量産され続ける限り、『Jポップ批評』は永遠に不滅です。

サンガリアって関西の飲料水のメーカーが数年前、「二十一茶」て商品を発売したとき、「それって、あの『十六茶』に何か5つ混ぜただけちゃうんか?」と、思わずテレビCFに突っ込みましたが、「私の彼は石油王」は、限りなく、そんな「二十一茶」のニオイがしました。

CamScannerでスキャン

スガシカオ

スガシカオよ、ふたたび悪意をぶちまけるのだ！

水越真紀［ライター］

皮肉屋が〝行き止まり感〟に包囲されるまでの道のり

12 ▼「4 FLUSHER」

近頃のBボーイに、この自意識は分からない？

年功序列や学歴主義や、日本的共同体における以心伝心コミュニケイションなどが崩壊し始めたのは何もバブルが弾けてからというわけではない。90年代に日本を襲った数々の幻想の崩壊は、70年代からすでに始まっていた崩壊の最後の一撃にすぎない。そして、戦後の経済成長を支えてきた「日本」共同体に席を確保するための画一的「向上心」の仲間には、そもそも最初から入ることができないままで育ってきた子供たちだって、ずっと前から存在していたのだ。彼らは、「反抗」によって団結できた団塊世代の高揚とも無関係だった。たとえば団塊世代のフェミニズムやフェミフォビアが文化的遺伝子としての性差別意識を〝克服〟あるいは内包してのものだとすれば、その後の世代のフェミニズムやフェミフォビアはそれ以前の日本共同体からの文化遺伝子とは切断されたところから芽生えている、というようなものだ。たとえばスガシカオのアルバムに必ず入っている女性との倒錯的な関係やセックス描写は、狂気や変態というより、旧来の共同体的家族や人間関係に彼を誘おうとする人間への当然感じる悪意の率直な表現、あるいはどうしても共同体を構成しようとする人間というものへの本質的な違和感や疎外感であるようにも思われる。あるいは、この人の第1作以来続いている〝父〟や家族や友人関係などの小さな共同体性との葛藤は、近頃のBボーイたちには全く意味不明の過剰な自意識と映るかもしれない。

自分でないものが何かは分かるが、自分が何かは分からない

全国の〝スガシカオ〟にとって、周囲の家族も学校も家族的企業共同体も、日本社会そのものが最初から過去の遺物として存在していた。だからといって彼らは肝心の「未来」の像を持っているわけでもなかった。つまり、自分でないものは分かるけれど、自分とは何かは分からずに、自画像（アイデンティティ）をうまく描くことができない状態だったとも言える。スガシカオ自身の歌を聴いた後で「夜空ノムコウ」を聴き直してみると、そこで振り返られた〝過去〟は、一人の人間の人生の過去であると同時に、〝未来〟である彼自身が周囲という〝過去〟に対して感じる遠さだったというふうに聴くこともできる。〝過去〟に取り囲まれて生きてきた子供は多くの場合、皮肉屋になる。彼の周りには〈間抜けな野郎しかいない〉（「ミートソース」）。最初から話など通じるわけもないからすぐに〝ややこしい話〟になる。〈いいわけさえ面倒でニヤニヤと笑って〉（「ミートソース」）ばかりいる彼

CamScannerでスキャン

流行り歌"切り捨て御免"

CD&ビデオ「丸裸」レビュー

はますます「共同体」から遠ざかる羽目になる。

もちろん、そんなことは全くお構いなかったというべきだろう。望むところだったはずだ。けれども、〈本気でふてくされてはいないけど　なれあいの方法論ってシラけるんだ　いつまでガマンすればいいかな　ぼくのチカラで壊していいかな〉（「前人未到のハイジャンプ」）、〈ぼくらが確かに　いまいい大人になったからって　全てのことを許したと思っているのかい〉（「ドキドキしちゃう」）と強気にデビューした当時と比べ、今回のアルバムでスガシカオはずいぶん内省的になっているように感じる。

"過去"を軽蔑してきた男は、"未来"にも裏切られたかのよう

〈言葉もココロもぼくの声も　よだれを流してうなだれている　ユメも未来も渇いているから〉（「ミートソース」）、〈こうしてすべてがあたりまえのように過ぎ去っていくことに身を任せている〉（「AFFAIR」）、〈誰かがぼくを怪我した　だからぼくも人を裏切ってきた　愛のカタチをバカらしい作り物だとこそこそ笑った〉（「波光」）、あるいは過去に会った人たちを懐かしさを以て回想する「たとえば朝のバス停で」や〈おれの大事なものを返してくれ〉と自分の影が訪ねてくる「青白い男」など、過去を振り返り、自分を省みた時の忸怩たる痛みが際立っている。そこには、疎外感のうちに、皮肉と悪意で軽蔑してきた"過去"のなかの"未来"としての自分が、いざやって来たと言われる現実の"未来"と、自分の人生における未来（＝今）が、あまりにも望んでいたそれとは違う姿をしていること、あるいはひとが「これこそが未来だ（こちら流星号！）」と言っている現在を含めたその場所に自分の居場所はないんだという予感、そもそも自分は"過去－未来"という軸の上にいたのではなくて（カンブリア期に絶滅したアノマロカリスのように）突発的に現われてある日ぷちんと途切れた系の末端にいるような存在に過ぎなかったのだろうか……などという、行き止まり感が充満しているかのようだ。

そして同時にそれは、これまでにないほどの、痛みのある柔らかさともなっている。多分、人々が「未来がやってくる」（「国民運動としてのIT革命」by森喜朗）と浮かれ騒ぐ今の時期には相応しい"身の処し方"のようにも感じられるが、私としては、彼が再び渇いた皮肉を、悪意を隠した小さな棘を全開にする時期がまたすぐにやって来るはずと、このアルバム中の期待と絶望の隙間から願っているが。

★福耳2行情報★

本作タイトルは、ボーカーで"カードが4枚しか揃わいないのにフラッシュを持っているふりをする人"という意味とか。初のバンド録音では、メンバーがそれぞれの解釈で演奏することにてこずったり新鮮さをおぼえたりというが、共同体幻想にとことん入っていけない人だと感じさせる。

「4 FLUSHER」（キティ）

収録曲▼①かわりになってよ②性的敗北③ミートソース④AFFAIR⑤波光⑥ドキュメント2000～the sweetest day of my life～⑦SPIRIT⑧そろそろいかなくちゃ⑨たとえば朝のバス停で⑩青白い男⑪木曜日、見舞いにいく（Album Mix）

▼みずこし・まき▼ビデオ屋にたくさん並んでいて、しかもいつも全部貸し出し状態。そんなに面白いのかいと思って観た「栗の城」にびっくり。一体どういうたくさんの人が次々にこの映画を借りていたの？　皆、人が借りてるから面白いのかと思って借りたの？　これぞ「悪の連鎖」。

「ミートソース」「前人未踏のハイジャンプ」「ドキドキしちゃう」「AFFAIR」「波光」「たとえば朝のバス停で」「青白い男」いずれも作詞・作曲／スガシカオ

CamScannerでスキャン

安西ひろこ

くれい響［フリーライター／編集者］

コギャルの新教祖だからって、パラパラ仕様でいいわけ？

デビューCDはいくつもの顔を持つ彼女の"真実の姿"というふれこみなのだが……

13 ▼「True Love」

「やっぱ、今年の秋冬は千鳥格子だよね～っ」「そうですね」（いいとも屋）

みなさん、そんな"ひろ"こと安西ひろこが待望のCDデビューですよ！　でも、彼女ってイマイチ何をやってて、何を目指してる人なのか、ワカリ難くないですか？

それだけ、彼女はいろんな顔を持ってるんです。アイドルマニアの方なら、ビキニ姿で雛段に座ってたタイトルまんまの番組（司会は、"誠意大将軍"こと羽賀研二）の後期レギュラーや365日間、年中OAのイメージビデオ番組に出てた、"ちょいと"Hなグラビア・クイーン顔。格闘技マニアの方なら柔道の黒帯所有者ということで、格闘技番組でもコメントを残す、"ちょいと"スポーツウーマン顔。お茶の間のお父さん方なら「シムケンさ～ん」と志村けんを慕ってみたり、今年最高の流行語「ミニにタコできた」のマーシーズ店長と「ガブリンチョ！」と叫んでた、"ちょいと"バラドル顔。そして、コギャルの皆さんにとっては、ファッションブックも出した憧れのお姉さん的存在。これこそ今回のCDデビューの発端となった、"ちょいと"ファッション・リーダー顔だ。

なぜ、彼女はそこまで違う方向にベクトルを出しまくってきたのか。これにグラビア・クイーン時代以前に池脇千鶴を輩出、加藤あいも参加したASAYAN・CM美少女オーディションを受けてた（＝リハウスガール目指してた）"ちょいと"清純派顔の過去まで知るとますます、この人ワカりませんね。

パラパラは誰が歌ってるかより みんな揃って踊るのがいいのだ

しかし、そんな難問の答えが彼女のデビュー・マキシCDにあるらしい。ジャケ（に貼ってあるシール）をみるとタイトルと同じ大きさで、"真実の安西ひろこ!!"と親切丁寧に書かれているではないか！　で、実際聴いてみると、コレって懐かしや安室の「TRYME」？　いや、avexの十八番、デイヴ・ロジャース印の定番ユーロビートでした。とはいえ、安室ほどインパクトもない（つーか脱力すぎな）歌唱力。2曲がカラオケを含め6回ずつ、計12回これでもかと繰り返される。コギャルの新教祖だから、パラパラ用の楽曲という安易さ。コレって、"きゅうりのキュー

CamScannerでスキャン

「True Love」(エイベックス)
収録曲▼①True Love EUROBEAT Ver.②Reality>Eternity EUROBEAT Ver.③True Love DISCO Ver.④Reality>Eternity DISCO Ver.⑤True Love J-POP Ver.⑥Reality>Eternity J-POP Ver.⑦True Love EUROBEAT Ver.(KARAOKE)⑧Reality>Eternity EUROBEAT Ver.(KARAOKE)⑨True Love DISCO Ver.(KARAOKE)⑩Reality>Eternity DISCO Ver.(KARAOKE)⑪True Love J-POP Ver.(KARAOKE)⑫Reality>Eternity J-POP Ver.(KARAOKE)

●「True Love」はCDリリース前から彼女出演の頭痛薬のCMにかかってたが、印象にないハズ。だってパラパラなのに、ほとんどそう聞こえないんだモン。

▼くれい・ひびき▼71年生まれ。映画、香港ネタ中心に「この映画がすごい!」「POP ASIA」「スターログ」などに執筆。来年公開の「ハイ・フィデリティ」は傑作だ。そいから、早くタリエのソロ聴きたいぞ。

ちゃんのCFに高橋尚子を!"という代理店発想に近くないスカ? パラパラは盆踊りのようにみんなで揃って踊るってのがいいんであって、特定の誰が歌ってようと関係ない。彼女より一足先に教則ビデオ付きでデビューしたHappieの苦戦は、それを十分に物語っていた。それでもあえて、この戦略(パラパラ教本もなく、写真集のみ封入)できたのは怖いモノ知らずというか、安西ひろこというキャラに頼りスギなんである。まんま、浜崎あゆみバッタもんキャラとして立てているプロモ・ビデオを見れば、それがより明らか。やはり、グラビア・クイーンはキレイキレイなヴィジュアルでしかない。昔みたいにちょいとカワイイからってCDを買うなんて、聴き手もそんなにバカじゃない。いくら"ちょいと"で多ジャンル制覇したくらいじゃ、ダメなんである。そう考えるとそんな過去もなかったように成功した、浜崎あゆみや持田香織、坂井泉水などの努力や才能(十運)はハンパではなかったことがワカる。まあ、好きな女優なハズの『オースティン・パワーズ:デラックス』のヘザー・グラハムをフェザー・グラハムやヘザー・グレアムとか間違えている(さらに、そのまま掲載)時点でハンパなんですけどね。これでは『夜もヒッパレ』で年齢をゴマかしながらも年下アイドルたちと頑張っている、同じグラビア出身の松田純のブリブリ路線の方がまだ可愛げがあるようにも思えたりもする。

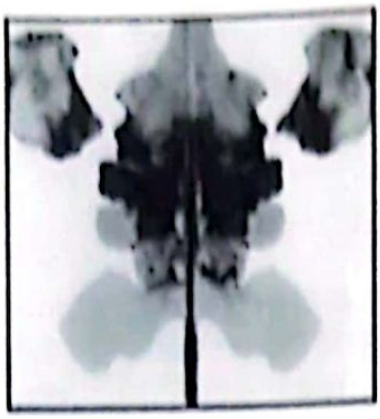
★極写2行情報★
今回のプロモーションでバラエティのほかにも、かなりの歌番組に出ていた"ひろ"。しかし、東野と一緒に踊った「うれる堂」でパラパラがあまり得意でないという致命的な事実が判明。果たして、彼女をサポートするahプロジェクトの明日はあるか?

"J・POP Ver."がメインでも良かったのでは

てなワケで、結局"真実の安西ひろこ!!"とやらは、中途ハンパなヤツが歌出しても所詮、企画モノに毛が生えたものでしかないという実例なのか? 彼女の魅力として"バービー人形に似てるから"と堂々と言うファン心理、つまり、顔イジってるからという、ホメ言葉かケナシなのか不明な点や、『BIKINI』メンバー総勢参加と噂のアングラ・パーティーIn三田家といった、東スポ・テイストな真実には少なくても迫っていなかったようだ。

それはさておき、このマキシには本誌にツッコんでもらうため(嘘)"J-POP Ver."が収められていることを最後に付け加えておこう。V6やMAXを手掛けた上野圭市による、このアレンジは予想に反してすこぶる素晴らしい(というか、東京パフォーマンスドールっぽい!)。こっちがメインでも、良かったんじゃないのというほどである。さすがに、そのときは歌い手が変わるんだろうけど……。

CamScannerでスキャン



「TALK TALK」作詞／いしわたり淳治・作曲／中村弘二

は順当なのだ。ほんのすこし眺めたり、聞いたり、触ってみたりしてみなくては、好奇心を失った瞬間から人はすこしずつ死んでいく。目の前の現実を自分と無縁のものだと決めた瞬間から、受け入れた現実はサルのように枯れていく。（同）

文中の"自分"を"ロック・ミュージック"に、"全て"や"現実"を"ダンス・カルチャー／ローカルチャー"という単語に置き換えてみれば『フチュラマ』の出来上がりではないだろうか。『ファンタズマ』・『キッドA』・『オートマティック』にも『スクリーマデリカ』にもそれなりに当てはまることがもしないけれど、ダンス・カルチャーをダンス・カルチャーとしてそのまま意識のなかで囲い込んでしまうことが、つまりは"ロック・ミュージック"という、かつては"人とは違う"を特権的に増幅させてきたタームをいたずらに強化するのではなく、"ロック・ミュージック"や、それを選択してきた自分は絶対だという前提を疑ってみることによって、むしろ、結果的に"人とは違う"ことになっていったのがスーパーカーであり、レイディオヘッドであり…ということになり、さらにいえば、仮に等しくダンス・カルチャーを受け入れたとしても、なかなか"撫でたりさすったり"といった繊細な部分までが等しくなるわけがないのだから、それらが似たような作品にはなりようがないということもここでは指摘できるかと思う。

ロック・ミュージックでもヒップ・ホップでも、かつてのように"あいまいな日本の私"を批判していれば、それで表現が成り立つと考えているとしたら、そこで繰り返されているのは単に貧しい自我ばかりであり、が、しかし、それが日本的集団性から能力主義へと変化が期待されているという気運といまはシンクロニシティを引き起こしていると見えているのだとしたら、そうした気運によって存在を脅かされている"（安易だけども）普通なる努力家たち"にとっては"長いものには巻かれたい"といった歌詞も文字通りのノスタルジーとして受け止められているのかもしれないし、歌詞ではそのようにして能力主義によって締にかけられる側の心性にマイノリティであることの根拠を求めながらも、音楽性では能力主義に積極的に対応しているというアンビバレンツな状態を可能にしていることがむしろスーパーカーの強みなのかもしれない。それはつまり、変貌しつつある日本の現実をありのままに映し出しているという離れ業をやってのけていることになるのだから。

《前へ前へと進む僕には 後を振り向く勇気も余裕もありもしないのに》（「TALK TALK」）

ティンパン

気持ちいいが憎たらしい日本最高峰の音楽趣味人

河田英也［アーティスト］

どこまでも久米の仙人よろしく、俗っぽい風来坊でいてね、細野さん

旅路を終えるにはまだ早い

15 ▼ Tin Pan

彼らの「気持ちよさ」と「憎らしさ」

自分が、不安や自己懐疑、安定への「反動、反発」をモチベーションに、欠落や過剰を抱えながらの試行錯誤過程を体現するロックに共感を寄せ、半ばそこの緊張感とリアリティを物差しに「ホンモノ」「ニセモノ」を計っていたもんで、昔から、はっぴいえんどや、ティンパン系の音を聴くと、どうしても複雑な気分になっていた。気持ちいい。気持ちよさだけに満腹なく向かうことが憎らしい。

こんな、余裕がました清ましの顔の趣味人の遊びが、日本のロックの元祖にして最高峰だなんて（圧倒的なセンスとクオリティが、なおさらムカツク）。

とりわけ、現在のはっぴいえんど再評価の中で、多くの「フォーキー」なバンド達が、洗練された美しい過去を懐かしむように歌っている、東京原風景的レトロモダンな空気、それは簡単、田舎者を圧倒するスノッブ趣味というより、（都会人のいい気な田舎幻想みたいなところも含め）マイペースな自然体の謙虚のように宣言しているけど、なんだかそこに現実の過去がスポールされているような感覚、地の感さと、根本的な反省や自己懐疑の機会を持たなかった現代っ子の、フラットな「屈託のなさ」とセットになったレ・ジンの狭さ、薄情さへの違和感のようなものを感じてしまう。

間違ってたり、趣味悪かったり、歪んでたり、暗鬱しかったりもするんだけど（だから、それは断ち切りたくて仕方のない過去だったはずなのだけれど）、そんなものに囲まれて苦心なく生きていく中で身に染み付いた、自分を育んだものに対する、愛憎入り交じった面倒臭い気分。意味や価値で人を切り刻むのではなく、そういう「どうにもならなさ」に、ただ、そっと寄り添ってくれる、「言葉」にはない優しい抽象性の懐の深さから、俺たちは音楽を必要とし、心を委ねる。そんな音楽の価値が、結果から後出しジャンケン的に読み替えた歴史観によって正解をまっすぐに求めるように計られてしまうなら、それはただ「現実」の処世の延長でしかないじゃないか。

核になる新曲がないのが、ちょっと心配

CamScannerでスキャン

「Tin Pan」
(FIRE WIND RECORDINGS)
[illegible]

しかし、はっぴいえんどのそういう部分って、実は松本隆がつくったコンセプトであって、注意深く見ていくと、細野にはそういう二枚目風の態度や下心、内向きのナルシズムや少女趣味的な臭み、気張り、気取りが全くない。あるのは、力の抜けた、マイペースに見えて、その実しぶとくゆるぎない、衰えることのない、"ふ〜らいふらふら風来坊"な好奇心と冒険心。彼は、保守的、趣味的、職人的洗練とは実は無縁な、筋金入りのモダニストなのだ。

「自分が自分である理由」に身構えるあまり、身動きが取れなくなるような時、フラットでありながらなお、いつでも前を見てたったひとりの「旅」を続ける寂寞を愛することのない彼の曲たちは、だからこそ優しく、自分を未来へと投げ出す勇気をくれる。

最近の細野は、ローカル秘儀的な部族音楽やアンビエントミュージックを追求するあまり、妙に作品も冒険もカブレっぽかったり、内なる普遍へと向かう浮き世離れしたムードが強かったけれど、実は誰よりストイックだからこそ、慣れや固執を潔しとしない彼。やはり、そこにも飽き足らない。歴史と世界を巡る往年の旅の盟友、マック久保田との共作となった前作「ロード トゥ ルイジアナ」は、ルーツ回帰、バンド回帰、歌もの回帰を感じさせ、自分の中でかつて憧れと愛情と共に血肉化された音楽から、プリミティヴな衝動と反射神経をもう一度引き戻す、振り子の揺り戻し作業に入っているように見えた。

そして「Tin Pan」。細野初のジャム録音を含むという前情報から、演奏の快楽に回帰する内容と思いきや……。

前作の延長で、とことんニューオリンズ、デキシー、ケイジャン、ウッドストックと、ルーツを掘り下げ、瑞々しい才気とモチベーションにあふれた若手バンド「うずまき」とのコラボレートに触発されながら「歌心」リハビリを続ける久保田の新作とは対照的な、バンドサウンドというより、新鮮な音響、音像に拘ったプロデュースワークが目立つ現代的な作風が、また細野らしい感じ（ハックルバック以来久々の、鈴木茂のやんちゃなギター小僧体質爆発ぶりは嬉しかったけど）。

ただ、やはり核になるような新曲やメロディがないことがちょっと心配だし、ローファイ趣味にしても散漫な印象を受けてしまう。ビジョンはないけどとりあえず作ってはみたが……という不発感というか。

しかし、彼にとってはすべては「過程」であるはず。旅路を終えるにはまだ早い。どこまでも久米の仙人よろしく、俗っぽい風来坊でいてね、細野さん。

◆編集部行間◆

久保田麻琴を激しく刺激し、細野や清志郎が触発する「うずまき」は、サニーデイら最近のフォーキー連中とは別サイドのはっぴいえんどを受け継ぐ、サブカル的風味と無秩序、真にオリジナル、オルタナティブなバンド。細野と同様、超ロングスパンな音楽的冒険を続ける「日本のグレイトフルデッド」に要注目！

◆かわだ・たくや◆ ライター兼DJ。「[illegible]」[illegible]

GO! GO! 7188

問題は〈声〉と〈歌詞〉なのだ

大須賀猛［ライター／編集者］

オタッキーな昭和趣味をはみ出す、ぶっきらぼうな明るさ、
すっとぼけた孤独、悪態をつく純情、図太いさわやかさ

このテのオト、まあケーハクな音楽ライター用語で言うなら〈GSガールズ・バンク〉というやつ。昭和40年代くらいまでのリズム歌謡をほうふつとさせるリフとバンド・サウンド十荒々しさと健気さが同居した娘ヴォーカル、というのは実は3〜4年前から芽を出してはいたのだ。

たとえば、97年前後に下北周辺で精力的なライヴ活動をし、Pヴァインから1枚だけアルバムを出して消えた知子のロックというバンド。ブサイクだがパンチにあふれた、当時23歳の知子のヴォーカルを記憶している人は今でも少なくないはずだ。その音楽的嗜好は「ルートROCKで待ってなよ」「おしゃべりエレキ」「恋の爆発5秒前」といった曲名に象徴されていた。あるいは、ともさかりえの、さかともえり名義の97年のシングル「稲妻娘」。ビッグ・ホーンズ・ビーによるゴージャスな演奏をしたがえて、♪ギラギラ太陽、♪ビカビカ稲妻、♪ワナワナ恋の罠、なんてフレーズ（作詞：森雪之丞）を当時17歳のさかともがクリーミーな声で歌っていた。

♪ギラギラ太陽〜、とくれば、GO！GO！7188のデビュー曲「太陽」にもそのフレーズが出てくる。♪ギラギラ太陽〜、は、さかとも×森雪之丞の場合は、昭和歌謡というコンセプトのために、昭和40年にヒットした和製洋楽曲「涙の太陽」（歌／エミー・ジャクソン、作詞／湯川れい子、作曲／中島安敏）から引用されたものだった。その「涙の太陽」の発想の元となったと思われる曲もあって、それは昭和37年に園まりがカバーしたフランス映画の主題歌「太陽はひとりぼっち」だ。GO！GO！7188の「太陽」では、手の込んだことに、その♪ギラギラ太陽〜、というフレーズが、「太陽はひとりぼっち」のメロディに乗って歌われる（しかもほんの8小節、挿入句的に）。まったく、ヤヤコシイというかマニアックなつくりなのだ。

マニアックついでに言えば、園まりに、外国曲のカバーではない最初のオリジナル日本語曲「赤い風車」（昭和38年）を提供したのは前述の中島安敏であり、園まり最大のヒット曲「逢いたくて逢いたくて」（昭和41年）を書いた宮川泰はザ・ピーナッツの座付き編曲者／作曲者だった。2ndシングル「ジェットにんぎょん」の3トラックめでザ・ピーナッツの「恋のフーガ」がカバーされているのは、なるほど、そういう流

CamScannerでスキャン

れであったか。という楽しみ方もできるワケだが、メンバーのユウ（中島優美）とアッコ（浜田亜紀子）の2人、さかともりと同い年のこの2人が、曽我部恵一みたいなオタッキーでむさくるしい昭和趣味を持っていたとは信じがたい。

宇多田ヒカルに近い感触アリ。これも藤圭子ズ・チルドレン？

しかしまあ、以上のようなことはどうでもよいことなのである（って、長過ぎ）。

問題は〈曲〉と〈歌詞〉なのだ。

さきの「太陽」のどこに、筆者がクラッときたかといえば、〈ギラギラ太陽、のあとに、悲痛だが激しい叫びを通して放たれた、〈神様なんて信じない／欲しいモノは手に入れるの、という部分だった。そうして2トラック目の「パンク」の、急きしているだけで他に何もしないのかなイヤな感じもしなくてすむ、というアンチ・ロックスピリットのパンチを喰らった。母親の知れない無力感やもどかしさや怒りや愛しさが自分のなかにたまってきたってあふれだしてくる衝動というのは、青春期にはやってくる。大人になってもしばしばあることだが、それをきっちり表現されると同じような気持ちになる。

「むし98」（東芝EMI）
表紙裏▼「むし98」のジャケットの裏ページ（カラーオフset）

▼関連さ行関連▼

はみごとだと思う。大げさなタイトルにも全然負けていない。2ndシングル2トラックめのこれまた大層な題名の「ロック」でも、生（むろん性を含む）への烈しい欲求と、その欲求に具体的な活路を見いだせない無力感→自己嫌悪との落差が、今度はナマナマしい言葉、というよりはナマごみのような言葉で表わされる。文字通りの、捨てぜりふだ。そうして、次にリリースされた「こいのうた」が、あまりにもストレートなバラードだったのでさらに驚いた。戸川純が憑依したかのような曲調、とくれば、間を措かずに出た「むし98」はあまりにも出来過ぎた曲名だが、ここにアングラ的な暗さや病気の意匠はなく、むしろ「ぼくらはみんな生きている」（やなせたかし作詞の歌のほうね）のオケラやアメンボに捧げたとも言うべき〈自力更生〉の歌となっている。

GO-GO-ナイツに感じるのは、ぶっきらぼうな明るさであり、すっとぼけた感触であり、悪態をつく純情であり、図太いさわやかさである。それらは、筆者にとっては、宇多田ヒカルから感じるものに近い。とすれば、GO-GO-ナイツもまた藤圭子ズ・チルドレン？　という論考を展開できるのだが、それについては別の機会に。

▼くすもと・しんや▼71年生まれ。編集・文筆業の傍ら東京のクラブを中心にDJとしても活動。

椎名純平

楠元伸哉[ライター・編集者]

日本のダニー・ハザウェイと呼ばれぬまま「世界」へ……

「世界」(ソニーレコード)
収録曲▶①世界②逃げろ！③世界(DJ Spinna Remix)④世界(Sleepy Tongue Remix)

例えば、椎名純平の声はマイルス・デイビスのトランペットである。ジャズの巨匠を持ち出すのも大仰だが、椎名の持ち味を例えるに相応しい話がある。

数年前、あるジャズ専門誌上で、こんな論争が繰り広げられた。「マイルス・デイビスのトランペットはウマいのかヘタなのか」。マイルスのラッパをヘタだとする言い分は、管弦楽的な美意識に則している。つまり、ひとつの音を均一の音量で長時間吹くことができる「機械のように正確な技術」。これを「上手い」とする価値観である。一方、マイルスをウマいとする言い分は「発想と表現力」。通常ならミストーンと呼ばれるような、かすれた音や震えた音まで表現の武器として採用し、味わい深いフレーズを紡ぎだした「巧さ」である。こちらは極めてジャズ的な価値観といえよう。この議論は当然ながら平行線をたどり「マイルスはラッパはヘタだがジャズはウマい」という結論に着地する。

なにも「椎名は歌がヘタだがソウルはある」と言っているのではない。確かに椎名の音楽はソウル、R&Bと呼ばれるスタイルではある。しかし、作品は極めてジャズ的な「様式」で構築されている。例えば、ジャズ的なるものの代表格はインプロビゼーション（即興）である。モダンジャズを支えたのは、この「様式」である。椎名の歌唱もまた、この様式＝即興性に支えられている。音階を探りながら声を出し、探る経過で出てしまった声も含めて曲とする。これは「気持を込めた」印象を与える歌唱である。もちろん、実際には楽譜通りに歌っているだろうし、気持ちなど入っていなくても問題ではない。要は「あたかもその時感じたままにアドリブで歌っているかのような即興性」を思わせるような「技術」なのだ。

新作「世界」で聴かれる、裏声と地声の頻繁な往復も、まさに即興性を際立たせる仕掛けである。さらに、トラックを這うウッドベースやジャズギターも、ジャズ的な様式化を進める装置としてうまく機能している。こうした「様式」を支えるのもまた、声をトランペットのような楽器として操る椎名の優れた技術。当然、聴き手にそう認識させる技術も含めてである。思えばメジャーデビュー前の昨年12月、人知れずリリースされたミニアルバム「LIVE」も、ライブ録音ならではのモーダルな即興から、歌詞の間違いまで克明に記録されていた。そして同作はまたしても、ソウルシンガーとして知られるダニー・ハザウェイの代表作「LIVE」の様式を借用している。タイトルはもちろん、演奏の質感、録音状態まで似せているのだが、それでも反応してくれない人のために、当時のサンプルテープにはこんな見出しがある。「日本のダニー・ハザウェイと言われてしまうのか？」

結局「ダニー・ハザウェイのようなソウルシンガー出現」という話題もないまま「世界」の発表と相成ったわけだが、まあ仕方あるまい。若くして自殺でもすれば、そう呼ばれるのかもしれないが。

★極盲2行情報★
●ダニー・ハザウェイ／ニューソウルの代表的アーティスト。1979年、ビルから身を投げ33年の生涯を閉じる。実娘レイラ・ハザウェイもシンガーとして活躍。●マイルス・デイビス／1950年代から92年の死の直前までシーンを牽引したジャズトランペッター。

CamScannerでスキャン

18 ▶『Visualized!』

Cymbals

小暮秀夫［ライター］

シンバルズのビデオは映像による「Jポップ批評」！

『Visualized!』
（ビクターエンタテインメント）
収録曲▶1.Visualized! 2.午前8時の脳内会議 3.RALLY 4.My Brave Face 5.Do You Believe In Magic? 6.Highway Star, Speed Star 7.Endroll 8.～全てのCMを収録（VHS版とDVD版では一部内容が異なります）

最近の若手バンドには、何もないのに持っていないくせに自分達の音楽が何かを持っているかのように思い込んでいる（あるいはそういう素振りを見せる）アホが多くてホントにイヤになるのだけれど、そういうダサダサな勘違いを強調している勘違い若手バンド達（インディーズ出身のビクター系ロック・バンドなどに多いですね）と明らかに一線を画しているのがシンバルズだ。

もともとシンバルズというのはそのポップスの教科書的な音楽シーンに対するシニカルな視線が強かったバンドであり、いわば彼ら自体が「ポップ批評」として機能しているというか。そもそもユニークなバンドである。みずからの特殊な体験を売り物にしたり、若者として[illegible]を見せつけることが本当の自分をさらけ出すことであると勘違いしている若手シンガーや白いロック・バンドが最近やたらと多いけれども、彼らはそのようにして聴き手の共感を得ようとはしない。彼らのそういった姿勢はビデオ・クリップに特にわかりやすい形で表れており、例えばメジャー・デビュー曲となった「午前8時の脳内会議」のビデオ・クリップでは男性陣3人が[illegible]をしたりして、「[illegible]」ではコクールの「[illegible]」のオマージュ的世界を体現させたりと、自分達の立ち位置をちゃんとわかっている。また「[illegible]」では[illegible]バンドの[illegible]をキャラクターとしてたっぷりと皮肉っている。[illegible]のシーンをコラージュして見せたりするのだ。

[illegible]は「多国籍なJポップ」[illegible]ブームを[illegible]にJポップをモチーフにして[illegible]が多い時代にあって、彼らの試みであり、今の時代にこういった形で[illegible]を提示すれば[illegible]

[illegible]になるだろう。

[illegible]

▶筆者の一言情報▶

[illegible]

19 ▶「ディスティニー」

NONA REEVES

栗原裕一郎［フリーライター］

ノーナ・リーヴス＝オリエンタル・エクスプレス2000!?

「ディスティニー」（WEAジャパン）収録曲▶①LOVE TOGETHER②二十歳の夏（Pts.1&2）③DESTINY④AMAZON⑤シリアス・ラヴ⑥DJ!DJ!～とどかぬ想い～⑦地球儀と野鼠⑧AUGUST、他全10曲収録

▼くりはら・ゆういちろう▼プロフィールは94P参照

90年代には「ポスト・フリッパーズ・ギター」とされるバンドやミュージシャンが何組か現われた。しかし、代表格のカジくんですら最近はとんと話題にのぼらない。結局、フリッパーズ的な音なり方法論なりが「渋谷系」のバッコしたあの当時から10年近く経った今、さすがに色あせているということだろう。

そうした危機感からか、ノーナ・リーヴスは、ファースト・アルバム『アニメーション』で見せた、フリッパーズ・ファーストあたりの影響色濃いネオアコーギタポから徐々にシフト、3枚目のアルバムとなるこの『ディスティニー』ではとうとうディスコになってしまった。収録された2枚の筒美京平プロデュース・シングル「LOVE TOGETHER」「DJ!DJ!～とどかぬ想い～」（こちらはユウ・ザ・ロック★も参加）で図られた、70年代末～80年代初頭あたりのディスコ・サウンド～和製レア・グルーヴ的な路線への転向がアルバム全体に反映されたようだ。が、ときどきギタポになったりするけど。

とりあえず筒美プロデュースの2曲は必聴かも。どちらももの凄く上質なポップ・チューンだが、とくに「LOVE TOGETHER」の完成度の高さは特筆に値すると思う。不覚にも無限ループ状態に陥ってしまった。

この「LOVE TOGETHER」、とにかくよくできている。すんなり聴けてしまうが、よくよく耳を傾けると、2コーラス5分弱ほどの曲なのに、Aメロ～Fメロと、6つものメロディの要素からできあがっていることがわかる。それでいてゴチャゴチャしない構成の巧みさ！

詞はと目を移せば、ポップスのセオリーに忠実に他愛のないことを書き連ねているだけだというのに、曲として聴くと、恐るべきことに、せつなさみたいな感情をきっちり喚起させてしまうのだ!!

しかし、他の曲へ耳を移すと、この驚異的なクオリティが、ノーナ・リーヴスではなく、筒美京平の手柄らしいと知らされることになる。これがちょっとツライ。もともと彼らは良質なポップスを生産するバンドだし、M2「二十歳の夏」など非常に佳曲だとも思うのだけれど、それでもやはり、筒美プロデュース作品に較べると、どこか弱く感じられてしまう。

インタビューを読むと、あたかも指導教官のように行くべきところを示唆する役割を筒美は担ったようで、作詞作曲Voの西寺郷太も共作にしたい旨申し出たのだが、筒美は笑いながら西寺くんが書いたんだからと断わったのだそうだ。

エピソードを知れば知るほど、筒美京平の職人に徹してきた凄みへと話を落としたくなってしまうのだけれど、それではあまりに面白くない。ここはひとつ、あの筒美京平と拮抗しえた実力を持つ新人なのだと記憶にインプットし、次作の期待へと橋を渡すのが建設的な見方ってヤツではないか。頑張ってね。

★福耳2行情報★

Yahoo!掲示板に今年4月ごろ「Kyohei_Tutumi（60歳／男性／不明）」なる人物が登場、宇多田、倉木、小柳などについて短い批評を立て続けに展開した。語り口のもっともらしさに、すわ本物か!?と色めき立つも真相はヤブの中。

CamScannerでスキャン

TARGET 20 ▶『ミラーボーリズム3』

ダンス☆マン

丸目蔵人[評論家]

肝心の歌詞がいまいち。ならば、もっと怪しさ、いかがわしさを！

『ミラーボーリズム3』(エイベックス)
収録曲▶①接吻のテーマ②やっぱりビリである③甘えてる円盤④お知らせ⑤漢字読めるけど書けない⑥釣りしよう！ほら、サオ振ろう！　ほか全18曲

ダンス・ミュージックを広めるべく、ミラーボール星からやってきた親善大使、ダンス☆マン。ビジュアルは松鶴家千とせ、コンセプトはデーモン小暮、芸風は嘉門達夫、ステージングはグッチ裕三、名前の☆はつのだ☆ひろとダブってはいるが、ソウル、ディスコ・サウンドに特化したレバートリーでシニアを喜ばせるだけでなく、若年R&Bファンにもその存在はすんなり受け入れられた。デビューの98年当時、そこそこアフロ・ヘアも流行ってたし……。

しかも、編曲&演奏を担当したモーニング娘。の「LOVEマシーン」「恋のダンスサイト」のヒットで陰の立役者と評価され、以後、郷ひろみの「なかったコトにして」の作曲を手掛けるなど、活動の幅も大幅に広がった。

というわけで、ダンス・クラシックに日本語の歌詞を当てる「ミラーボーリズム」シリーズも、フル・アルバムとして3枚目をリリース。経済的にかなり潤い、精神的に余裕が出てきたとの発言もラジオで聞いた。マニア道を行く者は探求心を深めるほどマイナーになりがち。そこのところを「空耳アワー」っぽい歌詞づくりでリスナー層を広げたのが、何より成功の秘訣だろう。

しかし、周囲にも「1回聴いたらもういいや」という反応が少なくないように、肝心の歌詞部分がいまいちウケてないのも事実。いや、当人の出演していた「ウリナリ」支持者は笑ってくれるのかもしれない。しかし、うるさ型が多い音楽ジャンルにあって、ワン・アイデア、しかも説明口調のストーリーが延々と続く曲展開は、どうにも間延びしている。盛んにテレビで披露していた新曲「漢字読めるけど書けない」にしても、寿司屋がらみで魚類の書き方に話を持っていくなんて、ヒロミのトーク並みにフツーすぎやしないか。笑いというフィールドからすれば、「辰巳琢郎」を音字対決で書かせているナインティナインのほうが断然キレ味がいいし、コミック・ソングとしては「ヨーデル食べ放題」のほうが反復して聴く楽しさで勝る。当初の発想は良しとしても、ツメが甘いとするのは、ひねくれた見方じゃないだろう。

原曲の英語発音に近い日本語表現という縛りがあるだけに、生みの苦しみが分からないでもないが、冗長な歌詞で楽曲のファンキーな魅力を打ち消しているのは、あまりに惜しい。「らいおんハート」をとっさに「おいらんデート」と言い換えるタモリの技があれば、もっとアーティストとして突き抜けられるんじゃないか、と思う。

深夜枠に於ける矢追純一とのUFO対談、「LOVE LOVEあいしてる」出演時のリアクションにも生真面目なキャラがにじみ出ていたが、それが日本語歌詞に影響してしまうのは問題。嘉門達夫の噺をつつくネタひろいで嘉門達夫に及ばないなら、もっと怪しさ、いかがわしさを漂わせる方法はある。モーリス・ホワイトに劣した木梨憲武に迫るべく、リック・ジェイムスくらいの視覚的インパクトも追求して欲しいものだ。

★極寒2行情報★
踊りは苦手だが、バドミントンは得意というダンス☆マン。彼の三味線が以前、星のおばさんとしてお馴染みだった[illegible]の最大条件というのは旧知の事実（かっ）。そう言えば「トナカイとほかいいんだ」あたりの曲でいっぱい、遠慮は要らないかもね。

「グロウアップ」(ソニーレコード)
収録曲▶①グロウアップ②diet NUDE version2.1③だいすき

21▶「グロウアップ」

Hysteric Blue

ヒスブルの曲のあの「鄙びた」感覚は、歌う人間を選ぶ

ミヨ荻原[フリーライター]

▼みよ・はぎわら▼著書に『どんどんやせてがつくまで』(翻訳『魔性は魔女クッキング』(ともにワニマガジン社)等。『宝島』誌からの絶りよ切り解。

ヒスブルというと、透明感があるとかなんとか、どうしても抽象的なイメージしか湧かないことが多かった。

が、これは自慢なのだが私は最近、それも新曲の「グロウアップ」を死ぬほど聴いて、彼(彼女)らの物凄いオリジナリティを発見した。それは何か。絶対にベテランには歌えないということだ。もっといえば、歌ってはいけない。

これは、たとえば「夜もヒッパレ」あたりの"芸能人カラオケ番組"みたいなアレを想像して欲しい。ヒスブルの歌というのは、本来はあの3人組だからいいという前提ではあるが、「これからデビューが決まってマス」的な女の子たちが余興まじりに歌うならいい。

が、たとえばNOKKOとか渡辺美里とか、この道10何年というベテランが熱唱した場合、歌う側・聴く側お互いにとって非常にマズいことになりやしないか。

ヒスブルの歌は、全体的に鄙びている。なんというか、若いTAKUYAが作っているにしては、セピア色のボカシが入ったような感じだ。「グロウアップ」というタイトルからして、今風ではないだろう。狙っているのかいないのかすらわからない。

この曲は最初から二重唱のハーモニーで始まっているが、これがまた、鄙びた感じの、いい意味の懐かしい郷愁を誘ったりする。あえて「いい意味」と表現したのは、Tamaのちょっと子猫チックな澄んだ若い声によって、そうさせられているから。「レトロ」とか「○年代感覚の~」みたいな、ちょっと懐かしいムーブメントが似合うのは、なんの汚れも知らない若者の特権。元ヒッピーのバーサンが現在、60年代の格好をしたらキ印なのと同じである。声、曲調、雰囲気が似ているジュディマリは、"若者ソング"ではなく"若作りソング"で、大人の遊び心といった感じか。センスのいい若作りは巧みに計算されている分、曲自体がクリアで、これは歌う者を選ばない。むしろ、ある程度の年増が歌ったほうが可愛いものだ。

が、ヒスブルのそれは、まっすぐど真ん中の若さだけで勝負している向きがある。まっすぐな分だけ、おそらくTAKUYAの天性の鄙びれ感をそのまま出してしまうのだろうか。

鄙びた歌はベテランが歌うとただのモノ悲しい歌になり、聴いているほうまでどんよりとしてしまう。逆にいえば、若者が歌うといい意味で「あ、なんか懐かしい」と思わせつつ、爽やかな風を呼ぶ真の若者ソング。ちなみに、この男バージョンがゆずだ。ゆずの若者独特の"ものの哀れ"を歌った"前向きなんだが寂しい曲"は、若いふたり組だから感動出来るのであって、狩人なんかが歌ったら「中年鬱病で自殺する前兆では」と心配になってしまう。歌う者を選ぶ若者ソングは、少なくとも筆者がここ数年で聴いた限り、ヒスブルとゆずだけで他にはない。そして、セピア色の天才、ヒステリック・ブルーの10年後が気になる。鄙びた若者ソングが萎びたナツメロになるのは結構早いので。

★極言2行情報★
ヒステリック・ブルーの歌には、怒り、悲しみといった負の感情がない。あるのは切なさとなんとはなしに感じる焦燥感。怒り狂っているパンクスは結構シーサンになってもやってけるのを見ると、真の若者像は前者なのかも。そういえば最近、ものの哀れを感じることが少なくなった。年を取ったな。

CamScannerでスキャン

顔で選ぶJポップ

OLIVIAの巻

文▶石井恒［ライター／編集者］

せっかくの可愛い白人顔なのに、引いたキャラなのが歯がゆいわ！

まあ、なんて可愛い子なの♥
でも、なんなの、この悲壮感は。
気取ってちゃ一生ブレイクしないわよ。
さあ、気合入れて、強気で行くのよ！

OLIVIAがソロになってテレビで歌うのを見た時、「まあ、なんて可愛い子なの。でもこの子、このままじゃきっと売れないわね」と確信したわよ。

彼女はアメリカ人とのハーフだけど、白人度がかなり強い顔。多くの日本人にとって、白人はいまだに憧れの存在なのか、広告モデルは、テレビCMから通販のカタログまで生っ白い白人ばっかりだし、その白人どもはなぜか皆、どう？ウチら白人って高級感があるでしょ、と言いたげに不敵の笑みをたたえてる。でもこいつらにはそれが似合ってて、それでこそ白人と思えてしまうのが悲しい真実ね。

一方OLIVIAは〝見た目、白人〟なのに不敵の笑みなぞたたえず、新人歌手としてけなげに日本人マーケットに受けようとしてる。これが問題なのよ。実際は彼女は沖縄生まれで、アメリカでの生活経験もあるけど、沖縄アクターズスクール出身。まずD&Dというグループでデビューして最終的にソロになったという、アムロと同じアクターズスクール出身組の王道コースを辿ってる。なのに、限りなく白人に近いルックスと拙い日本語のせいで、どうしても〝日本芸能界に出稼ぎに来てる自信なさげな白人〟という感じに見えちゃうの。新人としてのぎこちなさに初々しさじゃなく、ムリヤリ日本仕様で売られてる、みたいな悲壮感を感じちゃう。

自信なさげでけなげな白人って、白人らしくないから逆に記憶に残りやすいのは確か。だけどこんな評価じゃ、OLIVIAはちっとも嬉しくないだろうし、未来もないわ。森永のお菓子のCMに出てるのを見たけど、OLIVIAが終始緊張した面持ちだったせいか、そのお菓子が全然おいしそうに見えなくて、あらら、かえってまた記憶に残りやがって…ニクイわね。

ロックで行きたいならヴォーカルも鍛えて腹から声出さなきゃ

あんた、こんな引いたキャラだから人気がブレイクしないのよ。積極的な売りはどこにあるのさ。音楽はどうかと言うと、これも引いたキャラなのね。これまでの曲で印象に残った曲なんて一つもない。OLIVIAが歌う必然性もないチープな曲ばかりだったけど、最新曲「Color of your spoon」はちょっと違う。作詞、作曲からアレンジまでOLIVIA本人が手掛け、特にアレンジが凝ってて、アラニス・モリセットあたりを目指したロック志向。でも肝心のヴォーカルが問題で、弱々しくてちっちゃくまとまりすぎ。ちゃんとメシ食ってんの？　こんなに個性の薄い、感情表現の小さい歌が誰の心に訴えるというの？　甘いわよ。可愛いからって気取って歌ってたら、一生売れないんだから。

あんた、ルックスも音楽も、もっとワイルドにゴージャスにしなきゃ。非白人にとって白人の顔はどれも似通って見えるんだから、ピュア路線で行くのはやめて、一目でOLIVIAだと分かるように美しさを際立たせつつ個性的なルックスにするの。音楽面ではアレンジに凝るより、まずヴォーカルを鍛えることね。ロックで行きたいなら腹から声出さなきゃ。さあ、暗示をかけるのよ。私は豪華、日本人になんか媚びない、日本人が私に媚びればいいわ、アタシの歌をお聞き、ってね。OLIVIA、自信持って気合い入れて、強気で行くのよ！

「Color of your Spoon」（エイベックス）
収録曲①Color of your Spoon ②Grapefruit Tea ③Lettuce Garden
このシングルは3曲ともOLIVIA本人が作詞、作曲、アレンジを手がけてるのには感心するけど、チャート・アクションは過去最低。"スプーンの色"って何さ。たとえ特別な意味があっても日本人には伝わらないわ。アレンジはなかなかのレベルだけど、暗いわね。好きなことをやるのもいいけど、ビジネス戦略を立ててしっかりやらないと先がないわ。

イラストレーション▼ヒロ・コジマ

▶いしい・ひさし▶71年石川県出身。寒くなり鍋料理ばかり作っているが、いつも1人で食ってるので、たまに他人と食べると満腹にならずイラつく日々。

CamScannerでスキャン

平成演歌"秘境"めぐり旅

～冠二郎への道～

「演歌」という名の秘境に埋蔵するエンターテインメント性溢れる"珍獣"たちの生態調査を通して、忘れ去られた秘境を、再び、キラ星・冠二郎を核としたサファリパークの知恵"演歌"へと作り変える試み……。

取材・文▼宝泉　薫［著述業］

第五回　「アイドル演歌」という桃源郷

「小豆島発・演歌ルネッサンス――」というイヴェントを観た。過去3回、デビュー5年未満の女性演歌歌手によるコンテストとして行なわれ、今回はグランプリ受賞者3人を含めた10人から1曲ずつ熱演するスペシャル版。会場は「桃源郷」というより「桃源郷」。

というのも、そこには今も"アイドル演歌"が命脈を保っていたからだ。

「恋しているんだもん」

たりを嚆矢として、森

子や西川峰子、石川さ

ゆりらが名かった頃、少

女の気持ちを表現する演歌が自然に受け入れられていた。が、平成に入るとすたれ、"演歌ルネッサンス"という表現をもらしたよう

調査場所：香川県・土庄町総合会館
大分県・中津市文化会館
対象珍獣：山本博子、原沙織ほか

▼恒例の"手売り"風景。こういう汗が演歌の情を育むのだ。特別ゲストの石川さゆりはさすがにいなかったけど。

▲初々しい原沙織。2曲目の「あなたを好きでいられたら」は演歌調ポップスの傑作だが、最近は本格演歌に挑戦中。

ては差別的な言葉まで生まれて、ジャンル自体が変わりもの扱いにされるようになっていく。

このイヴェントを訪ねたのも、その現状を探るためだった。結果は、童顔と下演歌の意外性が面白い秋月ひかりをはじめ、ボーイッシュで元気のいい川野夏美や、"演歌のPUFFY"として話題を集めたKayoMayo改め、もずっこ姉妹など、それなりの状況を呈していてひと安心。コンサート終了後の即売会では、財布のひもを緩めるのに苦労した。なんせ、出演した歌手たちが通路の両側に並び、自ら「買ってトきぁい。握手だけでもいいですよぉ」などと誘いかけるのだ。ここを素通りできるのは、よほどの人非人かロボットくらいだろう。

唯一、気になったのは4年前"ルーズソックスをはいた女子高生演歌歌手"としてデビューした原沙織の声の状態がよくなかったことである。

最近は、"アイドルの涙"を見なくなったけど……

その謎は、打ち上げパーティで解けた。あいさつに立った原沙織は、話し始めると同時に泣き出し、「風邪が治らなくて、ひどい歌になってしまって……」とひたすら詫びたのだ。そのとき、ふと、「最近"アイドルの涙"を見なくなった」という思いがよぎった。新人歌手の涙がつきものだった賞レースの衰退という事情もあるが、引退や解散といった節目にも大泣きするアイドルは少ない。これは昔ほど"アイドルの涙"が求められなくなり、泣きたいアイドルも減ったからではないか。

一方、演歌は若い子でもよく泣く。おそらく読者の中にはこういう時代に演歌を志す少女の気持ちを不思議に思う人もいようが、きっかけとしてよく挙がるのが、中二のとき、役場の人に頼まれて歌を会で歌ったら、お年寄り

CamScannerでスキャン

絶対役に立つ、超・実用講座

偏差値40からの音楽ライター予備校

今回は前回の続き。ライターから企画編集へ。それはライターとしての格上げを意味する。さあ、編集部と密に連絡取って、単なる取材・執筆から「責任編集」「監修」に名前がクレジットされるまでガンバロウ!

必須科目8

編集手がけてステップアップ

専任講師 下井草秀 先生

起立! 礼! 着席!

1カ月の原稿料収入がレンタルビデオ屋のバイト代をわずかながらも超えるようになった。仕事の発注もコンスタントに入るようになり、百枚刷った名刺の残りも減ってきた。しかし、それだけではとても一人前の音楽ライターとは認められません。黙っていても業界人と分かるような風格、そんなオーラを身につけてこそ真の音楽ライターなのです。

風俗行ってシャワー浴びながら、「お客さん、学生さん?」なんて聞かれるうちは洟たれ小僧。先生自身の体験を話しましょう。ライターだなんて一言も話してないのに、イメクラのピロートークで「お客さん**音楽関係の人でしょ、B'zのチケット**取ってよ」とせがまれた時、これでライター検定の免状がもらえたと私は目頭を熱くしたものです。後で服着たら、Tシャツも携帯ストラップもトートバッグも、**全部レコード会社のノベルティ**だったことに気づいたんですけどね。

編集という名目でどんな仕事を要求されるか、で現在の位置を知る

ボロは着てても心は錦、ノベルティ着ずとも身分はライター。例えば、電話の口調だけで音楽業界人の匂いを漂わせてこそ、初めてライターとして遇されるというものです。

「完パケの白カセ聴いたけど、今度レコ発ライヴ打つんだって? あのバンドはもうウェストじゃなくってクアトロクラスでしょ。渋谷のHは面陳だったもん。マガハの取材は有り物のアー写対応だからポジ借りに行かなきゃ。ソニマガの方は特写らしいね。でも書き原なのにゲラチェックあんだからたまんねえよな。まあ、こないだ台割見たら表3見開きでドカンと出稿だからしょうがないけどさ。じゃ、例のインタビュー起こしといて。3日締めの朝イチ入稿の即戻し校了ってことで」

いやあ、これなら学ラン着てようが女装してようが全裸だろうが、もうどこからどう見ても立派に音楽業界人です。電車で向かいの席に座った女子高生がこちらを見つめる視線も、心なしか憧れを含んでいるような。ライターの醍醐味を感じるのはまさにこんな時です。が、そんな自分に酔いしれながらも、多忙な我々は寸暇を惜しみ次の業務連絡に励まねばなりません。

「あ、藤野ちゃん? ナオンのヤオンでインビで5時入り。ギャラ2並びでツェーマン、ゲーマン。ハッパフミフミ、ウッシッシ。ケンチャナヨでカムサハムニダ」。えー、さすがに業界歴浅いとボキャブラリーも貧困で、途中から何話してんのかすら怪しくなってますが、気づけば向かいの女子高生の視線も鋭くなっているようで。はい、単純に車内で電話するなってことだったのね。ライターとしての常識の前に社会人としてのマナーを守ることも大事です。手を上げて、横断歩道を渡りましょう。さて、諸君もすでに気づいていることと思いますが、先の電話の相手はもちろん編集者。音楽ライター

イラストレーション/スズキサトル

CamScannerでスキャン

が時に実験に連絡を取る暇もない、は、編集をおいてほかにありません。カッコーの雛のように口大きく開いてれば勝手に飯喰わしてくれるほど、この業界は甘くない。編集部への短縮ダイヤルはライターにとって、いのちの電話。編集者との密なコミュニケーションで築いた巣にこそ、仕事というエサは降ってくるのです。

小鳥ちゃんたる我々に編集者が与えるエサは、単なる取材・執筆に限りません。ある日、懇意の編集部員から、「下井草ちゃん、**編集手伝ってよ**」などという電話がかかってきます。しかしちょっと待てよ。

編集って何？

著述家としての栄達を目指す我々にとって、編集という仕事は見知ったようでいて実は未知の領域。フリーターとフリーライターの違いも分からない世間（特に不動産屋とクレジットカード会社）に日々憤慨しているくせに、ことに編集業務の詳細についてはよく分からなかったりするのです。であるからにして、編集の仕事を経験することは、**編集者の気持ち**を理解するためにも、そして**雑誌ができる仕組み**を理解するためにも、**大変有意義なこと**なのです。

しかし、ライターの編集への参画と一言で言っても、その形態は千差万別、ピンからキリまで。

「責任編集」とか「監修」などという肩書きで大御所音楽評論家の名前が入った特集記事や単行本を見かけることも多いでしょう。でもその実、御大のやった仕事といえば前書きだけ、なんて名義貸しはよくある話。**現場は編集者と手下のライターが仕切ってる**わけです。まあ、一日警察署長の鈴木あみが実際に犯人逮捕したり取り調べしたりするわけじゃないのと同じことですね。関係ありませんが、眞鍋かをりが一日編集長を務める雑誌なら、先生、どんな仕事でも受けるつもりです。

さて、うってかわって駆け出しのライターの場合になると、編集とは名ばかり、当てがわれる仕事は資料集めやらテープ起こしやらアポ取りやらで体のいい雑用係ということも。編集という名目でどんな仕事を要求されるか。それがライター双六の現在地を確かめる指標となるのです。

原稿料込みのギャラかどうか、最初に聞いておきましょう

えー、こんな両極端の話で希望に燃える諸君を混乱させてもしょうがないので、まあ、ここは一般の音楽ライターが編集に参加するケースに話をしぼってご説明しましょう。

まずは編集部員と角突き合わせて**企画会議**。取材物でもレビュー特集でもいいですが、ここでいちばん肝心なのは、**ライターの人選**です。適材適所ということよりも、いかに自分の知り合いに仕事を回すか、そこに心を砕く。情けは人のためならず。同志に着せた恩はいつか自分にも還元されます。かくして、似たような特集やムックにはいつも似たようなメンツが執筆しているという、美しい業界内互助関係が構築されるのです。そこを足掛かりに、**「責任編集」「監修」**への道を邁進しましょう。

ライターが編集者を兼ねる際は、編集者としてのギャラが**原稿料を含む場合と含まない場合**があります。その違いはあまりにも大きい。SMクラブの料金がプレイルーム代込みなのか別なのかと同様の切実な問題です。あらかじめ原稿料込みのギャラなのにシコシコ記事書いても、**結果的にはすべてタダ働き**。それぐらいなら、ライター界での政治力を身につけるためにも、**どんどん知り合いに仕事を振る**べきです。事前に原稿料を尋ねることがなぜかタブー視される出版業界とはいえ、この条件だけは必ず最初に聞いておきましょう。

はい、ちょうど時間となりました。何か質問のある人はいますか。……えっ、**入稿のやり方とか校正記号の書き方**とかも教えてほしい？　君はここじゃなくてジャナ専にでも通ったほうがいいと思うよ。

21世紀の音楽ジャーナリズムは、諸君に任せた！　もし何か編集を請け負ったあかつきには、先生にも仕事を回すように。

起立！　礼！　解散！

▼しもいぐさ・しゅう▼プロフィールは65P参照

「英語詞論争」を総括する！

文▼島賀陽弘道（『アエラ』編集部）

私の狙いはある意味成功したが、出てきた発言の内容は肩すかしの連続だった。発言した全員が、この論争の唯一の論点を空振りしたからである。

私が敢えて「挑発的」な文章を書いた理由

Jポップの英詞をめぐる論争は楽しかった。表現者の反応、レコード会社や事務所の対応から、他の評論者の態度に至るまで、何から何まで狙った通りの展開になったからだ。

私がJポップの英詞の滑稽さを指摘したのは「英検ランキング」が初めてではない（本誌六号百三十八ページ）。ところが残念なことに、前回は反応ゼロ。そこで、編集部が「英検」という挑発的な企画を提案してきた時、反発を予想しながらも、敢えて乗ることにした。そしてわざと語調を強めた。論争に相手を誘い出してみようと思ったのだ。

論争になれば発言する人間が出る。それを読めば、表現者本人であれ評論者であれ、その資質が読者の前に明らかになる。Jポップに携わる人々の知性や感性がどの程度なのか、サンプルが記録される。これが狙いだった。

その意味では成功だったのだが、出てきた発言の内容は肩すかしの連続だった。発言した全員が、この論争の唯一の論点を空振りしたからである。「英検」と本誌八号百五十六ページの描稿を再読されたい。私が主張しているのは「表現上の必然性もないのに、日本人リスナーに英語で歌う日本人の表現者は二流である」「しかも間違いだらけの稚拙な英詞を世に出すのはプロの表現者として三流以下である」という点に尽きる。これが論点である。そして、そんな惨状を放置してきた責任を負う評論者の一人として、評論者の責任について触れないわけにはいかなかった。よって、この論争での反論は「当該の英詞は間違っていない」「表現上の必然性がある」「表現として価値がある」ことを根拠を挙げて証明すること以外にはない。

野球に例えるなら……

くどいようだが、誤解が甚だしいので念のために言っておく。私は「日本人は英語で歌うな」などと短絡的な主張は一切していない。むしろ「英語でしか表現できない必然性があるなら、どしどし英語で歌えばいい」とまで言っている（宇多田ヒカルをその例として挙げておいた）。曲についても議論の対象にしてい

CamScannerでスキャン

ない。歌詞のみである。その他、枚挙にいとまがないが、論点になっていないことにいくら議論を挑まれても、こちらは応える必要もないし、応えようもない。

野球に例えれば分かりやすいかもしれない。私はマウンドに立ってバッターに向かって球を投げた。論点がその球である。打者が投手に勝ちたいのなら、その球を打ち返して塁に出るしか方法はない。今回の「論争」では、潔く打席に立ったのはボニー・ピンク（BP）一人だった。期待したが、悲しいかな彼女も論点を空振りした。プロ野球選手だと思ったらリトルリーグだった、みたいな拍子抜けである。本誌前号「覗き見メディア時評」で拙稿を取り上げた自称評論家諸兄も同じだ。こちらがマウンドの投手なら、諸兄は球場外でナイターを見ながら素人野球談義をしている酔っ払いのようなものだ。

「Jポップの英詞？あれはインストですよ」という意見

ひとつだけ、なるほどと思った意見がある。ある外資系輸入CD店のバイヤーと雑談をしていた時のことだ。彼は「Jポップの英詞？　あれはインストですよ」と言ったのだ。これなら、歌を単なる音として捉えるか、意味を運ぶ言語として捉えるか、まだ議論のしようがある。表現者にせよ評論者にせよ、プロならせめてこれくらいの意見は言ってほしかった。「英検」では「文法的に間違っている」という穏当な表現に留めたが、ありのまま言えば、Jポップの英詞の大半はグロテスクなほど滑稽な代物である。どれくらい滑稽かと言うと、厳冬期の谷川岳にアロハシャツ姿で登ろうとする、「空しかしゲタ住んで希　困グキどこ」と書いて俳句と称するくらい、滑稽だ。意味さえ通じないのだから、表現以前に言葉としてインポテンツ状態なのだ。

結局、このグロテスクさを理解できるかどうかが、この論争に対する態度を決めたようだ。理解できないから「そんなの、いいじゃん」と思考停止して、論点に関係のない話ばかりつつき回すのだ。ネイティブが和製英語を嘲笑するサイト（例・http://www.engrish.com）などご覧になってはどうか。私は背筋が寒くなった。

こんな状態では、Jポップが国外で通用することなど夢のまた夢だし、国内でも成熟した表現文化として認められはしないだろう。インチキ英詞を弄しているのはほんの一部なのに、何とも悔しい。

ところで、BPの所属レコード会社が、広告絡みの「圧力」を編集部にかけたという話が「噂の真相」に出ていた。真相は私には確認のしようがないが、もし本当なら見過ごせない事態だ。BPはルールを守ったのに、周囲が彼女の顔に泥を塗るような話が次々に耳に入ってくる。どうにも理解に苦しむ。私が知る音楽業界の人々は常識をわきまえた人物が多いのだが。

▶うがや・ひろみち▶プロフィールは177P参照。

CamScannerでスキャン

覗き見〝メディア時評〟20世紀総括記念版

鈴木淳史〔クラシック音楽評論屋〕×栗原裕一郎〔ライター〕
フィーチャリング下井草秀〔ライター／編集者〕
四コマ漫画▼村松栄一

第3回「Jポップ」と「Jポップ批評」の未来

あいまいな日本というか「J」の私たち

——20世紀最後の特別バージョンということで、ゲストに「偏差値40からの音楽ライター予備校」が好評の下井草秀さんをお招きしました。

下井草　どーも。

——ありがちなテーマですけど、侮蔑と羨望入り交じった(笑)「Jポップ」という言葉の定義というか、是非からいきましょうか。

下井草　渋谷のHMVとか象徴的かもしれない。かつて今のマルハン・パチンコタワーにあった店舗は、「渋谷系」だけ別の売り場だったんですよね。他は全部「Jポップ」として一緒くたなのに。あそこのカテゴライズが渋谷系の線引きだったな。スパイラル・ライフはいつになったら「渋谷系」の棚にいれてもらえるのかな、とかさ(笑)。

栗原　「Jポップ」も、使い始めたのHMVだって話ですよね。

鈴木　タワーレコードじゃなかったんだ、意外。

下井草　「渋谷系」もHMVの命名ですね。

栗原　90年代はレコード屋が音楽文化を牽引した面が顕著だったかな。

下井草　うん。当時HMV渋谷店の邦楽担当だった太田浩って人がいるんだけど、この人の店舗レイアウトが与えた影響は本当に大きいと思う。昔、『ブルータス』で誰かが、「もし渋谷系の葬式があったら」って小さなコラムを書いてて、それによれば、喪主は小西康陽で斎場は渋谷HMV(笑)。

やっぱり恥ずかしい「J」

——『考えるヒット』の連載スタートが97年。その頃にはもう「Jポップ」って名称はそれなりに浸透してましたよね。

鈴木　考えてみると、「Jポップ」という名称を用いた雑誌って他にないですよね。

栗原　どっちかつーと侮蔑的な言葉だからねえ。恥ずかしいし。

下井草　うん。「Jポップのアーティスト」って自称する人は誰もいませんからね。

——気持ちは分かるけど、でも、何がそんなに恥ずかしいんだろ？

栗原　やっぱ「J」でしょう(笑)。

鈴木　「歌謡曲」と比べるとどっちが恥ずかしい？　「Jポップ」になって逆に恥ずかしさから脱却しようとしたようにも思えるんだけど。それとも、そういう悪あがきが最も恥ずかしいのかも。

——「歌謡曲」もどちらかといえば、昔は「恥ずかしい」存在でしたよね。ただ、時代がひとまわりして成熟しちゃってるから、今さらそんなことを言う人間はいない。プロレスの「八百長云々」と同じで。

鈴木　「Jポップ」はシステムが見えにくいってことはないでしょう？

栗原　つーか、見せてるよね。

鈴木　じゃあ、ロラン・バルトが文楽を見て指摘したような、日本文化としての「仕掛けの露呈」がすんなりと受け入れられているってことでしょう。Jポップ世代には。

——それなら、なんで「歌謡曲」のように熟成した見方をされないんだろう。

栗原　だから、熟成を妨げるのが「J」なんですって(笑)。

——そんなに真顔で恥ずかしがる代物？　やっぱり(笑)。

下井草　「Jリーグ」は恥ずかしいなと思いましたよ。あと「Jビーフ」ね。「J文学」は言うまでもないと(笑)。

CamScannerでスキャン

栗原　「J」って無自覚な感ずかしさだよね。

鈴木　辻仁成みたいな？

栗原　（一同）ああー（笑）。

栗原　あと、責任の主体がないっていうのがあるでしょう。「J文学」だったら河出を責めれば気が済むんだけど（笑）。

鈴木　責任が「J」そのものにあるって感じ。日本固有のってことに開き直る積極性と傲慢さ。自虐的なニュアンスも多少あるかもしれないけど。

下井草　ちなみに、「ニューミュージック」はユーミンが、「テクノポップ」は坂本龍一が命名者。どっちも本人が誇らしげに明言してます。「Jポップ」も、絶対に考え出した誰かがどこかのレコード屋にいるわけでさ、その人は名づけ親ってだけで名士になれると思うんですよ。命名責任者、出てこーい！（笑）

——良くも悪くも、洋ものコンプレックスがなくなったと同時に出てきた言葉でしょ、「J」って。

下井草　開き直りって気もし

栗原　洋楽の歴史も知らず、白人コンプレックスもなくなったリスナーが「Jポップ」聴いてる事実は重要かなと。

——で、そのことの是非はどうなんですか？

栗原　いいんじゃないですか（笑）。

鈴木　能書きみたいな歴史は必要ない、まさに終焉の時代の音楽ってことで。

下井草　教養としての音楽って階梯がなくなってると思いますよね。クラシックが一番偉い、みたいな。かつては、大文字の音楽に対するカウンターとしてのロック支持、もっとアンビバレントにあえて歌謡曲を聴く、みたいな行為もあったわけじゃないですか。

——そのへんどうなんです？クラシックのリスナーって。

鈴木　最近一番多いのは「癒

栗原　「J文学」以上の便乗商法だよね（笑）。日本人演奏家や指揮者ってだけだし。

下井草　クラシック業界の反応としてはどうなんですか？

鈴木　「Jクラシック」という文字が紙面に登場すること自体はまだそんなにはないし、批判

恋しさとせつなさと小室哲哉と

栗原　なんだかんだ言っても、小室哲哉が90年代、一番大きい事件だったんじゃないかなと。

下井草　篠原涼子の「恋しさとせつなさと心強さと」（94・7・21発売、202万枚）あたりでソニー臭さが抜けて今のコムロって気がしますね。

——仮に「Jポップ」の象徴をコムロだとすると、さっき話題になっていた「恥ずかしさ」に関する言説とコムロに対する批判はどかか根が同じというか……。ものすごく批判の対象になって

たじゃない、一時、彼は。

栗原　そりゃーアレですよ。やっかみそねみ（笑）。なぜあそこまで売れたかについては一考の余地はあるかもしれないけど、現象を後追いして過剰に意味づけしてもねえ。

下井草　だいたい現象っていうのは、その当時の流行語を当てはめれば説明できちゃいますからね。「癒し」とか「ポジティブ・シンキング」とか「複雑系」とか（笑）。

鈴木　「たまごっち」とか「パパ

栗原　脱ヨーロッパ的だからいきなり「J」ってのもすごいね、しかし（笑）。

ピンクパンクぽん太①

ラッチ」とかですかね(笑)。そういえば、当時はクラシック関係の文章でも、「コムロのようには売れないし」とかいう感じでちょくちょく出てました。当然ながら、やっかみ以外のナニモノでもないんですけど。

――やっかみが大部分にしても、別な文脈でコムロに向けられた蔑みの視線ってあったわけですよね。

栗原　はっぴいえんどの後歌謡曲の詞を書き出して村八分にあった松本隆みたいな？

下井草　でも松本隆はセル・アウトじゃなくて、体制内オルタナティヴという意味が大きい。彼の場合、歌謡曲と戯れるみたいな視点・思想性があったけど、コムロに限らず今はもっと悪いですよね。

栗原　コムロも当時は、売れた原因についていろいろ語ってましたけどね。

下井草　ディスコの帰りにカラオケボックスに行くような客が増えているのに、彼らが歌うための曲がない。それを作ったから当たったとか。

栗原　どうやって歌うねん！　っつー歌いにくさも、ひとつのキーだったかな。

鈴木　カラオケでそれをひとつひとつクリアしていくゲーム感覚ってあったでしょうね。

『売れる！』技術

――コムロ以外のネタで90年代を振り返ってみましょうーか。

栗原　10年後、何が残ってるかと考えると、コムロと宇多田と林檎の3つって気が……。

下井草　そんなもんでしょうね。後はロック的な文脈に寄っちゃう。それとはまた別のJロックにB'zがいるけど。

――GLAY、ラルクは？

下井草　B'zに象徴されるもののひとつって感じでしょうね。

栗原　B'z、レコードの売り上げ、いよいよレッド・ツェッペリンを抜きそうだとか。

下井草　ビートルズの『ザ・ビートルズ1』ってアルバム、あれ、英米で1位になった曲を27曲集めたっていうんだけど、B'zってもうそのくらいはいってるんですよね、日本だけでいえば。

栗原　シングルが3000万枚強、アルバムが4000万枚強だそうです。スゲー。

――アルバム出せば必ず200万枚？　買ってるのは、コアなファンだけじゃないでしょ？　この数字は。

下井草　生活の中でB'zがとにかく一番大事って人が200万人いるとは思えないですよね。

栗原　ミリオンって大変な枚数だったのにね、昔は。

下井草　ミリオンがふつうに出始めたのって、KANの「愛は勝つ」(90・9・1発売、201万枚)あたりからですよね。あれを皮切りに100万枚突破がぞくぞく出るようになった。あの売れ方を見ていて、音楽がというよりも、CDを買うという行為自体が流行っている感じがしたんですよね。85～87年あたりのドン底の時代だと、邦楽シングル年間売り上げの一位が50万枚台ですからね。石井明美の「CHA―CHA―CHA」(86・8・14発売、58万枚)とか。

栗原　それもタイアップでようやくって感じだった。

鈴木　ちょうどCDへ移行する時期的な谷間だったこともあるでしょう。

下井草　橋本治が書いてたんだけど、チャゲアスの「SAY YES」が250万枚売れて村上春樹『ノルウェイの森』も250万部売れた、つまり買ってる人間は同じだ、そういうものを買う層が日本には250万人いるって。当時感心して読んだんですが、今それどころの話じゃない(笑)。800万枚だもの。

鈴木　商売うんぬんよりも、まるで病気か宗教の世界ですよね。日本人の15人に1人は買ってるわけですから。

栗原　あれだけ売れてトチ狂わないのがすごいよなあ、宇多田。

――自分の作品がいきなり800万枚売れるって、怖いことですよ。結果的には、大衆の好奇な視線にさらされて、あらゆるメディアが自分のことをのべつまくなしにしゃべっているのにほとんど動じない。宇多田と対極にいるのが椎名林檎かもしれない。自分に関するファンやメディアの言動に敏感になっているところが。

栗原　二六時中、人格改造セ

▶くりはら・ゆういちろう▶年の瀬といっても暦上の数字にすぎず、21世紀にしたところで事情は変わらない。だからそんなに騒ぐなよ、と斜に構えるべく見廻すと、世間様もぜんぜん盛り上がっていないようす。景気のせいか、はたまた未来なんてもはや誰もあてにしちゃいないってことなのか。ともあれ皆さん、良いお年を。

CamScannerでスキャン

で聞きまくって、最後にこれでとう！ パチパチと。

下井草　『エヴァンゲリオン』ですな（笑）。

鈴木　林檎ーシンジ？　巨大化したレイプでもあるわな（笑）。

栗原　林檎はある意味宇多田以上に不可解。どう見積もっても、せいぜい10万、20万の世界でしょう？

――音楽だけじゃなく、いろんなイメージが増幅した結果でしょ？　久々じゃないですか、ああいった大衆に妄想を喚起させるキャラクターって。本人はそれが逆に嫌になっちゃったみたいですけど。

栗原　とすると今度は、ブレイクの速すぎることが不可解。「歌舞伎町の女王」で「なんかまたパチくせえのが出てきたなあ」と思う間もなく、だもの。キャラクターの浸透にかかる時間を考えると、あまりに速い。

下井草　ぜんぜん様子見ないで受け入れちゃってますよね。中央線沿線テイストで、「ああ

ブルーハーツという呪縛

栗原　それ以外では、ブルーハーツの呪縛ってのが90年代としてはひとつありそうだなと。

下井草　80年代が89年で終わらず93、4年まで続いていたとは言えそうですよね。

栗原　オザキは80年代できっちり完結してると思うんですよ、神話になって。でもブルーハーツはいまだに健在というか。解散は90年代だけど。

下井草　スピッツもドラゴン・アッシュもブルーハーツから出てきたバンドですしね。大文字の思想としてのロックって意味でいえば、確かに正史として残ってるのはブルーハーツぐらいで、それ以外のバンドはバンドブームの徒花として、なかったことにされちゃってる。

――ブルーハーツが出てきた頃って、独立資本の事務所がロック系のアーティストをメジャー・シーンで本格的に売り出し始めた時期ですよね。その中で、ブルーハーツはやっぱり別格だった。一時のRCサクセションみたいに、猫も杓子もが絶賛してたし。

下井草　サンプラザ中野が「オールナイトニッポン」で、「今日、♪人にやさしく～って歌を偶然聴いてすごい衝撃を受けたんだけど、誰が歌ってるのか知っているリスナーは教えてくれ」って、時でおけてた曲を覚えてる。

――「人にやさしく」だけじゃなく、やっぱり彼らの歌詞にはインパクトありましたよ、当時としては。

栗原　サウンドはあの調子ですもんね。ハイロウズの「青春」聞いたときは感動したもんな。「転調してる！」って（笑）。

――リアリティの欠片も感じられない美辞麗句か、リアルといっても結局は欲求不満をぶちまけただけの攻撃的な歌詞ってのがそれまでの相場だったわけでしょ。彼らはそれとは違った文脈で自分たちの内面を素直に表現したわけですよ。〈気～がぁ～狂いそう〉と〈人にやさしく〉が同居ってのもスゴイ。当時は「やさしさロック」なんて言葉もありましたけど。

鈴木　それが、今は「おはロック」になってしまったとか（笑）。ブルーハーツの歌詞とメロディのそぐわなさが、当時はある種過激だったのがウケたんじゃないの？　まるで、校長先生が無理して若者言葉を使った時のようなインパクトだったかもしれないけどね。リンダーリンダーが「みんな、死んだー」みたいに聞こえて・超イカす歌詞じゃん、と思ったことはあるけどねぇ（笑）。

栗原　そういうインパクトはわかるとして、だからってメッセージだの思想だのって話にどうしてなるのか。

――80年代って時代自体が、そういう時代だったんでしょ。「価値相対化の時代」というか、意味づけを望んでいたというか。

ピンクパンクぽん太③

▶すずき・あつし▶70年生まれ。売文業。クラシック音楽に関する戯作＝評論が主なフィールドワーク。最近、気になるのは「あぶらだこ」の復活。

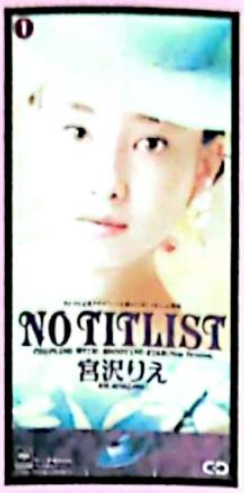
CamScannerでスキャン

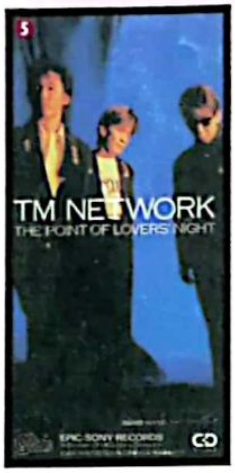
ぼくの、愛すべき「100円CD」コレクション

『オリコン』1位になったシングルCD編

各作品について言いたいことは人それぞれあるだろう。だが、今こうして「銀盤」として現存している——その事実に、ぼくは敬意を払いたい。

文▼麻井良彦［『a、b、c、』編集長］





1.宮沢りえ「NO TITLIST」
（90.2.15発売　90.2.16付「オリコン」1位）
▶10年前、ぼくは小劇団で役者をしていて（苦笑）、そのデビュー作でこの曲が流れたんですよね。「ノー・タイトリスト」。後に役者として売れず泡沫ライターとして満落した人間にふさわしいタイトルじゃないですか（笑）。冗談はさておき、作・編曲は小室哲哉。皮肉抜きに、当時の彼には（日本の）"ポップス"に対する愛があった。ただそれではセールス＝商売に繋がらなかったのだろうが。

2.LINDBERG「今すぐKiss Me」
（90.2.7発売　90.3.5付け「オリコン」1位）
▶いまでもよく覚えている。手塚治虫氏逝去直後、おおよそ"神様"手塚タッチとは異なったアニメぽかったりCGチックなグッズが氾濫したことを。敢えてブランド名は挙げないが、知人がアルバイトをしていたショップでもバカ売れだったそうだ。リンドバーグがこの曲でブレイクしたとき、ボーカルの渡瀬マキはそんな"アトムTシャツ（長袖）"を来てブラウン管の前に現れた。

3.たま「さよなら人類・らんちう」
（90.5.5発売　90.5.14付け「オリコン」1位）
▶とにかく、かの「イカ天」ムーブメントを語るとき、彼らを外すことは出来ないであろう。もし彼らが「イカ天」に出ず吉祥寺・曼荼羅あたりで地道に活動していたら……。むろん現在もそんな「運とチャンスに不幸にも恵まれない」バンドは数多いるのであろう。だが、運も才能のうち。目立ったヒットとしてはこの1曲くらいだが、将来"再評価"されるときが訪れそうで怖い。

4.ジッタリン・ジン「にちようび」
（90.6.21発売　90.7.2付け「オリコン」1位）
▶驚いたよね。何がって、この夏のwhiteberryによる「夏祭り」のカヴァー（&ヒット）。あれってやっぱりディレクターあたりの趣味なのかしら。普段、ぼくは仕事柄、小中学生と接する機会が多いんだけど、彼らが「夏休み」を口ずさむわけだ。で、こっちとしてはオリジナル云々を語りたいわけだけど、当時まだ生まれていなかったりするのよね。これ今年の最大ショックかも（笑）。

5.TM NETWORK「THE POINT OF LOVER'S NIGHT」
（90.7.7発売　90.7.16付け「オリコン」1位）
▶あのね、いまこそ「おしゃれカンケイ」あたりで古館伊知郎に突っ込んで欲しいんだけど「コムロさん、いまどこでなにしてるんですか？」って。まあたぶん、LAとかNYで曲作りとかレコーディングなんだろうけれど（苦笑）。で、TMって正式に再結成したんだよね。特に再結成盤とかベスト盤とかでボロ儲けもしてないよね。どういうことなのかしら。

ア・グルーヴならぬ、クズ・グルーヴ

いまを去ること10年前。元号が昭和から平成に代わる頃の話。ぼくは、月に3、4本のペースでクラブDJをしていて、"サバービアもの"（フリー・ペイパー"suburbia suite"に紹介されるような音楽のこと）ばかり選曲していた時期があった。"サバービア"といっても、特定の音楽ジャンルを指すわけではないが、ぼくが好んでかけたのは、映画のサントラ盤やイージー・リスニングもの。『ヨーロッパ映画音楽全集』などのオムニバス盤がときどき二束三文の値で売られたり、「掘り出し物」「3枚1000円」コーナーなどでイージー・リスニング系のレコードが投げ売りされていて、結構、利用させ

CamScannerでスキャン

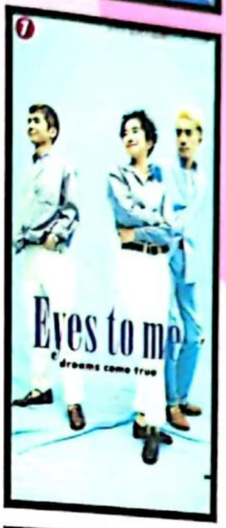
6.徳永英明「ウェンズデイ・ムーン」
(91.4.10発売　91.4.22付け「オリコン」1位)
▶徳永英明の代表曲って何を連想します？　たとえばデビュー曲の「レイニーブルー」とか、CMソングになった珠玉のバラード「輝きながら」とかじゃありません？　ところが本稿を書くにあたり、調べたところ、オリコン1位になっているのはこの曲だけなんですね。しかも知った[illegible]ていましたが、歌い出しとかエンディングとか意外な展開。聴いてみるもんです(笑)。

7.Dreams Come true「Eyes to me」
(91.4.25発売　91.5.6付け「オリコン」1位)
▶いまや世界に羽ばたくドリカム。意外にもシングル9作目にして初のオリコン1位。でもそう言われてみると、この曲辺りから耳に入ってきたよね、この声。実はぼく、このボーカルちょっとダメなんです(苦笑)。でもデビューから全部アルバム持ってるんです(謎)。つまりは「怖い者見たさ」っていうと言い過ぎだけど、なぜか気になるんですよね。

8.布袋寅泰「BEAT EMOTION」
(91.6.28発売　91.7.8付け「オリコン」1位)
▶今年で20代にバイバイするぼくらといえば、本誌版元である「宝島」にも煽られて(苦笑)、思い切りバンド・ブームに乗っかったりしたわけで、ちょい自慢話をさせてもらえば、ぼくたちのバンドに現AIRの車谷くんが見に来たりね。そんな時代の主役はBOØWY。ひねくれ者のぼくたちは当然アンチだったわけだけれど、布袋ソロ「GUITARHYTHM」は悔しいけれど衝撃だった。唄も歌っちゃうのねとちと驚いたシングル。

9.槇原敬之「どんなときも。」
(91.6.10発売　91.7.29付け「オリコン」1位)
▶ついに古巣ワーナーから再デビューが決まったマッキー。事件のことは触れまい。何を隠そう、ぼくは中古(100円CD)ながら、彼のシングルはほとんど持っている。そして、酔いが回るとヘッドフォン着用でマイクを握る(苦笑)。決してぼくはホモ・セクシュアルではない。だがバイ・セクシュアルであることは否定しない。今回歌詞を読んで改めて実感した。

10.チャゲ&飛鳥「SAY YES」
(91.7.24発売　91.8.5付け「オリコン」1位)
▶敢えて書くね。あのね、ぼくはこういうねっとりした歌い方ってダメ!　ところがウチのおかんは好きなんだなあ(苦笑)。まあ、それは飛鳥の「日本語の発音の良さ」らしいんだけど、言われてみれば幼い頃から正しい日本語に矯正され、そんな音楽ばかり聴かされてきた。ちょっと話逸れるけれど、いまぼくは日本語のリズム、ビート、グルーヴに着目している。その点でこの曲のヒットは分析できない(メロディという観点なのかな?)。



11.今井美樹「PIECE OF MY WISH」
(91.11.7発売　91.12.9付け「オリコン」1位)
▶大学時代、絵に描いたような木造のオンボロ・アパートに住んでいた。たしか階下に予備校生(女子)が住んでいて、彼女がよく今井美樹を聴いていたことを、こうして10年後に文章化できるほど記憶に残っている。この曲の作曲者、上田知華というひとは現在の200倍くらい評価されても良いメロディ・メーカーだと、ぼくは個人的に思っている。かつて小林麻美が放っていたようなアンニュイさを、今井美樹にも発して欲しかったんだけれど、もうダメだろうね(苦笑)。

12.大事MANブラザーズバンド「それが大事」
(91.8.25発売　91.12.30付け「オリコン」1位)
▶一発屋。その言い回しがぼくは正直好きではない。たとえばこの曲は160万枚を売っている。口うるさい輩が何と言おうと、日本国民の1／100がこのCDを買ったのである。あるいはレンタルで買ったり、ぼくみたいに中古で漁っている人間を含めれば、相当数がこのCDを手にしている。本文でも触れたが、スクラップにされて他のCDのトレイになるよりどんなにマシなことか!

13.とんねるず「ガラガラヘビがやってくる」
(92.1.24発売　92.2.3付け「オリコン」1位)
▶ちょうどぼくたちが中学生の時だ。おニャン子ブーム=「夕焼けニャンニャン」は。当時(いまも?)ひねくれ者のぼくは、"アンチとんねるず"だった。そのくせテレビ朝日系深夜の「トライアングル・ブルー」だけは見ていたりして。だから未だに「みなさんの〜」シリーズは、一度たりとも見たことがない。陰で糸を引く秋元康氏の才能はいうまでもない。だが、悔しいけれど、それ以上に"キャラ立ち"したとんねるずの能力を認めざるを得ない。

14.織田哲郎「いつまでも変わらぬ愛を」
(92.3.25発売　92.5.11付け「オリコン」1位)
▶失礼な発言だったらごめんなさい。いま織田哲郎って何してるの?　相川七瀬も布袋プロデュースになっちゃったよね。ビーイングとは一線を引いたの?　作家／プロデューサーとしてより、アーティスト／シンガーとしての道を選んだの?　そこでイメージが重なるのが角松敏生。彼ってば、超一線級のポップ・メイカーだったよね。だけど自らを冠したプロジェクト始めてから歯車ずれてない?　織田哲郎もそこに気付いたのかな。

15.氷室京介「KISS ME」
(92.12.7発売　92.12.21付け「オリコン」1位)
▶今回のセレクトの基準は「オリコンで最初に1位を獲得した曲」とした。その中で、唯一、

ていただいたわけだ、いまは亡き渋谷ハンターなどで——。

ぼくはそれらのレコードのことを、レア・グルーヴに対抗して、「クズ・グルーヴ」なんて命名していた(苦笑)。ちょっと前に(今もか?)ラウンジ・ブームなんてのがあったけれど、それを10年先取りしていたともいえる。

そして、現在。ちょうど10年前にアナログ盤がCDに取って代わったように、細長のCDシングルはほぼ姿を消し、マキシ・シングルが主流を占めつつある。

サヴァイヴァルするCDに敬意を!

ところで、みなさんは、CDシングルのトレイをじっくりご覧になったことがありますか?　CDが収められている下の部分、黒とかグレイの部分——。もし今、手元に何枚かCDシングルがあれば、ちょっと眺めて欲しい。そこに銀色の粒状の物体が混じってはいないだろうか?　聞くところによると、あれは、返

この曲だけが、例外となってしまった。氷室がはじめて「オリコン1位」を獲得したのは、ソロ・デビュー曲の「ANGEL」である。出来る限りの労力を費やし探したのだが、残念ながら結局入手できなかった。原因としては、同曲がちょうどアナログからCDへの移行期の発売であり、CDシングル自体がさほどプレスされなかったのではないか、ということが考えられる。蛇足ながらこの曲が氷室初のミリオン・ヒットとなった。

16.桑田佳祐「真夜中のダンディー」
(93.10.6発売　93.10.18付け「オリコン」1位)
▶先程どこかで書きましたが、幼少期に「正しい日本語の発音」を刷り込まれたぼくは、当然ながら、サザンオールスターズなど、テレビに出てきただけでチャンネルを変えられてしまうような教育を受けてきました。ちょうど中学時代、KUWATA BANDが活動をしていた時期に、親の目を盗んでレコードを聴き、家を出るや否や、この曲を手にしたのでした。そして、これも前述の通り、痛飲すると歌うのがこの唄。男のPRIDEを感じます。

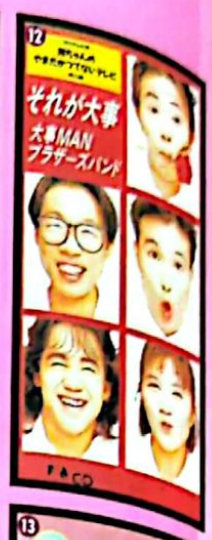
17.森高千里「風に吹かれて」
(93.10.11発売　93.10.25付け「オリコン」1位)
▶「森高千里の代表曲って何ですか？」って訊かれたら、あなたは何を挙げます？　「17才」？　それもあるよね、話題になった。「私がオバさんになっても」？　男性週刊誌的にはこれかなあ。「夜の煙突」？　コアだわ、それ(笑)。で、客観的なデータで見ると、20枚目にしてはじめてこの曲がオリコン1位。ちょっと意外じゃない？いや、聴けばわかると思うよ。

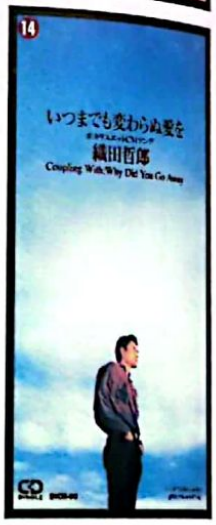
18.藤井フミヤ「TRUE LOVE」
(93.11.10発売　93.11.22付け「オリコン」1位)
▶個人的にぼくはチェッカーズのファンだったので藤森付けるつもりはないのだけれど、藤井フミヤのソロ・デビュー曲ってこの曲になってるよね？　でもチェッカーズ時代に「MOTHER'S TOUCH」という胃腸薬のCMソングを歌っている。まあ、たしかに解散後のソロ・デビュー曲ではあるけれど。200万枚以上のセールスを獲得し、オリコン1位を獲得。チェッカーズ時代でもミリオンはなかったんじゃなかったかな。

19.広瀬香美「ロマンスの神様」
(93.12.1発売　93.12.27付け「オリコン」1位)
▶冬ですね。スキーですか？　スノー・ボードですか？　となるとBGMはこの曲ですか(失笑)。リリース当時、付き合っていた女性のカーステレオでさんざん聴かされて、サビの部分を「とん・ちん・かん！」と歌って叱られた苦い経験があります(苦笑)。いままで気付かなかったのだけれど、改めて歌詞を読むとスゴイですね、これ。日本語が壊れたのはゲレンデからだったんだ(笑)。

20.SMAP「Hey Hey おおきに毎度あり」
(94.3.12発売　94.3.21付け「オリコン」1位)
▶もはや「アイドルには親しみやすさ、お笑いの要素が必要」だなんて、語り尽くされているんで言及しませんが。改めて聴いてみて驚いた(発見した)こと。この曲、J-RAPより5年早くラップを導入してるのね。ダ・パ○プより思い切りマシ。それから、これもよく言われる「歌唱力のなさ故にカットされがちな中居くんのボーカル」、この曲では生きてます。それよりも、ファンには森くん参加(ステッカー付き！)という点が重要かな(笑)。

※紹介したシングルCDは、「HARD OFF」「BOOK OFF」等の中古CDコーナーで、一〇〇円で売られていたものです。





品されたり廃盤になったCDを粉砕してリサイクルしているそうだ。つまり、今あなたが手に取っているそのCDシングルのトレイには、陽の目を見ずに再利用されたCDたちの切なくも悲しい想いが籠もっているってことだ。

さて、今回ここで取り上げたCDは、いずれも「オリコン」誌上で1位になった作品ばかりである。さして売れなくてもトップに輝いた曲もあれば、その後ミリオン・ヒットを記録した曲もある。いずれにせよ、どの作品もそれなりに流通し続け、その挙句に今また、ぼくのような酔狂者が買い漁って、こうして手元に置いている。この事実が何を物語っているのかといえば、どれも皆、CDトレイになぞならずに、しっかり〝サヴァイヴァル〟し続けてきたということだ。

各曲について言いたいことは人それぞれあるだろう。だが、今こうして「銀盤」として現存している――その姿に、まずは、敬意を払いたい。

▶あさい・よしひこ▶71年生まれ、蟹座B型。CD同様古本も100円本を漁る日々。目指すは〝プチ・吉田豪先生〟！　96年に「今世紀中に発行します」と宣伝した「a. b. c.」no.5は果たして出るのか!?

CamScannerでスキャン

このビデオ・クリップが「すごい！」かも

文▼バド石橋
［ビデオ・ジャーナリスト&ライター］
イラスト▼もりいくすお

もはや「ノスタルジー」は、中年以上の専売特許ではなくなったんでしょーか。アーンド、今年のマイ・ベストVC発表！

しかし、倉木麻衣の幼少ビデオで儲けようとしているオヤジは一体なんでしょうか？　いろいろゴシップの絶えない倉木だけど、あのオヤジの登場には絶句した。でも、元時代劇俳優だの、AVのスカウトマンだのと、無責任なこっち的には面白すぎ。あの訳の分らない勢いでバラエティ番組にシャシャリ出そう。そうなったら倉木側にはかなりの脅威。倉木の当面の敵は宇多田ではなく、身内であるオヤジとは…！　最初からビデオ・クリップ（以下VC）以外の話題で申し訳ないが、ビデオつながり、ということでお許しを。

近頃、ノスタルジーは中年以上の専売特許ではなくなった。なにしろ今や、小学生が「昔は良かったわ」としみじみ語る時代。そんな風潮を反映してか、19やゆずなどVCにも10代の若者のノスタルジーを描いたものが多い。女性デュオの花＊花も「さよなら大好きな人」では、田舎の駅にキーボードを持ち込み歌ったり、汽車を追ったり。クラムボン「ドギー&マギー」では、学校の音楽室でオルガンを弾く。嵐「感謝カンゲキ雨嵐」でもバスケットゴールに夕焼けののどかな田園風景と、いかにも懐かしいカットが並べられていく。GO！GO！7188は新作「こいのうた」ではそういうシーンはないが、前作で二人は黄色い帽子にランドセルという小学生姿になりタテ笛を吹いていた。どれもこれも、せいぜい5年前のノスタルジー。大人になる前に昔を懐かしむ…それほど現実社会は生きにくい、ということなのだろうか。

CHARAの新作VC「大切をきずくもの」は夫・浅野忠信のディレクション。人形アニメを使ったりして意外？にもメルヘン風な作り。完成後、浅野は「疲れた。俺には監督は向かない」とボヤいたらしい。

洋楽にはアーティスト本人が画面

VCランダム・ノート

①吉田直樹「夜のストライク」（ポリスター）
▼何とも意味深なタイトルであらぬ想像をしがちだが、実は「夜、空を見上げたらすごくきれいだった、それでストライクだ」ということらしい。VCは草野球のナイトゲームが出てきて、それこそ直球の内容。

②B-DASH「野球」（PCレコード）
▼こちらはタイトルは「野球」だが、歌詞ではどうも野球のことには直接ふれていないようだ。それでも、野球場で撮影、試合風景を入れ込んでいる、というややこしい作品。野球場で跳ねを出したり、かなりアナーキー。

③SHERBETS「38Special」（Sexystones Records）
▼ザラつく8ミリ映像。ピントもろくに合っていない。そこへ「渋谷とか原宿とか、政治家とかフォークソングとかガキのしゃべり方とか腐ってない？」というボソボソ声と歪んだギター音がかぶる。挑発的な作品。

④ACO「ハートを燃やして」（キューン）
▼窓が床や天井にもある部屋に閉じ込められているACO。「不思議の国のアリス」のようでもある。なんとか外界に出ることができるACO。そこはなぜか雲の上でしかもアニメの世界だった……。

⑤B'z「RING」（ルームス・レコーズ）
▼障子のある部屋。室内なのに、なぜか小川が流れている。まるで、外人の和風趣味というか、ほとんどラブホ。そこで、歌うB'zの二人。しかし、彼らは座って歌うことが多い。そんなに足腰が弱っているのか

⑥aiko「ボーイフレンド」（ポニーキャニオン）
▼なんと、珍しいウエスタン風である。日本ではまったく受けないウエスタンであるはずなのに、なんで？　そういえば椎名林檎もカウボーイスタイルをしてた。aikoは後半、次々と決闘をして、バタバタと相手を撃ち倒す。

CamScannerでスキャン

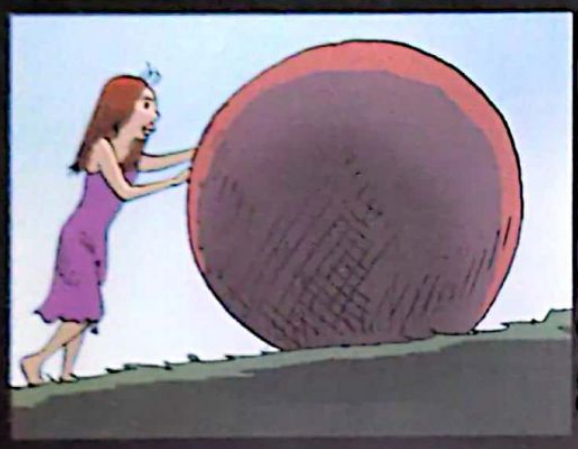
に出てこないVCが結構ある。役者を使ったりして完全に曲のイメージだけで作り上げるのだ。が、日本ではまだまだVCを顔を売るための手段と考えているようでフェイスレスなものはほとんどない。そんな中、スーパーカー「WHITE SURF style5.」は本人たちが一切出てこない。歌うのも演奏シーンも全くなし。このスタイル、来年は流行るだろうか。

ところで、今年最後の号ということで、僅越だが今年のVCマイ・ベスト3を挙げて締めとしたい。3位は椎名林檎「罪と罰」、2位はJUDY AND MARY「BRAND NEW WAVE UPPERGROUND」、そして栄えある1位は、Bonnie Pink「You Are Blue,So Am I」だ!

⑦矢井田瞳「my sweet darlin'」(東芝EMI)
▼さんざ推名もどきと言われながら、ヒットを飛ばす矢井田。なんだか倉木麻衣と同じ。案外相当したたかな女か。推名よりクセがない分、大衆受けという点では有利かも。どんなシャベリをするのか聞いてみたい気がする。

今月のこの4本

溜息まじりで一言。「売れる」ということは、素晴らしいことだなあ。



「大切をきすくもの」
CHARA(エピック)
◀冒頭、人形アニメのCHARAが森で玉を穴に落とす。一転、実写になり、森の中の道をころがって行く大きな赤い玉。その玉をCHARAが運動会の玉転がしの要領でえんえんと押していく様が描かれる。
浅野の演出はえっ? これだけ、というほどのシンプルさ。ラストはまた人形アニメに戻るくらいで、他に派手な展開が用意されているわけではない。だが、この潔いほどの何もなさが、歌のほのぼのさにマッチしたようだ。

「Rainyway」
SUPER BUTTER DOG
(東芝EMI)
▶まず、曲の♪"Rainyway Rainyway〜"の繰り返しが心地よいのがポイント。斉藤和義を若くして下品にしたような顔だちに声のリードボーカルが一人で熱演する。
人気のないハイウエイで、自分に似た男の運転する車にはねられる斉藤もどき。ただ、これだけで、金も何もかかっていない風だが、面白い。歯をむき出しにしたりして、斉藤もどきはなかなか笑わせてもくれる芸達者だ。

「WHITE SURF style5.」
スーパーカー(ソニーレコード)
◀同棲中らしき外人の男女がささいなことで仲たがい。猛烈な戦いへとエスカレートしていく。男の両腕はミサイルとなって女に向かって飛んでいく。何やら前号で紹介したT.M.Revolution「魔弾」に似ている。だが、こちらはミサイルを受けた側の反撃があった。なんと、女の二つのおっぱいがミサイルとなって男に発射される。おっぱいミサイルを腕ミサイルはむんずと押さえて阻止する! この結末は、果たして!?

「Everything」
MISIA(アリスタジャパン)
▶"売れる"ということは、素晴らしいことだと思う。というのは、MISIAのVCはどれも実に贅沢な作りで、"売れる"というのは、こういうことなのかと思わせてくれるからだ。本作も、衣装が豪華。特に今回は冬が舞台なのでますますゴージャスだ。外国風の建物の前は一面雪景色。もちろん特殊効果による雪だろう。その道を歩く100人ほどの人間とMISIAがクレーンで撮影される。こんなスペककककルを組れるのも金があればこそだ。

▶はど・いしばし▶MXTVで『ポケットモンスター』のようなこのドキュメントを製作。作品中でVCもどきを作ったが、これが難しかった。これからは誠多なことは言えません。

「懐古」と「反省」と「再評価」を交えながら

20世紀で「封印」したい名曲・名盤150

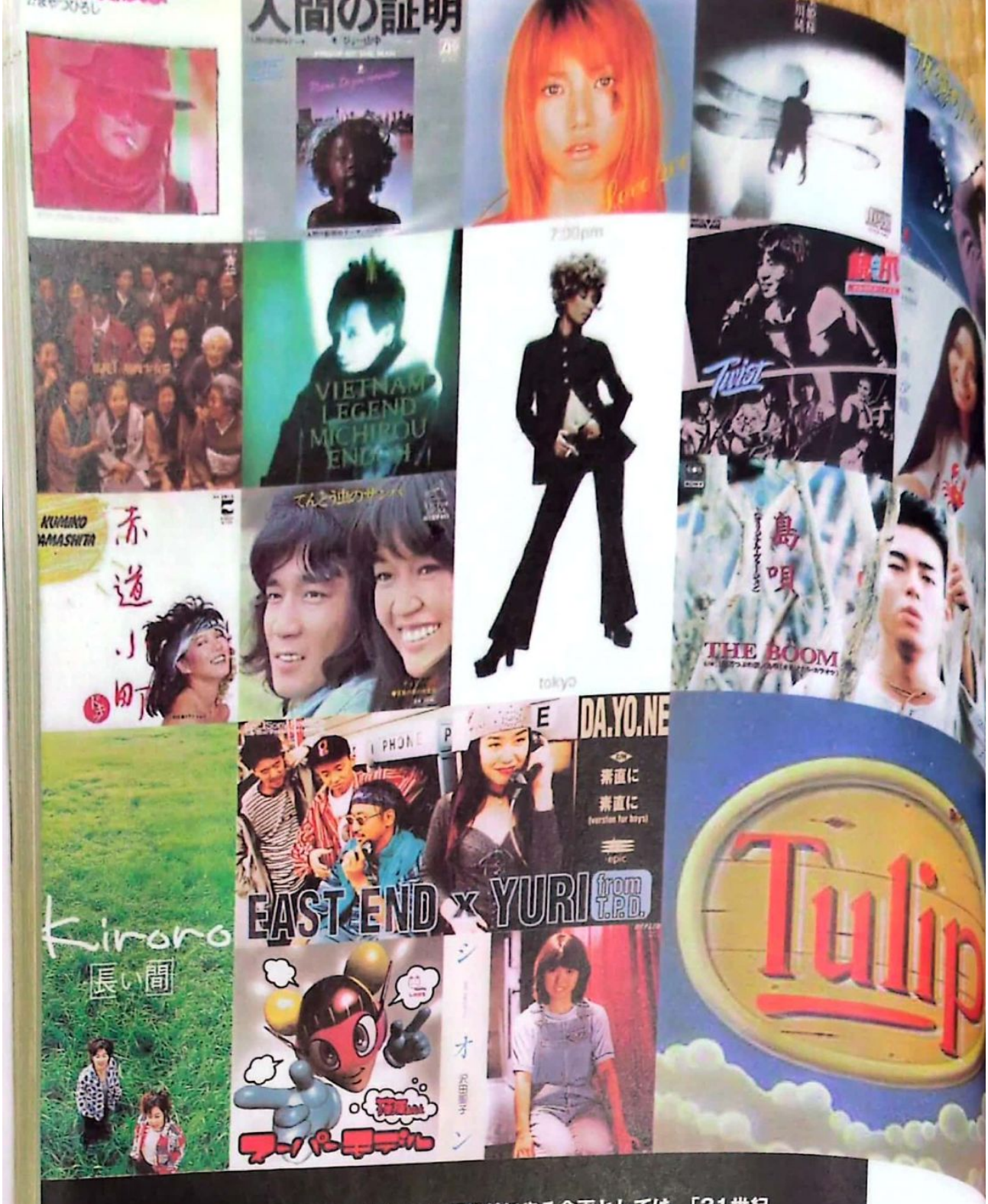
タイトル・イラスト▶ヒロコジマ
本文イラスト(コラムをのぞく)
▶垂井ひろし

CONTENTS

#1 あの時代の"シンボル"をそのまま「冷凍保存」――104
#2 名盤・名曲の"呪縛"から解放するために！――116
#3 新世紀に向けて、そろそろ「卒業」しましょ！――128
#4 ほろ苦い思い出とともに……――138
#5 俺以外、聴くの禁止でしょ！――148
#6 できれば、なかったことにしとこ。――157

表記に関する注意事項＊ジャケット写真下のデータは、上から、①オリジナル楽曲(アルバム)名、②オリジナル作品リリース年月(カッコ内は収録アルバム)③現在、入手可能な収録作品(※のモノ)および(レコード会社名、です。③がないものに関しては、基本的には、CD化(オリジナル作品がアナログ盤の場合)されているか再発されたもの、あるいは現在でもオリジナル作品が入手可のものです。ジャケット写真は、オリジナル作品および収録作品のモノを使用。

CamScannerでスキャン



本来なら、世紀末&新世紀という時代の一区切りにやる企画としては、「21世紀に残したい名盤・名曲」なんてのが定番なのだろうが、その手の企画は他の音楽誌でもやるだろうからそちらに任せておいて、本誌は「封印」という言葉に拘ってみた。で、読者はこの「封印」という言葉の響きから、何をイメージするだろう。実は、今回の特集をやるにあたって、「封印」というテーマで事前に著者にアンケートをお願いしたのだが、文字通り存在そのものを否定するものから、素晴らしすぎる故の「封印」、あるいは、独り占めしたいから……など。一言で「封印」といっても、そこに纏わりつく意味は人それぞれである。そんなわけで、一応は6つのタイプに分類されてはいるが、内容に統一性はない。ただ一つの共通点は、「封印」という言葉から、各著者がイメージした作品ということだけ。もっとも、だからこそ、いわゆる「名盤・名曲」特集とは違った「語り口」が可能になった……なんて、前口上はこの位にして、20世紀のポピュラー音楽史を彩ったこれら名曲・名盤たちの価値を、「懐古」と「反省」と「再評価」を交えながら、今、改めて考え直してみては、いかが？

CamScannerでスキャン

#1 あの時代の"シンボル"をそのまま「冷凍保存」

歌は世に連れ、世は歌に連れ——。
「古き良き時代」としての70年代から、
「不安な時代」である現在にいたるまで、
その時々の世相を写す鏡としての
ヒットナンバーを、「懐古」と「反省」を交えて総括!

70年代以前

かまやつひろし「我が良き友よ」

バンカラ硬派礼讃&美化よ、さらば!

そもそもバンカラという言葉自体、死語になってるんだから、今さら漱石の「坊っちゃん」に通じる弊衣破帽の青春を歌われてもピンとは来ない。喜ぶのは羽織袴姿で全国寮歌祭なんかに出てる政財界のご老体くらいじゃないのか。無論、ギリギリそのアナクロ感覚を受けとめられる拓郎、かまやつ世代が内輪で懐かしむのは結構。しかし、硬派礼賛と美化、今の若者にも……なんてのはウザいのでご勘弁を。山田洋次監督の「ダウンタウン・ヒーローズ」で打ち止めにしといたほうが、失笑を買わずに済むはず。シングル盤カップリング曲「ゴロワーズを吸ったことがあるかい」のほうが、昨今のゲンズブール支持者には大いに受けそうである。

(丸目蔵人)

「我が良き友よ」
作詞・作曲/吉田拓郎
70年4月
※「ああ、我が良き友よ」に収録
東芝EMI

ゴールデン・ハーフ「黄色いサクランボ」

ベタな隠喩はコレで打ち止め。やっつけカバー禁止!

性的イメージとのリンクがあまりにもベタ。ギミック歌謡の先駆けとして評価はできるが、ストレートな性表現もOKになりつつある21世紀の日本では、無理矢理オヤジ・ギャグに付き合わされるくらいキツいものがある。いい加減、場末のキャバクラでも選曲しないだろう。ここはやはりオリジナルのスリーキャッツ、リバイバル・ヒットさせたゴールデン・ハーフで留めておくのが美学というもの。過去のヒット曲ならそこそこ売れるだろうというやっつけカバーで、これまで一体どれだけの新人が沈没していったか。って、AV女優の企画ユニット「チェリー・ボンバーズ」が、ちょっと前にカバー・リリースしてたんだっけ。あぁ、ナムアミダブツ。

(丸目蔵人)

「黄色いサクランボ」
作詞/星野哲郎　作曲/浜口庫之助
70年9月
※「ゴールデン・ハーフのシングルコレクション」に収録
東芝EMI

CamScannerでスキャン

村八分 ライブ／村八分

人生片づくもんなんかありゃしないぜ！

ストーンズの「ゲット・ヤー・ヤー・ヤズ・アウト」の中、「カッコイイ！」と叫ぶ日本人の声が聞こえてくる。この声の主がチャー坊その人である。当時こういう場に居合わせたのは、ある種「特権的」人間だった。それはロックの原初的イメージ――自由、反抗、放埒といったものにすっかり「やられて」いた連中である。今聴くと何とも古臭い。魂の叫びというより情動の垂れ流し。だが先鋭的であろうとすればこんな手立てしかおもいつかなかったんだろう。全身全霊を賭けた行為が殆ど何の成果も上げずに終了したということ。この無常感が何故か愛しい今日この頃。リストラされ自殺しそうなお父さんに聴かせたい。人生片づくものなんかありゃしないぜ。

（広瀬陽一）

「ライブ／村八分」
73年
ヴィヴィド・サウンド

ジョー山中「人間の証明」

日本人のベタな母恋いの心情に合致

〈母さん、僕のあの帽子、どうしたんでせうね？〉というフレーズは当時流行した。「母さん」という甘酸っぱい響きのする問いかけが受けたのだろう。西條八十（やそ）の詩「帽子」の冒頭である。

ジョー山中が自ら作詞した歌は〈Mama, do you remember〉と始まる。「帽子」の詩の前半を英語にしたものだ。だが、もとの詩が「僕と帽子」との関わりを中心に述べたものであるのに対し、ジョー山中の解釈による訳詞では、〈like the life you gave me〉というような、もとの詩にはない表現もあり、「僕と母」との関わりに軸をスライドさせている。「帽子」を本歌取りした別の作品になっている。そのほうが映画の内容にあっているし、日本人のベタベタな母恋いの心情にも合致する。

「人間の証明」
作詞／ジョー山中　作曲／大野雄二
77年10月
※2000年4月に再発
スケアクロウ

当時中学生だった私はこの歌詞や西條の詩をノートに書き写して覚えた。特に「ええ、夏、碓氷（うすひ）から霧積（きりづみ）へゆく道で、谿底へ落したあの麦稈（むぎわら）帽子ですよ」と続く詩の、「碓氷」や「霧積」という地名には、映画のシーンと結びついた謎めいた魅力を感じた。これらは軽井沢から群馬へ抜ける峠近くの名で、西條八十は子供の頃ここにある温泉によく連れてきてもらったらしい。私はずっとそこを訪れたいと思っていたが、実際に足を運ぶことができたのは、映画の公開から15年ほどもたって、偶然その近くで仕事をすることになったときである。

（見崎鉄）

世良公則&ツイスト「あんたのバラード」

やっぱJポップは演歌だよな

「Jポップ？　所詮演歌じゃん」程度の台詞で全て見透かしたつもりになってるキッズには、脳天直下ド演歌ロックをぶち込みたい。なんたって90年代のドラマでもジーンズにバンダナというあの出で立ちで、「惚れてんのかぁい？」などとまんま名曲「宿無し」（作詞・作曲／世良公則）のフレーズをいい放つ男の代表、我らが世良！　まさに役者ロックバカ一代。CHAR、原田真二と並び「ロック御三家」と呼ばれた彼の体温の高さに比べれば、ヒムロックを薄めただけの昨今の男性バンドなどお湯とソースを一緒に入れてしまったカップ焼きそばの如し。「世良公則&ツイスト」を完聴すれば新たな感慨とともに「やっぱJポップは演歌だよな。いや、演歌でなければならない」と改めて確信されるに違いない。

（夏至明）

「あんたのバラード」
作詞・作曲／世良公則
77年11月発売
（「世良公則&ツイスト」に収録）
※「BEST HIT SINGLES」収録
ポニーキャニオン

CamScannerでスキャン

木之内みどり「横浜いれぶん」

アイドル歌謡終焉のメルクマールとして

「アイドルが衰退したのは、80年代なかばの小泉今日子「なんてったってアイドル」やおニャン子クラブに集約される、それまでブラックボックスだった内幕までも切り売りするような（つまり楽屋オチに受け手まで巻き込むような）商売へ走った帰結である、との認識がたぶん一般的でリクツでは正解だとも思うが、皮膚感覚に忠実に振り返るなら、岡田奈々監禁（77年）と木之内みどり〝恋の逃避行〟（78年）のふたつの事件の方が、より本質的なターニング・ポイントだった気がする。

この「横浜いれぶん」は、逃避行の半年ほど前に発売された木之内みどり11枚目のシングル。ドラマ『刑事犬カール』の当たり役直後でもあり、おそらく彼女がアイドルとしてもっとも注目されていた時期の作品である。詞曲はもちろん、当時は珍しかったサビ頭の曲構成とイントロのギターリフが秀逸で、いま聴いてもアイドル歌謡のお手本だよなあと胸が苦しくなるような出来。

本来なら、ラスト・シングルとなる「一匹狼（ローンウルフ）」を挙げるべきかもしれない。けれど、「横浜いれぶん」に体現されていたものこそ、先に挙げた事件により決定的に失われた何かであり、この曲をもって個人的にはアイドル歌謡は終わりを告げた。

失われた「何か」とは、せいぜいが「きらめき」だのという、いずれ陳腐でやくざな修辞で語られてしまう程のものにすぎないのだけれど。

（栗原裕一郎）

「横浜いれぶん」
作詞／東海林良・作曲／大野克夫
78年2月
※『お元気ですか？ 木之内みどり with Love』に収録
ポニーキャニオン

堀内孝雄「君のひとみは10000ボルト」

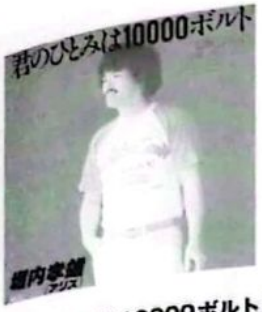
マスコミに媚びないはずのNMが企業広告でヒット。一気にシラけたね

堀内がアリス時代に出したソロ・ヒット曲が「君のひとみ～」だ。ソロとはいえ、曲が堀内、作詞が谷村、編曲も常連の石川鷹彦ではほとんどアリス節。で、アリスといえばニューミュージック（NM）の代表選手といっていいだろう。NMの歌手たちは、従来の歌謡曲（界）とは違ったコンセプト（曲も売り方も）を打ち出し、テレビ番組に出ない歌手もたくさんいた。曲を聞くなら、レコードやライブを見ろ、俺たちは決してマスコミには媚びない、なんてうそぶいてた。NMだって売れてなんぼの商売。だからすごく矛盾してる。でも、当時は、結構それがカッコ良かったりした。

それなのに、76年から始まったCMのイメージソング・ブームに、NMの歌手たちがこぞって参加する。そんなイメソンの頂点に立つ楽曲こそが78年、資生堂のキャンペーンに使用された「君のひとみ～」で、90万枚のヒット。堀内たちはテレビ出演が好きだったかもしれないが、このヒットは僕のNM全般に対する評価を決定付ける象徴的な出来事となる。マスコミに媚びないはずのNMが、企業広告でヒット、一気にシラけたね。

で、現在の堀内は「そういえば昔、NMなんてあったね」ってな顔で演歌歌手をやっている。ポップスだか歌謡曲だか良く分らない半端なNMに見切りを付けたんだ、と言ったかどうかは知らないが、演歌街道一直線。これはある意味、立派か。なんて誉めてたら〝アリス再結成〟のニュース。うーん、やっぱ節操ないなあ。

（バド石橋）



「君のひとみは10000ボルト」
作詞／谷村新司　作曲／堀内孝雄
78年8月
※『アリス・シングルズ』に収録
東芝EMI

CamScannerでスキャン

世良公則&ツイスト「爪」

70年代における「若さ」は、この歌にすべて集約

カラオケにおいて、他人が歌い、引っかかる曲とは、若気の至り的な恥ずかしさと共にある。mc.A・Tの「BOMB A HEAD」や、シャ乱Qの「ズルい女」等、歌う場合はモロにセンスを疑われ、聴いてる側も結構恥ずかしい。

しかし、そこに男気がプラスされれば、それは情念として解釈され、歌う人のアイデンティティとして受け止められる。そんな便利な楽曲がコレだ。この歌に内包する、思わず爆笑を誘うほどのギリギリな危なさは、歌い方によって、その人の全て窺い知れてしまう。

「BOMB A HEAD」のような「軽さ」が醸し出すお寒い要素は一切排除されるが、かといってマジメに聴ける曲でもない。どの道、力技で笑いに持っていけるので、昔の変な歌という事で楽しく聴ける。世良に似れば似る程、その人の「熱さ」血中濃度は高いと言える。世良の特徴的なスタイルを習得したトコロでモテる訳もないが、笑いは確実に取れる。

70年代の汗臭さは笑いによって消費されてゆく。ムサ苦しい黒髪の長髪とヒゲ面、上下をジーンズでキメた若者が闊歩した、あの混沌とした時代。ニューミュージックなんて言葉も知らない今の若者には、この熱さを笑いに持っていく術がある。「若いのに凄く暑苦しい」70年代の若さとは、この歌にすべて集約されていると言えるのではないだろうか。だが、「この歌をもって70年代の歌謡曲を総括する」なんて言われたら、泣いて止めるしかない。

（支部長）

「爪」
作詞・作曲／世良公則
78年8月
※『Rambling Dreamer ～世良公則ロック・コレクション』に収録
イーストウエスト・ジャパン

ピンク・レディー「透明人間」

この歌詞の真理を今になって悟った私

"真実"というのは、意外と見えないところに転がっているもの。私にとって、それがかのビッグスター、ピンクレディーだったとは、口が裂けても言えない。

矢沢永吉の「成りあがり」の中ではアホなアイドルとして実名で挙げられていたが、じつは、「アイラブユーOK」の矢沢よりも、当時、世の真理とリアリティをずっと過激に表現したアイドル・ユニットだったのでは。

例えば、前奏部分が本物の船舶救助信号音とカブり、電波混乱防止のために放送禁止になった「SOS」。言っていることは、たんに「男は誰も信用するな！」。幼い頃、フリツケを真似て踊り狂った筆者は、この歌のサブリミナル効果か、今も嫁に行けずにいる。筆者と同世代の30代女性の初婚年齢上昇にも一枚噛んでいるんじゃないか。というより、男で人生を台無しにしないための教訓としては、じつに真理をついていることを、この歳になって初めて実感した次第。

で、その究極のリアリズムが「透明人間」だろう。〈透明人間現る！ 嘘を言っては困ります、現れないのが透明人間です〉。この実も蓋もない言い回し。でも、これほど世の真理を語っている言葉もあるまい。最近、思わず口ずさんで、この事実にハタッと気づかされた筆者は、以後、伝統ホラーである「透明」モノの映画や小説等はもとより、世の「透明人間」的なる存在すべてを受け付けなくなってしまったほどだ。おそるべし阿久悠！ すべての人がこの事実に気づいたら……と思うと、ちょっとコワイ！

（ミヨ萩原）

「透明人間」
作詞／阿久悠　作曲／都倉俊一
78年9月
※『ピンク・レディー』に収録
ビクターエンタテインメント

CamScannerでスキャン

沢田研二「カサブランカ・ダンディー」

ジュリーのモノマネは学校でも大流行だった

誰よりも、沢田研二が大好きだった。歌番組で過剰なパフォーマンスを演じるジュリーは、小学生男子の眼にも輝いて見えた。井上堯之や大野克夫の名前はまだ知らなかったが、オンナだけを客にする他の男性タレントとは違って、オレのためにも歌ってくれてるような気がした。そのせいか、ジュリーのモノマネは学校でも大流行だった。真似しやすかったというのも、もちろんある。志村けんもやってたし。ミニボトルの代わりに牛乳ビンを片手に持って歌う「カサブランカ・ダンディー」は、男子同士でも賛否両論分かれて、本当に牛乳を吹くかどうかで、男の根性(笑)が試された。歌の中でも、男が試されていたとは知らずに。

70年代末期、すべての価値が茶化され、相対化される80年代への萌芽は、既に始まっていて、当然のことながら男のナルシズムもその対象となっていた。

〈ボギー ボギー／あんたの時代は良かった／男がピカピカの気障でいられた〉

と歌うジュリーもその例外ではない。「やせがまん」という美学がダサくなってしまい、その「悲哀」を歌うようになる。ナルシズムを自意識から、より客観化して眺めるようになったと言い換えてもいい。

奇しくも、二つの男の在り方がぶつかり合う映画「太陽を盗んだ男」が撮影、公開されたのもこの時期。別に〈ききわけのない女の頬を／一つ二つはりたおし〉たいワケではないが、もう20年以上前の歌にこんな言葉を見つけると、驚きと共に少し複雑な気分になる。

(神崎鉄男)

「カサブランカ・ダンディー」
作詞／阿久悠　作曲／大野克夫
79年2月
※『ROYAL STRAIGHT FLUSH』に収録
東芝EMI

チューリップ「虹とスニーカーの頃」

「性差の問題アリ」につき、取り扱い要注意曲に認定！

性差について、こうまで敏感になったのはいつ頃からだろうか。「父兄」が「保護者」に代わり、「キーマン」が「キーパーソン」と言い換えられるようになってきた。「ブルースマン」という言葉がどう置き換わるのちょっと楽しみにしているのだが、ともあれ痛烈にジェンダーを歌い上げたのが、このチューリップの「虹とスニーカーの頃」だ。ワガママなのが男の罪なのか、許さないのが女の罪か。ようするに「ワガママなのは治んないんだから許してやれよ」という男性側からのメッセージに聞こえる。いやそれすらも逆転しているのが現代。ゴージャスというのはワガママの置き換え語だもんなぁ。どちらにしろ。

(小川真一)

「虹とスニーカーの頃」
作詞・作曲／財津和夫
79年7月
※『2000BEST チューリップ・ベスト』に収録
東芝EMI

沢田聖子「シオン」

80年代以降のアイドル歌謡が、失ったモノ

イルカが既製アイドルへのアンチテーゼとして世に送った手作り感覚のフォークアイドル。のちのガールズポップを予告する存在ともなったが、それだけじゃない。都市のにおいを感じさせない素朴な味わいは、フランシス・ジャムの散文に描かれた田舎の風景にも似て、80年代以降に登場したアイドルには望むべくもないものだった。まして、21世紀になど、何をかいわんや。さらにいえば、沢田聖子は今も活動中だが、この時期の曲は10代の声でなくてはという気がする。少女の心を表現するのにアコースティックな音が何より有効であることを教え、この直後に事故死した元ジャックス・木田高介の職人的アレンジとともに、ここで封印してしまっても……文句ないでしょ。

(宝泉薫)

「シオン」
作詞・作曲／イルカ　編曲／木田高介
79年10月
※『HISTORY SHOKO SAWADA』に収録
日本クラウン

CamScannerでスキャン

80年代

角松敏生「WEEKEND FLY TO THE SUN」

R&Bブームの今だからこそ！と言いにくいのはなぜ？

角松敏生が82年にリリースしたこの第2作目は、R&Bブームのいま聴き返してもなかなかのものだ。演奏陣にアル・マッケイ、ルイス・ジョンスン、カルロス・リオス、エイブラハム・ラボリエル、サー・ディーン・ギャントなどを揃え、ソウル・ファンを唸らせる。黒人音楽界屈指のアレンジャー、トム・トム84が全曲に関わり、LA録音ながらシカゴ・ソウル色が濃厚なのもまた泣かせる。

とはいえ、発表当時からこそばゆく感じた「オフィス・レディ」などの歌詞が、いま聴くと、さすがにちょいとばかり暮麻彦級。たとえば平井堅が好きな若いR&B好きにも聴いて欲しい……と言いたいのはやまやまだが、どうも躊躇しちゃうんですよねぇ。（高橋道彦）

「WEEKEND FLY TO THE SUN」
82年4月
RCAアリオラジャパン

山下久美子「赤道小町ドキッ」

「細野晴臣作の隠れた名曲」のリメイクは時期尚早？

21世紀の音楽キーワードは、テクノ・ポップ。つまり、近未来を現在形で楽しもうというレトロ趣味が横行するのだ。なんだかヤヤこしいが、すでにその兆候は始まっている。80年代の都市伝説ともいえるYMOの再々結成でその火蓋はきって落とされるだろう。そこで残念なのがこの曲「赤道小町ドキッ」。本来ならば「細野晴臣作の隠れた名曲」として21世紀ヴァージョンが華々しくリリースされるはずなのだが、先にリメイクしちゃったものなぁ、このフライングは実に惜しい。いくら世紀が変わるといっても、1年後に作り直しちゃうってのはあまりにも安っぽい。解凍の時期を待って、もう一度フリーズしてもらうしかないだろう。（小川真一）

「赤道小町ドキッ」
作詞／松本隆　作曲／細野晴臣
82年4月
※「20th ANNIVERSARY SWEET MEMORIES～BEST SONG SELECT1」に収録
日本コロムビア

チューブ「Season in the sun」

この年の夏を止めてくれ、なんて口が裂けても言えない

TUBEは21世紀を迎えられない。何故ならば、夏場しか働かない彼らは1年を182日半と勘定する。TUBE歴で換算すれば、2001年までまだ8年もあるのだ。なんてヨタ話はともかく、あらためて聴き直して何とも80年代的な曲だと実感した。あの頃の世相が走馬燈のように過ぎってくる。86年といえば、チェルノブイリで原発が事故って、スペースシャトル・チャレンジャー号が木っ端微塵に爆発し、東京ぼん太が亡くなった年でもある。この年の夏を止めてくれ、なんて口が裂けても言えない。いや事件を風化されないがためにも封印すべきではないのかもしれない。どっちにしてもTUBE歴2001年まで、まだまだ先のことだから心配することもないか。（小川真一）

「Season in the sun」
作詞／亜蘭知子　作曲／織田哲郎
86年4月
※「TUBEST」に収録
ソニーレコード

いとうせいこう『MESS／AGE』

残念ながら「正当な評価」は、受けずじまい？

日本初のラップ・アルバム。ヒップ・ホップが市民権を得た現在では大して驚くべきことではないかも知れないが、時は89年。そう、バンド・ブームが失速し渋谷系などがクロス・オーヴァーした時期である。"マエストロ"ヤン富田と、"ダブ・マスター・X"こと宮崎泉による全17曲は、サンプリングという手法を大胆に取り入れた点でも画期的だった。

95年にリイシューされたが、残念ながら現時点では未だ正当な評価をされているとは思えない。そして「噂だけの世紀末」をとうとう迎えることに。いとうせいこうは次なるオトシマエを考えているのだろうか。その時までに、とりあえず封印。（渋谷慶一）

「MESS／AGE」
89年7月発売
ファイル・レコード

CamScannerでスキャン

銀色夏生

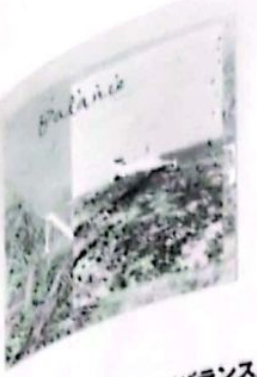
銀色夏生プレゼンツⅠ／バランス

21世紀中に再び復権することを祈りつつ

銀色夏生といえば説明不要の、中高生を中心に絶大な支持を受ける詩人である。その彼女の同名詩集を音楽化したアルバムで、1曲を除き本人が作詞・作曲を手掛けプロデューサーとしてクレジットされている。といってもサウンド面は長谷川智樹が担当。長谷川氏といえば高浪敬太郎氏とのウインク・サーヴィスを皮切りに、アイドルやアニメのサントラで良質のポップスを製作している。

シンセを主体としたサウンドに甘いヴォーカルが切ない詩を囁く。いまや滅茶苦茶に荒らされた感のあるアイドル・ポップス。失いかけていた、いまどきまっとうな"うた"が21世紀中に再び復権することを祈りつつ、とりあえず、今は封印。

（浅井良彦）



「銀色夏生プレゼンツⅠ／バランス」
89年12月発売
ソニーレコード

90年代以降

東京パフォーマンスドール

「おちゃめなジュリエット」

米光美保は何処へいった？

90年代初頭、歌とダンスをキーワードに新時代のグループ・アイドルとして仕掛けられた東京パフォーマンスドール（以下、バードル）でしたが全然パッとしませんでした。またパッとしないものを好きになるのが遅れて来たアイドル親父の悲しい性。バードルは最終的に横浜アリーナまで登りつめたわりに、どう考えてもカルトな時代の徒花として、悲しくフェイド・アウトしていった感じは否めません（解散後、篠原涼子や市井由理のブレイクは一応ありましたが）。ちょっと危ういものを感じんでもありませんが現在のモー娘。のブッちぎりの働きぶりを見るにつけ、玉砕した彼女たちが不憫でならない。まぁ、つんく氏はハナっからバードルなんて頭になかったでしょうが。反面教師として、ちょっと頭をよぎったりもしなかった……よな、多分。バードルも最盛期は小室哲哉がプロデュースしていたり、結構お金かけていたのに。

俺のバードルの鼻眉は篠原涼子でバードルが末期に出した共作ソロ・アルバムも篠原涼子モノは、そりゃ聴きまくりましたがな。そのくせ、この曲はフィーチャリング・市井由理と矛盾してますが、お金がかかる前の元気な女の子集団の代表曲として選びました。メガネスーパーのCMソングで、カルトなAV男優、清水大敬と共演してました……。そんな時代もありました。今や穴井夕子も新妻タレントとして自宅訪問されてたし、時代は変わる。そういやシンガーとして将来を期待されていた米光美保は何処へ？

（杉山達）

「おちゃめなジュリエット」
作詞・作曲／in voice
92年7月
エピックレコード

ピチカート・ファイヴ

「東京は夜の七時」

50年後にスゴイ笑える曲になってるかも

1976年に矢野顕子が歌った「東京は夜の7時」。なのに完全なカバーではない微妙な借用。90年代初頭に「なんでもあり」「やったもん勝ち」「やり逃げ」のカッコよさみたいなものを体現したのがピチカートだった。で、みんな巻き込まれた。客も同業者も。確かにビデオクリップとかカッコよかったですよ。わかったような、わかってないような「エセおしゃれ感」みたいなものが。しかも確信犯だったし。あのトバシっぷりでも、まだしばらくは賞味期限が残ると思う。しかし、あのトバシ方だけに、21世紀半ばあたりにスゴイ笑える曲になってるような気がしてならない。そんなこと誰にもわからないけど。だから、どうせなら今のうちに葬っておきたい。

（楠元伸哉）

「東京は夜の七時」
作詞・作曲／小西康陽
93年12月
トライアド／日本コロムビア

CamScannerでスキャン

trf (survival dAnce~no no cry more~)

この無意味なユニット名に当時は驚かされた

いかにも人工的に作り出されたカッコよさのする歌だが、当時はそれがまたよかった。

trfが出てきたとき、まずそのユニット名に驚いた。今でこそ、一見無意味な記号や数字を名のるユニットは珍しくないが、当時は、型式記号のような3つの小文字は奇異で、そこからは歌っている人の顔がまったく浮かんでこなかった。むしろ主体として立ち上がってこないようにその名をつけたのだろう。小室がかつて自分が属していたユニットはTMNと大文字であったが、それよりも下のレベル、自分の所有物という感覚がtrfからは臭ってくる。小室の手を離れたあとTRFと誇らし気に大文字に変えたのは、押し込められていた自分たちの主体を取り戻す意味もあったのだろうが、TRFという抑圧された名を捨てるくらいのふんぎりが欲しかった。

（見崎鉄）

「survival dAnce~no no cry more~」
作詞・作曲／小室哲哉
94年5月
※「WORKS~THE BEST OF TRF」に収録
エイベックス・トラックス

封印コラム

泣けない笑えない、80年代ギョーカイ歌謡とその残骸

もとはパロディ企画だったのに、今や大マジ。出す側、消費する側、どっちもどっちか？

文▶丸目蔵人（評論家）

カリスマ・ブームの先駆けというか、80年代に何かと取り上げられたのがギョーカイ・ネタだ。バブルの浮足立った空気のせいか、マスコミやアパレル関係者が作品以上に目立つようになったが、振り返れば音楽シーンでも、その残骸があちこちに見受けられる。

ややの「夜霧のハウスマヌカン」は、オシャレでトンガった存在（書くだけで恥ずかしいなぁ）と持ち上げられつつ、じつは低賃金で酷使されている販売員の悲哀を歌った曲。元ヒマラヤ・ミキことややが86年の日本有線大賞新人賞を取るほど大ヒットし、結局のところ現場にいるマヌカンたちが居心地の悪い思いをするようになった。作詞（共作）のいとうせいこうは、当時青年誌の人気企画「業界くん物語」を仕掛けた編集者。結果的にはギョーカイがギョーカイを噛うという構図であり、マヌカンがカリスマ店員となった今、風化していくのを、ただ傍観するだけである。

もう誰もTV関係者を止められない？

で、「夜霧の～」は多少の批評性があったとして、これはどうなのかと思ったのがテレビ関係者が立場を活かして自らの番組に出てくるという傾向。ヒチコックのようにシャレで出るならまだしも、ひょうきんディレクターズの「ひょうきんパラダイス」など、シングルまで出すのは勘違いと言われても仕方ない。MIKEに乗じて日テレの女子アナ三人がDORAとして適当に活動したのも、真剣に亜流を狙った三人組、ポチに酷な仕打ちだった。

というわけで、番組多角経営の産物、最近の野猿にも複雑な思いは深まる。果たして、これは裏方が努力次第で表舞台に立てるというドリームなのか。低予算時代の現場が体育会系体質を利用してパシリをやらせているだけなのか。市場が開けたからそこを狙うのは道理と言えば道理だが、企画ものらしく徒花として散らず、マジになってリリースを続けている現状。それを喜んで嚥下し続ける消費者も、いつの間にか、ジャンクフードにしか目のいかない小学生に見えてきた。

やや「夜霧のハウスマヌカン」
作詞／いとうせいこう、李秀元
作曲／横部陽一
86年1月
東芝EMI

ひょうきんディレクターズ
「ひょうきんパラダイス」
作詞／伊藤アキラ　作曲／小杉大五郎
82年4月
ポニーキャニオン

野猿「Get down」
作詞／秋元康　作曲／後藤次利
98年2月
エイベックス・トラックス

CamScannerでスキャン

EAST ENDXYURI

（04' YO' ZEI）

東京下町の小さな酒場から、世界へ羽ばたく女たち

[illegible]

（文責編集部）

H Jungle with t

（東京都渋谷区宇田川町）

東京の中心で、ジャングルを探す。

[illegible]

（文責編集部）

松田樹里

（matsudajuri）

沖縄から世界へ、なでしこの歌を

[illegible]

（三宅雅人）

SMAP『007～Gold Singer』

あの反ロマン主義的な視点が見事すぎた

ぼくが封印したいのではなくて、このアルバム自体が、90年代中頃の日本の気分を封印している。このアルバムには収められていないが、この1年前に発表されたシングル「がんばりましょう」は、他のJポップにはない奇妙な歌詞を持った曲だった。

〈かっこいいゴールなんてさ　あッとゆーまにおしまい(中略)Hey Hey Hey Girl　仕事だから　とりあえずがんばりましょう〉

この曲はJポップに、ドラマチックでも何でもない現実世界の視点を導入したのである。これによって、既存のJポップ(特にロック系)の歌詞が一気に古臭くなった。

社会に出て仕事をするようになれば、ロックの歌詞みたいな夢物語だけを口にしているわけには行かないというわけである。この視点は決定的に斬新だったし、その後、この曲の影響と思われる歌詞も登場した。

「がんばりましょう」に示された反ロマン主義的な志向性は、このアルバムに受け継がれている。「それが僕の答え」の主人公は、終電で、学生時代の友人が赤い顔をして眠っているを見つけるが、「まぁいいや　今度にしよう」と結論を出す。まるで山田太一や岡田惠和のドラマのワンシーンのようだ。

もちろん、このアルバムの価値は歌詞だけにあるわけではないから、音楽そのものは21世紀に残るかもしれない。しかし、このアルバムが持っていた同時代批評的な感覚を追体験することは不可能だろう。

(川口瑞夫)

「007～Gold Singer」
95年7月
ビクターエンタテインメント

globe『globe』

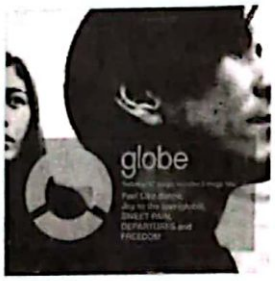
音楽バブルの象徴として、むしろ飾りたてるべき名盤

もしも、の話になる。小室哲哉成功のきっかけになった(ダンス十カラオケ)÷2などという方程式からgloobeのスタートをあえて外していたならば、聴かずギライの音楽ファンを、少なくとも聴く気にくらいはさせていたのではないだろうか。本人にとっては、自分がメンバーとして名を連ねることで、コムロ新章を印象づけたかったのかもしれないが、世間はそこまで簡単に踊ってはくれなかった。

既存の現象から新たな流行を作り出すことに長けていた、少なくともそう当時は評されていた小室だが、ダンスという曖昧なカテゴリは常に液状化を起こしている地盤でもある。流行という言葉で済むような生易しい場所ではなく、突然足下をすくわれ二度と立て直せなくなる。結果として自らの棺桶を作ってしまったことに気がついた小室は、これ以降コムロ・サウンドというカテゴリから一抜けしようとするが、時すでに遅し。この時点で小室の死期もある程度具体化されていたのかもしれない。

すべてがお約束で固められたこのアルバムをいっそなかったことにして、その後に見られた生楽器の積極的導入や、他のコムロファミリーとは決定的に異なる方向性を指し示した生活感、いうなればKEIKOの外見をそのまま利用した「お水感」を滲ませる歌詞に焦点を当てれば、gloobeとしての評価を得られるのかもしれない。正に墓穴を掘った一枚。音楽バブルの象徴としてむしろ飾りたてるべき名盤なのだろう。

(佐藤国春)



「globe」
96年3月
エイベックス・トラックス

CamScannerでスキャン

FOLDER「パラシューター」

少年の官能よ、永遠なれ

小学生以下の肉声を刻んだ全てのJポップを愛しており、様々な音盤を21世紀に持ち込む所存でおりますが、反面、ボーカリスト各位は10才前後で成長を止め「20世紀に封印したい」小生であります。例えばFOLDERの三浦大地さん。昨年末、変声期の入口で産み落とされたEP「Ever lasting Love」は、小森田実さんの手腕冴えまくるも佳作。97年8月「パラシューター」でデビューした頃の、性徴前の少年の官能が消え去っており実に無念でした。（ムードマン）

「パラシューター」
作詞／小林和子　作曲／小森田実
97年8月
※「THE EARTH」に収録
エイベックス・トラックス

キロロ「長い間」

90年代の天然記念物ってことで

90年代、突如として現れたキロロはJポップ界の座敷わらしだ。彼女が黙ってそこに座っていれば、ポップス界の売り上げが伸びる。彼女らがいる分だけ伸びる。ソウルやブレイクビーツなど、新しい音楽の吸収ばかりに血道をあげてきたJポップが忘れていた、伝統的な、復古的な「歌心」の復権に彼女たちは貢献した。それは、ニューミュージックが死語と化した90年代では、新しく開拓されたマーケットともいえるのだ。他のアーティストと食い合うことはない。その意味で業界の拡大に寄与した。この曲には「待つわ」のあみんの影も濃厚であるが、これまでは、あみんの後継者はいなかった。クドいほどに親しみやすいメロディーや、ボーカルが際だつミキシングも、久しく忘れられていた物。90年代の天然記念物ってことで。（鹿島良雄）

「長い間」
作詞・作曲／玉城千春
98年1月
※「長い間～キロロの森～」に収録
ビクターエンタテインメント

水木一郎・影山ヒロノブ「鋼の魂」

アニソンの90年代を締めくくるキラーソング

進化系にあるアニメソングのムーブメントだが、90年代を締めくくるキラーソングとして、この歌は評価するべきだ。この業界の帝王として30年間君臨する水木一郎と、元レイジーの影山ヒロノブによる、魂のかたまりソングである。「特撮」や「sex MACHINEGUNS」等のメタルコア楽曲もかくや、という程に強烈な曲展開と、熱いセリフ、擬音の多用と、アニメソングのお約束もしっかりと踏襲。90年代的解釈の完成形となっている。このジャンルの特筆すべき点は、若い世代はもちろん、40歳を超えた男女が、スタンディングのライブハウスで大暴れできるジャンルであること。まだまだムーブメントは拡大しているので、忘れられぬよう言及し、今後の動向に注目する。（支部長）

「鋼の魂」
作詞／なかの★陽　作曲／渡辺宙明
98年3月
ファーストスマイルエンタテインメント

hitomi「Love 2000」

高橋尚子ファンの立場も考えてほしい！

曲名をあげた時点でネタバレ。俺は悲愴感とか涙と無縁の高橋尚子のファンだ（った）。あっさり金メダル獲って完走後のコメントもクールでかっこいい！　ただ、お守りを縫いつけたショートパンツだとかファッションその他のセンスはちょっとなあ。まあ彼女はあくまでスポーツ選手でアイドルじゃないし。でも出走前になんで「Love 2000」なんかを。歌に自信がないからパンツ姿や、髪で乳首隠したヌード（しかも浜崎の後追い）でなんとか人気を持ちこたえているとしか思えない、あの女の歌を！　名場面が今後プレイバックされるたびに「Love 2000」が流れると思うとたまらん。それに恋人がいないはずの国民栄誉賞受賞者が、あの歌で気持ちを高めていたことの裏を探ると、禁断の……これ以上は書けん！（本田珠男）

「Love 2000」
作詞／hitomi
作曲／Masato Kamata
00年6月
エイベックス・トラックス

CamScannerでスキャン

封印コラム

ユーミンが都市伝説に!?

環境、社会の変化によって封印される名曲たち

文▶水越真紀（ライター）

イラスト▶丸橋圭太郎

今年の秋は天気が悪い。こういう話題を社交辞令に何度も繰り返しているうちに、例の"温暖化"というやつが、21世紀にはぐぐっと進んでいくのだろうか？　何しろ今オゾン層に辿りついているがやっと20世紀最初の頃の大気汚染の分だと言うから気の長い話だが、すでに日本近海まで海水温はガラパゴス並みらしい。やがて「なごり雪」を始め、「雪」を歌った歌が、日本人の口から消えて行くだろう。さらに、今東京ではどぶねずみが絶滅の危機に瀕しているともいう。もっと頭が良くて可愛らしい、しかも猫いらずもねずみ取りも効かないクマネズミが席巻しているらしい。つまり「どぶねずみ」を象徴的に歌ったあの「リンダリンダ」（ブルーハーツ）もまた、歌の力を奪われつつあると言うわけだ。

いや、こんな悪い話ばかりというわけでもない。21世紀にはきっと、バイオ技術の進展でしわとりやたるみとりの美容術も飛躍的画期的進歩を遂げるだろう。女たちは（男たちも）、容貌の衰えに怯えることはなくなるというわけだ。そのときには「私がオバサンになっても」（森高千里）などという少女の可愛らしい傲慢さを湛えたラブソングも、その魅力は半減してしまうのかもしれない。その辺のところが、人間の"向上心"までも含めたいわゆる自然の力が変えていきそうなJポップ環境の一例といえようか。

さらに社会環境の変化がもたらす影響も免れないだろう。たとえば、いまや小中学生の不登校13万人、高校中退や入社3年以内の離職者というのもぐんぐん増えている。中学に行かないくらいのことで人生が終わりだなんて感じる人はみるみる減っている。「信じられない大人とぶつかり」合って傷つくなんていう青春はもうなくなってしまうかもしれない。つまらない教室につまらない気持ちで座り続けなくてはいけないとか、行儀よくマジメにやれなどと頭ごなしに子供に強制する自信たっぷりの大人たちも徐々にいなくなりつつある。この状態が順調に進行すれば、「卒業」（尾崎豊）を始めとする悩める少年たちの訴えもまた当然変わらざるを得ないだろう。良い学校を出て良い会社や役所に入るという確固たる社会的本流のレールがあってこその対管理教育プロテストだ。21世紀には、親の経済状態で教育差別をするなとか、俺達も学校に行かせろ、専門知識や技術習得機会の平等化を求める、なんていうプロテストソングがワカモノたちの胸を震わせるようになっているかもしれない。

あるいはまた、社会における経済格差が拡大と固定化を続ける21世紀の日本では、あの欺瞞的な"一億総中流"が懐かしまれているだろうか。それとも、中流消費文化の繭の中で愛されたユーミンの歌などは、「昔はOLとかいう、職種的には掴み所はないが経済的にはかなり豊かな一群の女性たちがある種の文化を形成したらしい」などというまことしやかな都市伝説と共に歌い継がれて行くことになるのだろうか？

CamScannerでスキャン

小坂明子「あなた」

「あなた」が帰ってこない悲劇が、何を生み出したか？

この曲を上梓する時ていきたいう。

なぜ、男と女っていうことあるあ、この曲がヒットした当時（73年、単者は18歳、作詞・作曲）で、高田馬場と阿佐ヶ谷の中間あたりの一軒家に住んでいたのだ。高田馬場の中華そばを食べ終――タクシーで時代背景もいっぱい手すぐ、時代の流れとかを所属出立ったと言聖とかレベル（BEBE）・ミュージシャであるフォークやロック（当時はまだ、ムズムズ）とかを見ると聞いたり考えたりするのが手に取るようなって、「平穏サーフルのささやかな小市民的日常」こそが重要なのではないかとかナンと、上ム、現実する（何からの？）ための言い聖としてこの歌を聞いていたのでは思う。

近年の少年犯罪の、冒頭者の家庭しっいこの報道を見聞きするたびに、筆者はなぜか、この時の歌詞を思い出す。フルーの経験の一つとなる家からの光を浴び、レースを編みながら「切ヤ」を育てる母聖とは、73年当時筆者のクラスメイトだ、こんな母たち、この歌にうっかりハマったあの子たちのうちの誰かだ。この歌にあるような、ある意味で理想的な家庭を彼女たちは築く、が、最も重要なはずの当の「あなた（男）」、夫であり父親であるべき「あなた（男）」が家庭に存在していない、あるいは帰ってこないという、この歌のサビの部分のことは忘れていたのだろう。そしてもちろんきょうびの「14歳」きこんな「14歳」にしたのは、「あなた（男）」が原因なのだ。

（大須賀篤）

「あなた」
作詞・作曲　小坂明子
73年12月
※「小坂明子の世界」に収録
ワーナーミュージックジャパン

タン・タン・ファイ・バンド「港のヨーコ・ヨコハマ・ヨコスカ」

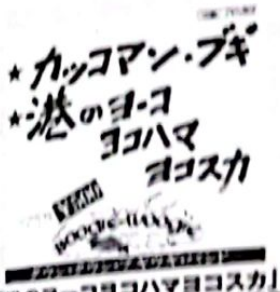
宇崎竜童自らの手で封印した理由を知りたい

ケーブルTVの音楽チャンネルで、山口小夜子がこの曲を、時の朗読パフォーマンスのもと歌っているのを見た。伴奏は宇崎竜童が務めていた。

宇崎は音楽の世界では名人である。それがなぜ今「港のヨーコ・ヨコハマ・ヨコスカ」かと問いたくなった。性しや、聞きたくないとも思った。なぜか。大ヒットした当時の「港のヨーコ・ヨコハマ・ヨコスカ」とは、似ても似つかない代物だったからである。

非難しているのではない。楽曲に存在したある種の気配が後に消えることは珍しいことではない。しかるにそれは、ナツメロではなく新作である。宇崎は自らの手で、かつての「港のヨーコヨコハマヨコスカ」を封印したのだと思った。理由を知りたいと思った。

（山本かずしげ）



「港のヨーコヨコハマヨコスカ」
作詞／阿木燿子　作曲／宇崎竜童
（「カッコマン・ブギ」の裏面に収録）
75年4月
※「シングルズ」に収録
東芝EMI

ゴダイゴ「モンキー・マジック」

DJの登竜門的サンプリング材料として、使われ過ぎ

楽曲自体のノリは素晴らしい。有象無象なオリエンタルな雰囲気は、ビーイング系お得意のパクり軍人も出るスキが全くないほど構築されていると言える。冒頭の絶叫部分は現在に来て、TV番組や、DJ等のサンプリング等に多用され、ついには、この曲だけでミックス盤が発売されるハメに。この手のミックス盤で成功しているのは「ルパン三世」だけ。

やはりオリジナルが汚されている気がしてなら、楽曲、シングル盤とアルバムでの微妙な違い（マント口）がある等、素人向けの聞き方を提示した事も重要。フルース・リーの怪鳥音入りシングル「ENTER THE Dragon」と並び、DJの登竜門的サンプリング材料としても、使われ過ぎて聞き飽きた部分があり、封印したい。

（立部篤）

「モンキー・マジック」
作詞／奈良橋陽子　作曲／タケカワユキヒデ
78年12月
※「GOLD／GODIEGO NOW&THEN」に収録
日本コロムビア

CamScannerでスキャン

カシオペア「ASAYAKE」

野外ジャズフェスの同好会ノリにトホホ

ジャズでも歌謡曲でもない微妙なポジション。でも「あれってJポップだよね」って言われれば「うん、まあそうかもな」と思わせるカシオペア。大ヒットした同曲は「毒にも薬にもならない日本のフュージョン」の象徴である。しかもこのノリを20年以上も持続させてしまった。F1テーマ曲化したスクェアのあの曲とか。テレビ番組のBGM使用率もダントツなのではないか。NHKを筆頭に。釣り番組とか、TVショッピングとか、ローカルニュースのオープニングとか。「BGMのあり方」を作り上げたことは罪か功績か。しかし明らかな罪がひとつ。夏の風物詩である野外ジャズフェスに奇妙な同好会ノリを与えたこと。あんなトホホな21世紀はいやだ。

（楠元伸哉）

「ASAYAKE」
作曲／野呂一生
（「SUPER FLIGHT」に収録）
79年11月
アルファ

80年代 谷村新司「昴」

世代を判別するリトマス試験紙はもはや無用

美空ひばりからデーモン小暮にまでカヴァーされた日本を代表する名曲。そればかりかアジア一帯でも人気は高く、北京では音楽師範学校の規定曲になっているそうだ。凛々しくも哀愁のこもったメロディー、どこか懐かしく遠い昔を思い起こさせる。日本人の泣かせ処を集中攻撃したような曲だが、それもそのはずで、サブリミナルに軍歌が挿入されている。「加藤隼戦闘隊」の旋律が巧みにサンプリングされている、という検証結果も発表されている。こういった下地があったからこそ"国民の名曲"になり得たのだろう。この曲にどう反応するかによって、世代を判別出来る。21世紀を迎えるにあたって、この手のリトマス試験紙曲はもう必要なし？

（小川真一）

「昴」
作詞・作曲／谷村新司
80年4月
※「TREASURE COLLECTION」に収録
ポリスター

さだまさし「防人の詩」

右翼的な唄とバッシングされたけど……

静謐な名曲で、生老病死の四苦を詠みこんだシンプルな詞も上出来。こんな歌は今後二度と現われないと思うが、映画「二百三高地」の主題歌だったせいで、右翼とバッシングされた。むしろ生命主義的な反戦歌である。もともとパトリオット（愛郷心のある人）ではあったけれど、政治的な資質の人では全然なかったのに、誤解された。しかし、その後のさだまさしは疑似自己実現予言（周囲の評価どおりの自分になってしまうこと）を成就し、さだのパトリオティズムはナショナリズムへ変化してゆく。特に90年代半ば以降は憂国的な発言や歌が目立ち、庇いようがない。真面目なのはわかるが、説いている処方箋といえば「夢を持て」という説教なので、若い人には相手にされない。そういう分岐点に位置した不幸な歌。

（見崎鉄）

「防人の詩」
作詞・作曲／さだまさし
80年7月
※「さだまさし―シングル全集 第3巻［さだまさし篇］其の二」に収録
テイチク

寺尾聡「ルビーの指環」

このぬべ～とした歌声のどこがダンディだったの？

大ヒットしていた81年当時、この曲がダンディズムの象徴として認識されていた理由がどうにも腑に落ちなかった。ほぼ20年たったいま聞き直しても、やっぱり納得いきまっしぇ～ん。歌う宇野重吉やん、というのは実の息子である以上いかんともしがたいとはいえ、終始ぬべ～と続くヴォーカルを聞くたび、「ああもう、はっきりせんかい」。そう叫び出したくなるむず痒さが漂うのだ。

カユさをやせがまんしてこそのダンディズム。作詞の松本隆の美意識からすればそういうことになるのかもしれないが、「♪誕生石ならルビィなのン」と突然女言葉が飛び出す展開は、やはり唐突。ジェンダーを混乱させたら天下一品の横原敬之も復帰したことだ、21世紀、ますます出番がないのでは。

（真保みゆき）

「ルビーの指環」
作詞／松本隆　作曲／寺尾聡
81年2月
※「20' Century J's BEST Vol.2 80's」収録
ユニバーサルビクター

CamScannerでスキャン

BOØWY
『BOØWY』

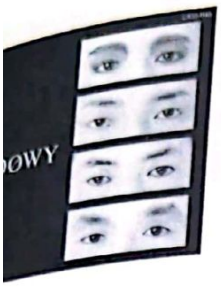
これが存在しなかったJポップ史を見てみたい

かつて『パチパチ・ロックンロール』なる雑誌があった。3、4年前だったと思うが、この雑誌の終刊号は、一冊まるまる使っての「BOØWY以降」という特集だったのである。彼らの遺伝子を受け継いだ幾多のバンドを年譜として追ったその内容はなかなか充実していた。

この誌名が表すように、「パチパチ」と「ロックンロール」の結節点がBOØWYだったのだと思う。ミーハーとしての「パチパチ」のギリギリと、「ロックンロール」のギリギリ。そのグラデーションが彼らのような歌謡ロックだったという図式は分かりやすい。歌謡ロックを商売にした、という意味で彼らの功績は大きい。細かい点では、サビの英語やら歌唱スタイルやらその他もろもろ。もしBOØWYがいなかったとしたら、と仮定すると、そのロスト・イヤーズはどうなっていただろうか。ビジュアル系もビーイング系も彼らが作った土壌なしでは育つはずもないわけで、そういう意味じゃ、BOØWY以前にリセットしてやり直すパラレルワールドのJポップ史を見てみたいのだ。

しかし、BOØWYチルドレンの跋扈を見ていると、布袋も氷室もエクスタシー・レーベルみたいの作ってりゃYOSHIKIぐらいの大富豪にはなれただろうにと思う。まあ、そこがそもそも真正ヤンキーではない彼らの限界なのだろうが。BOØWYが秀吉でXが家康ってことか。我ながら上手いね。

（下井草秀）



『BOØWY』
85年7月
東芝EMI

渡辺美里
「My Revolution」

無責任主義と来るべきバブルの浮遊感を同時予告

80年代「純粋まっすぐ君」の道は尾崎豊によって開かれ、渡辺美里によって固められた。文系不良少年であった尾崎になく、体育会系根性娘であった渡辺に顕著だったのは「力への意志」だ。ヒットにこだわり、「10代アーティスト初の2枚組」「15年連続夏の西武ドーム公演」等々、力ずくな記録への希求をあからさまにしてきた彼女。勝つこと、量を手に入れること、それが渡辺美里の本質である。清く正しく前向きに生きる少年少女のために全身全霊をかけて歌い、マナーを守らぬファンを叱りつける。飽くなき拡大願望はそのような彼女の、歌で人を救わんとする真摯さの現れではあろう。が、それがバブルの似姿に映ってしょうがない。

この曲はGのキーだが、そのコードに決して到達することなく3回も転調を繰り返す。落ちつかぬ調性の中で歌われる「自分らしく生きよう」とのスローガン。小室哲哉と渡辺美里の名を同時に世に知らしめた86年の本曲は、皆が自己肯定に勤しんだあげくの果てに蔓延する無責任主義と、やがて襲い来るバブルの浮遊感を同時に予告していた。これが「私の革命」とは皮肉である。

この曲が膨大な後続を生む「スタミナソング」（©宮台真司）が叫ぶ「真摯な自分」の肯定作業は、結局「私」を変えたところで事態は何も変わらないのだ、ということをただ確認するだけの絶望的な作業の反復ではなかったか。というか生まれて初めて自分で買ったレコードがこれ、という段階で、個人的には封印希望。

（増田聡）

lution」
作曲／小室哲哉
年
amond」に収録
コード

原田知世「彼と彼女のソネット」

シンガーとしての地位はこの曲で築かれたけど…

"『私をスキーに連れてって』コンビ復活！"の『ストレートニュース』見てる？　でも、知世様イジメられてばっかじゃん。たまには三上博史にウソの電話番号教えて、困らせたりしないんかね。てなワケで、某シーンズCFで10年もかかってた（今はインストで続行中）フレンチ・ポップのカヴァー。アイドル女優でなく、シンガーとしての知世様の地位はこの曲で築かれたと言っても過言ではない。一時期、この曲を聴くためにライヴに足を運んで泣いたもんね。昔、ゲストで出たトーク番組で（ビート）たけしに「さっさと芸能界辞めて原節子みたいに、婆やとひっそり暮らしてもらうのもアリ」なんて言われてたけど、この曲を封印すればそうしてくれるのか!?　（くれい響）

「彼と彼女のソネット」
作詞・作曲／C.Cohen
（『From T』に収録）
87年7月
※『シングル・コレクション'82～'88』に収録
ソニーレコード

筋肉少女帯『仏陀L』

今や「パノラマ島」もテーマパーク化しなきゃ

江戸川乱歩の有名な小説に、『パノラマ島奇談』というのがある。世俗に飽き果てた男が、金持ちの男とすり替わり、孤島に自分の夢想の王国を築く。が、やがて全てが露見し、自ら死を選び、打ち上げ花火と一緒にブッ飛ぶというお話。つまるところ、ロックというのもこういうもんだろうと思う。自己の生理や欲望というのは、本来外部とは断絶しているもの。だけど、そんな自己を通してみたくて、倒立したる価値観で築くパノラマ島。そう、多数決で勝てるんならロックなんていらねぇんです。絶対、多数決で勝てない大槻ケンヂの、渾身のパノラマ島計画が、この『仏陀L』であった。が、現代においては、パノラマ島もテーマパークにしなきゃならないのが、苦しいところなり。　（奈落一騎）

筋肉少女帯『仏陀L』
88年6月
トイズファクトリー

ブルーハーツ「チェルノブイリ」

社会派ブルーハーツに、"具体性のある意志"を見せてほしかった！

「社会派」のレッテルを貼られそうになったミュージシャンは、自分は決して「社会派」なんかではないことをくりかえし表明し、時には「自分はラブソングを歌うように社会問題を歌っている」などと意味不明の言い訳をしたりする。「社会派かラブソングか」という無意味な二文法が確かに存在する。

ブルーハーツも、この罠にハマった。「社会派」のレッテルに戸惑いながら、その「期待」に応えようとした結果が、「チェルノブイリ」だった。方向性を完全に見失った彼らは、「イメージ」というこれまた犯罪的な作品での転向宣言を機に無難な路線を歩みはじめたり、それで初期のファンが離れたことに危機感を抱いたのか、突然PKO問題に言及して「社会派」に逆戻りしたり、5年以上に及ぶ痛々しい試行錯誤の末、ついに遅すぎる解散をした。

初期ブルーハーツに与えられた「社会派」のレッテルは、しかし間違いではない。ただしその「社会派」性は、現実に自分が身を置いている学校や職場や家庭の共同性をなんとか越え出たいという欲求も由来するものであって、別に天下国家の問題へのジャーナリスティックな言及によって応じたものではない。

チェルノブイリに行こうが行くまいが、世界中いたるところで僕らの頭の上にハンマーは打ち下ろされているのであり、「まあるい地球」などという漠然とした曖昧な場所からではなく、今ここで何かを始めるんだという意志こそが「決して負けない強い力」の源だったはずだ。

ぼくは今でも「社会派」だ。　（外山恒一）

「チェルノブイリ」
作詞・作曲／真島昌利
88年7月
（『MEET THE BLUE HEARTS ベスト・コレクション IN USA』に収録）
メルダック

CamScannerでスキャン

米米CLUB「君がいるだけで」

80年代の彼らは本当にバカ（・褒め言葉）だったのに

巷名林檎「性的ヒーリング」を観て思い出したのが米米だったといって意外に思う人は、ビデオ「K2C2」「米米TV ONODA—SAN」をご覧あれ。デビュー前のトッチラカリ感に町田町蔵がバンクを感じたほど、80年代の奴らは本当にバカだった。しかし、90年の「浪漫飛行」のスマッシュ・リバイバル・ヒットを機に、米米はメジャーとマイナーの間で路線を低迷させる。この状態を打破しようとした石井は社会的認知と商業的成功を収めるべく自己プロデュースを開始。確かに「君がいるだけで」でレコ大&紅白の称号を得た。が、ここには石井の「素」である真面目さと彼らの思う「売れ線」の狭さとが思いっきり出てしまい、正しすぎるこの作品イメージが米米のアホさを呪縛、解散まで祟り続ける。やっぱホスト系遊び人が〈True Heart〉なんて歌っちゃいけないよな。（夏至明）

「君がいるだけで」
作詞・作曲／米米CLUB
92年5月発売
※「Octave～オクターヴ～」に収録
ソニーレコード

ザ・ブーム「島唄」

「より抑圧された誰か」に依存した変革の是非

ソウルフラワーユニオンが「硬派」として一定の位置を占められるような状況を見るにつけ、ぼくは自分がミュージシャンではなく政治活動家であったことを誇りに思うのである。彼らを筆頭に、ボ・ガンボス、ゼルダ、そしてザ・ブームといったいくつかのバンドが、90年代初頭、沖縄の喜納昌吉の周辺に結集した。彼らは、経済大国日本の現実を、沖縄そしてアイヌ、第三世界に立脚して撃とうとした。ここで問題にしたいのはこの現象そのものであって、「島唄」は単に一番知られている作品だから象徴的に挙げたにすぎない。

全共闘運動の崩壊と入れ替わりに、70年代の左翼シーンを席巻したのが反差別運動である。在日朝鮮人でも被差別部落民でも障害者でも沖縄・アイヌ民族でも女性でもない我々は、彼らを差別・抑圧する社会構造に従属することで結果的に加害者である側面から逃れられない自己を否定的に捉えかえしつつ、彼らの自己解放運動に献身的に参加しなければならない……という思想。当然の帰結として左翼は急速に新興宗教以下の超マイナーな存在になり果てた。

人はなぜ、社会変革を夢見るようになるのか。言うまでもなく、その人にとって、今の生活が我慢ならないからである。重要なのは、「より抑圧された誰か」のフィルターに依拠せず、学校で、職場で、家庭で、すでに充分に抑圧されている僕ら自身の開放を直接に求める回路を再建することだ。（外山恒一）

「島唄」
作詞・作曲／宮沢和史
93年6月
※「思春期」に収録
ソニーレコード

篠原ともえ「チャタレイ夫人にあこがれて」

シノラー&中原による危険な（？）一曲

現在小説家としても活躍する中原昌也が作詞したこの歌はウルトラ・ドラッギー。スペイシーに飛び回るシンセもヤバすぎ。詞の内容は、整形外科に入院中の女子高生が「キュリー夫人」と間違えて「チャタレイ夫人」を読書しちゃうというもの。サビは「チャタレイ夫人／キュリー夫人／蝶々夫人／ヒラリー夫人」と連呼するだけ。

この歌をはじめてウォークマンで聴いた時のことは今でも忘れられない。「魅せられて」の衣装で朗々と歌う、うつろな目をした篠原がホログラムで現れ、電車の中で僕は立ちすくんでしまった。完全バッドトリップ。

この曲がもし有線とかで流れたら、精神病院は行列のできるお店状態になったりして。（丹羽哲也）

「チャタレイ夫人にあこがれて」
作詞／中原昌也　作曲／山本アキヲ
96年10月
（「スーパーモデル」に収録）
キューンレコード

CamScannerでスキャン

GLAY「REVIEW」

ベスト盤の歴史を変えたのはいいが……。あれから3年。

ベスト盤の歴史には97年をもって「GLAY以前、それ以降」という分水嶺が横たわっている。メジャーデビューからわずか3年。その間にリリースされたアルバムは3枚、シングル12枚。12曲入りのベスト「REVIEW」には、そのうち7曲が収録され、インディーズ盤から2曲がリテイクされた。シングル至上主義を通り越し、更にはシングル曲プラスおまけでしかなくなっていたアルバムまでをも、単なるシンパへのボーナスと位置づけてしまう姿勢。シングルにおける物理的なパッケージと、アルバム収録曲という中間マージンを極限にまで抑えることで、実質的にはそれまでの楽曲を安売りするという、徹底したコスト削減を推し進めたパイオニアとなった。

価格破壊は消費者の歓迎を呼ぶ。これ以降、ベスト盤が年間ミリオンタイトルの3分の1を占める現象は、新聞の文化欄でも語り尽くされての通り。10年、20年、30年とミュージシャンの高齢化が進む中、記念・移籍・解散を伴わないこのベスト盤は、リスクを伴う最終手段だったはずの処方を一斉解禁させ、アルバムを盛り立てるためだけのシングル攻勢に最期の一鞭を与えた。アーティストの延命措置ならぬ縮命措置の後押しをすることで、価格破壊を超え、J—POPという枠組みの価値破壊にまで及ぶ。あれから3年。2度目のベストアルバムの裏には、全レコード会社の総意、焦げ付かせたツケが見え隠れしている気がしてならない。

（佐藤国春）

「REVIEW」
97年10月
ポリドール

SMAP「夜空ノムコウ」

この曲、音楽の教科書にもそのうち載りそうだもんなぁ……。

ムードコーラスの逸品、であることは多くの人が認めるところ。〝ハモリのないダークダックス〟みたいなSMAPの拙ないユニゾンも、ここではむしろ有効に機能している。山崎まさよしの「セロリ」もそうだが、スガシカオによる〝女々しさのリアリティ〟に5人のけなげな歌いぶりがミョーにハマるのだ。その点、野島伸司の「らいおんハート」は、男根主義的な感性が出すぎており、好悪が分かれるのも仕方ない。

しかし、この作品にも瑕瑾というべきものがある。〈あれからぼくたちは何かを信じてこれたかなぁ……〉という、あからさまな〝ら抜き〟言葉だ。

むろん、流行歌としては、〈来られる〉なんてやるよりずっと自然なのだろうし、一時は小室哲哉なども盛んに使っていた。が、国民的アイドルとして子供の人気も高いSMAPがやるのでとでは意味が違う。おそらくこれにより〝ら抜き〟はますますなしくずし的に許容されていくのではないか。しかも困ったことに、SMAP本人をはじめ多くの人が、この作品を後世に歌い継ごうとしているのである。

著名ミュージシャンの賛辞に自信をつけすぎたキムタクが音頭をとって『27時間テレビ』のラストで歌ったシーンなどは、まさに危険な予兆。国語史的な大事件としてのちに記録されるかもしれない。国語審議委員会は何らかの手を打つべきだろう。だって、この曲、音楽の教科書にもそのうち載りそうだもんなぁ……。

（宝泉薫）

「夜空ノムコウ」
作詞／スガシカオ　作曲／川村結花
98年1月
※『SMAP 012～VIVA AMIGOS!』に収録
ビクターエンタテインメント

CamScannerでスキャン

#3

新世紀に向けて、そろそろ「卒業」でしょ！

どんなに「新しいモノ」でも、
いつかは時代に追い越される日が来る。
「温故知新」もいいが、
「新しい」モノを創造するために、ひとまず、
輝かしい「過去」のことは忘れるってのはいかが？

70年代以前

井上陽水「氷の世界」

もはや「懐かしソング」としての再評価は必要ナシ？

「歌詞の意味がわからない」まま、個性派として評価される歌手として、その後活躍する契機となった曲だ。暗～い高校生活はこの曲と共に過ぎ去った気がする……。全体を覆う陰鬱な世界観と、不条理な詞。そして何より陽水の感極まった歌声は、まるで江戸川乱歩の作品世界を音で表現したようだ。

飄々とした風貌だが、その実かなりの苦労人である陽水は、この曲で悩める立場の人達に支持される事になる。筋肉少女帯がその後カヴァーしたことをとってみても、イメージとして、文学的な表現を歌にする事が上手い歌手だとわかる(ナゴム受けするアーティストという事か)。現在ほどアクのない、直線的な危なさが大槻ケンヂを動かしたのだろうか。

「氷の世界」
作詞・作曲／井上陽水
(「氷の世界」に収録)
73年10月
ポリドール

この曲が表題のアルバムは、陽水の直筆による歌詞とギターのコード表、何故かアフロ以上にモコモコした爆裂パーマの陽水が危ない視線を放つ裏ジャケ等、よくわからないが、とにかく異様な雰囲気が漂っていて楽しい。

今の30代がカラオケで歌う率が高い。どうやら現在の陽水をリスペクトするのは若い世代で、30代やそれ以上は文字通り〝氷の世界〟の時期に突入ということらしい。筋肉少女帯によるカヴァーを聴いた時点で、「氷の世界」が持つドロドロした情念世界を大槻ケンヂが全て表現し、評価してしまった。または成仏させたという時点で、文句なく70年代における名曲なのだが、もはや懐かしソングとしての再評価は必要ナシ？

(支部長)

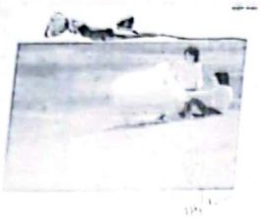
CamScannerでスキャン

オフコース「僕の贈りもの」

一番スキなのは自分じゃ〜ん！

俺は、いつも小田和正の歌に「結局、自分が一番スキなんじゃないか」という疑問（欺瞞？）を感じる。「キミ」への、「あなた」への想いを歌いつつも、好きなのは自分なのだ。オフコースのヒット曲に共通する事件への距離感というか、肉体感の薄さの出どころは、そこいらへんにあると思う。この曲は彼らがロック・コンボ編成になって人気者になる前、フォーク・デュオ期の代表作だが、「好きな人が出来なかった人」「好きな人と別れた人」のためへの贈りものであるという、実にわかりやすい歌である。でも、ちょっと借越じゃないか。これも自分が一番スキだからこそできる芸当。と今は思うが、当時は「優しさフォークやのぅ〜」と思ったのみ。

（杉山達）



「僕の贈りもの」
作詞・作曲／小田和正
73年6月
※『オフコース・グレイテストヒッツ 1969〜1989』に収録
ファンハウス

バンバン「『いちご白書』をもう一度」

無神経な自己肯定歌はもはや不要。でも、歴史は繰り返す。

この歌が登場したのは75年だが、そのモチーフとなった映画『いちご白書』が日本で公開されたのは70年だ。60年代末のアメリカの学園闘争とヒッピーイズムを描いた、というよりはそれらを小道具とした淡い恋愛ドラマで、名作ビデオベスト100などに選ばれることもあまりなくテレビ放映の機会も少ないので、今となっては幻の凡作かもしれない。

歌の主人公は、この映画がリバイバルされるにあたって、その頃つきあっていた女のことを思い出す。男は学生集会へ「時々出かける」程度の意識の持ち主で、無精髭なんぞも伸ばして社会に反抗するような格好もしていたが、就職を前にして髪を切り、女に言い訳をする。まあそのへんの不徹底さというかヘナチョコさが原因で女と別れたのだろうが、70年に大学4年だったとすれば75年でまだ26歳くらいなのである。なのにもう思いっきり隠遁→回想モードに入っていて、そのうえその女とまた会いたい（つまりまたヤリたい）などといい気なことをぬかすのだ。この腐れチンコのような歌詞を書いたのは荒井由実の一生の不覚だと思うが、グズグズとした無神経な自己肯定を歌うのにぴったりなばんばひろふみの生ぬるい声を得てヒット曲となった。60年代後半は熱かったというような物言いが定期的に繰り返されるが、その渦中にいた団塊の世代がいまに至るまで鈍感なのは、この歌が依然彼らのカラオケでの定番曲になっていることでもわかる。もっとも、いま革命とかなんとかライムしている若い衆も5年もたてばすっかり失楽園なオヤジになりはてるんでしょうなあ。歴史は繰り返す。

（大須賀猛）

「『いちご白書』をもう一度」
作詞・作曲／荒井由実
75年8月
※『ばんばひろふみ-それぞれの昨日』に収録
エピックレコード

80年代 堀江淳「メモリーグラス」

軟弱オカマソングはもういらない。21世紀は蜂起よ！

グジグジした失恋の悲哀を、生ぬるいオカマ風味たっぷりにナヨナヨ歌う、20世紀を代表するオカマ・ソング。♪あいつなんか飲み干してやるわ……20世紀のオカマはこんなジメジメしたシメジみたいな生き方でよかったかもね。でも、もうこんなメソメソした生き方は必要ないわ。強く生きるのよ。飲み干す、なんて甘いわ、食い尽くして骨までしゃぶりなさい。21世紀のオカマは男を栄養分にして輝く奴隷、気が済むまで奉仕させてイジめて我が同胞の恨みを21世紀でとことん晴らさなきゃ。だからこの歌みたいな軟弱オカマはもういらないの。全世界のオカマちゃん、蜂起せよ！

（石井恒）

「メモリーグラス」
作詞・作曲／堀江淳
※『硝子通り』に収録
81年4月
ソニーレコード

CamScannerでスキャン

浜田省吾「ON THE ROAD」

「ON THE ROAD」というメタファの感覚はもう古い?

「ON THE ROAD」は浜田を代表する名曲というわけではないけれども、82年からツアーの名前としてずっと定着している。人生はいつも道の途中だ、ということであるが、その道がどこへ続いているかというと〈約束されたはずの場所〉である。浜田は、生まれた町を出ていくという歌をいくつも作っているが、「生まれた町」から「約束の場所」までの過渡期が「ON THE ROAD」ということなのである。

だが「ON THE ROAD」というメタファの感覚はもう古い。アメリカの郊外のようにどこまでも真直ぐに延びた道をイメージしているのだろうが、その道を進んでいけば大丈夫というような〈信じて行きたい〉単純な道のイメージは、ポストモダンの現代にはそぐわない。むしろウェブネットのように錯綜した、出口もゴールもない迷路があるばかりだ。けれども浜田省吾は、頑固に来世紀も「ON THE ROAD」と銘うったツアーを続ける。この頑ななほどにスタイルを変えないということに浜田らしさがある。絶対はずさないサングラスがその象徴だが、ポパイがいつもパイプを口にくわえているように、サングラスは浜田省吾の肉体の一部になっている。

浜田の声には荒涼とした不安感と寂寥感があって、そこが好きだった。浜田の少し厚めで突き出た下唇から発せられる声は、低いのにかすれず、伸びと粘りがある。しかしそれにももう食傷ぎみ。作品的にも80年代の終わり以降は注目すべきものがない。持てるものは全て出し尽くした感がある。

(見崎鉄)

「ON THE ROAD」
作詞・作曲／浜田省吾
82年2月
※「ON THE ROAD」に収録
ソニーレコード

稲垣潤一「ドラマティック・レイン」

コートの襟も立ってる80sクールの象徴

小学生の時はじめて聴いて、思いましたよ。「オトナの恋はカッコええなぁ」って。都会に生きる男女の出会い、危険な恋、そして別れ。かっこいい(とされていた)恋のカタチはすなわち「80sクール」の象徴でした。まあ、そこは、詞を提供していた秋元康のパワーが大きいのだけど。それにしても、稲垣の喉元だけで出してるような(腹から出てない)声と、秋元の詞の相性のいいこと。例えば、ドラマティックなサビに突入する直前のフレーズ〈光るアスファルトふたり佇む、ああ、都会の夜はドラマティック〉、〈コートの襟を立てて歩けば、ああ、ふたりは無口にドラマティック〉。どうですか。佇んでますからね、都会の夜に。襟は立ってるし。21世紀なのに。

(楠元伸哉)

「ドラマティック・レイン」
作詞／秋元康　作曲／稲垣潤一
※「SHYLIGHTS」に収録
82年10月
東芝EMI

ムーンライダーズ「Y.B.J」

今でも80年代の殻に安住してるファンが多いね

大抵の雑誌には、ムーンライダーズのファンと称する編集者が2、3人は必ずいるものだ。彼らが通過した80年代のサブカルチャーにおいて、音楽を聴くという行為は、あくまでも教養の一環だった。つまり「ビックリハウス」や「宝島」を読む行為と同義。彼らは地方の高校で生徒会長やりながらも、俺はただの優等生じゃないんだもんねと思ったりしていた。その選民思想の根拠の一つがライダーズ・ファン=趣味がいいという自負。しかし90年代の渋谷系以降は、音楽における趣味のよさがファッションと切り離せぬ実践の時代。それが恐くて80年代の殻=ライダーズ・ファンに安住してる人があまりに多いように思うんで、あえて苦言を呈してみた。

(下井草秀)

「Y.B.J.」
作詞／鈴木博文
作曲／鈴木博文、鈴木慶一、岡田徹
(「アマチュア・アカデミー」に収録)
84年8月
メトロトロン

CamScannerでスキャン

佐野元春『NO DAMAGE』

つまらない大人には、ならなかったけれど……

DEAR 元春――。

デビュー20周年コングラッチュレーション。

『NO DAMAGE』は、いわゆるベスト盤。傷ついた少年少女の心をハッピーにするような、ロックンロールナンバーが詰まった元春にとって初のチャートナンバー1アルバム（ちなみに『Cafe Bohemia』が惜しくもチャート2位にとどまったとき、彼は「ペプシの気持がわかる」との名言を残した）。

私も、ガラスのジェネレーションだった中学生の頃、金がなくて、自転車で40分の田舎のレンタルレコード屋で借り、テープがのびるほど聴いてた。シンナー臭い県下一の暴力中学校に通っていた私にとって、元春は、非現実の象徴だった。

『NO DAMAGE』
83年4月
エピックレコード

でも高校くらいになると、あんまり聴かなくなった。だんだん洋楽を聴くようになって、「なんや、ニセモンやん」と熱中していた過去を恥ずかしく思ったりもした。

月日が流れ、生きてくために仕事をするようになって、なんの気なしに、昔好きだったスプリングスティーンとビリー・ジョエルと一緒に元春のレコードを中古屋で激安でまとめて入手。甦るティーンエイジブルース。

〈若すぎて何だか解らなかったことがリアルに感じてしまうこの頃さ〉（『SOME DAY』）

いつまでもセンチメンタルなドリーマー。つまらない大人にはならなかったけど、へんてこな大人になってしまった元春。いつまでもこのままでいてほしい、と思う。

（荻原魚雷）

尾崎豊「卒業」

今や「反学校」というより「脱学校」の時代なればこそ

〈校舎の影 芝生の上 すいこまれる空〉という出だしを聴いていると、啄木の「不来方（こずかた）のお城の草に寝ころびて／空に吸はれし／十五の心」という短歌を思い出す。だが少年らしいこののびやかさは長くは続かず、苛立ちが勝り、テンションは上がってついに〈夜の校舎窓ガラス壊してまわった〉と暴発する。ナイーブさと不穏さをあわせ持ったところが共感を呼んだ。

〈早く自由になりたかった〉というが、そんなに嫌だったら中退してしまえばいいのに〈うんざりしながら それでも過ごした〉という。学校以外のオルタナティブを知らないから、学校の中で全てを解決しようとして、反抗の牙を学校へ向けてしまう。反発しつつもとにかく学校生活をまっとうし、時間がくれば自動的に訪れる学校の制度下の卒業という儀式をガマンして待っていた。

「卒業」
作詞・作曲／尾崎豊
85年1月発売
（『回帰線』に収録）
※99年にシングル再発
ソニーレコード

しかし今の子たちはどうか。適応できない子たちは、ストリートに出たり、引きこもったりというかたちで、「反学校」というより「脱学校」化してしまった。卒業までガマンする必要もなく、卒業という言葉の持つ比重が下がった。そういう意味で卒業を過大視する尾崎のこの歌はもう時代遅れになってしまった。

尾崎のこの方面での後継者はGLAYである。TAKUROは尾崎が好きなのだろう、「卒業」の雰囲気をもった歌をなんとか作ろうとしている。たとえば「グロリアス」などにそれを感じる。だが尾崎とGLAYの違いは、尾崎がそれを「現在」のこととして歌っているのにたいし、GLAYは「あの頃」はよかったと思い出のかたちで歌っていることだ。尾崎の歌にはまだ馴致されない野生の危険さがあったが、GLAYの歌は反抗のガス抜きとして体制の補完物に成り下がっている。

（見崎鉄）

CamScannerでスキャン

聖飢魔Ⅱ「蝋人形の館」

彼らのプロ根性は素直に賞賛すべし！ で、21世紀は？

本誌で封印するまでもなく『HM／HRCDガイド』での長谷川幸信氏のジャパメタヒストリーでは見事なまでになかったことにされている聖飢魔Ⅱ（LAZYやX、セックス・マシンガンズは入っているのに）。HMⅡ悪魔ギミックといういかにも80年代の大学生が思いつきそうなお遊びは、当時中学生だった自分は単純に面白がったが、年上のメタル・ファンは真剣に泣いたと聞く。だが、お茶の間にヘヴィ・メタルを持ち込んだ功績や、色物としてみられるがゆえに逆に身につけた演奏力、『THE OUTER MISSION』以降開花したHR／HMに留まらない音楽性、そして何よりも自ら選択した役割を十二分に演じきったプロ根性は素直に賞賛すべきだろう。で、21世紀はどうするの？

（夏至明）

「蝋人形の館」
作詞・作曲／ダミアン浜田
86年4月発売
※『1999 BLOOD LIST［元祖極悪集大成盤］』に収録
キューンレコード

BOØWY「only you」

すべてはこの曲から始まった？

もともとニューウェイヴ出身だったBOØWYが雌伏6年、バンド・ブームの最盛期を作り出すきっかけとなった記念碑的な曲。バンド・ブームも初期はアバンギャルドな匂いのする爆風スランプや米米CLUBなどの活躍で、どういった方向に向かっていくのかは、予断は許さなかった。

しかし、BOØWYはこの曲で、歌謡曲とロックのちょうど中間地帯に巨大なマーケットを発見したのである。ギターのリフでパンキッシュな2拍子の要素を加味したロックは、扇情的に濡れたメロディーと上手く噛み合った。さらに、西城秀樹などの70年代に模索されたビートの強い歌謡曲の唱法がスピード感を増し、バンドサウンドの上を走る。客のノリが過激かつ巨大化していく当時のライブシーンでは、この手の曲が是非とも必要とされていたはず。そして、それを実現化したのは、本当はアバンギャルドなポップ感覚を兼ね備えている布袋寅泰の、類い希なるバランス感覚だったといえる。

以後のバンドブームはこうした特攻隊のような「パンクビート歌謡ロック」が主流になり、90年代以降はビジュアル系がこの曲を雛型に曲作りを続けている。後に大槻ケンジなどがカバーするが、大槻バージョンですら曲調に大きな変化が出なかったことは注目に値する。この曲の持つ扇情感覚は、アーティストの方向性を問わず、かなり広範にアピールしたと思われるのだ。

（鹿島良雄）

「only you」
作詞／氷室京介　作曲／布袋寅泰
87年4月
※「BEAT EMOTION」に収録
東芝EMI

CamScannerでスキャン

B'z
「BAD COMMUNICATION」

「B'zが続いていく限りやらねばならない曲」のはず

ブレイクのきっかけとなった前期の代名詞。一時期は「B'zが続いていく限りやらねばならない曲」とまでの発言していたほどだが、その後の連続ヒットによってその発言自体をすっかり忘れていたという（笑）80年代末のソニー系～イカ天主導のバンド・ブームにあえて背を向けるかのように、バンドでなくユニット、タテノリ生バンドでなく打ち込みのユーロビート。帯コピーは「エンドレスで、かまわない。止めるまで、DANCE空間。」とまさにギリギリ崖の上を行くバブリーなキラキラ感。試験的に都内のディスコ（notクラブ）で流し火がついたといわれ、DJプロモ用にアナログ盤も制作された。英詩版（「WICKED BEAT」）、アコギ版（「LOOSE」）などのセルフカバーもアリ。

実はこちらをこそ封印したい3枚目のベストでは「"Mixture"」（2000年）などとうたい失笑を買ってしまったが、ミクスチャーという名が現れる前から彼らがクロスオーヴァー感を出していたのは事実。英語調のフェイクをかける日本詞ヴォーカルにみられるようにシーケンス＋ノイズ・ギターが基本の本作でもみられ、バックは徐々に生に置き換えられてゆく。ただし、例のバ○リの刻印を受けてしまったのもこのヒット作なのであった。まあ、たしかに。（夏至明）

「BAD COMMUNICATION」
作詞／稲葉浩志　作曲／松本孝弘
（「BAD COMMUNICATION」に収録）
89年10月発売
※「B'z the Best "Pleasure"」に収録
ビームス・レコード

90年代以降
ブランキー・ジェット・シティ
「Red Guitar and the Truth」

あの2枚ベストにも入らなかった曲たち

かつて千原兄弟のジュニアが、「ブランキー・ジェット・シティというのは、ロックとかジャズとかと一緒で、ブランキーというジャンルなんだ」といっていた。至言だと思う。

そのブランキーの究極アルバムといえば、2nd「BANG!」か3rd「C.B.JIM」。よくも悪くもアホ度ピカイチ。しかし、封印という意味ではこれ。解散後、発売された2枚組のベスト・アルバムにも、デビュー曲を含むこの1stアルバムの曲は、1曲も入っていなかった。プロデューサーとモメたかなんかで、当人たちが出来ばえに不満だったとか。

でも未完成な感じといい、音質の悪さといい、浅井健一の捨て身でむきだしなところが一番出ている、ブランキーらしいといえばブランキーらしいアルバムだったような気がする。

〈ここは何処？　君は誰？　俺は今唄うだけ　何が愛？　何が嘘？　俺は今　唄うだけ〉（「不良少年のうた」作詞・作曲／浅井健一）

彼らが21世紀を待たずに解散してしまったのは、ブランキーというジャンルの限界に達してしまったからだろう。90年代の半ばあたりから、ブランキーは、ある種の"貫録"を身につけてしまい、今にも空中分解しそうなギリギリの危うさを維持できなくなっていた。そもそも形になることを拒み、刹那的な輝きを放ち続けるというのは、土台からして無理な話だったのかもしれない。

しかし、そんなノー・フューチャーさかげんがブランキーの最大の魅力だった。（荻原魚雷）

「Red Guitar and the Truth」
91年4月
東芝EMI

封印コラム

恐れるな、恋をしろ。君だけのトーチソングを探しだすんだ

文▶本根誠(レコード会社勤務)

ガキの時分から、恋する俺を辛くしてきたJ-トーチソングの数々。ユーミンに泣かされっぱなしだった70年代からスガ シカオまで。

写真／大西基

俺のJ-トーチソング10

70年代

- 大瀧詠一「水彩画の町」 72年11月(「大瀧詠一」に収録) ソニーレコード
- 荒井由実「海を見ていた午後」 74年10月(「MISSLIM」に収録)アルファ
- 山下達郎「2000トンの涙(2000t of Rain)」 78年12月(「GO AHEAD」に収録)

80年代

- 大貫妙子「新しいシャツ」 80年7月(「ロマンティーク」に収録) BMGメディアジャパン
- 山下達郎「悲しみのJODY(She Was Crying)」 83年6月(「MELODIES」に収録) ワーナーミュージック
- 井上陽水「夢」 83年12月(「バレリーナ」に収録) フォーライフ

90年代

- オリジナル・ラヴ「DEEPER」 93年6月(「EYES」に収録)東芝EMI
- スガ シカオ「愛について」 97年11月(「FAMILY」に収録)キティ
- 岩下清香「サイレント・ダイアローグ」 96年7月(「眠らせないで」に収録)殿堂
- カーネーション「幻想列車」 00年2月(「LOVE SCULPUTURE」に収録)日本コロムビア

※番組は発表年順です。封印したい理由は全曲共、俺が過去に体験したつらい失恋を思い出させるから。が、必ずしも昔のガールフレンドと何かしてた時にBGMとして流れてた訳ではなく、俺の頭の中で今でも鳴ってしまうと即つらくなる、という感じなのです。

10年ぶりにぐらいに激しい失恋をした。毎日涙を抱えて鬱々としている。そんな時21世紀に残したくない1曲だと？　決まってるだろ。ガキの時分から、恋する俺を辛くしてきたJ-トーチソングの数々を今こそ俺は葬りたい。

70年代においては、みんなユーミンに泣かされっぱなしだった。失恋したことすらない級友まで横浜ドルフィンにむかわせた「海を見ていた午後」での、中産階級女子のラブ・モードは日本中の女の子を恋心コンシャスにさせた。80年代に入ってからの中産階級トーチの古典「雨のウェンズデイ」も良いが、大瀧詠一(詞:松本隆)コンビといえば「水彩画の町」での、今にも壊れてしまいそうな状態への言及の見事さ。そ、ザーッツ70'S！

で、80年代。J-トーチは不作続き。ケミカルな録音技法と演出過多、カタカナ過剰な詞曲がチャートを席巻。山下達郎「2000トンの雨」、大貫妙子「新しいシャツ」のような隠れ財宝も中堅派の頑張りで、恋していたい俺としてはぶんぶん。辛うじて70年代人脈からの後輩ピチカート・ファイヴ「日曜日の印象」からオリジナル・ラヴとスガ シカオに関しては、熱愛中にさえも来たるべき不和を予期して勝手に脱力するザマは、じつに深い洞察力そして表現力。

みたいなこと考えつつ都会の夜を一人歩くと。おいおい！　ちょっち前まではビルの谷間とかで人目忍びつつ別れを惜しんでちゅうちゅうしてるアベックは、多数いた筈だろ。それがこの頃ときたら新興宗教の集まりの帰りか君達、ぐらいのしかいないぞ最近は。センター街を歩く10代のメンズ&レディース、そしてギンザな20代のみんな、ズバリ言いたいのはね。「今すぐしたい」のは誰しもそうに決まってんだけど、同時に俺たち一人ずつが、詞を書いたことのない詩人だってことなんだ。恋することは自分が何者なのか体感すること。地球の限界を知ること。恐れるな。恋をしろ、年に1曲位しか生まれない君だけのJ-トーチソングを探しだすんだ。

りんけんバンド「ありがとう」

沖縄がJ?POPを再生する夢を見た。が、……

時代のロックが見失われれば、ポップもシンクロして停滞すると思っている。80年代末もそうだった。ロックはあまりにも複雑化し、ぼくたちは迷子になりかけた。ある人はアシッド・ハウスに、ある人はワールド・ミュージックにすべてを賭けた。が、ぼくにはいずれも心地が悪かった。そんなとき出逢ったのがこの曲である。懐かしくて新しく、シンプルだが奥深かった。すぐに沖縄に飛び、そのまま絡め取られてしまった。あれ以来、何十回も沖縄を訪れ、島の音楽を浴びてきた。沖縄がJ?POPを再生する夢さえ見た。が、一体いくら使ったんだろうと思うと暗澹たる気分になる。そろそろ封印しないと、破産に追い込まれる。ホント、冗談じゃなく。

(篠原章)

「ありがとう」
作詞・作曲／照屋林賢
90年5月
※『りんけんバンド』に収録
ソニーレコード

CamScannerでスキャン

森高千里「道」

強まるアーティスト色と反比例した俺の気持ち

この曲は確か本人が出演していたポッキーのCMで流れていた。正に森高大ブレイク直前という時であった。〈口も鼻も耳もまつ毛も〉、〈花も虫も土もバス停も〉と次々にたたみかけてくるこれまでにない吹っ飛んだ歌詞と、血圧低そうなルックスにほだされたのが運のツキ。ちょうど発売されたばかりだった新録ベスト、『森高ランド』のトリコになってしまった（初回限定でアルバムに付いていた写真集のセクシーコスプレは今、改めて見ると非常に味わい深い）。これ以降、『ザ・森高』や『古今東西』あたりの森高は無敵のガール・ポッパーだったと思う。少なくとも俺の中では。しかし、その後、急速にアーティスト色を強めてゆくのに反比例して俺の気持ちは急速に冷えた。

（杉山達）

「道」
作詞／森高千里　作曲／安田信二
（『森高ランド』に収録）
92年11月
ワーナーミュージックジャパン

ZARD「揺れる想い」

ニューミュージックの歴史を最大公約化

「Jポップとは何か？」という問いがなされたら、十人十色の答えが返ってくると思うが、ZARDはその中で最も中庸な答えといえるだろう。この曲の、無駄な部分をそぎ落としたメロディー、ジャケットのコントロールされたイメージ、簡潔な歌詞には、一点の雑解さもない。これ以上わかりやすい詩はないと思う。ニューミュージックの歴史を最大公約化した、抽出液のような内容だ。

サウンドに関しても、可もなく不可もないということがこれほど突き詰められたアレンジも少ない。これはZARDなりの「洗練」といえるが、日本人の中道好きをこれほど具現化したアーティストもいない。タイトルも「ゆらぎ」の流行をにらんで、まさに90年代のド真ん中。で、21世紀は……。

（鹿島良雄）

「揺れる想い」
作詞／坂井泉水　作曲／織田哲郎
93年5月
※『ZARD BLEND～SUN&STONE～』に収録
ビーグラム

MY LITTLE LOVER「Man & Woman」

影響大の鼻音唱法。AKKOフォロワーが自白押し？

相前後してブレイクした安室奈美恵の顔ほど直截な衝撃ではなかったぶん、ボディ・ブローのようにじわじわ効いてきたのが、マイラバAKKOの閻舌の悪さだった。「時々」が「ドキドキ」、「下校時刻」と聞こえるはずが「結構地獄」だもん。甘えた調子で、実は自信満々。人工甘味料てんこ盛りのケーキを食した後にも似たいや～な満腹感を、有線で聞くたび味わったものである。

AKKO自身は出産をへて現在は引退状態。めでたしめでたし……と言いたいところだが、さにあらず。鈴木あみしかり、浜崎あゆみしかり。いまや一語一語に濁点をまぶして歌ってくれる女性歌手たちが目白押しである。21世紀に入って耳がしびれてきたら、どうしてくれるの。

（真保みゆき）

「Man & Woman」
作詞／KATE　作曲／小林武史
95年5月
※『evergreen』に収録
トイズファクトリー

ケン・イシイ「EXTRA」

"革命を夢見る時代"なんて、もう終わってるでしょ

90年代においてテクノといえば、「テクノはオープンマインドだ」とか「テクノは革命だ」とか「テクノは前進し続けなければいけない」とか、一昔前の学生運動における青臭い革命思想然とした崇高な理念が堂々と語られてきた音楽ジャンルの代表格だ。でも、そうやって選民エリート意識をブンブンさせたおかげで結局は村社会化したあげくに、音楽的にも煮詰まって失速。先日の日本赤軍の重信房子の逮捕が象徴しているように、"革命を夢見る時代"なんて、とっくの昔に終わったはず。90年代テクノのアイドルとして君臨したケンイシイのこの曲は、テクノ革命理想を夢見たそんな時代を象徴する20世紀の遺物。

（小暮秀夫）

「EXTRA」
作曲／ケン・イシイ
（『ジェリー・トーンズ』に収録）
95年12月
ソニーレコード

CamScannerでスキャン

スガシカオ「黄金の月」

諦念こそスガシカオの本領

4大卒の、まあまあキレイなんだけど男運のない女友達（30歳）からスガシカオを薦められて聞いた時は、結構ショックだった。「〜してしまった」を連発するその詞が、後悔と諦念に満ちていたからだ。ただ、それが異様に暗いモノなのかと言えば、そうでもない。諦念のほうが、後悔に対するガス抜きにキッチリなっている。タイトルでもある「黄金の月」とは、おそらく〝希望〟である。だが、〈夜空に光る黄金の月など無くても〉と歌って曲を終えてしまう。しかもその先「何とかなる」じゃなくて、「仕方ないな」とか考えてそうだし。でもそれが、他の男性ソロとは違うスガシカオの本領、諦念なんだろう。ケッ、だから結婚も出来ねぇんだよー（オレ含む）　（神崎鉄男）

「黄金の月」
作詞・作曲／スガシカオ
97年5月発売
※「COVER」に収録
キティエンタープライズ

Misia「つつみ込むように…」

ディーヴァ界の第一人者はそつがなさすぎ!?

仕事場のFMで、やたら流れてると思ったら、いつのまにやらヒットしていた「つつみ込むように…」。今や、押しも押されぬ「イエロー・ディーヴァ界」（？）の第一人者だ（みんな、そんなにソウルものとかR&B好きやったんかい？）。今もコンビニの有線とかで、よく流れてますねMisia。彼女の歌にいつも感じるのは「しっかりトレーニングしました感」。いや別にトレーニングするのは全然かまいません。なんつーか、こうスポンテニアスなものより、後から学習したものの方が先に立ってる気がしてならないのだ。「おせーてもらった」感じ。この感じは、今も聴いてて変わらない。現在、ヒット中の「Everything」のゴージャスなサウンド・プロダクションの凄さには感心したが。別に「そうるみゅーじっくハ、ホンバノ黒人イチバン、ニホンジン全然ダメネ〜。りずむ感チョト悪イネ」とか思ってるわけじゃないし、別にソウル歌謡でオッケーっス、というのが偽らざる心境なのです。でも、う〜む、しかし。仕事場のFMでは、いつのまにか自分の番組やってたり、結構ソツなく他の番組もうまく仕切ってたりするMisia。出世が早いぜ。FMのお喋りを思い起こすと「汚れ」感がないんだな。妙にちゃんとしているのだ、このオネーチャンは。俺がひっかかってんのは、そっちなのかも。Misiaに限らず適度に滅菌されてないと売れないね。この曲のタイトルが象徴する曖昧なダマシ感も含めて。　（杉山達）

Misia
「つつみ込むように…」
作詞／島野聡　作曲／島野聡
98年2月
※「Mother,Father,Brother,Sister」に収録
アリスタ・ジャパン

椎名林檎「ここでキスして。」

タイトルの、男を試すような「行為」が気に入らない

タイトルの、男を試すような、そういう行為が気に食わない。態度ではなく、行為が気に入らないのです。電話で「今、隣に奥さんいるんでしょ、だったら、声に出して好きって言ってよ」とかいう女。主人の大事にしてる皿を割って、自分と皿とどっちが大事か、と迫り、そんなことで愛情を試す女。まわりっくどいちゅうねん。この前の「歌舞伎町の女王」のフィクション性が好きだっただけに、この曲のパーソナルな肌触りが鬱陶しくって、そのうえ、リリース当時、地元のFM局がヘヴィーローテーションで、嫌悪の追い討ちをかけてくれた。それとタイトルが入り混じって、聞き手の私を試してるような、そんな印象を受け、現在に、たぶん21世紀に至る。　（安田謙一）

「ここでキスして。」
作詞・作曲／椎名林檎
99年1月
※「無罪モラトリアム」に収録
東芝EMI

CamScannerでスキャン

ドラゴン・アッシュ『ビバ・ラ・レボリューション』

大人のたしなみってヤツですよ

若さというのは、輝かしくもみっともない季節の別称である。あえてベタな引用をしてみよう。

〈僕は二十歳だった。それがもっとも美しい季節だなんて誰にも言わせない〉（ポール・ニザン『アデン・アラビア』）

そう、若さはいつも美しさと裏腹の恥ずかしさに満ちている。大人たちは、自らの恥の記憶に照らし合わせ、「若さ」を深いフトコロでもって受け止めてきた。つまり、なかったことにしてあげていたのだ。

それがどうだ。最近じゃ、「若さ」ゆえの表現まで大人げなく叩かねば気の済まない余裕のなさ。

たしかに、ハンチクな「革命」だの「共闘」だのといったメッセージが、全共闘世代としては見過ごしにできなかったかもしれない。そんな浅薄なものが200万枚も売れてしまう日本に怒りを抑えかねたかもしれない。でもって、あんな若造が印税で分不相応なカネを手にしたことの間違いに憤ったのかもしれない。不景気で小遣いが減ったかもしれない。毎日の昼飯が平日半額のマクドナルドや値引き戦争激しい牛丼ばかりでウンザリしているかもしれない。それだけならまだしも、いつリストラされないと限らないかもしれない。

だがしかし、だからといって、切羽詰まった勘定、いや感情を直にぶつけるってんじゃあ情けなさすぎる。

彼が大人になったとき恥ずかしさに身もだえせずに済むよう、前もって封印しておいてあげる――、それが大人のたしなみってもんじゃありませんか。

（栗原裕一郎）

『ビバ・ラ・レボリューション』
99年7月
ビクターエンタテインメント

封印コラム

文▶難波章（大東文化大学教授）

私の「聖域」に土足で入り込んだ「歌謡曲」の系譜

歌謡曲は遠い宇宙の彼方の音楽だった。俺にはまるでカンケーねえやと思っていた。ましてそれが、会社の経費で呑んでるような中年サラリーマンとホステスのオネエチャンとの行き場のない恋物語だったりしたら、徹底して耳をふさいだ。現に70年代前半まではそういう歌も多かったのである。

ウェットで退行的でダサイ歌謡曲の世界を革新したのは、まず松任谷由実だった。やがてサザンオールスターズが登場するにおよんで、ユーミンと相乗的に日本のポップスの世界を塗り替えていった。歌謡曲をJ?POPに変異させる酵素となったのは、間違いなくこの二組のアーティストだ。

が、歌謡曲アンシャン・レジーム（旧体制）は思いの外強力だった。かぐや姫などのフォーク勢を取り込んでニュー演歌の担い手とし、ユーミンやSASのフォロワーを続々と送り出した。革命派も黙ってはいなかった。旧体制に公然と食い込んで、松田聖子というD-VAに行き着いた。その代表作が松本隆＝大滝詠一作の「風立ちぬ」である。この曲こそ90年代J?POPの礎石であろう。

以後、歌謡曲に仕えた兵士たちは、なし崩し的にJ?POPの潮流に飲み込まれたが、本丸に位置したジャニーズ帝国は容易に崩れなかった。が、スガシカオ＝川村結花作品「夜空ノムコウ」をSMAPが歌うことによって、ジャニーズ帝国もついにJ?POPの軍門に下ったのである。

成長したJ?POPにも弱点はあった。世界的モードであるR&Bを血肉化できないでいたのである。が、これも宇多田ヒカルの出現で簡単に乗り越えられてしまった。「First Love」によって、J?POPは最後のブロックを積み上げることができた。

そして21世紀。これらの曲を封印しないかぎり、ぼくはJ?POPという名の歌謡曲を毎日聴くことになるだろう。勝者は誰か、敗者は誰か。その答えを出せぬままに。

CamScannerでスキャン

#4

ほろ苦い「思い出」とともに……。

♪あの頃、僕は、若かったぁ〜。
そういえば、
あんなに熱中した時代が俺にもあったっけ……。
若き日の信仰告白。「通過儀礼」としての音楽。

70年代以前

はっぴいえんど「12月の雨の日」

コレで、ぼくは政治少年からロック少年へと変身

はっぴいえんどなるバンドのことは知っていたが、フォークの神様との異名をとった岡林信康のバック・バンドという程度の認識だった。岡林も音が好きで聴いていたわけではない。反体制的な歌詞に引かれていたにすぎない。当時のぼくはモードとしての左翼だった。中学生のくせに反戦デモに参加し、集会では革命を呼びかけた。それがえらくカッコいいことだと信じていた。

70年6月に警察につかまった。公安のデカにマークされ、灰色の夏休みを送った。さて、これからどうしようかと迷っていた矢先、この曲に出逢い、世界が一変した。アタマがクラクラした。カラダがガタガタ震えた。フォークギターを捨て、序文から一向に読み進めなかった『資本論』も書棚の奥にしまった。はっぴいえんどのアルバムを買いに走り、盤が擦り切れるまで聴いた。エレキギターを手に入れ、すべての曲をコピーした。スペシャル・サンクスにあったアーティストを端からチェックして、必要なレコードも集めた。

こうしてぼくは政治少年からロック少年に変身した。松本隆が描く世界が青山や麻布周辺だと知って、ほぼそれだけの理由で進学先もその近くの学校に決めた。後はライク・ア・ローリング・ストーン、坂道を転がるがごとくはっぴいえんど発のロックとポップの世界を彷徨い、残りの20世紀を過ごした。得たものも、失ったものも、今や大きすぎて測ることもできない。合掌である。

（篠原章）

「12月の雨の日」
作詞／松本隆・作曲／大滝詠一
71年4月発売
※『はっぴいえんど』に収録
東芝EMI

CamScannerでスキャン

大滝詠一「Cider '73」

あのときの興奮がなければ……

ステージに大滝詠一が登場し、山下達郎や大貫妙子を従えてこの曲を歌ったとき、カラダが宙に舞うような興奮を覚えた。時代は変わった、もう密室のロックや汗臭いロックとはおさらばだ、いよいよ明るく楽しいアメリカン・ポップスの時代が来ると確信した。この瞬間、ぼくは大滝詠一＝ナイアガラの世界に引きずり込まれたのである。73年9月21日、はっぴいえんどの解散記念イベント「CITY—LAST TIME AROUND」における出来事だった。あのときの興奮がなければ、アメリカン・ポップスのレコード収集なんかに大枚をはたくこともなければ、大滝詠一の新作を待ちこがれるあまり夜も眠れない、なんてこともなかったはずだ。

（篠原章）

「Cider'73」
作詞・作曲／大滝詠一
（『NIAGARA MOON』に収録）
75年5月
※『niagara CM Special』に収録
ソニーレコード

SHOGUN「BAD CITY」

優作の存在しない時代には、もはや不要

「最強のスタジオミュージシャン軍団」というのが当時、SHOGUNの売りだった。まだ小学生男子に過ぎなかったオレの心を掴むドラマの主題歌を次々と歌い、クールでハードボイルドな大人の世界を見せてくれた。が、今から考えるとそれは、スタジオミュージシャンの必然だったように思う。ハードボイルドという態度は、事物を客観視することである。風景化すると言ってもいい。SHOGUNにはそれが出来るが、逆にいえば濃ゆい主観がない。「BAD CITY」と罵ったところで、それは「都会」を「都市」に変換する作業にしかならない。松田優作という主観の塊の濃度を薄めて、80年代の幕を開ける役割を果たしたが、優作の存在しない時代にそんなモノは必要ない。

（神崎鉄男）

「BAD CITY」
作詞・作曲／キャシー・ランキン
79年
※97年10月に再発
ソニーレコード

スペクトラム「イン・ザ・スペース」

ファンクの本質、先取りしすぎた。

スペクトラムがモロに本気だったことは、グループ結成前に参加したキャンディーズ『ファイナル・カーニヴァル・プラス・ワン』でのバッキングからもよくわかる。そして「イン・ザ・スペース」へ。笑える。けど、かっこいい。これって結構ファンクの本質。米米CLUBを上回る日本きってのコスプレ実力派ながら、時代の徒花としてほぼ2年で解散したのも潔い。「トマト・イッパツ」「侍S」「夜明け（アルバ）」などを残し、宇宙へ戻っていった。とはいえ、そこはアミューズ契約第1号アーティスト。桑田佳祐プロデュースのもとでギタリストの西慎二がリリースしたソロ・アルバム（80年）は、日本のロック史上に残る名盤ですよ。ほんとに。

（高橋道花）

「イン・ザ・スペース」
作詞／宮下康仁　作曲／スペクトラム
79年11月
※『スペクトラム』に収録
ビクターエンタテインメント

ARB「Tokyo Cityは風だらけ」

ライヴで気絶したのは、あの時一度きりでした

この曲で石橋凌が「東京シティは〜〜」というと、みんなで「風だらけー」と叫びたいがために、よく新宿のライブハウスLOFTに通っていました17歳当時。そんなある日、なぜかフラフラと最前列に行ってしまった私は人ごみに押しつぶされて、ステージに腿がはさまってしまい、後ろから人が覆い被さり気絶。後にも先にも気絶という体験をしたのは、この時一度きりなのですが、その後私はステージの上から助けてもらい、楽屋でなぜか待ちかまえていたお医者さんに優しく看護してもらったことは一生忘れられません。

しかし、その後グループ魂なる人たちが「東京シティは〜」というのをギャグにしているのを見て、あの日のことは、私の過去恥部とともに封印したい次第です。

（谷亜ヒロコ）

「Tokyo Cityは風だらけ」
（『魂こがして』のB面に収録）
作詞／柴山俊之　作曲／石橋凌
79年12月
●写真は『Tokyo Cityは風だらけ』ライヴ収録の『BAD NEWS』
ビクターエンタテインメント

CamScannerでスキャン

80年代

沢田研二&エキゾティクス「6番目のユ・ウ・ウ・ツ」

あの目のジュリーは犯罪者だった

かつて刑務所で、社会復帰を指導する聖しろいた映画監督ジョン・ウォーターは、囚人たちに語れた。

「あっちゃんをうらんだりするなって、絶対にやらないでくれ――その代わり、文章や絵にするんだ」「僕がつくる映画はぜんぶ犯罪だ。ただ、刑期を終めるんじゃなくて、金が入ってくるところがちがう」『クラックポット上』より、ジョン・ウォーター著／徳間書店）と。

早川タケシという稀代のアーティストとコラボレートして「TOKIO」に代表される実験的なことに次々とトライしていたころの沢田研二は、まさに犯罪者だった。

羽飾&派手傘、カラコン、スヌーピーのぬいぐるみ――ブラウン管を通して、日本全国のお茶の間に犯罪が届けられた日々。なかでも「6番目のユ・ウ・ウ・ツ」には当時やられた。だって〈毎日僕生きてない／愛せない〉〈あなたを抱いても／誰かを抱いてもユ・ウ・ウ・ツだよ〉だぜ。そんな歌は世の中に不安な気持ちを蔓延させ、今なら即刻放送禁止になるんじゃねえの。

ジュリーはなぜテレビで歌わなくなったのだろう？　彼がテレビの歌番組にめったに出演しなくなってから、ずっとそう感じてきた。誰もが少年期に〝世の中は間違ってるからぶちこわしてやれ〟というパンク心を持つものだと思う。ジュリーはそういう思いを〝お茶の間のエンターテインメント〟で痛快に昇華してくれた稀有な存在だった。

ジュリーの不在と結びつけて少年犯罪を語るのは早計なような気がするのでやめておくが、ジュリーに力キのころ出会えた俺はシ・ア・ワ・セだった、ジュリーがいつの日かお茶の間で完全犯罪を犯す日のために、過去のノスタルジーとは訣別しておく。

（丹羽哲也）

沢田研二&エキゾティクス
「6番目のユ・ウ・ウ・ツ」
作詞／三浦徳子　作曲／西平彰
82年9月
※「Royal Straight Flush 1980～1996」に収録
東芝EMI

CHAGE & ASKA「YAH YAH YAH」

意味ナシ曲名はプロの凄み。ついつい口ずさんでしまうのが悔しい

サビのシンコペんとこがね、古手の黒人音楽ファン好みを刺激するもんでついつい口ずさんでたんです、流行ってた頃。軽いポ・ディドリー・ビートなんだよナ、なあんて、聞いてるこっちに教養があるだけに向こうの思うツボで。このサビの4小節と、〈殺りに行こう〉という文言〈これは〉これで世間に鬱積する不満を推測に表現してます〉だけからピヨーンと引き延ばしてつくった歌なんだろうなあ。文章書く時も参考になりますワ、2つもつかみがありゃいいのヨってな〝ゆー作歌法〟。ろくでもない歌だと思いつつ覚えちゃってるのが悔しい。福山雅治「HEY！」と双璧をなす意味なし曲名もプロの凄みを感じさせる。映画化希望、「ヤアヤアヤアー　チャゲと飛鳥がやってくる」って、ああ退屈。

（大須賀猛）

CHAGE & ASKA
「YAH YAH YAH」
作詞・作曲／飛鳥涼
93年3月
※「Red Hill」に収録
ポニーキャニオン

ARB「トラブルド・キッズ」

10代の恥ずかしい時代の墓碑銘

〈ヤクザな町には今日も朝から／風が吹き荒れて／気がきいた事なんか何も見つからない〉というフレーズを、いつも口ずさんでいた。何処にでもあるような地方都市で、何処にでもいるような10代のオレは、何処にでも転がってるような苛立ちを抱えて身悶えていた。それでもどうしようもなくなって、街の空気がヒリヒリ感じられ始めた時、鎮静剤のように、このフレーズが頭の中で流れた。新聞記事みたいな言葉の使い方をする歌が確かに多かったが、ARBのこういうところは信用できたし、10代の自分には必要な存在だった……な～んて恥ずかしい時代の頃を思い出させるこんな曲は、自分としてはしまっておきたい。今でも時々ライブアレンジ版が頭の中で流れるけど。

（神崎鉄男）

「トラブルド・キッズ」
作詞／石橋凌　作曲／田中一郎
83年4月発売
※「DAYS OF A.R.B vol.1 [1978-1983]」に収録
ビクターエンタテインメント

CamScannerでスキャン

ALFEE「星空のディスタンス」

誰にも見られたくない卒業写真や文集のように

以前『Jポップ批評2』で、筆者が高校時代に〝アル中〟（＝アルフィー中毒者）の友人を持っていたことを書いた。15年くらい前のアルフィーは結構オシャレな存在で、いまでいうGLAYとかラルクのように、フォークソング部の少年たちがカバーしたのが、「星空のディスタンス」。その波がBOØWY（筆者が高校3年時）に移るまでは、みっちり2年間、文化祭や新入生歓迎行事など、あらゆるところでこの曲を聞かされた。

いや、だから飽きたということではない。演るヤツらが下手すぎたのだ。ま、楽器が下手なのは愛嬌で済まそう。問題は歌だ。高見沢リードの「恋人たちのペイヴメント」なら多少声がずれても〝ああ高見沢さんってやっぱり声が高いね〟と、罪もない高見沢本人のせいにできる。

しかし「星空～」は桜井リード。誰にでも歌えそうなキーだ。だから、誰もが気軽に挑戦した。が、じつはこれがクセモノ。中音よりちょっと高い、なかなかキーが合わないいわく付きの声なのである。誰にも歌えそうな曲の第一印象なだけに、逆に音痴度が高まる。歌っている当人は陶酔しているからいいが、聴いているほうは、かなりこっぱずかしい思いをした。そんな軽いトラウマのおかげで、「星空～」を聴くたび、何か学生時代の作文を他人に読まれたような恥ずかしさがこみあげる。

筆者としては、「封印」というより、鍵付きの引き出しにこっそりしまっておきたい。誰にも見られたくない卒業写真や文集のように。昔の思い出の曲って大半はそんなものだ。

（ミヨ萩原）

「星空のディスタンス」
作詞／高見沢俊彦　作曲／高橋健
84年1月
※『EMOTIONAL LOVE SONGS』に収録
ポニーキャニオン

封印コラム

罪なのはあの人？それともあたくし？

さだまさしの熱狂的ファンと、一通のラブレター

文：さかもと未明（漫画家）

思い出したくないんですが、わたくしは中高校時代、本っ当にイケてない女でした。どのくらいイケてなかったかというと……。実はね、「さだまさし」が好きで……（笑）。

どのくらい好きだったかというと、「グレープ」時代からのLPをほとんど持っていて、部屋には無縁坂に立つさだのポスター。当時妹が渡辺徹（太る前な）やトシちゃんに夢中なのを横目で『低脳！』と軽蔑していたという、かなりヤバイ女だったんですよ。

それが縁で、クラスでもかなり地味目の女と急接近。ヤバさ二乗のあたくしたちは、「さだまさしコンサートの最前列のチケットを買うために徹夜する」という暴挙に！　まさかそんなので徹夜する奴なんかいないと思うでしょ？　ところがさだファンちゅーのは、イケてない女学生と亭主に相手にされなくなった人妻の鬱屈したリビドーによって、実に厚い層を形成しとるんですよ。

あたくしはその怖い風景にやたらなじんでおりました。毛布持参で膝抱え、早寝の友達横にしてウォークマンで聴いていたその曲は「道化師のソネット」!!

ところがそんなあたくしにラブレターが来るんだから、世の中スゴイ。当時浪人中だった、一年年上の彼から送られてきたその封書。開封するや否や、花の香りのビーズがバラバラと飛び出してきたのにはおったまげた!!

「ほーら、ラベンダーの花畑の香りを、君に送るよ」で始まる手紙と一緒に出てきたのは、大瀧詠一の「君は天然色」が入ったアルバムのテープ……。凍ったね。さだファンといえど恥ずかしさに耐えられず、手紙ごと焼却させていただきました。でも「恋するカレン」の甘ったるいメロディーと、トイレの香りの煙りの匂いは、今も鼻に焼きついて離れないわ。「狂ってる……」。つぶやいた当時のあたくしでしたが、さだを聞いていたあたくしと彼、どっちが罪なのでしょう。今考えるとぴったりの二人よね（泣）。

さだまさし
「道化師のソネット」
作詞・作曲／さだまさし
80年2月
『さだまさしシングルス全集　第3巻『さだまさし篇』其の二』に収録
テイチク

大瀧詠一
「君は天然色」（『A LONG VACATION』に収録）
作詞／松本隆　作曲／大瀧詠一
81年3月
ソニーレコード

大瀧詠一
「恋するカレン」
作詞／松本隆　作曲／大瀧詠一
81年6月
廃盤

おニャン子クラブ「セーラー服を脱がさないで」

透明で切ない恋愛とエロ妄想のジレンマ……

もう、こんな夏休みはいや。おニャン子クラブの解散が、“夏休みの一瞬の輝き”が次々からないそのトリアム青年をも夏に生まれ出したのは今さら残念するまでもないことだが、そういう“夏休みの情熱をいつまでもジルブルとひきずり続けてきたガメノ族”にとって、もしかしたらが、その夏休みから女業する絶好のタイミングなのではないだろうか。

そのきっかけを作ったアイ・わたのがモーニング娘。だというのは、考えようによってはなんとも皮肉な話ではあるが、あの夏の情動を現代に求めたところで、所詮はモーニング娘。程度のものにしかならないということは、これで残酷にも証明されてしまった。

それに……これは自分の心の傷口をえぐることでもあるので言いたくないことなのだが、おニャン子に熱狂していたあの暑い夏、僕達は本当に輝いていたのだろうか。大林宣彦の尾道三部作映画で描かれるような、透明で切ない純キュン的恋愛を夢見る一方で、頭と下半身はエロ妄想でパンパンに膨れ上がっている……そんな童貞少年にとっておニャン子は、その相反する夢想を同時に満たしてくれる存在であったことは確かだし、だからこそあれだけの支持を得たのだろう。でも合コンやサークル活動などで明るい青春を謳歌する大学生連中を横目に、「夕ニャン」を見て夜はオナニー、という青春は明らかにイジケているし、かっこ良さとも無縁だ。そんな暗い青春の思い出を美化しちゃうというのは、今でも自分がその頃と変わらないイジケた暗い人生をおくっている証拠でもあるわけで……ウーム、書いていると気が滅入ってくるばかりだな。

とにかく、そんなイジケ・ライフを21世紀に引きずらないためにも、おニャン子クラブはフジテレビのあの日玉マークの中に今こそ永遠に封印されるべきなのだ。でも封印したところで、ダメダメ人生がそう簡単に変わりゃしないのも分かってはいるんだけどさ。ハァ～（と溜息をつく）。

（小暮秀夫）

「セーラー服を脱がさないで」
作詞／秋元康　作曲／佐藤準
87年7月
※「おニャン子クラブベスト」に収録
ポニーキャニオン

町田町蔵FROM至福団「どてらい奴ら」

拝啓、あの頃の自堕落な町蔵様へ

80年代に入って「町田康」と名前を変えてからの町蔵は、「オルタナティヴ・スノッブ」といった風情が漂い始めてどうもつまらん。その点、80年代の彼は実に痛快だった。インタビューで店に入ると、近頃に「おっちゃん、ビール！」とのたまう。さんざん飲んだ後、別れ際に「500円貸してくれませんか。帰る金ないんで」と言い出す。ただのアル中、自堕落、禁治産者の流をまっしぐら。……あれから13年、私にとっての町田町蔵は今もあの時の500円玉とペアだ。握りしめた最後の銭。何十円の不足が死活問題になる現代の「方丈記」、「どてらい奴ら」。誰からも顧みられない場所で誤合された音のリン酸コデイン。あるいは脳下垂体のバグ。

（広瀬陽一）

『どてらい奴ら』
87年
バルコ・セクタリー

渡辺満里奈「マリーナの夏」

アイドル・ポップス幻想のシンボル！

80年代末期、すでに時代はアイドルの時代ではなかった。それなのにノコノコやって来たアイドル・ファンだった俺が、お無だったのが渡辺満里奈。「マリーナの夏」は後にリリースされた新録ベスト、「FUNNY FACE」で知った。このアルバムは、よく酔っ払って聴いた。ひ～、恥ずかしい。それにしても「満里奈」だから「マリーナの夏」って、ねぇ。そんなタイトルが通る時代だったのだろう。勢いは恐ろしい。タイトルはアバウトだが秋元康の歌詞はソツなさすぎ。そして彼女のヴォーカルは3枚目のシングルにして無防備すぎ。後にフリッパーズと組むとは思えない。俺の中のアイドル・ポップス幻想のシンボル。踏み絵みたく。いまさらですが「満里奈」は本名。

（杉山達）

「マリーナの夏」
作詞／秋元康　作曲／岸正之
（「MARINA」に収録）
87年4月
※「FUNNY FACE」に収録
エピックレコード

CamScannerでスキャン

パール兄弟「バカヤロウは愛の言葉」

穴があったら入りたい

サエキけんぞうはイトコである。そのサエキがパルメンズというバンドをやっていた頃、親類としての義理でライヴに出かけた。穴があったら入りたいとはこういうことを言うのかと思った。親類が人前で歌うのを見るのは、自分が歌うよりもはるかに恥ずかしかった。テクノもほぼ終息し、日本のロックなんてもう沢山と思っていた頃、サエキはパール兄弟を結成した。友人の川勝正幸に誘われてやむなく彼らのライヴに出かけた。恐る恐るステージをのぞくと、驚いたことにそこには一皮剥けた日本のロックがあった。サエキが「バカヤロウ」と歌ったとたん、世界は再び輝き始めたのだ。こうしてぼくはカタギに戻る機会を失ってしまったのである。

（篠原章）

「バカヤロウは愛の言葉」
作詞：サエキけんぞう・作曲：篠田昌男
（「PEARL & SNOW」に収録）
87年11月発売
※「究極のベスト」に収録
ポリドール

封印コラム

明菜より聖子派、マッチよりトシちゃん贔屓だった

文▼見崎歓（ライター）

実は歌なんてどうでもよかった。ひたすら、あの顔が好きだった。

山口百恵は美貌過ぎて近寄れず、ピンク・レディーはセクシーだが品がなく、さりとて石野真子や神原麻里のタレ目系ではイモっぽすぎる、と田舎の中学生の私ですら感じていたが、高校生になった80年、その微妙な空隙を埋める格好の疑似恋愛対象として登場したのが松田聖子であった。遅れて明菜・小泉ら82年組も登場し、アイドルたちのデケイドが形づくられる。もしこれがおニャン子ブームの85～87年に高校生活を送っていたら、もっとシニカルなアイドルファンになっていただろう。

聖子について語る人は必ず歌が松本隆とユーミンの作品でとゴチャゴチャ言う。松本隆は徹底して海や高原のリゾートを描くことで女性ファンを取り込んでいったが、私はむしろ「Rock-a-Rouge」の〈君がス・ス・スキだと　急にもつれない〉という、吃音を歌に取り入れた遊び心に感心したりした。しかし、私は聖子の歌は実はどうでもよかった。ひたすらあの顔が好きだった（特に、聖子カットではなくストレートにした83年頃がよい）。写真集は何冊も持っていたが、レコードは1枚も買わなかった。フォトジェニックという点では初期の明菜に負けるが、聖子は表情が豊かで媚びるしぐさも可愛いく、テレジェニック（テレビ映りのよい）において依然勝っていた。のけぞって大口開けて笑ったのも聖子がはじめてであろう。O脚・ペチャパイ・太い二の腕・貧相な顔・ウソ泣き、と様々な妬み僻みを受けていたが、聖子の体型は変えられないから、ファンとしては認知的不協和をO脚のほうが子供っぽくて可愛と合理化した。

アイドルのデビューも「スター誕生！」でのように歌の上手さで競うよりも、顔の可愛さ（ルックス）のみを基準に写真で競う、雑誌『MOMOCO』のモモコクラブのようなシステムが注目を集めていった。歌の下手な歌手が輩出した。歌はテレビに映る方便になった。

率直ながら男性アイドルにもふれておく。当時は、田原俊彦のファンになる子はマジメな人が多く、近藤真彦のファンには性的に早熟な人が多いといわれた。田原は世間知らずの坊っちゃんふう、近藤の顔は首と同じ太さで、横から写すと男性器のような卑猥さがあった。私は田原贔屓である。昨年、2時間ドラマ「巡査びんびん物語」で久しぶりにブラウン管で田原を見たが、頭髪の寂しさに残酷な時の流れを感じた。

田原俊彦

青い珊瑚礁

泉谷しげる「野性のバラッド」

共同幻想の中で響いたあの頃の泉谷の言葉

何かがしたくて、何もできなくて、何者でもなく、何もすべきことがなかった。エネルギーは有り余っていた。目が合う合わないで喧嘩になり、無意味にバッティングセンターに通い、窓ガラスの代わりに飲み屋の看板を壊して回った（笑）。

（なんてお前に伝えよう／静かに暮らすいらつきを。）考えてみれば80年代末期というのは、ある意味、幸福な時代だったと思う。好景気で余裕があったし、歴史的に大きな波が動いて、自分もその中にいるような幻想を持つことができた。その反面、脅迫された小さな孤独と躁鬱病も生み出されていったが。そんな時代に泉谷が吠えた言葉は、ボランティア程わかり易くはなかったが、多くの若い野郎を救っていたハズだ。

（神崎鉄男）

「野性のバラッド」
作詞・作曲／泉谷しげる
87年12月
※「吠えるバラッド」に収録
ビクターエンタテインメント

90年代以降 JUNSKY WALKER(S)「Let's GO ヒバリヒルズ」

あの頃のひばりヶ丘はもう戻らない

ジュンスカが育った街、西武池袋線・ひばりヶ丘の風景をジュンスカ・サウンドの基本形態（1コの音符に1コの言葉）で見事に描写したこの曲。歌のままの風景だったあのころから、ひばりヶ丘は変わった。この曲のプロモーションビデオが撮影された、駅前の小さなケンタッキーはバルコ建設と同時に取り壊されテナントになった。階段を下りて左側にあったBOOKSのしは、新しくできたパチンコ屋の地下に。フィッシュバーガーが美味しかったファーストフード「ロングジョンシルバー」は、とっくの昔になくなり、唯一の遊び場だった「ひばりボウル」も姿を消して数年。ジュンスカの街として名を馳せた「ヒバリヒルズ」は、もう二度と戻ってこない。

（島田宣子）

「Let's GO ヒバリヒルズ」
作詞／宮田和弥　作曲／森純太
（「Let's GO Hibari-hills」に収録）
90年6月
トイズファクトリー

オリジナル・ラヴ「VENUS」

学生時代の一人旅、ずっとこの曲が一緒だった

学生時代に日本中を旅して回った時期があった。そんなとき、たまたま同行していたのがこの曲。今でも、知らない風景が目に入ると頭の中で流れてしまう。で、先日もう一度あんな旅を、と思い立ちある離島に出かけた。出発の前夜、自宅で「そういえば」と例のCDを数年ぶりに聴いてみた。愕然とした。いつも頭の中で流れていたあの歌の、田島貴男の声が違うのだ。自分の中で勝手に田島の声だけ成長させていたのである。この数年間、ウソの歌をバックに記憶と戯れていたことがショックだったのだ。これからどうすればいいんだ、と。自分の責任なので仕方ないのだが、早く忘れてしまいたい。21世紀バージョンを発表してくれるなら別の話だが。

（楠元伸哉）

「VENUS」
作詞／木原龍太郎　作曲／田島貴男
（「結晶」に収録）92年4月
※「2000 BEST オリジナル・ラヴ・ベスト」に収録
東芝EMI

シャ乱Q「ズルい女」

何より、紛れもない歌謡曲だったことが嬉しかった

初めてシャ乱Qを聞いたのはアルバム「勝負師（ギャンブラー）」。全曲、六本木あたりの黒服の世界観で語られるお水な歌。イヤラシイと思ったが、つい引き込まれて最後まで聞き入った。その中に入っていたのが「ズルい女」だ。ホーンを全面に出すアレンジ、字余りの歌詞も、フアルセットを交える歌い方もカッコ良かったが、何より紛れもない歌謡曲だったことが嬉しかった。だが、それを声を大にして言えない。というのは、僕は〝おやぢの渋谷系〟を標榜しているからだ。愛聴盤はバーキンにゲンズブール、ピチカート・ファイブ、ポニー・ピンクだぜ、相当恥ずかしいけど。でも、というわけで口が裂けても大阪のヤンキーの歌など褒められないのだ。

（バド石橋）

「ズルい女」
作詩・作曲／つんく
95年5月
※「Qシングルベスト10～おまけつき～」に収録
BMGビクター

CamScannerでスキャン

NOKKO「人魚」

この名曲を"卒ぐれ"と割り切るのはソラすぎる。でも……

ソロになってからクラブ路線に走ったり、迷走していたNOKKOが、レベッカの名曲から解放され、ソロ歌手としてはじめてひと息向けたのが「人魚」だった。往年の「アカシアの雨がやむとき」（西田佐知子）の一節を引用したこの歌は、作曲を手がけた筒美京平のポップス・センスとそれ録されたクランク。ちなみに彼女は前年の春にシャケとの不倫騒動している。余計なお世話だが、たぶん「人魚」でNOKKOはシャケとの永きに渡った恋と別れを歌っているんじゃないだろうか。その恋物語を思い浮かべながらこの悲しい歌を改めて聴くと胸がしめつけられそうになる。そして同年に発表した極上曲ナシのアルバム『カラード』（もちろん「人魚」も収録）で、NOKKOはそれ以降の数多のポップスの新たなランクダードを作ったと、俺は勝手に確信した。

しかしその後迷走、名前をのっけにゆ名したり離婚したり芸能人公開カラオケ大会『Thｅ夜もヒッパレ』にレギュラーで出たり、あげくの果てに、今になってレベッカを再結成したり。

僕がNOKKOの歌手としての魅力にハマったのは、実はあとにも先にも『カラード』だけ。でも1000回聴いた「人魚」や「カラード」をブロックだと割り切るのも辛い。いっそのこと『カラード』全曲まるまるNOKKOのキャリアから消してしまおう。しつこいようだけどホントに『カラード』のジャケ写に映った、どこか微妙だけどフラットな表情を浮べたあなたの姿は本当に美しかったし、その表情は見事に音に刻み込まれていた。何度聴いても本当に素晴らしいアルバム。（丹羽智也）

「人魚」
作詞／NOKKO　作曲／筒美京平
94年12月
※『colored』に収録
ソニーレコード

Mr.Children「名もなき詩」

カラオケに行くたびに歌った。でも、そろそろ卒業したい

ミスチルの歌は恥ずかしい。ロック系のミュージシャンには、自分探しを恋人への愛に託した薄身のラブソングみたいなものが必ず存在するが、桜井和寿のすごいところは、それをずっとやっているところだ。それでも初期のものには若さゆえの初々しさが、最近のものにはバツイチならでは(!?)の苦みがそれぞれ粋いとなっていて、そういう意味ではこの曲あたりが、"恥ずかしさの極北"かもしれない。月9のドラマ『ピュア』（この物語もかなり恥ずかしかった）の主題歌ということもあって、自分探しとスケベ心が混在した言葉の数々。落研出身者らしい駄洒落みたいなレトリックも頻出する。こういう曲をカラオケで熱唱したりする素人って、いったいどんなヤツなのか、問いかけたい気分だ。

ところが、数年前の筆者は、そんなヤツだったのである。ちょうど、妻とつきあい始めた頃で、カラオケに行くたびにこれを歌った。恋愛というものは、最初こそ過剰な羞恥をともなうが、成就に向かううち、逆にそれを忘れさせる。その結果、過剰に恥ずかしい状況が出現するわけだ。桜井は、当時、自分探しの答なんかないとした上で「でも、それを探す旅がイコール、チルチルミチルの"青い鳥"や銀河鉄道999の"機械の体"なんです」などと語っている。こういう人生観を続ける限り、彼はこの世界を卒業しないだろう。でも、筆者はそろそろ卒業したい。というわけで、この曲の封印理由は思いきり個人的だ。（宝泉薫）

「名もなき詩」
作詞・作曲／桜井和寿
編曲／小林武史＆Mr.Children
96年2月
※『深海』に収録
トイズファクトリー

池田貴族「MiYOU」

死を前に売りたいと私に言ったが、売れなかった

昨年12月25日、池田貴族が死んだ。死因はガンである。末期ガンで死を目前にした池田に3月会った。体はやせ細っていたが語気強く生と死を語り、"遺作"と言い放ちながら発売直前のアルバム『MiYOU』の宣伝もした。

池田は心霊研究家として世に出て、最後はガンを売りに出した。ガンのお陰で仕事が増えて嬉しい、いつ死ぬんだと突っ込まれるのがオチだという言葉は、強がりの一種でも聞き手は力を与えられた。

しかし果敢にも池田は歌い手として死に、娘の美夕に自分の存在を知らしめるために曲を残した。売りたいと言ったが売れなかった。ガンでは騒いだのに、このCDを買って聞いたマスコミ人を知らない。家族と娘、そしてファンに返すべきものなのだろう。

（山本かずしげ）

「MiYOU」
99年4月
ホリプロ

ポルノグラフィティ「アポロ」

俺たち「万博世代」の夢を壊すなよ、オイ。

ギリギリ万博世代で、学研の『科学と学習』やら星新一のSFやらを読んで育った俺。2000年には真鍋博（R.I.P.）が描くような世界になっているんだろうと、なんとなく夢想してた。環境問題は解決。リニアモーターカーがガンガン走って、宇宙旅行も当たり前になってるような未来。他のヤツだってそう思ってなかった？

なのに〈本気で月に行こうって考えたんだろうね〉とポルノはバッサリ。月旅行という大いなる憧れが"最初から実現不可能な幻想じゃん"とバカにされてるような。こんな歌、21世紀に持って行きたくない（泣）。

冒頭の〈僕らの生まれてくるずっとずっと前にはもうアポロ11号は月に行ってたっていうのに〉ってフレーズの裏にも、"僕たちは脳天気に科学を信仰していた世代とは考え方が違う"っていうメッセージがあるように聞こえてしまう。ポルノのメンバーって実は74年生まれ。アポロ11号の月面着陸からたった5年後だけど、オイルショックの年でもある。

作詞したハルイチには上の世代に対する悪意という含みはまったくないのだろう。でも聴くたびに不愉快になる。人類が月に行かなくなって18年。IT革命だ、ペットロボットだって騒いでも、未来に"進歩と調和"的夢があまり感じられなくなったいま。「アポロ」は期せずして、高度成長期に生まれた鉄腕アトム世代の哀しみを、皮肉にも爽やかに歌っている。

（丹羽哲也）

「アポロ」
作詞／ハルイチ　作曲／ak.homma
99年9月
ソニーレコード

SPEED「STEADY -Atlanta Mix-」

せっかくのリミックスも意図不明。少女たちの意志は？

解散時にリリースされた『ディア・フレンズ1』で「ステディ（アトランタ・ミックス）」がようやく聴けた。TLCでお馴染み、ダラス・オースティン所有DARPスタジオでのミックスで、手掛けたのはニール・H・ポーグ。当時、グッディ・モブなどでアトランタ産R&B独特のくすんだ音色を作り出していた人だ。そんな人にこんなにどうってこともないアッパーなミックスをさせたのはどういうことか？　スタッフ側の意図が不明。SPEEDはどれくらい自分たちの指向性をその音楽に反映させることができたのだろう。フィンガー5で音楽に目覚めたぼくには、とても気になることだ。「ステディ（アトランタ・ミックス）」に見え隠れする解散への道。

（高橋道彦）

「STEADY -Atlanta Mix-」
作詞・作曲／伊秩弘将
（『Dear Friends 1: SPEED THE MEMORIAL BEST 1335days』に収録）
00年3月
トイズファクトリー

CamScannerでスキャン

封印コラム

"聴こえない歌"を封印するな

文▶湯浅学[音楽評論家]

イラスト▶[illegible]

歌謡曲がJポップとなった今、はびこらない歌はどこだ。〈幻の名盤解放同盟〉常務のマニフェスト

V.A.『幻の名盤解放箱』
99年12月
P-VINE RECORDS
レコード会社別にコンパイルした『幻の名盤解放歌集』シリーズの集大成14枚組。現在品切中だが2001年6月再発の予定。

売れる売れないだけで計量できる世界はいっそ清いと思う。売り上げがトレンドと盲信している人が人類の何割を占めるのか、というところから時代を計測して満足している分析馬鹿どもをいちいち相手にするがために幻の名盤解放同盟が結成されたのではない。"いい"と"わるい"がまるで既成のジャンル化された事実の如く認知されていると思い込ませようとする人々が日本歌謡界の売る側に多数存在していることがいましいましかった、ということは原因として確かにあった。非主流というより、あまりの自己主張(歌や音、詩の内容)のアクの強さゆえに"なかったことに"されていた、いわば"聴こえない"作品の存在を認知しておきたいという願いだった。退屈な楽曲の大群の中にそれらはうずもれていた。主流派は主流としてのスタイルや仕掛けによって再生産されていった。しかしそれら"なかったはずの聴こえない"楽曲は身勝手に自己完結あるいは自己消滅あるいは自己破壊あるいは単なる行方不明となって消えていく、という現実が繰り返されている。

幻の名盤解放同盟結成から18年、日本歌謡曲の多くはレッテル貼り替えによってJポップと呼称されるものとなったが、売り上げと内容は年々反比例していくようになった。つまり楽曲内の時代性とやらの薄さこそが世相を反映するようになってしまった。70年代初頭によく感じられた"虚しさ"とはまるで反対の、挫折すらしていない空漠感、空腹を感じたことのない苛立ち、不安なき不満などをなぐさめるための楽曲が売れる側にも売れない側にも主流となってしまった。意地を通して頑固ぶる者は過去へこだわるように細々と暮らしているように思えてならない。かつては主流たる芸能界には整然たる歌謡曲の数々が実験を繰り返していたが、今やJポップ界では実験なき再生品が音楽小僧やおねえちゃんたちによって大量生産され続けている。誰もが作り手であり受け手でありえるのは、受注関係があいまいであり、製品管理基準がいいかげんでも大量に売れてしまう世の中になったからである。世の中におもねっていることを居直ってごまかしていた我々の敵が、主流にも反主流、非主流にもはびこっている。誰もが主流予備隊化した日本において、被差別を実感できる者は、残念ながら極めて少ない。見せかけの平等を撃つしか道はない。

●幻の名盤解放同盟とは…埋もれた歌謡曲を調査・発掘し続けるフィールドワーク団体。82年結成。構成員は椹木敦、船橋英雄、湯浅学。

CamScannerでスキャン

#5 俺以外、聴くの禁止でしょ！

……などと、
過激かつ尊大にタイトルをつけてみましたが、
要は、この曲、このアルバムの扱われ方が
どうにもガマンできないといった個人的な憤懣から、
いっそのこと「封印」したい作品ってこと、で。

70年代以前

原田真二『Feel Happy』

このアルバムの価値を知る者は、松本隆と俺だけかも？

このアルバムで、"ポップス"に目覚めた人もけっこういるのでは!? たしかオリコンでデビュー作としては史上第一号の初登場一位を記録したはずだけど、ポール・マッカートニーのパクリなどと言われて本人が第一線を去り、地元・広島で琴をテーマにしたイヴェントに出演するなど、趣味的な音楽活動（あとは宗教!?）にとどまっている今、"過渡期的状況に生まれた佳作"くらいにしか思われていない。が、その程度の評価なら忘れられたほうがマシだ。ここでは、アイドルとアーティスト、歌謡曲と洋楽といった相反する要素が混在し、融合しながら独自の輝きを放っている。若書きなればこそ、得られたかもしれない完全なる美しさ——それを知る者は松本隆と俺だけかも!?

（宝泉薫）

「Feel Happy」
78年2月
※92年に再発
フォーライフ

遠藤賢司『東京ワッショイ』

エンケン保存のために世界遺産に指定

同時代の様々な才能あるミュージシャンが消えてゆくなか、なぜ彼がいまだに現役を続けられているのか？ 私はエンケンを"人類の保険"だと思っている。いつまでも地に足つかず、本業の音楽でさえも、ぶかっこうなまま突っ走ることしかできない。

「東京ワッショイ」では、当時流行のテクノサウンドをとりいれたりしているのだけど、エンケンは、なにをやってもエンケンでしかなかった。そんな彼の歌だからこそ、流行からは完全にとり残されながらも、希望という名の光を放ち続けているのかもしれない。〈今まで何度 倒れただろうか でも俺はこうして 立ち上がる〉（「不滅の男」作詞・作曲／遠藤賢司）

（荻原魚雷）

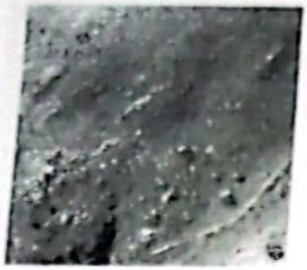
「東京ワッショイ」
79年1月
キング

CamScannerでスキャン

ザ・ルースターズ『φ(ファイ)』

「神経症・向精神薬の時代」を予見したアルバムゆえ

パンク以降、ロックの歴史が2周目に入ったとするなら、ルースターズの『φ(ファイ)』(84年)は、この第2幕の終焉を告げ、さらにはやがて訪れる「神経症・向精神薬の時代」を予見したアルバムだった。最も聴いちゃダメ、復活してはならないバンドである(否:復活してほしくない)。しかし、そのサウンドならびにスピリットは、見事なまでにブランキー、ミッシェル等に受け継がれ、深夜のTVから、今またオープニング・テーマとして「やりたいだけ~」なんて流れてくる! なぜか? そこには「ロックの本質」が含まれてるから。本質って? ここはユートピアじゃない、という2とです。あとは自分で考えて下さい。(奈良裕明)



『φ(ファイ)』
84年12月
ヒートウェーブ

荻原健一『愚か者』

ショーケンの立ち位置は激しく狂気じみている

「愚かさ」というものは、周囲の社会的要求に応えようとする理性よりも、個人的な欲望が勝ってしまった場合に発生する。そういう意味で、アル中にヤク中、ギャンブル狂、淫乱も全て愚か者になる苦だが、そのためには実はもう一つ条件がある。自分のしでかしたことに対する後悔と自責の念である。しかしショーケンは、そんな愚か者達を優しく慰め、「真の愚か者」という位置から誘惑する。「オマエ自身の欲望は何処にあるんだい?」と。その誘惑は甘美だが、中途半端な覚悟など吹き飛ばしてしまうほど、ショーケンの立ち位置は激しく狂気じみている。小心者に勘違いして半端に真似されても、危険だし大迷惑。一億総中流なんていう平和な幻想が崩れる21世紀は、オレ以外、聞くの禁止でしょ。(神崎鉄男)

「愚か者」
作詞/伊達歩 作曲/井上堯之
87年1月
※『Straight Light』に収録
イーストウエスト・ジャパン

RED WARRIORS『CASINO DRIVE』

優等生ロックの80年代に花開いたアダ花

細かい知識やポーズ以前に、ロックとかバンドとかロックンロールドリームといった言葉を聞いた時、まずイメージされるものをそのまま体現したようなバンド。それがレッズ。

金が欲しい、有名になりたい、女が好きだ、それがロックンロールだ。セックス、ドラッグ、ロックンロール!

でも、そこには言葉どおりのエグさや退廃は微塵もない。それは、70年代の健康な10代男子の、放課後の憧れそのものだから。こんなに素直に突き抜けてて、思い切りはじけてる、かわいい(それでいて、自分では「かわいさ」を意識したような真似、絶対しない)、いじらしいくらいの少年性を感じるバンド、他に知らない。

おためごかしなイイ子がやる、優等生な付加価値だらけのメッセージロックに占領されてた80年代半ば。いじけてしみったれた言い訳、能書き皆無の、不器用で意地っ張りな少年の強がりと高笑いのような彼等の音は、放課後のサイダーの味のように爽やかに響いた。(河田拓也)

『CASINO DRIVE』
87年6月
※『CASINO DRIVE ~CD文庫』で再発
日本コロムビア

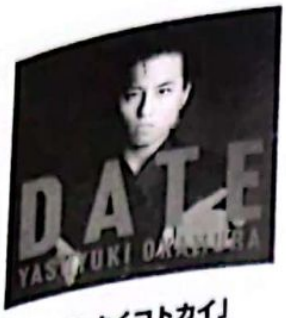
CamScannerでスキャン

岡村靖幸「イケナイコトカイ」

彼と同い年の私だけが好きだと思っていたのに

「DATE」というアルバムが出た時、仲間内ではちょっとした話題になっていました。もちろん私もこのアルバムで大ファンになったうちの一人です。中でもこの「イケナイコトカイ」の詞は素晴らしい。特に好きなのは《真夏の雨のように18、19が蒸発したけど》ってとこで、胸ドキューンーともってかれました。彼と私は同い年ということで勝手に親近感を持っているので、彼が太ってしまっても暖かく見守って行きたい、と思っているのですが、またもや強烈な同い年の人物を発見。鈴木祥子がこの前「イケナイコトカイ」をカバーしていたのです！　ああ、この曲についての良さを分かっている人がいたのかぁ、と感慨にふけっている35歳の秋。

（谷亜ヒロコ）



「イケナイコトカイ」
作詞・作曲／岡村靖幸
88年2月
※『DATE』に収録
エピックレコード

中山美穂「人魚姫」

誰も言わないのであれば、筆者が勝手に評価

80年代には、アーティストとアイドルが明確に分けられていた。人気絶頂のアイドルともなれば売れる歌を当然作る。荻野目洋子とかも当時マドンナのアルバムプロデューサーを呼び寄せて、しきりに「本格派」を強調していた。だが実際、耳に残る歌というのはキャッチーなものだけで、下手に全編英詞にしたりすると印象が薄かった。キャッチーであり、ダンサブルな歌謡曲として「人魚姫」は八神純子の「みずいろの雨」と並び、筆者の中では評価が高い。切ないラブソングなのに、本格ダンスナンバーとして売れた。これは当時のアイドルがアーティストとして成長するバロメータだったように思う。誰も言わないのであれば筆者が勝手に評価し、封印。

（支部長）

「人魚姫」
作詞／Chinfa Kan　作曲／Cindy
88年7月
キング

COMPLEX「Be My Baby」

布袋と吉川による早すぎたファット・ボーイ・スリム!?

実は元祖デジタル・ロック！　アルバムのふたりの妖しい姿と、額面通りでヒネリのまったくない詞が素晴らしい。「ロッキング・オン」的文学的ロック解釈はまったく不可能。こういう派手で大味な曲こそミレニアムの移り変わりに歌われるべき！　「You Spin Me Round」とかのようにね。しかしここ数年で布袋はピンの歌謡ロッカーとしての地位を確立したが、「Be My Baby」の重要性に気づかなかったのでは。実際、「Be My Baby」を超えるビッグな曲をその後書いてないしね。もっとも、来年以降、再リリースしても（笑）になるのは目に見えてる。そんなわけで、3000年まで封印。

（丹羽哲也）

「Be My Baby」
作詞／吉川晃司　作曲／布袋寅泰
89年4月
※『complex best』に収録
東芝EMI

90年代以降 ブランキー・ジェット・シティ「★★★★★★」

これからも私はこの曲に甘え続けてしまうのだろう

この間、吉祥寺の「酔舎」という店に行った。リクエストカードに書いた曲は「★★★★★★」。店内は週末の夜を過ごす人々で満席に近く、大音量のロックがかかる中で笑い声が響いていた。しばらくすると、ベンジーのギターが警鐘のように鳴りだし、達也が感情剥き出しのドラムをたたみ掛け、照井氏の切迫したベースが響くあの前奏が始まった。こんなに殺気立った曲が他にあるだろうか？　途端に店内は静まり返り、人々が息を呑む音まで聞こえそうだった。別に皆を黙らせようとした訳ではない。正義が通らない現実に苛立ち、この曲に甘えたくなっただけだ。私はこれからも封印どころか「思い出」にさえできないまま、ブランキーに甘え続けてしまうのであろう。

（石井暁子）

「★★★★★★★」
作詞・作曲／浅井健一
（『BANG!』に収録）
92年1月
東芝EMI

CamScannerでスキャン

鈴木蘭々「Kiss」

R&Bブームへのあだ花。早すぎた。合掌。

先日吉祥寺で鈴木蘭々を見た。何というか、芸能人のオーラを失っただの一般人にしか見えなかった。最近は歌の仕事が少ない蘭々は、どの時代にも必ずいる不思議系美少女の中でも歌唱レベルは非常に高く、このまま消えるのは惜しい存在だ。松田聖子歌唱の正統後継者である事も、こと90年代では稀有な存在だ。「Kiss」のようなR&B的曲調のブームが本格的にやってきたのは98年あたりから。

96年に発表されたこの曲は、楽曲、歌唱、全てにおいて早い。つまり、R&Bブームへのあだ花として消えていった「聴ける曲」なのだ。もったいないと言うべき他はなし。曲としては申し分ないR&Bのソレ。今出せば……と、本当に思う。だが早すぎた、合掌である。（支部長）

「Kiss」
作詞／相田毅、鈴木蘭々
作曲／ZAKI
96年6月
ソニーレコード

封印コラム

「情報処理」野郎は、聴くの禁止だぜ！

文▶河田拓也（フリーライター）

「達観」への早上がりではなく、「過程」そのものが希望である生き方への勇気と共感のための、この5枚

こういう仕事をしながら、こんなこと言い出すのは反則かもしれないけど、レビューってものには、いつもある種の抵抗感のような、複雑な気持ちがつきまとう。「現実そのもの」を目の前にした瞬間に感じる、とまどいや怖さや迷いのようなもの。そう簡単に「わかる」ことなどできない、複雑な背景や多面的な様相。そのとりとめのない「怖さ」の前で踏みとどまり、自分の中に答えのでない問い掛けを、「保留事項」とし抱えていけるか。そんな「見えていないこと」に対する自覚と謙虚さが、他者への礼節や優しさを生む、信頼のおけるコミュニケーションのための基盤であり、現在に胡座をかかないためのモチベーションを生みもする。

が、一見「身も蓋もなく」壮快な「本音」っぽく見えるレビューの氾濫は、その実、怖くて面倒な「現実そのもの」を、「情報」に書き替えてしまうことによって、物事を「模範解答」のある、ある種「怖くないもの」へと変換してしまう。それによって、世の中丸ごとが、タカを括った理解の「ウチワ」の中に閉ざされてしまっているような状況を作り、その中での情報スピードや細かい立回りばかりを加速させているようなところがあると思う。

情報が増え、選択枝が増えて、脅迫的に余計な葛藤や衝突、背伸びした野心に振り回されず、個性にあった自然な生き方を選びやすくなったことは、本当にいいことだと思う。だからこそ、それを、「達観」への早上がり、「全能感」への閉じ籠りの道具にしてしまうのはつまらない。

自分自身が、「可能性の渦中」を生きることは、本当はいつだって怖くてしんどいことだ。きりがないこと、辿り着けないことを知り、自分の身幅を身に染みながら、同時に自分に苛立ち続けること。そんな「過程」そのものが希望であるような生き方への勇気と共感のためにこそ、この5枚を贈りたい。

ゴダイゴ『新創世記』廃盤（76年）
▶水谷豊が、過干渉な母親の市原悦子をブチ殺す映画『青春の殺人者』のサントラ。最早ロックと呼ぶにはあまりにナイーブに洗練された彼等の音は、高度成長期の終り、豊かさと同時に未来も喜み、目的も原風景も失い、自立への糸口も見えないけれど、でも、「生きてやる！」というギリギリの生命力に、優しく寄り添っていた。

尾崎豊『17歳の地図』ソニーレコード（83年）
宇多田ヒカル『For You』東芝EMI（00年）
▶「安定」自体を目的に生きるような、「過去も未来も失われた」80年代の空気の中。郊外の様家族で育った、ちょっとやんちゃで真面目な嫌っ子優等生が、加速する都市の消費文化の台風の目のような青学の道楽文化と、ロックビジネス草創期の渦中で、無防備に被った混乱。
真文化の狭間に立っている緊張感に実存がざらされているからこそ、安全圏からの傍観者のような態度から最も遠い宇多田ヒカルの、「現実の迷いの渦中」を生き、表現する者としての尾崎への共感の表明には、本当に驚き、勇気づけられた。

Theビーズ『とどめをハデにくれ』ビクターエンタテインメント（95年）
▶「自分」にすぐ胡座をかく奴は、腹が立つ。「わかってもらいたい」なんて期待することが恥ずかしい。できれば、自分が当たり前に有用で、自然にここにいると思いたい。でも、思えない、変われない。キリがないから、せめて今は「関係ねえよ」とブチ切れたい。そんなシャイなロック。

パンプ　オブ　チキン『THE LIVING DEAD』UKプロジェクト（00年）
▶21世紀はここからはじまって欲しい。「外ヅラ」ではりあう刻苦な虚勢じゃない、本当に素直でいる「強さ」を、今度こそ得るために。ロックはそれを繰り返し求める、終りのない戦い。

CamScannerでスキャン

The ピーズ『リハビリ中断』

ヤケクソな感じを表現させたらサイコーのバンド

90年代はピーズを聴きながら陽の当たらない坂道を下り続けたような10年だった。

情けなくて、やるせない、ヨレヨレで、ボロボロで、ヤケクソな感じを表現させたらサイコーのバンド。

《僕らの死ぬまで　考えた　そして最悪の人生を消したい》（「実験4号」作詞・作曲／Haruyuki Oiki）

97年秋、このアルバムを発表後、しばらくして突然の活動停止――。

今でもよく聴く。だけど、以前のように頻繁にCDデッキにいれるようなことはなくなった。死んだ子の年を数えるじゃないが、「そろそろ自分自身の一歩を踏み出さなきゃな」と思いつつ、とりあえず、発売延期になっているベスト・アルバムを待っている。

（荻原魚雷）

『リハビリ中断』
97年5月
キング

スーパーバタードッグ『FREEWAY』

才能がこれほど無益に見殺しにされていくJポップの惨状

滅多にほめない僕だが、このアルバムにだけは満点をつける。高度な作曲能力。演奏は恐ろしくうまい。特にベースとドラムは機械のように正確だ。東京という都会が持つ孤独感、疎外感を簡潔に立ち上げる作詞に、優れた才能を感じる。肉感的な演奏にクールなボーカルが乗ると、不思議なほどエモーショナルで、これまたいい。完璧である。20世紀末の東京の心象風景を写しとめた作品として、これ以上のものはない。が、売れなかった。評論家は誰も彼らの才能を見抜けなかった。レコード会社も微々たる宣伝しかしなかった。聞くたびに、僕は泣けてくる。これほどの才能がこれほど無益に見殺しにされていくJポップの惨状が、あまりにも恥ずかしくて、泣けるのだ。

（鳥賀陽弘道）

『FREEWAY』
97年5月
東芝EMI

封印コラム

文・イラスト▼ぽんぴーな堂島
（ジャニーズ・アイドル研究家）

ジャニーズ歌謡はゼ～ンブ私のお墓に埋めちゃって下さい

コドモにはわからない、かつて大衆歌謡が忍ばせていたシュールでビザールな輝きこそ！

KinKi Kids『B album』
98年8月
ジャニーズ・エンタテインメント

封印したい……っていったら事務所こと封印したい気持ち(笑)。うーん、でもなあー。この無限に節操なく広がるJポップ業界の中で、唯一独占企業状態のまま、ほぼ閉ざされた「男性アイドル虎のアナ」みたいな極めて特殊な機関になってるワケですよ。トレンドはそこそこ押さえつつも、先輩から後輩へ継承されていく「ジャニーズ道」ともいうべき芸風はほとんど伝統芸能の世界。そこから繰り出されるのは、J―POPなるコトバが生まれてから急速に失われていった「日本人のうたこころ」を秘めた「Jポップ歌謡」(あ、この場合のJはジャニーズなんでよろしく)。日本人特有の情感「切なさ」タップリのプロフェッショナルな楽曲に、時折のぞくかつて大衆歌謡が忍ばせていたシュールでビザールな輝き。ああ、いいなー「ジャニーズ歌謡」。コドモにはわかるまい。

もう巷に溢れる声だけデカイ、プチ「アーティスト」にウンザリなんですよ。私。

てなわけで、ジャニーズを歌舞伎界同様、日本の誇る貴重な伝統芸能として次世代へ伝え……あれ？　封印しなくちゃいけないのね？　そうだな。ジャニ・ファンの若いコたちって「キンキ好きだけどオ～、曲はダサくてキラ～イ」ってヤツが多いから、じゃあ、いっそもう聴かせてやるのやめちゃえ。結局マニアはクロート筋に多かったりして、フツーのファンは意外と彼等の音楽には無関心だったりするから、まず「硝子の少年」封印。それから「雨のメロディ」も封印。キンキのシングル全部封印。「ガラスの10代」も「夜空ノムコウ」も「愛と沈黙」も……、あ～、やっぱり事務所こと私のお墓に埋めちゃって下さい。

で、21世紀のJポップに何かしら影響あるのかないのか、興味津々(多分、ない)。

CamScannerでスキャン

ゆず「夏色」

北川&岩沢の役割分担が絶妙だった初期のゆず

私がこの5年間で興味を持ったのはミスチルとゆずくらいなものである。マンネリのミスチルは一昨年の活動休止で自然消滅すればよかったのに、未練がましくまだやっている。ゆずも路上出身という、その路上くささがあっというまに抜けてしまい、売れセンを狙うたんなるJポップの追従になってしまった。

一般的に言って、コンサートに人が集まるのはCDという複製品にもの足りなさを感じる人たちが礼拝的価値を求めてやってくるからだが、ゆずの出てきた路上というのはコンサートのもっとも原初的な形態であり、路上こそは、大量生産・大量消費にもとづくJポップが喪失した歌のアウラを再び見出すことのできる場所であった。ゆずの真似をして路上で歌う若者が雨後のタケノコのように現われたけれど、彼らの誰もがゆずにあやかってデビューしたいという下心からそうしているのではなくて、むしろ歌のアウラに気がついたからそうするのであろう。

ゆずで重要なのはバランスだ。2人組はともすればどちらかの影が薄くなってしまうものだが、ゆずの場合は、権力欲がなさそうでただギターをかきならして歌っていればそれで満足といった感じの岩沢がおいてきぼりをくうのはもうわかっている。吉本隆明の詩ではないが「みえない関係が／みえはじめたとき／かれらは深く訣別している」ということにならねばよいが。

この「夏色」は北川の作詞作曲したものを岩沢がメインに歌っている。北川の書く楽曲にはこれでもかと押しまくってくるパワーがあるが、それを自然体で歌いこなすことができるのが岩沢の才能である。最近のゆずは自分で作った歌を自分がメインのボーカルで歌うことが多く自己完結ぎみだが、初期の「夏色」においては両者の才能の役割分担がうまくいっており、異質な二人がバロムーのように1人のゆずに変化していたのである。

（見崎鉄）

「夏色」
作詞・作曲　北川悠仁
トイズファクトリー
98年6月発売

Say A Little Prayer「深愛」

あの日の彼女の表情は、突然の解散を物語っていた

解散ライヴもなく、いきなり解散表明するアーティスト。当たり前だが、前もって「今日が最後のライヴ」なんて心構えで聴けない。セイア珠玉のバラード「深愛」もそうだった。時は99年8月27日、場所は横浜ベイホール。対バンは生音なのに、なぜかカラオケというイベント。でも、いつもより泣けてヘッドバンギングしまくってた、この日の「深愛」。実は数時間前、メンバーの大柳江里華と駅でバッタリ逢い「今日は久しぶりに『深愛』歌うよ」といった話をしていたからだ。今思えば明らかにいつもと違う彼女の表情は、解散を物語ってたのかもしれない。21世紀まで残すべき名曲なのは当然だ。と、同時に今世紀中にオレの心に封印したい一曲となった。

（くれい響）

「深愛」
作詞／田口理恵　作曲／PIK
98年4月
ポニーキャニオン

CamScannerでスキャン

封印コラム

文▶鈴木TDC（コラム）

DJによるネタ発掘ブームは、痛恨事！

読者諸君、ここで紹介する曲については他言無用です

90年代のクラブカルチャー隆盛は「売れた曲だけが必ずしもイイ曲ではない」というテーゼを明確にした。コレによって多くのDJによる「売れなかったけど実はイイ曲」、いわゆるネタ発掘の大ブームが起きることになるが、そうしたDJたちのネタ披露は、恒常的に売れてないCDやレコードも買い続けてきた者にとっては、生涯大切に育ててきた宝箱を突然ピッとその馬の骨にかっさらわれることに等しい痛恨事である。

だからこそ21世紀に残さなくていい、オレだけのものとしてずっと一緒にいてほしい音盤は、誰の心の中にも存在するはずだ。

オレだけのものでいてほしい理由にもいろいろあるが、大雑把に分別すると、

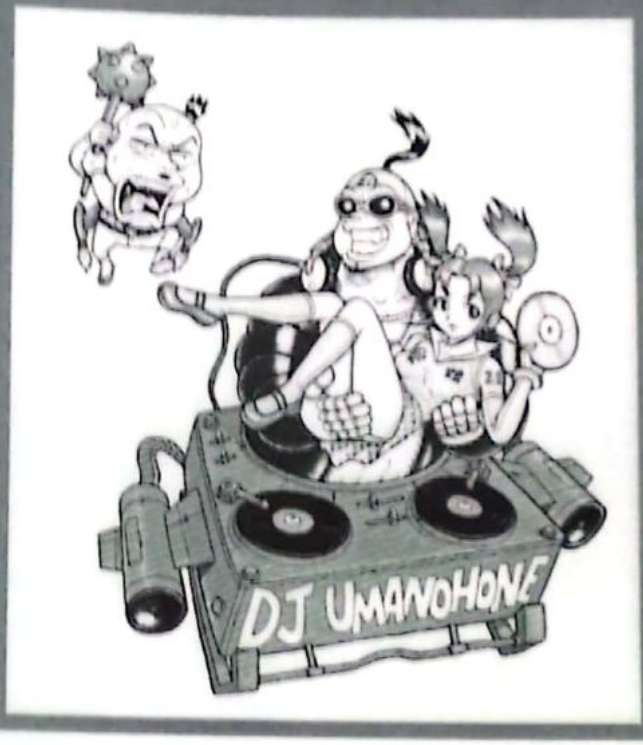
1、業務用
2、心の支え用
3、マイ・テーマソング用

の3つになる。

1、は70年代なら「キャッツアイ」「アバンチュール」、80年代なら麻生真美子&キャプテン「悪の帝国」と、いつの時代、どこに出してもそれなりに恥ずかしくない自慢のメカケのような音盤がそれだ。はっきりいって復刻しないでほしい。しないでくれ。

2、は女にフラレた時やバクチで負けた時に聴く曲。シミったれた曲ばかり歌ってた80年代の矢沢永吉「LAHAINA」が筆者にとってはそれだが、女にモテモテの瞬間や「万馬券5千円買ってたII」なんて時に耳に入ってきてもいるので、俺がかけていいと言ったとき以外はかける必要なしII という意味で、音源を世界中で俺が一枚持ってるだけでいい。

3、はカラオケ&鼻歌で俺の魅力をビシッと見せつけるために、他人には歌ってほしくないし、どこぞの馬の骨に勘違いした解釈でカヴァーされた日には、メーカーに殴り込んでマスターを破壊だ！！ ダウンタウン・ブギウギバンド「身も心も」、RIKIと竹内力「欲望の街」なんかがそうした曲である。



イラストレーション／スズキサトル

海援隊『ベスト～エレック・イヤーズ～』

中年になって初めてワカる、この魅力

フォークのイメージが強い武田鉄矢だが、海援隊の結成以前、ディープ・パープルのコピーを歌っていた事実をご存じか。エレックから移籍後、『武田タバコ店のイアン・ギラン』を復活させたロック時代の最大の収穫。千葉和臣作「贈る言葉」など抒情派ヒット路線の一方で、武田ロックサイドを受け持っていたのが中牟田俊男であった。額面通りに受け止めればまきれもない褒め殺しチューン。だが嘉門達夫風のあるあるネタを歌っているようで、3番でホロリとさせる笑い泣きの武田節が、ノベルティに終わらぬ中年の悲哀を生む。かつて小野島大氏は中年になってわかるとサザンを評したが、小生にとってはさしずめ海援隊がそれといえるか。

（田中雄二）

「ベスト～エレック・イヤーズ～」
98年7月
フォーライフ

CamScannerでスキャン

モーニング娘。「Memory青春の光」

この曲が忘れられていくほど、筆者は幸せになれる

モー娘。のベスト曲、を決めるとしたら、かなりの票割れが予想される。シャ乱Q風キャバクラ歌謡が好きな人は「サマーナイトタウン」か「抱いて〜」、ディスコ系なら「LOVEマシーン」以降、アイドルポップスなら「モーニングコーヒー」or「真夏の光線」で、古くさい歌謡曲なら「ふるさと」、かと思えば、先物買いのマニアは「愛の種」を選んだりして!? しかし、この「Memory青春の光」を挙げる人はそんなにいないはずだ。冬向けの地味なバラードだった上、途中から福田明日香を見送る「Never Forget」をメインで歌うようになったため、忘れてしまったファンもいるだろう。

ところが、嬉しいことに筆者はこの曲がものすごく好きなのである。なぜ、〝嬉しいことに〟かといえば、アイドルファンにとって、何かを〝ひとり占め〟できることは最高の歓びだから。この曲のよさを知っているのは俺しかいない、という独りよがりな思い込みがストーカー心理にも通じる恍惚をもたらすのだ。

この曲の〝敗因〟は、キャンディーズが好きだったというつんくが、屈折した乙女心を複雑なコーラスで表現しようとしすぎたことだが、志はもっと評価されていい。しかも、もう一つ嬉しいことに、ここにはまだ細いなっちがいる。馴れとは面白いもので、今のなっちも捨て難いのだが、少女の危うさを表現する上ではきゃしゃであることも重要な条件だろう。

そんなわけで、この曲が忘れられていくほど、筆者は幸せになれるのである。

（宝泉薫）

「Memory青春の光」
作詞・作曲／つんく
99年2月
※「セカンド・モーニング」に収録
ゼティマ

宇多田ヒカル「Wait&See〜リスク〜」

チューしてェぞ、ヒッキー!

正直に言って、宇多田ヒカルになんて注目していなかった。楽曲と言葉の選び方のセンス、そして18歳という年齢には確かに恐れ入っていたが、他のヒット曲を歌うアーティストの延長線上でしか捉えていなかった。それが、どうしてもこの曲から認識を改めざるを得なくなった。種類が、次元が違うのだ。

〈リスクがあるからこそ／信じることに意味があるのさ〉と言ってみせる彼女がこの曲で示したのは、「覚悟」である。それは多少大袈裟な言い方をすれば、自意識を抱えてしまった者が超えなければならない「孤独との共存」という覚悟である。誰も他者と完全に理解し合うことなど出来ない。自分で自分を意識することが、より深い「寂しさ」を生み出してしまう。そんな世界との一体感を疑うことのない子供でなければ誰もが直面する問題に、学者や評論家の専門用語ではなく、日常的に使う簡単な言葉で、絶対に屈折も絶望もせず、誠実に解答する彼女。自分と他者との違いから生まれる不安に対して、焦らず〈占いなんて信じたりしないで〉自分で考えて答えを出し、それを自分自身で引き受けよう、〈どこにいたって私は私なんだから〉と。

大スターという極めて特殊な立場になっても、両親や恋愛にトラブルがあっても、安易なニヒリズムに陥ることなく、真っ直ぐに、しなやかに現実を受け入れ自分の人生を生きようとする彼女の強さに、オレは本気で感動してしまった。

というわけで。

チューしてェぞ、ヒッキー!

（神崎務男）

「Wait&See〜リスク〜」
作詞・作曲／宇多田ヒカル
00年4月
東芝EMI

CamScannerでスキャン

封印コラム

この3曲こそ矢沢永吉の殿堂入りなのよ、YOU、分る？

文▶三嶽貴彦（ライター）

本当は永ちゃんの曲なんて封印したくないんだけどさ、20世紀の遺産として残すためにもあえてこの曲を封印する。

「時間よ止まれ」
78年6月
「ゴールドラッシュ」に収録
ソニーレコード

「アリよさらば」
94年4月
東芝EMI

「止まらないHa～Ha」
86年7月
「東京ナイト」に収録
ワーナーミュージック

「矢沢」と書いて「ビッグ」と読んだ70年代

「時間よ止まれ」

永ちゃん最大のシングルヒット曲よ。だけどよ意外とファンから人気がないんだよな。でもこれあらゆる意味でエポックメイキングな曲なの。分ります？　CMタイアップ、ロック歌手のチャート1位これ全て矢沢から始まったの。でな、「ゴールドラッシュ」のヒットもあって永ちゃん所得番付1位になったわけだ。永ちゃん俺にこう言ったね。

「ロックシンガーが日本で初めて市民権を得たのは、俺の"所得番付1位"だったんじゃない？　YOU、そう思うだろ」

「矢沢」と書いて「ビッグ」と読んだ時代よ。というわけで、この曲の偉大さを確認させるために封印、殿堂入り。

「矢沢」と書いて「カーニバル」と読んだ80年代

「止まらないHa～Ha」

「止まれ」のあとは、「止まらない」と来たもんだ。今やコンサートで一番盛り上がる曲よ。そう、みんなでバスタオルを投げるのがこの曲。俺はそれまでにライブに行って、サジを投げたことはあったけど、タオルを投げたことはなかったね。もうビッグサプライズよ。分る？　YOU。ドームの5万人がオープンマインドで、いっせいにタオルを投げた姿は、一反もめんが何万も舞ってるようだ。おそらくこれ誰が見ても感動すると思うよ。まぁロックの儀式だね。ピュアな光景だよ。21世紀には「ロッケンロール無形文化財」になることはまちがいないね。永ちゃん俺に言ったもんね。

「やっぱライブは食うか食われるかよ。でも客は食われに来てんだよ。そこを上手く食ってやらなきゃ。昔ジョン・レノンがいいこと言ったよね。音楽はレコードで聴いてくれ。ライブは俺の顔を見に来いって。俺もそう思うよ」

やっぱ永ちゃんのライブ行ったら、毎回バスタオルは買わなくちゃね。「矢沢」と書いて「カーニバル」と読んだ時代ッス。

「矢沢」と書いて「ロック」と読んだ90年代

「アリよさらば」

94年あの伝説のドラマ「アリよさらば」の主題曲よ。永ちゃんが先生役で主演したドラマよ。俺は忘れもしないよ初回の放送。最後、理科室で永ちゃんが役柄に関係なくこの歌を歌ったのさ。理科室で歌う永ちゃんの姿なんて後にも先にもこの時だけよ。永ちゃんが歌い出したら、理科室だろうと保健室だろうと職員室だろうと関係ないね。懐が深いんだよ永ちゃんは。でもさ、この時ドラマに永ちゃん力入れてたんだよね。ストーリーとかもマスコミに明かさないでいようとスタッフで決めていたんだよね。でもさ、生徒役の子がテレビ雑誌にうっかり喋っちゃって、それが載っちゃったんだよね。でも永ちゃん怒らないでその子にこう言ったんだよ。

「YOU、フライングだよ」

でもさ、この時永ちゃんさ、役者はこれが最後とか言ってたのに、この後ドラマや映画にバンバン出るんだもん。もうしびれっぱなしよ！　でも永ちゃん俺に言ったね。

「矢沢の基本はロックンロールですよ」

やっぱ「矢沢」と書いて「ロック」と読むよ。ヨロシク！

というわけで超レアのお宝映像があるために生半可のファンには見てもらいたくないため封印、殿堂入り。

というわけで、これがロック界の無形文化財になるために封印、殿堂入り。

CamScannerでスキャン

#6

できれば、なかったことにしとこ。

日本のポピュラー音楽史上に
燦然と輝く大スターたちの代表曲に、
恐れ多くもモノ申す。
個人的には、この作品がなかったら、
あ〜あ、よかったのになぁ〜。

70年代以前 奥村チヨ「恋の奴隷」

和製シルヴィ・バルタンが、「演歌歌手」の道へ

実は奥村チヨはデビューの頃、和製シルヴィ・バルタンと呼ばれていたことを、ご存じか？　だから、歌う曲もフレンチ・ポップスっぽい曲やベンチャーズ作曲の「北国の青い空」などポップス寄りのものばかり。この時期は名曲揃い。チヨも本当に素晴らしかった。この流れを壊したのが「恋の奴隷」だ。チヨのお色気に着目したなかにし礼が、鈴木邦彦に小唄の節回しを取り入れさせ作った。結果、大ヒット。だが、以後5作も続くソフトSMお座敷歌謡が彼女のイメージを固定した。ある歌番組で〝演歌歌手〟と紹介され不満そうだったチヨ。来世紀こそは奴隷解放、「シェルブールの雨傘」だって持ち歌なことを世間に知らしめて欲しい。

（バド石橋）

「恋の奴隷」
作詞／なかにし礼　作曲／鈴木邦彦
69年
☆「CHIYO! COQUETTISH BOMB」に収録
東芝EMI

レイジー「赤頭巾ちゃん御用心」

ジャパメタの祖・高崎晃に代わって「封印」

トラウマが忘却あるいは抑圧され記憶には残らないがゆえに実定的効力を持つとするならば、世界的影響力を誇るジャパメタの祖・高崎晃に代わって、この曲とそこでみせた華麗なステップを封印せねばならないだろう――佐山聡にとってのマーク・コステロ戦のように。

バンド名からしてディープ・パープル萌えの大阪の高校生バンドが、オーディション番組でかまやつひろしに認められ、上京してロックするつもりが「和製ベイ・シティ・ローラーズ」「70年代のGS」として時代の寵児に仕立て上げられ、葛藤を抱えHR宣言後の「宇宙船地球号」（80年）を経て解散。歌謡ロック路線で低迷した後アニソンで復活する彭山ヒロノブ（ミッシェル）を尻目に、高崎（スージー）と樋口宗孝（デイビー）はラウドネスで世界的成功を収める。彼らの運命を同じく中身はロッカーだったはずのチェッカーズと比較するのも面白い。

（夏至弘明）

「赤頭巾ちゃん御用心」
作詞／彭山浩美　作曲／都倉俊一
78年2月発売
☆「This is the LAZY」に収録
BMGメディアジャパン

さだまさし「親父の一番長い日」

DJ志望の皆様へ。これが日本初の12インチです

日本における12インチシングルの嚆矢はといえば、これがさだまさしの「親父の一番長い日」なのである。80年代で12インチといやエクステンデッド・ヴァージョンだの、いかにもMTV世代なタームが思い出されるが、ほんとのこと言うと、LPサイズなら長いから歌詞いっぱい入るじゃん、てな単純極まりない理由で選択されてたりするのだ。

ニューヨークのクラブカルチャーに日本を重ね合わせたりしてるようなDJ志望のみなさんには実に申し訳ないのだが、わが国にとってのレコードの尺なんてものは、そんな意味でしかとらえられてなかったのです。

ま、音楽じゃなくて落語や浪曲のレコードだと思えば悩まなくてすむか。ねえ。

（下井草秀）

「親父の一番長い日」
作詞・作曲／さだまさし
79年10月
※「さだまさしシングルス全集第3巻」に収録
テイチク

80年代 サザンオールスターズ「匂艶 The Night Club」

これ以後、サザンにこの曲と同路線の曲がないのは何故？

お祭り騒ぎ、ラテンな雰囲気で盛り上がるサザンの名曲。KinKi Kidsの等もこの曲をリスペクトしているだけに、ある意味有名なのかもしれないが、サザンはアルバム「NUDE MAN」を出した時点で完全に天下を取ってしまった。

ある意味、内容面で超えたアルバムをこの後は出していないと思う。このアルバムを手本として、80年代を引きずり、延々と模倣と、お家芸としての異端を際限なく繰り返しているように見える。TUBEにも言えることだが、オリジナル楽曲の売れるパターンを自ら王道化し、新しい展開を拒むのはいかがなものかとも思う。絶頂期にあったサザンの歌の中でも、この「匂艶 The Night Club」は、サンバノリの中に、使える楽器を全てブチ込んだ、何でもアリでヌケの良い一曲なのだが、それ以後のサザンにはこの曲と同路線の曲がない。どちらかといえば、「いとしのエリー」や「真夏の果実」に代表される癒しバラードが多くなったように思う。だいたい2、3年周期でこの手のバラードを発表する。う～ん、何でもござれのバブリーな雰囲気を好む輩が減少した事もあるのだが、同じ道具しか出さないドラえもん程つまらないモノはない。絶対的支持層がブ厚いサザンは、もう観客を裏切れないのか？　最初にこの曲を聴いたとき、「こんなのもアリか？」と思わされた部分がある。

全体のグルーブ感は、まさに絶頂期にあったサザンの秀逸なる楽曲として評価すべきだが、ここの時点で封印したほうがよいのかも。

（支部長）

「匂艶 The Night Club」
作詞・作曲／桑田佳祐
82年5月
※「NUDE MAN」に収録
ビクターエンタテインメント

CamScannerでスキャン

イエロー・マジック・オーケストラ

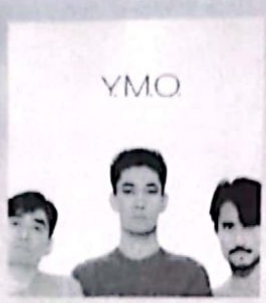
「君に、胸キュン。」

「最高のジョーク」は、なかったことにするのが礼儀

松本人志とのコラボレート、教授のアホアホ・マンとともに、ある意味賞賛の対象なのだが、それだけにここはひとつなかったことにするのが礼儀（改めて指摘するほうが罪ですか）。中年男だってアイドルになれる。そんな意志表示をしたのは、マイク・マイヤーズがウェインやオースティン・パワーズに扮したのにも近いハイ・ブロウな対応。でも、パロディはナマものだけに、時間が経てば色褪せる。いいとも青年隊よろしく、赤、黄、青と3色のベストを着た3人が愛想振りまくプロモ・ビデオもあったけれど、ここに来てそれがお宝映像として発掘されたりするのは、たとえサウンドが緻密でもちょっとイタい。

同じように、流行歌を意識した「胸キュン」という表現もいまや「プッツン」「ちゃっぷい」あたりと同列。また、テクノ歌謡再発見という動きもあるなか、その代表格として取り上げるとすれば、イモ欽トリオの「ハイスクールラブバイ」のほうを選ぶ。むしろ、YMOのこの作品は、作家ばかりで舞台公演を行った文士劇のように、一過性の娯楽として忘却するほうが楽しいし、見苦しくない。好セールスに引っ張られて、似たような曲をリリースしなかったあたりも、高度なジョークとして済ませる意図があったのは明白。その点、休眠から目覚めるというパフォーマンス付きで活動再開、反響の少なかった「TECHNODON」のほうが真の意味で封印、いやデリートしたい人が多いのかも。

（丸目蔵人）



「君に、胸キュン。」
作詞／松本隆　作曲／細野晴臣、高橋幸宏、坂本龍一
83年3月
※『浮気なぼくら』に収録
東芝EMI

封印コラム

TVで観た相川七瀬のバックバンドに唖然!!

元デッド・エンドに元ノヴェラ 彼らのちゃんとしたバンドが見たい!

文▶鈴木ゴロー（フリーライター）

DEAD END
『GOHST OF ROMANCE』
（ビクターエンタテインメント）

TVの歌番組で相川七瀬を見掛けるたびに、思わず表情を緩めていた時のこと。思ったよりもしっかりしたリズムが聴こえてきたのだ。なーんと、相川の後ろでドラムを叩いているのは紛れもなく西田竜一、ベースを弾いているのは増本正史だったのだ。

と、いっても多くの読者にはピンと来ないとは思う。しかし、彼らこそ、日本のロック史上、五指に入る空前絶後の最強のリズム隊だとしたら、少しは興味をもってもらえるだろうか。

増本は「彼らの存在がなければラルクは誕生しなかった」といわれる『デッド・エンド』のベーシスト。そして西田は、既に伝説と化した関西系プログレバンド『ノヴェラ』の2代目ドラマーとして、人知を超えた超絶技巧を駆使していた偉人なのである。こんな二人が組んでいるのだから、凄くないわけがない。まさに大ニュースなのだ。

ただ、歴史に残る画期的な出来事なのに、何も相川七瀬の後ろじゃなくても……と思うのが偽らざる心情。例えるなら、王・長島が草野球の試合に出ているようなものである。あるいは、田舎の力自慢大会に北尾がひっそりと出場してたとか。

相川七瀬本人に恨みはない。しかし、この二人が組むのなら、ちゃんとしたバンドでみてみたい。そんなわけで、相川には申し訳ないが、この豪華絢爛なバックバンドは、是非とも封印していただきたい。

CamScannerでスキャン

ザ・チェッカーズ
「song for U.S.A.」

これで偽アメグラ路線から脱出できた

86年はチェッカーズにとって激動の年だった。「GS＋ロカビリー（なぜか衣装はBCR）」とも言うべき“ダサカワイイ”コンセプトを屈辱に感じながらも甘んじて受け入れていた彼らは、遂にこの年「いい加減、オリジナル曲をA面にしてほしい」とスタッフに直訴。時期尚早と却下するスタッフへの反発心からメンバーは続コンセプトから離れ、好き勝手にパーマをあてたり、無精髭を剃ろうとはしなかった。藤井郁弥はインタビューで「ことあるごとに「ビストルズが好きだ。ロンドンでライブがやりたい」と語り、チェッカーズのアメリカン・グラフィティ路線をまっこうから否定しはじめた。

この郁弥の想いに油を注いでしまったのが同年7月公開の「チェッカーズ／song for U.S.A.」。「自分たちの音楽に疑問を感じたチェッカーズがアメリカで黒人ブルースマンと出会い、再び自分たちの音楽を取り戻す」といった内容のこの映画は、皮肉にも「俺は偽アメグラ路線はもういやだ」とより強く決意させてしまい、彼らは同名シングル発売後、スタッフの反対を押し切りオリジナル曲「NANA」を強引にリリース。これをヒットさせてしまう。

彼らは翌87年、キュート・ビート・クラブ・バンド名義でロンドンでのライブを成功させ、郁弥の念願は叶った。「song for U.S.A.」は80年代の世代闘争を知るうえでたいへん貴重な曲ではあるが、メンバーにとっては最も忘れたい一曲だろう。

（吉村智樹）

「song for U.S.A.」
作詞／売野雅勇　作曲／芹澤廣明
86年6月
※『EARLY SINGLES』に収録
ポニーキャニオン

美空ひばり
「川の流れのように」

美空ひばりが、これ一曲に集約されるのはあまりにも淋しい

ご存知、世間でいうところの“21世紀に残したい曲ナンバーワン”――しかし、個人的にはどうかと思うぞ。不世出の大歌手の代表作が、秋元康・見岳章コンビのやっつけ仕事、とまでは言わないけど、“一丁、でっかい企画物をやってやるか”みたいな軽いノリで生まれた曲でいいのかって。ま、ニャンギラス「私は里歌ちゃん」と同じコンビってのも、ある意味で感動的だが（笑）それはともかく、あからさまなパクリだという事実も不問なのか。気付いている人も多いと思うけど、この曲、そのまんま谷村新司の「昴」ではないか。

そういえば以前、石橋貴明が「これって「昴」に似てるよね」とイタズラっぽく指摘して、秋元康が「よしなさい、って」と浸才師みたいなツッコミを入れるのをテレビで見たことがあるが、けっこうバツが悪そうだった。それなら21世紀には「昴」を残せばいい、なんて声もどこからか聞こえてきたりして!?

とまあ、いろいろと難クセをつけてみたものの、大勢の人に支持されているのは事実だし、名曲の条件＝わかりやすさ、という究極のケースだといえなくもない。ただ、「Jポップ批評」的には、美空ひばりがこれ一曲に集約されるのはあまりにも淋しいのだ。「東京キッド」でも「港町十三番地」でもいい、とりあえず「川の流れのように」は天国の女王に返して、もっと“Jポップ”な曲を残そうではないか。さしあたって、第一候補は「お祭りマンボ」でどうだ!?

（宝泉薫）

川の流れのように

「川の流れのように」
作詞／秋元康　作曲／見岳章
89年1月
※『特選集＊美空ひばり／川の流れのように』に収録
日本コロムビア

「真夏の夜の夢」

ユーミン様の最大ヒット・シングルがコレだなんて、冗談じゃない

拍抜けない、普通の庶民にキラキラした夢を与え続けた偉大なるユーミン。あなたは移ろう季節を、心を、そして愛を、美しい絵巻映画のように描き続けてきた。かつてどれだけの傷付き疲れた魂を癒してきたことでしょう。なのに、90年代に入ってあなたは堕落した。もちろん“ポップ”のような素晴らしい曲もあっ[illegible]子大衆の曲から価値がなくな[illegible]は無意味な様式を絶妙に編[illegible]メロディがあれだけ[illegible]な心の動きしか描なアレンジ、懐かしいユーミンまでもが[illegible]なる駄作だわ。なのに130万枚も売れ、シングルでは最大のヒットになったのよ。ミリオン・ヒットが続出した時期だったから、たまたま浮動層が買って売れたんでしょ。でもこんな手抜きのやっつけ仕事が、最大ヒット曲としてユーミンのバイオグラフィに永遠に残るなんて冗談じゃない。ユーミンが死んでいろんな媒体で特集が組まれた時、“代表曲は「真夏の夜の夢」…”とか紹介されるかと思うと、ユーミンの美しい曲の数々を大切に愛してきた私は死んでも死に切れないわよ。時を遡ってこのシングルCDを回収し、ドブに捨ててなかったことにしたいわ。

（石井恒）

良かったんだけどね～、ちょっとね

センガ車が、おせっかいながらシンガーティストに一言申し上げます。

ジッタリン・ジン「夏祭り」94年8月　日本コロムビア

ジッタの曲は入江さんのドラムがあってこそジッタ！　それにこの詞は男の子の詞なんだよ。あの春川さんが唄うからいいんじゃん。ラジオ番組でキャピキャピしてるWhitberryが唄いこなせる曲じゃないっつーの。だから入江さんのかっちょいいドラムロールのなかに、さようならWhitberry、と夏祭り。

斉藤和義「歩いて帰ろう」94年8月　ファンハウス

こち一和義、この曲もったいぶってアンコールの一発目にする曲か？　あんなにかっこいい曲いっぱい持っているのに？　ライブの流れってもんがあるでしょうが。最近あなたぐらいですよ。ライブで元の歌詞変えて唄ってくれるの。あっ一この曲もライブだとCDとまったく違えて絶唱してくれたなあ。20世紀に置いて行くのはもったいないなぁ。……というわけで和義はなしよ。っと。

松任谷由実「真夏の夜の夢」

ユーミン様の最大ヒット・シングルがコレだなんて、冗談じゃない

垢抜けない普通の庶民にキラキラした夢を与え続けた偉大なるユーミン。あなたは移ろう季節を、心を、そして愛を、美しい短編映画のように描き続けてきたわ。かつてどれだけの傷付き疲れた魂を癒してきたことでしょう。なのに、90年代に入ってあなたは堕落した。もちろん「春よ来い」のような素晴らしい曲もあったけど、まず大半の曲から風景がなくなった。かつては風景と心情とを絶妙に織り込んだ繊細な詞やメロディがあれだけあったのに、ただ単純な心の動きしか描かなくなった。

この曲を今一度自分で聴いてみなさい。何ざます、このヒドさは。何のヒネリもない無意味な歌詞、下品なメロディ、安易なアレンジ、輝かしいユーミン史の恥となる駄作だわ。なのに130万枚も売れ、シングルでは最大のヒットになったのよ。ミリオン・ヒットが続出した時期だったから、たまたま浮動層が買って売れたんでしょ。でもこんな手抜きのやっつけ仕事が、最大ヒット曲としてユーミンのバイオグラフィに永遠に残るなんて冗談じゃない。ユーミンが死んでいろんな媒体で特集が組まれた時、〝代表曲は「真夏の夜の夢」…〟とか紹介されるかと思うと、ユーミンの美しい曲の数々を大切に愛してきた私は死んでも死に切れないわよ。時を遡ってこのシングルCDを回収し、ドブに捨ててなかったことにしたいわ。

（石井恒）

「真夏の夜の夢」
作詞・作曲／松任谷由実
※「u-miz」に収録
93年7月
東芝EMI

封印コラム

文・イラスト▶村松栄一（マンガ家）

○○は良かったんだけどね～、××はちょっとね

ライブ大好きマンガ家が、おせっかいながら
お気に入りのアーティストに一言申し上げます。

バンプ・オブ・チキン
「ダイヤモンド」00年3月 トイズファクトリー

バンプに限らずインディーズ時代はカッコよかったのにメジャーに行った途端、流行りの音入れられちゃって哀しい結果になっちゃうバンドいるんだよなぁ。それもこれもライヴ見ないでCDの音源だけ聴いて、簡単に「これは名盤です」なんて評論家が書き散らすからじゃないのか。だからバンプよ、CDなんて3日で作れ。そしてその分ライブに時間かけて、力とアイディア注ぎ込めって!!

ジッタリン・ジン
「夏祭り」90年8月 日本コロムビア

ジッタの曲は入江さんのトラムがあってこそジッタ！　それにこの詞は男の子の詞なんだよ。あの春川さんが唄うからいいんじゃん。ラジオ番組でキャピキャピしてるWhiteberryが唄いこなせる曲じゃないっつーの。だから入江さんのかっちょいいドラムロールのなか、さようならWhiteberryと「夏祭り」。

斉藤和義
「歩いて帰ろう」94年6月 ファンハウス

こら！和義、この曲もったいぶってアンコールの一発目にする曲か？　あんなにかっこいい曲いっぱい持っているのに？　ライブの流れってもんがあるでしょうが。最近あなたぐらいですよ。ライブで元の歌詞変えて唄ってくれるの。あっ！この曲もライブだとCDとまったく違えて絶叫してくれたなあ。20世紀に置いて行くのはもったいないなぁ。……というわけで和義はなしよ。っと。

綾戸智絵
「どんなときも」（「LOVE」に収録）00年4月 ewe records

ライブを見て以来、オレの中ではこの人ロック！　智絵さんの歌声は絶品よ。あの震え具合。聞き手の中枢神経をも震わすね。でも気をつけろ、MCは大阪のどこにでもいるおばちゃんおばちゃんしているから。それとマッキーの「どんなときも」のカバーもちょっと……。

特撮
「企画物AVの女」（「ヌイグルマー」に収録）00年10月 徳間ジャパンコミュニケーションズ

最後は趣向を変えて、なんでこの国は、こういう曲がTVのベスト10番組に登場しないのかね？　1位／下町兄弟、2位／特撮、3位がつボイノリオ。ってどうよ？　うわぁ～。ベスト10番組大嫌いなオレでさえ見たくなっちゃうぜ。演歌はドロドロ愛。ヒップホップは友人家族を大切にしよう。ロックは人生応援歌……。もっともっといろんな詞があっていいんじゃないの。「愛だ、恋だ、ポジティブだ」なーんて詞に共感してる奴のために大槻ケンヂを20世紀に置いていきます。

CamScannerでスキャン

小沢健二＋スチャダラパー「今夜はブギー・バック」

図らずもヒップホップ歌謡を生んでしまった罪

どこかの雑誌でBOSE氏が言ってました。「デビュー当時、ラジオに呼ばれたんだけど、『ラップで自己紹介してください』とか言われてスゴイ困った」。素人のヒップホップに対する認識なんて、いまだにそんなもんですよ。同曲の大ヒットは、世間のヒップホップ～ラップに対する認識をさらに良からぬ方向に進めた可能性が高い。図らずもヒップホップ歌謡という新ジャンルを生み出し「DA・YO・NE」につなぎ、カラオケボックスでもラップ現象。ついには、プロデューサーがアイドル歌手に向かって「じゃ、ここはラップでやってみようか」なんて発言も珍しくなくなった（知らないけど）このご時世。あの曲はなかった事にしたほうがシーンのためかも。

（楠元伸哉）

「今夜はブギー・バック」
作詞・作曲／小沢健二、スチャダラパー
94年3月
東芝EMI、キューンレコード2社で発売

小沢健二「LIFE」

"なかったことにしたい"症候群のオザケンを救う道

「人間は2通りに分けられる。ひとつは……」のデンでいくと、人は、過去をなかったことにしたいタイプと、いつまでも顕示したいタイプに分けることができるんじゃないか。

小沢健二は疑いなく前者"なかったことにしたい人"だ。それも強烈に。

まるでゾンビが墓場で歌っているみたいに生気のないマーヴィン・ゲイのカヴァー「Got to give it up」で復活したと思いきや、再びふっつりと隠遁してしまったオザケン。

この「LIFE」に見られるハイテンションぶりは当時も「自己啓発セミナー？」なんて囁かれていたけれど、引用とサンプリングに象徴される批評眼によってフリッパーズが成立していたことを思えば当然、視線は自分へも向けられる。知性と教養と審美眼に優れた、躁鬱のケがありそうな彼にすれば、おのれのノー天気ぶりを正視するに堪えがたくなったとしても不思議じゃない。

しかし、「仔猫ちゃ～ん」と呼びかけられたファンは、その空白を癒すがごとくオザケンの過去を増幅肥大させる一方。"なかったこと"にしたいのに……。

そこで。もうすぐ21世紀。封印してあげましょう。ファンの皆さんも、ホームページだの何だので、いつまでもグチャグチャいってちゃいけません。彼の復帰を祈るのなら、さあ、いますぐ記憶のディレクトリもろとも消去しなはれ。ポンッ！

（栗原裕一郎）

「LIFE」
94年8月
東芝EMI

TRICERATOPS「TRICERATOPS」

メジャー・デビューとともにダメになったバンド？

デビュー前の彼らのライブを見て仰天した。なんていいバンドだろう、と。ソリッドなリフ。楽器もうまいし、意表をつくコード進行もいい。それを必要最小限の3人でやろうという潔い姿勢にもホレた。久しぶりに骨太なロックバンドが出たと喜んだ。が、発売と同時に勇躍このアルバムを聞いて、全身の力が抜けた。郷ひろみが駄々こねてるみたいなボーカル。アイドル歌謡みたいな歌詞。作曲者・演奏者としての秀でた力と、作詞家・シンガーとしての未熟さが、無惨なまでにアンバランスだ。しかも、アルバムを重ねるごとに悪化していく。作詞家とボーカリストを雇わない限り、メジャー・デビューとともにダメになったバンドの悪例として歴史に残るだろう。黙祷。

（鳥賀陽弘道）

「TRICERATOPS」
98年3月発売
エピックレコード

CamScannerでスキャン

電気グルーヴ「VOXXX」

テクノとヒップホップの明暗を分けた1枚!?

カラオケでOLから学生までが歌った大ヒット曲「Shangri-La」と、さらにTV媒体などへの積極的なプロモーションの成果によって、電気グルーヴの知名度は一気に広がった。これは同時に、ダンス・ミュージックとしてのテクノを一般層に浸透させるチャンスだった。だからこそ「Nothing Gonna Change」や「Flashback Disco」のようなキャッチーでわかり易い曲を、最新アルバム「VOXXX」にはもっと収録するべきだった。上記の2曲以外は彼らの趣味丸出しで、一般人には理解不能。つまり彼等はテクノをヒップホップのように、より底上げできるチャンスを逃したと思う。

〔川本マコト〕

電気グルーヴ
「VOXXX」
00年2月
キューン

封印コラム

この音楽雑誌を「封印」しちゃお!

▶▶▶『音楽誌が書かないJポップ批評』

文▶奈良裕明（文筆業）

まず、音楽誌の変遷を、ものすごく乱暴に

80年代以前　グラビア誌の時代

80年代　社会科学的視点の導入、ならびに「マクラ」としての身辺雑記

と、区分けしてみます。

かつて「フォーク歌手」や「ロック・グループ」が決してTVに出演しなかった頃、生のステージと「フィルム・コンサート」を除けば、グラビアは手にすることのできる、唯一の「映像」でした。インタビュー記事が、貴重な情報源でした。「音楽」を「産業」として社会科学の切り口で語る手法は、すでに70年代から存在しました。しかし、それが顕著になるには、MTVの登場と家庭用ビデオ・デッキの普及を待たねばなりません。並行して確立されたのが、「商品」と化しつつあるアーティスト・作品との関係を、「自己・個人」に引き戻すべく生まれた「身辺雑記→楽曲論」のパターンです。

1998年の暮れに『音楽誌が書かないJポップ批評』が産声をあげた直後、近所の本屋さんへ足を運びました。どこにでもある、郊外の中規模書店です。そこで目にした小さな張り紙――「当店のベスト10　第9位／『音楽誌が書かない～』」。ちなみに第8位は、池田大作著『新・人間革命3』（聖教新聞社）でした。

〝Jポップ〟が『人間革命』と肩を並べている！　それは書き手のひとりとして参加した自分にも、想像すらできない光景でした。

「評論」とは何か？　自然科学の「論文」と比較すれば解りやすいはずです。論文は、

仮説→実験→証明

の手続きを経て書かれます。それに対し「実験」ができない評論は、

仮定→具体例（引用・経験）→説得力

となるのが、本来の姿。『Jポップ批評』は、インタビュー並びにいわゆるパブ記事（おまけに広告）との訣別から、この「仮定」の部分において、かつてない「自由度」を獲得しました（個人的に「仮定」で、クラッときたベスト3は、①「体のデカさ」と「サウンドのわかりやすさ」は比例する――HOTEI論／青木優〔vol.1所収〕、②彼らの「ここではない、どこか」って、どこにあるの？――GLAY論／見崎鉄〔vol.3所収〕、③「ぶっちゃけた話、椎名林檎とやりたい」――「罪と罰」レビュー／イノマー〔vol.5所収〕）。

ただし、言葉を換えれば、それは「ミもフタもない話」に陥りやすい。「仮定」の珍妙さを競うばかりに「具体例」が欠けていないか。「具体例」のはなれ技を誇るばかりに「説得力」が失われていないか。つまり、本当に「評論」たりえているのか……。

それは「読み手」の判断を仰ぐしかありません。

音楽が鳴っている瞬間、人は「悟り」の状態にあるのかもしれない。「〝楽しい〟がゴールだ。その先はない。考えるな」――甲本ヒロトの言葉を、思い出して下さい。

人間は「悟り」というベッドの中で、「煩悩」という名の夢をみている――高僧の言葉に倣うなら――私たちは「音楽」というベッドの中で、「Jポップ批評」いう名の夢をみている――のです、間違いなく（また〝博オチ〟かよ、とお思いでしょうが……実はそうなのです）。

CamScannerでスキャン

20世紀で「封印」したい名曲・名盤150

執筆者紹介&一言コメント

★森井貴彦
80年代後半からのアイドルを扱った「ラヴァラヴ」を執筆準備中。発売は年内！ 間に合うか（爆）？

★石井恒
不祥事の嵐を起こすのは山猿りの一味唐沢子。演歌歌手にでもなって悔泣きしたい。世紀末のおんな一人の朝よ。

★真賀陽弘道
本家の『アエラ』でも、月イチでJポップコラムを連載することに。これでめでたく給料ドロボーの汚名返上。

★小倉寧
61年8月23日生まれ。血液型O型。ウケ70タチ30、おねえ85野郎15

★大須賀猛
週末は5歳の息子とカラオケへ行く。息子が「マンピーのGスポット」を歌い、父親は「青春の1・2・3」を歌う。時代は少子化である。（なんやそれ）

★小川真一
さて次にパンドーラの箱が開けられるのはいつのことになるのか。フウインのともしび、なんちて。

★荻原魚雷
封印したい過去、昔、クロボトキングスというバンドで、セーラー服姿で反原発ソングを歌ってました。

★鹿島良雄
勤めている会社のリストラ騒動は一段落。現在、下北界隈でバンドを色々研究中。ギャルも物色中。

★川口瑞夫
封印したい女優なら安室奈美恵と浜崎あゆみでしょう。ドラマ界は惜しい人材をJポップに取られちゃいました。

★河田拓也
久保田真琴&うずまきのライブ、ディラン&デッドって感じでめちゃ渋い。ゴジさん「連合赤軍」はやく撮って！

★川本マコト
電気は素晴らしい。ただJポップとして語る際やっかいなのは、「shangri-la」のヒットをロックと捉えるか否か。

★神崎鉄男
過去を牧歌的で平和だったと見るのは勘違い。ただ、コミュニケーションの技術（言い訳）だけは、姑息に進歩。

★くれい響
セイア、突然の解散から一年。あのときの衝撃は一生忘れない。だけど彼女たちとの二年間は、もっと忘れない！

★楠元伸哉
残したくない曲の選考理由は様々だが、名曲であるという前提と、苦肉の封印をご理解いただきたい。

★栗原裕一郎
有象無象あってこそ文化だから「封印」されるべきものなんてないんですけどね。ってわけで選択の基準は「いろいろあるさ」です。

★夏至明
無職で新世紀&三十路を迎える71年組院生ライター。「スクラップ・スティクス」第3号（随想社）は中野タコシェで部門2位と好評。

★小暮秀夫
90年代テクノ・カルチャーから落ちこぼれたおかげで、テクノと心中せずにすんだ音楽ライター。今一番のお気に入りは、女優のつぐみちゃん。

★さかもと未明
漫画家……のハズだが、本業の傍ら始めた、エッセイ、ルポも今は本業。新発売「突撃！自衛隊」（新潮社）はそんな著者の真骨頂！

★佐藤国春
木村大、吉田兄弟らが未来を拓く伝統音楽界が理不尽にうらやましい70年代半ば生まれ。

★篠原章
封印のおかげで「後は死ぬだけ」という境地に達する一方、J—POPの次のステージが見えてきた気がする。前途洋々だといいね。

★杉山達
新世紀に向けて、葬り去るはずの渡辺満里奈を本気で聴き返してちゃな。なんだ、この感銘は……。雲に乗りたい〜、柔らかな雲に〜。よろしく。

★支部長
76年生まれ。ライター。パソコンを自作し、13万の支出。だが交通事故に遭い、13万の保険金が支払われてプラマイゼロに。

★渋谷慶一
音楽批評家。ちょうど1990年頃、レコード店で働いていた。渋谷系のCDと元ネタの洋楽を並べて置くと一緒に売れた。

★下井草秀
71年生まれ。ライダーズに関しては自分が通ってきた道であり、バンド自体嫌いではないが、ファンのダサさが耐えられなくって。

★真保みゆき
最近、近くのものがよく見えないので、色味の凝ったCDの歌詞カード解読に苦労しています。求む、シルバー仕様CD！

★鈴木ゴロー
守備範囲は、80年代アイドル歌謡から、黒人音楽、フュージョンまで。

★高橋道彦
自作PCが約半年で3台に増殖中。う〜ん、困ったもんだ。でも、PCを弄りながら「音楽のデジタル化」の意味を肌で知った感じ。

★田中雄二
海援隊からXTCまで、幅広くギターポップを愛する雑誌編集者。「電子音楽インジャパン」「吹き替え洋画事典」などの著書がある。

★外山恒一
こんなはずじゃなかったのに30歳。同じ失敗を何度もくりかえすのは成長がないからではなく初心を貫いているからだと思いたい。

★奈落一騎
本業ワイルド7。でも、俺が本当に封印？したいのは、えびの「あわせみそ」（91年）。当時、一番良く聴いてました。

★奈良裕明
60年東京生まれ。20世紀最大の事件を第2次世界大戦とするなら、アルバムはPANTA「クリスタル・ナハト」か。

★二本松泰子
この原稿の執筆を機に、「二人目の男」についての考察を開始。早速、その男の故郷を歩き、新たなテーマ追求と作法の確立を願う。

★丹羽哲也
編集／ライターなど。以前休刊したふたつの某デジタル・カルチャー誌の編集者だった俺。IT革命に乗ってウェブで仕事中（苦笑）。

★バド石橋
BSデジタルのラジオ（毎金・カンツォーネ・316ch）に出演。全国で3人くらいは聞いているのだろうか。

★ばんびーな堂島
堂本剛マニア・夢はKinKi Kids研究の本を出すこと。ああ、裏本じゃなくてオフィシャルなやつ（笑）

★広瀬陽一
最近急に白髪が増え、生命曲線の下降を実感。心なしか勃起度も緩くなったようで。ああ、少女監禁するくらいのパワーが欲しい。

★藤木TDC
ゴールデンハーフのいにしえよりB級和モノ一筋百万光年。笑われても笑われてもT&Cバンバー支持!!

★宝泉薫
今回は、自分がいかに保守的な人間かを再確認させられ、勉強になりました。21世紀は演歌と歌謡曲の世紀にしたい。

★本橋誠
東京蒲田出身。よく暴走族上がりに見られますが、違います。

★増田聡
これ執筆のため渡辺美里を聞き直してたらひどい鬱に陥り、他の原稿を落としてしまう羽目に。この場を借りてお詫びします。

★見崎鉄
私家版「このJポップがすごい」今年の第1位は、カモメのジョナサンと人類史5万年を連想させるスピッツの「放浪カモメはどこまでも」

★丸目蔵人
漸増するマキシシングル。でも、ショップでの探しにくさにはホトホト閉口。背の部分のあんな小っちゃい字、ユーザーに読めってか！

★水越真紀
寅年生。「封印する」というより、状況や環境が変わることで呼び起こされる共感が減ることはあると思う。流行歌としてはその方が印象深いだろうな。

★三田貴彦
62年神奈川生まれ。元『宝島』編集者で「三獣が叱る」のコラム担当。現在はJSA認定のワインアドバイザーとなり酩酊の日々？

★ミヨ荻原
最近行ったライヴは「美輪明宏音楽会『愛』」。″ウンコなマスコミは死刑よ−!″と美輪様にMCで言われ、なんとなくブルーな日々。

★ムードマン
10Pを参照

★村松栄一
マンガ家。来年、相撲とパ・リーグと自民党がなくなる。21世紀はライブ黄金時代です。

★本田珠男
エディター。今回の浜崎特集で「女子高生の知り合いいない？」とあちこちに電話して気味悪がられる（泣）。協力してくれたみなさんに大感謝。

★谷亜ヒロコ
それでも、石橋凌主演の映画『さらば相棒』の新宿ロフトでのライブシーンにエキストラとして参加したのは良い思い出です。

★安田謙一
20世紀最後のマンガの収穫は、幻堂出版から復刻された鈴木漁生作品集。凄すぎます。待望の2巻も出ました！

★山本かずしげ
62年生まれ。米軍基地でロックの古典を聞いて育つ。10代中頃から、多くの日本のバンドのステージに関わる。

★湯浅学
ありふれた言葉も道端で買って来るとありがたく思えるのはあんたの中に元々あった言葉だから。ただの紙きれも売りようで宝か。

★吉村智樹
フリーライター、放送作家。新刊『ビックリ仰天！ 食べ歩きの旅』（鹿砦社）がもうすぐ出ます。

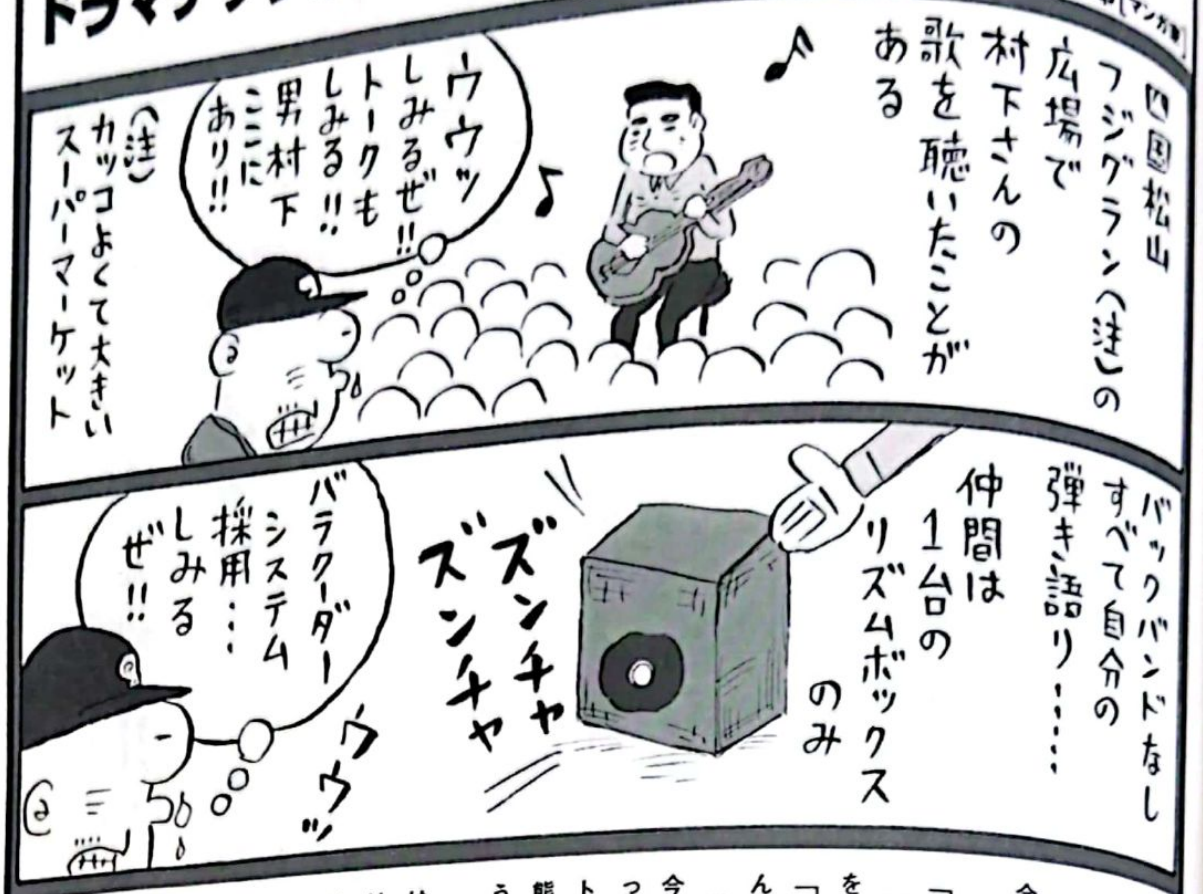
CamScannerでスキャン

オレのしあわせCDコレクション

村下孝蔵「ゆうこ」

カミングアウトの21世紀。思いこみたっぷりなドラマチック歌謡も成立しないと思うのであります

イラスト・文▶杉作J太郎（マンガ家）



「彼女いるんでしょ？」女に聞かれて、「いや、いないよ」いてもそう答えたのもおそらく今世紀まで。

妻帯者の場合には、「奥さん、どんな人？」聞かれたら即座に奇妙な演技を展開。憂鬱そうな顔をして、「いや、それがうまくいってないんだよ……」

てなこと言ったりする、これも今世紀まで。21世紀からは出遭った瞬間にすべてをカミングアウトして、それでもオーケーなら事態は進んでいくようになるのだろう。

彼氏いない暦なん年。前の男はこんな男だった。ちなみに性癖はSまたはM。具体的に×××はNGなんです。既に今日、聞いてもないことまで喋り倒す女は多数存在してますけどな。それが初対面だったりするから困ったもんであります。

いや、きっとそのほうが手順も簡単なんでしょうなあ。付き合ってからあてが外れたなんてこともないんだろうし。でも俺みたいな旧人類の場合はあてが外れるから面白いんでね。昼は淑女で夜には娼婦。いいじゃないですか。処女だと思ったら子持ちだった。おもろいじゃないの。女だと思ったら男だった。メルヘンだなあ！

ま、とにかくなんでもかんでもカミングアウトしたんではそんなドラマ性もなくなってしまうと思う次第。そんなわけで、思いこみたっぷりのドラマチック歌謡も成立しなくなると俺は思うよ。その代表格が歌謡界のミスター・ポーゴと謳われた村下孝蔵先輩であります。

どんな過去が君を
変えてしまったの
瞳のかげりがせつなすぎるよ
言い出せない愛は
海鳴りに似ている

「ゆうこ」より

今の、そしてこれから先の女性だったらこっちが考える前に答えてしまいますね。場所が飲み屋だったら俺はお湯割りかなんか飲みながらそれをただ聞いてるだけ。家で飲んでりゃよかったと思う瞬間であります！

「ゆうこ」作詞・作曲／村下孝蔵　82年4月発売

▶すぎさく・じぇいたろう▶DJ担当の超大型娯楽セクシーラジオ番組「美女の楽園」は岩手放送、山形放送、静岡放送、福井放送、中国放送、西日本放送、以上全国6局ネットで放送中！

CamScannerでスキャン

癒し音楽が再ブーム？

話題のヒーリング・アルバム『image』『Nature』をめぐる一考察

文▼松生恒夫（内科医・日本メンタルヘルス協会理事・産業医）

最近、またそろそろブームの癒し系音楽。
各レコード会社も競ってこの手のCDを発表しているが、
『皆前の"ヒーリング音楽"と聴き比べてみると、明らかに違う点が一つ。
どれも、"沈んだ曲調"ということだ。で、その理由はというと……。

収録曲のほとんどがマイナー調で内省的な曲

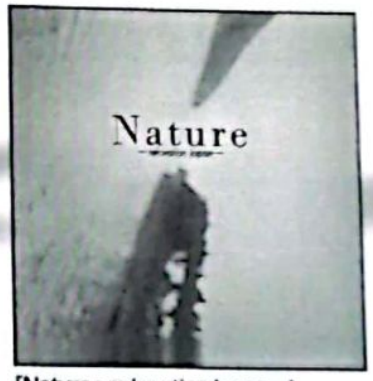
最近の『オリコン』のアルバム・チャートを見て、"ヒーリング・ミュージック"のコンピレーション・アルバム『image』が一位となっていたことに、ちょっと驚いた。坂本龍一の『Nature』（94年、製作者・三井の信M）の"ヒット"として以来の"快挙"ではア、というわけで、一体この『image』のどこがそんなに大衆受けするのか、以下でちょっと探ってみたい。

まずは、アルバムを聴いた感想から——。

M—1の「霧の浅瀬」は、UKロック・グループ、ソフト・マシーンのメンバーであったカール・ジェンキンズのミディアム・テンポのコーラスが美しいメロディアスなナンバー。M—2「Eupirka」は、バイオリニスト・葉加瀬太郎のマイナー調の日本人好みの曲。M—3「リベルタンゴ」は、ヨーヨー・マの暗いタンゴ……。

と、ここまで続けてCDを聴いて改めて気づいたのだが、"ヒーリング"といっても、マイナー調の沈んだ曲ばかりなのである。M—4「異人回廊」にいたっては、メロディだけ取り出すと晴めの演歌のような曲だ。曲中にお経のようなコーラスまで入っている。続くM—5「パリは燃えているか？」も、占領下のパリをイメージさせる暗い曲調。唯一の救いは、ゴンチチによるM—7「放課後の音楽室」の、太陽の下を思わせる明るいメロディくらいか。気分がパっと開放的になる瞬間だ。

残りの曲も、もちろん心地よいサウンドではあるけれど、曲調は似たり寄ったりだろう。イタリアの作曲家、E、モリコーネが関わった2曲と、NHKドラマ「あすか」のテーマ曲「風笛」



「Nature～relaxation japan～」
（キティMME）
●参加ミュージシャンは、宗次郎、佐藤正美、喜多郎、久石譲、溝口肇、岩代太郎、神山純一、白鳥英美子、ほか。全16曲収録。

「image（イマージュ）」
（ソニーレコード）
●参加ミュージシャンは、ヨーヨー・マ、シャルロット・チャーチ、葉加瀬太郎、ゴンチチ、坂本龍一、鳥山雄司ほか。全17曲収録。

CamScannerでスキャン

イラスト▶垂井ひろし

を除くと、そのほとんどがマイナー調で内省的な曲調なのである。

こうした曲調の曲は、なんとなくダークで内省的な気分の時に聴くと、気分が落ち着いて効果アリだが、逆に明るい気分の時に聴くと違和感を感じることの方が多い（もっとも、気分が明るい時には、この手の〝ヒーリング・ミュージック〟など普通は聴かないだろうが）。そして、この傾向は、最近の〝ヒーリング・ミュージック〟全般にいえることではないだろうか。

60年代サイケデリック・ブームとの類似性

以前この本でも何度か書いたことだが、こうした曲イメージと聴き手の気分の相関関係に関しては、《同質の原理》（52年に、I．アルトシューラーが提唱）を理解すると分かりやすい。《同質の原理》とは、人間の心理（感情の動き）同様に曲が持つイメージにも「気分」と「テンポ」の二つの性質があり、聴く側の心理状態とその時聴きたい音楽の間には、この「気分」と「テンポ」の点で共通項あるということ。つまり、聴き手はその時の「気分」と「テンポ」により、同質の「気分」と「テンポ」を持った曲を好んで聴くといったものだ。

この論に従えば、聴き手がこの『image』を聴いて爽快と感じるとしたら、精神的に結構、疲れている証拠。そんなアルバムがチャートで1位になるということは、やはり不況下で先の見えない不安を抱える人が軽薄い数で存在することを意味している。

これは、ベトナム戦争の頃の60年代後半のアメリカで、若者たちが不安を抱えドラッグに浸り、サイケデリック・ロック・ブームに発展したあの時代とも似ているような気がする。つまり、つらい現実からの逃避ということだ。

バブル時代の〝ヒーリング・ミュージック〟との違い

ちなみに、バブル経済華やかりし頃も、この手の〝ヒーリング・ミュージック〟は多数世に出ていたが、筆者の印象では、最近の作品よりもずっと明るい曲調のものが多かったような気がする。

例えば、リラクゼーションを目的で作られた作品で、加山雄三、吉川忠英ら6人のメンバーによるウクレレ・バンド、R．E．M SWIMMING CLUB BANDのアルバム『EBB TIDE』（89年）などはその最たるもの。『EBB TIDE（引き潮）』（60年代に流行った明るい曲調の曲）を6通りの異なるバージョンで60分以上も繰り返すだけのものだが、スローテンポにもかかわらず開放的。しかもヴァリエーション豊かで、飽きさせることなく聴く者の気分を解放してくれる。この他、林哲司の『ISLANDS IN THE STREAM』（90年）や、ゴンチチの『KIT』（91年）等も同様の曲調であり、やはり明るい時代には明るい曲調の音楽が〝癒し音楽〟としても望まれていたのだろう。

最近の〝ヒーリング・ミュージック〟に関していえば、『image』以外では、全曲日本人のアーティスト（宗次郎・神山純一・喜多郎等）による『Nature』なども人気らしい。が、こちらも『image』同様に、気分を穏やかにはしてくれるが、解放感とは程遠い印象である。今後、こうした音楽がもてはやされるとしたら、人々の抱える不安はかなり深刻だといわざるを得ない。

もっとも、本誌の読者はおそらく、ロックやR&Bを大音量で聴く方が気分爽快という御仁ばかりだろうから、この手の音楽とは無縁だろうけれど。

▶まついけ・つねお▶2001年1月に、『ソフト・ロック・イン・ジャパン』（音楽之友社）発刊予定。

連載

愛なき新世紀の「純音楽鑑賞講座」

文▼二本松泰子
イラスト▼さかもと未明

第8回 恋してないと死ぬ女

▼aiko

――恋愛キケン度数　100%　あなたは冷淡でダメな男ほどひどくハマってしまうタイプ。運良くつきあい始めても、今度は相手を失う恐怖で年中イライラ。それで結局、長続きせずという悪循環の繰り返しなのでは？――

女性誌の心理テストなんかに救いがあるわけはない。フミコは雑誌を閉じ、ため息とも深呼吸ともつかない息を長々と吐き出した。

「自称・恋愛ジャンキーaikoってどんな女の子？」

……あ、これこれ。これを読もうと思って買ったんだ。

「絶え間なく誰かに恋してます」

aikoは25歳。フミコより下だが、恋愛の感覚には同じ面がある。この悩みは年をとってもまったく解消されず、みじめさが増すばかりだ。

フミコは32歳になっても、年中無休で「只今片思い」。セックスはたまにするが、「彼氏」とは呼べない男だ。もっと確かな関係にしたいと思うが、どうしていいのかわからない。

「刹那愛の教典」でジャンキー女が再生

〈もう離しはしないと約束しなくてもいいから　不安で眠れない夜　隣にいて下さい　今夜そうして下さい〉（「愛の病」）

とりあえず、そばにいてくれる男は必要だ。そいつが自分をどう思っていようと、それを気にしてはならない。この〈隣にいて下さい〉ってのは使える。でも、永遠にそうしてくれってセマるわけでもなく、〈今夜（だけ）そうして下さい〉って感覚が男に負担を与えないんだろう……な。

ジャンキーだといいつつ、恋愛にタフな精神を持つaiko。詞を頭にたたき込むことで、フミコは何だかちょっぴり強い女になっていく気がしてきた。

●「ボーイフレンド」「密かなさよならの仕方」（いずれも作詞・作曲／aiko）～「ボーイフレンド」（ポニーキャニオン）収録

●「愛の病」「桜の時」（いずれも作詞・作曲／aiko）～「桜の樹の下」（ポニーキャニオン）収録

〈今まであたしがしてきたこと間違いじゃないとは言い切れない　ケドあなたと逢えたことで全て報われた気がするよ〉（「桜の時」）

〈全ての始まりがあなたとで　本当に良かったと心から思っている〉（「ボーイフレンド」）

刹那のつきあいかもしれないのに、相手に感謝の念すら持つ余裕。aikoは子供っぽく純情そうにみせながら、実は自分のほうが男より優位に立っている。

どうすればこんなふうになれるの？フミコは思わずそんなつぶやきをもらした。

〈「どこにいてもあたしの事を忘れたりしないで。」　この言葉を何よりもあなたに言いたかったわ〉（「密かなさよならの仕方」）

いちばん言いたいことは、ぐっとこ

▶にほんまつ・やすこ▶10/6 Cocco武道館ライブへ。イノセントクレイジー&ピュアハートが大炸裂の歌いっぷりに涙涙涙。私も彼女のようにありたい。

CamScannerでスキャン

純情田舎娘の秘めたる性衝動!?

軽快なバンジョーに乗せて、ウエスタンブーツにジーンズのショートパンツで唄うａｉｋｏのＰＶ。オーバーオールにコケシのようなオカッパ頭よりは少しマシになったが、あか抜けなさは相変わらずだ。

もしかすると、ａｉｋｏの田舎娘な格好も純情にみせるため、確信犯的にやっているのかもしれない。

〈テトラポット登ってててっぺん先脱んで宇宙に靴飛ばそう〉（「ボーイフレンド」）

テトラポットの形って三角でとがってて、あれって登るモンじゃないよね……。フミコはその形を浮かべながら、ふと、フロイトの夢判断を思い出した。鋭利なものや棒、蛇とかって性への衝動が隠されてるってことだよなー。うわー、ａｉｋｏってホントはすっげえＨな女のコなんじゃないのー！

〈早く逢って抱きたい〉（「ボーイフレンド」）

こんな詞もある。どうして、女のほうが「抱きたい」なのー！

興奮を覚えて、深夜にもかかわらずフミコは誰かにこのことを話したくてたまらなくなった。眠そうな声で電話に出たバツイチの女友達はフミコの話を真で聞った。

「だから、ボーイフレンドっていうのは若いコたちにとってはセックスフレンドって意味でしょ。本当にアンタって不器用でソンな性格ね」

友人の言葉に、フミコの高揚した気持ちは一瞬で萎えた。

佐野元春の〝現在〟と、Jポップの〝未来〟

コンピレーション・アルバム『GRASS』の正しい聴き方

文▼吉原聖洋［ライター］

▼佐野元春▲

効率主義のポップ・ソングに慣らされた者がより能動的な聴き手に進化するためには、激甘ケーキで肥大化した両耳のダイエットが必要。これでダイエットしてみる？

吐き気を催すほど複雑な現実に相応の敬意を払ったリアルな複雑性

最初は違和感があるかもしれない。イントロダクションにふさわしく、やや大袈裟な比喩を導入すれば、異次元へと通じるブラックホールに左足だけ突っ込んでしまったかのような違和感が……。

佐野元春のアルバム『GRASS～The 20th Anniversary Edition's 2nd』の話だ。2000年春にリリースされた『The 20th Anniversary Edition』がスタンダードなベスト盤だったとしたら、その姉妹作となるこの『GRASS』は意外な選曲と変則的な構成によるオルタナティヴなコンピレーション、と言えるだろう。しかし安易に〝ベスト盤〟だの〝コンピレーション〟だのと呼ぶことをためらわせる複雑性がここにはある。〝Jポップ〟の非音楽的即効性から遠く離れて、〝ヒーリング〟とかいうぬるま湯的な心地よさとも無縁の、吐き気を催すほど複雑な現実に相応の敬意を払ったリアルな複雑性。昨今のポップ・ミュージックからは失われてしまったこの複雑性が本稿冒頭の違和感を生む。

10秒聴いただけで泣いたり笑ったり濡れたり勃起したりさせなきゃならない効率至上主義のポップ・ソングが必然的に単純化していかざるを得ないことは言うまでもない。即効性が大前提になっているわけだから、その目的のために必要がないと看做された要素は無条件で削除される。その結果、複雑な現実とは無関係のピッカピカのポップ商品が出来上がるわけだ。

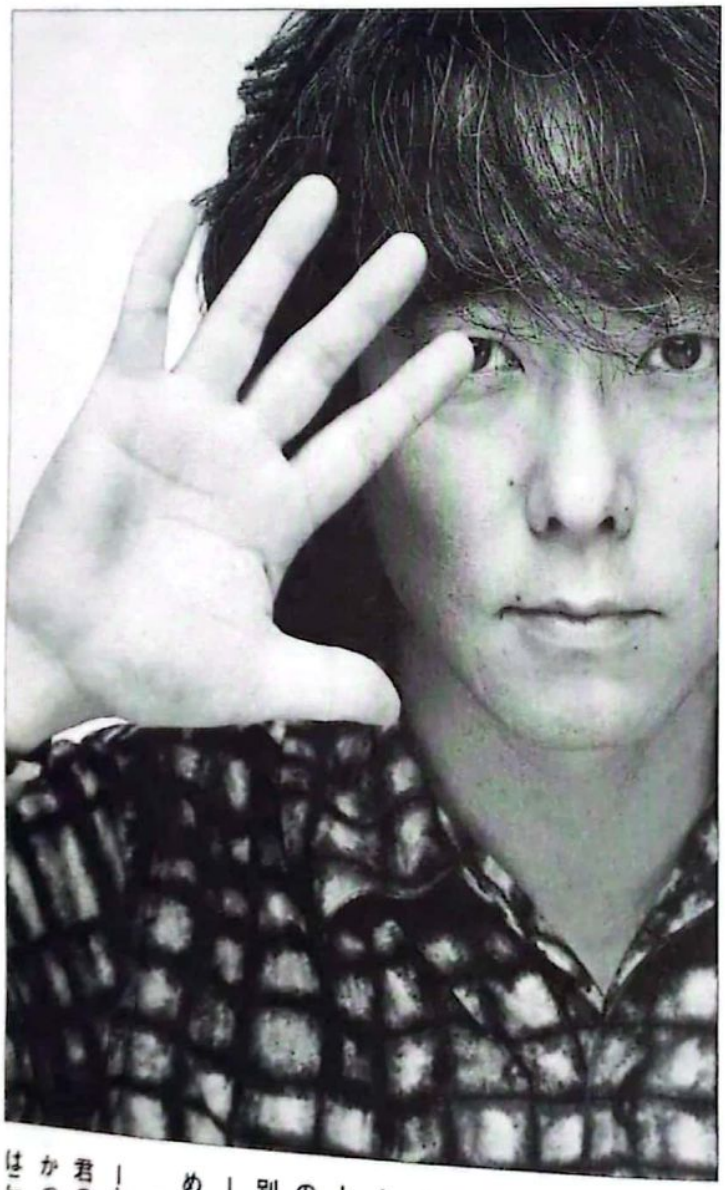
モーニング娘。やZARDや浜崎あゆみらのポップ・ソングがそういった効率至上主義体制の下で生産されたポップ商品であることは小学生だって知っているだろうが、いまやほぼすべてのJポップ系アーティストたちがそのシステムの下でそれぞれのポップ商品を制作している。ストリート仕様のフォーク・デュオだって、ギャングスタ仕様のラッパーだって、ネオアコ仕様のギター・ポップ・バンドだって、ニルヴァーナ仕様のオルタナティヴ・ロック・バンドだって、R&Bディーヴァ（なんだ、そりゃ？）仕様の女性シンガーだって、誰もがみんな必要以上に効率主義的になっている。

批判に対する彼らのエクスキューズは「時代の要請」。つまり「大衆がそれを求めているのだから」ってこと。より率直に言い換えてしまえば「だって、そうしなきゃ売れないんだもん」。

『GRASS～The 20th Anniversary Edition's 2nd』（エピック・ソニー）
●デビュー20周年を記念した作品集の第2弾。ボニー・ピンクとのデュエットによる新録曲、ザ・ハートランド時代の貴重な未発表曲、門外不出のシークレット・トラックなどを収録。オリジナル・アルバム以上に雄弁で饒舌なコンピレーションだ。

CamScannerでスキャン

いや、それはそれで構わない。やりたい連中はやればいい。ただ、それが自殺行為だってことを承知した上でやってもらいたい。即効性を大前提にした効率主義がポップ・ミュージックにとって緩慢な自殺行為だってことを認識した上でやってくれ。ポップ・ミュージックにとって致死量に値するかもしれない毒を自分が撒き散らしていることを充分に意識しながら毒を撒き散らしてくれ。



効率主義のポップ・ソングが、図らずも抹殺するもの

おいおい。お前ら、まさか何も知らずにやってるわけじゃないだろうな？知ってるだろ？　わかってやってるんだよな？

わかってるんだかどうだかわからない頼りない連中のために敢えて今さら書き殴り倒してやれば、彼らが殺しているのはノイズだ。それは音響的な意味でのノイズじゃない。楽音に対する雑音としてのノイズじゃない。効率主義によって抹殺されるのは、情報としてのノイズだ。ポップ・ミュージックに魅力的な複雑性を与えるはずの多様なノイズを効率主義的なシステムは抹殺してしまう。

だから即効性を大前提にした効率主義的なポップ・ソングには刹那的な効果しか期待できない。ノイズを除去したポップ・ソングなんて、ひたすら甘いだけのケーキみたいなものだ。ひと口で充分。その後、君の舌は別のより甘いケーキを欲しがり始める。

そんな激甘ケーキに慣らされた君の舌、じゃなかった君の耳にはこの『GRASS』は異次元のポップ・ソング集のように響くかもしれない。佐野元春はノイズの塊のようなポップ・アーティストだ。数えきれないくらいの多様なノイズがここでは生きている。しかもその無数のノイズが有機的に絡み合いながら摩訶不思議な物語を語り始める。『GRASS』を聴く、というのは君自身の〝新しい物語〟を擬似体験することに他ならない。そして君は〝新しい物語〟の中で未知の自分と出会う。まるで前世の自分と再会したような、あるいは来世の自分と対面してしまったかのような、日常的なリアリティから逸脱した〝センス・オブ・ワンダー〟がここにはある。

それは流行りの〝ヒーリング〟の次元をはるかに超えた強烈な音楽体験だ。現実と夢想、正気と狂気、そして調和と混沌との微妙な差異を正確に描写しながら、佐野の音楽はそのズレを徐々に増幅させ、最終的には未知の地平へと聴き手を連れていく。『GRASS』を体験した君はもう昨日までの君じゃない。

ただし、効率主義のポップ・ソングに慣らされた者がより能動的な聴き手に進化するためには激甘ケーキで肥大化した両耳のダイエットが必要だ。ダイエット、してみる？

▶よしはら・せいよう▶21世紀まで生き延びられるかどうか危ぶまれている絶滅寸前の珍獣の如きレアなライター。本人は抱腹絶倒の愉快な原稿を書いているつもりだが、残念ながら誰も笑ってくれない。それならば、と階段落ちのパフォーマンスでウケようと試みたら、背筋と肋骨を見事に損傷し、全治3カ月。現在は治療費を稼ぐ

CamScannerでスキャン

最後三面新春 2

カルトをシステムとして意識しちゃあ、つまらなくなるだけじゃない!?

『金字塔』から『ERA』へ。で、もっとも変化した点て、何？

文▼栗原裕一郎（フリーライター）

▼中村一義▲

話題の新作アルバム『ERA』。音楽としてのクオリティは『金字塔』よりもたしかにずっと上がっているのだけれど、しかし……。

中村一義の「革新性」とは？

いまさら何いってやがんだと叱られそうだが、音楽における詞というのは、けっこう難儀な問題をはらんでいたりする。私暴にいってしまうと、言葉の「意味」と「音」の関係の問題である。歌として聴くとき、それは「意味」なのか「音」なのか――。

中村一義の登場は、この「意味」と「音」の関係をひとつ次のレベルへ更新したと捉えられてきた。

あらためて歌詞だけを読んでも何が何だかわからないくらい日本語が抽象的に歪んでいたファースト・アルバム「金字塔」は（よくよく読めば輪郭くらいはつかめるにせよ）、「音」として聴くことがすんなりできた、というより聴くべきだった。あそこに散らばっていた言葉の破片から「意味」を紡ごうとすれば、「音楽とわたし（聴き手）」という関係だけでは情報がどうしても不足する以上、音楽誌などをとおして中村一義という人のあれやこれやを知らざるをえないハメになってしまう。

そういった聴き方ももちろんアリだが趣味ではない。それよりも、言葉が言葉であることを止めそうな地点で、「意味」とはまた違うメッセージを伴い音楽として結実していたことの方が圧倒的に重要だと思うし、それがまた中村の革新性でもあったはずだ。

だが、新曲「君ノ声」は「金字塔」のようには聴けない。詞が「意味」を帯びすぎているからだ。メロディに乗った上でも言葉が言葉として伝わるような仕方でこの曲、というかアルバム「ERA」は作られているんじゃないかということ。ここが「金字塔」から「ERA」にいたる変遷において、もっとも変化した点ではないか。

《誰にだって、光と影、あるはずなら、陽が落ちた瞬間に、ねぇ、優しさ、ねぇ、落とさぬように…。／（中略）僕だって、君だって、そう、代わりはいない。》（「君ノ声」）

「ERA」（東芝EMI）
1stの、世界に対する怯えとおののきによる輝きみたいなものは薄れ、矮小な共同体理解に安息した弛緩が目立つ。それはしかし、共同体内部ではきわめて流通しやすい類の成熟でもある。

「金字塔」（マーキュリー）
内向的な方法と言葉の断片で描き出される極私的世界が、それゆえに逆説的に普遍性を勝ち得ていた、希有かつ貴重な1stアルバム。

※本文中で引用した楽曲は、すべて作詞・作曲／中村一義

CamScannerでスキャン

これもたとえば、〈光と影〉の、〈僕として僕は行く、僕ら自覚ないんだろうな。叔は言う、こう…。「あぁ…ていのう」「もうけっこう！　叔等、住む場所へ行く。全て解決させたいんだ。僕は僕。もう、最高潮！　おとせ、あんなもんは…ねぇ。インチキばっかのさぁ。〉

と比較すれば、明らかに前者の方が、限定された意味を伝えるべく言葉が組織されていることがわかる。

そして、混沌としたフラグメントであることを止めた中村の詞から浮かび上がってくるメッセージが、意外と凡庸だったりすることにも気づく。

〈僕等がさぁ、雨にも負けて、風にも負ける、けど、晴れた日には進める生き物ならば、／そう。ねぇ、新しい地へ。そう、ねぇ、歩けるから。〉（「威風堂々（Part 2）」）

〈目そらさずに見て欲しい、本当にある事から。目の前に。〉（「ゲルニカ」）

〈ただ飛ぶ鳥に、涙がつたう、素晴らしき世界だね。〉（「素晴らしき世界」）

かけがえのない〈僕〉や〈君〉の無条件に近い肯定と根拠のないポジティヴ・シンキング。現状への強い違和とユートピアのようなものへの願い――。

イラスト▶上野千春

これらはまだイーシャンテンとはいえ、ニューエイジ思想などオカルティズムのお隣さんである。

ずいぶんとつまんねえモンになっちまったなあ、と思う。音楽としてのクオリティは「金字塔」よりもずっと上がっているのだけれど、しかし……。

「妄想」とカルトとプチ・カリスマ

そんな矢先、コップのなかで嵐が起きた。中村本人がオフィシャル・ホームページ（＊1）でそれまで〝ちんちんかもかも〟だった『スヌーザー』への決別宣言をしたのだ（9／30）。要約すると、『スヌーザー』10月号の記事が「妄想」にすぎることに我慢がならなかったというのが中村の主張。ネットでファンなどが騒いだものの、結局中村が自己完結するかのようにお終いをこれまた宣言して幕が閉じた（10／4）。

しかし、「スヌーザー」にせよ『ロッキング・オン・ジャパン』にせよ、ずっと前から「妄想」は炸裂していたのだし、中村にしたところで、〈レコード会社と音専誌によって暫定的につくられた仮想空間〉（©三田格／しかしこのセリフは簡明直裁で秀逸ですな）におけるファンの「妄想」を無意識にしかし最大限に利用することで立ち位置を築いてきた面があることは否めないだろう。それをいまになって、レコード会社移籍、新譜発売に併せたかのタイミングで批判してみせるなんて、いささかキナ臭い。

詞におけるメッセージ性の強調とこの一件を合わせて考えると、中村が、これまで無意識でしてきたことを意識的な方法論として認識し始めたということなのかもしれない。つまり、「妄想」の質をコントロールし等身大のプチ・カリスマとしての立ち位置を強く押し出していくと。

もちろんそれは、趣味だったり戦略だったりする部分だし、最近の田口ランディのブレイクなどを見てもわかるとおり商売として悪くない選択でもあるし、カルトをシステマチックに追求すれば必然的に行き着くところでもある。

しかし、だとすれば、なおさらつまんねえモンになっちまったねぇ、中村くん。

（＊1）http://www.five-d.co.jp/bin/nkmr/note/index.html

▶くりはら・ゆういちろう▶プロフィールは94P参照

CamScannerでスキャン

歌版三面奇事 3

『電波少年』不発企画のオチは箱&ハコの怪&快曲で大逆転?!

ひねってひねって、どこまで進ぬ

文▼高橋道彦［音楽評論家］

▼室井箱（滋）&山崎ハコ▲

今やテレビ番組企画タイアップ花盛りである。その潮流をリードしてきた『進ぬ！　電波少年』の新作は、箱男応援歌転じて引きこもり応援歌としてオンエア→CDリリースされた。音楽とテレビが組むとロクなことがないと思いがちだが、こいつは果たしてどうだ？

『進ぬ！　電波少年』は、はたして華原朋美にも応援歌を作るだろうか。どうせなら、ぜひやってほしいですよねぇ。じゃなけりゃ『電波少年』の名がすたる。もちろん、作詞・作曲は小室哲哉で。

なんてことを考えつつ、毎日毎日パソコンに向かって延々と原稿を書いてると、これじゃ俺もヒッキーじゃんと心のなかでつぶやいてしまうときもある。電磁波にヤラレているのか。しかし引きこもっていると、なぜか知らねどついついテレビを観てしまう。

自民党も内ゲバしているときが一番オモロイですよね、テレビ的には。将来、日本の借金地獄を背負わされる人間のひとりとしてはいつまでも面白がってるつもりはないけれど、それでもとりあえず原稿そっちのけで観てしまった。言い古されたことかもしれないけれど、テレビはやっぱりそんな即時性のあるネタと、何年も地道に取材を重ねたようなドキュメンタリーが面白い。それに加えて、くだらないお笑い〜バラエティ系の番組。これはもう、くだらなければくだらないほど、意味がなければないほど良い。『お笑いウルトラクイズ』、復活しないもんですかね。

そこいらのTVタイアップとは、ひと味違うぞ

さて、その『電波少年』において、全国の引きこもりの皆さんに捧げられたのが、室井箱（滋）&山崎ハコによるこの「希望」だ。本来、箱男の応援歌になるはずだった曲を、企画中止のために急遽スライド登板させた場当たり的な展開も素晴らしかった。いまだに五木寛之作詞「織江の唄」のドロドロッとしたイメージが強い山崎ハコを引っぱり出したのも見事にハマった。なにしろ「呪い」なんて曲もある人だ。山崎ハコの「呪い」は、中島みゆき「うらみ・ます」をものともせず、戸川純の「さよならをおしえて」に匹敵するくらいの鳥肌ものの名曲なのだ。マジ、ヤバいっす。一聴をお薦めします。

とはいえ、室井箱による応援歌が抜群に面白かったかというと、そうともいえない。だいたい『電波少年』の歴代応援歌は、妙に感動的すぎる使われ方がしてちょっとイヤだったのだ。それが今回は引きこもりというテーマがテーマだけに、室井滋をもってしても微妙に腰が引けていた感じだ。いま、引きこもりパワーは、『電波少年』さ

「希望」（東芝EMI）
●元イーストのメンバーで、大瀧詠一の
グ・バケーション」や荒井由実時代から
ミンのアルバムなどでギタリストとして
染みなのが吉川忠英。オザケンの「カロ
にのって」での仕事とはひと味違うアレ
聴けるのが、山崎ハコのこの「希望」だ。

えものともしないほど強烈なのだった。テレビじゃ不発だったから、シングルとなったこの「希望」もそれほど期待せずに聴いた。だがしかし！　わははは、笑った笑った。放映時よりも、もうひとつ捻りが加わっていて、確かにこれでようやく完結した感じがする。タイアップをはじめ、テレビと音楽が結びつくとロクなことがないとぼくなんかは思いがちだけど、「希望」はシングル化で最後の〝ぎち〟を用意するという見事なワザを披露している。

「エピタフ」ミーツ室井滋。さすがファンク好き？

室井滋ヴァージョンの冒頭、ロールするドラムスに続きメロトロンの音が神々しく響きわたる。これだけでも笑ってしまうが、ギターからドラムスの音色に至るまでよく似ているのだ、キング・クリムゾンの「エピタフ」に。当然、途中から曲調が変わるわけだけど、「エピタフ」のマイケル・ジャイルズ調のドラムスのリズム・パタンと音色自体はそのまま進むのがポイント高い。「エピタフ」といえば、なんといってもまず思い出すのは「クリムゾン・キングの宮殿」の阿鼻叫喚なジャケットだ。そんな暗い曲を引きこもり応援歌に結びつけた編曲の今泉洋、えらい！　確信犯ながら、まったく無理のないアレンジになっている。室井滋は思い入れを込めつつも、マジメかつけっこう淡々と歌っていて、仰々しいバックとつかず離れずの距離感がちょうどいい。

それに比べると、さすがに作者・山崎ハコのヴァージョンは、大ヴェテラン吉川忠英が編曲し、じっくり聴かせるフォーク調になっている。確かにここに「呪い」のようなものを持ってきたら、ちょっとくどく聞こえてしまったことだろう。

相当前に、室井滋はファンクが好きらしいという噂を聞いたことがある。あくまでも噂で真偽のほどは定かじゃないけど、ぼくはいままですっかりそうなのだろうと思いこんでいた。この原稿を書き出す段階で、はじめて〝そういや根拠がないな〟と思い当たったというくらい、間抜けなまでになんの疑いも感じていなかった。

着物をきて「おしどり涙」を歌いながらアジアを歩き回るのも、頭から（いやいやながらも）嬉々として箱をかぶるのも、〝さすがファンク好きは違う。しびれる〟と納得して観てたのだった。

となると、噂の真偽はどうでもよくなってしまう。ぼくにとっては、室井箱の「希望」はファンクである。室井滋は〝歩くファンク〟なのだ。

▶たかはし・みちひこ▶プロフィールは52P参照

CamScannerでスキャン

「流行り歌」の心象風景

第2回 松任谷由実

「ニッポンの女神」としてのユーミン

文▼烏賀陽弘道（『アエラ』編集部）

前回のサザンオールスターズと並ぶ日本のポップ・ミュージック界の「横綱」といえば、問違いなくこの人――。
でも、なぜこうも、彼女の歌が長期間にわたり世代を超えて支持されてきたのか。
恒例となった年末全国ツアーの模様、
彼女がパーソナリティを務めるラジオ番組「松任谷由実のサウンドアドベンチャー」でのやり取り、
そして、楽曲を軸にユーミンの魅力を解体してみれば、
そこには、「日本人の女神」としての彼女の特異な〝立ち位置〟が浮かび上がってくる。

CamScannerでスキャン

ユーミンは現代版「アメノウズメ」である

僕は特にユーミンのファンというわけではないが、彼女のコンサートは心から楽しんだ。三年ほど前の年末、会場は東京の代々木オリンピックプールだった。最寄りの原宿駅に降り立つと、まだ六時前だというのに日は暮れ、すっかり暗かった。街路樹にイルミネーションが灯り、街は夜の装いである。僕はブルゾンの襟を立て、ポケットに手を突っ込んだ。吐く息が白い。日付が大晦日に近づくにつれ、日没が早くなり、日に日に光が弱くなる。そんな夕暮れだった。

コンサートはというと、まるでおとぎの国の舞踏会のようだった。巨大な会場の真ん中の円形ステージが、十一人のミュージシャンを乗せてゆっくりと回る。ワイヤーで吊されたダンサーたちが、ピーターパンのように宙を舞い踊る。豪華絢爛。なんだかすごいなあ、と緊張していたら、何曲か終わったところでユーミンがしゃべり始めた。「今回は私たち、回転寿司のようにくるくると回っております」。会場が一斉に笑った。僕も笑った。肩がすっと軽くなった。回りを見ると、客はずっと穏やかな微笑みを湛えている。会場を満たしていたのは熱狂や陶酔というよりはくつろぎだった。ただの野次馬の僕でさえ何曲か耳に馴染んだ歌があって、場に受容されているという安心感があった。

ユーミンが年末に全国ツアーを始めるのが慣例化したのは一九八五年である。この、年末になると姿を見せ、歌と踊りを披露する女性は、日本人にとって単なるポップシンガー以上の意味を帯びている。

前号で、サザンの茅ヶ崎コンサートを例に、今も日本人がお盆になると「祖先霊供養のための血縁・地縁共同体回帰＋歌や踊りによる供養祭礼」という土着仏教的な信仰行動を無意識に辿っていることを指摘した。今回は、ユーミンを例に、年末年始になると日本人が無意識に辿る神道的な信仰行動について話そうと思う。

結論を先に言うと、ユーミンは「古事記」や「日本書紀」に登場する女神「アメノウズメ」の人物像に非常によく似ているのだ。それが、日本人の意識の下に横たわる理想の女性像の一つと共鳴するのではないか、と僕は考えている。

年末全国ツアーの「年末」の意味を考えてみる

前回も指摘したが、日本人という働き者民族が労働から離脱して許される祭日は、伝統的にはお盆と年末年始しかない。「帰省」という共同体回帰が約束ごとになっているのはどちらも同じだが、では何のための共同体回帰なのだろう。お盆は祖先霊供養だ。年末年始は？　そう、新年を祝うためである。では、なぜ、新年は祝わなくてはならないのか？

当たり前じゃん、と言うなかれ。僕はニューヨークで迎えた新年が忘れられない。タイムズ・スクエアのカウントダウンの馬鹿騒ぎはご存知だろう。大晦日の夜からNY中がああいうパーティーの嵐で、どこもかしこも酔っ払いだらけになるのだ。除夜の鐘の代わりに、新年の時報と共にウオーとかギョエーとか奇怪な歓声が街中から聞こえる。元日の朝、街はゴミとゲロだらけ。休日は一日だけで、二日から何事もなかったかのように出勤する。厳粛さもへッタクレもなかった。現行のグレゴリオ歴では、復活祭（イースター）が春分後の満月直後の日曜日になるように逆算して一月一日を決める。キリスト教社会にとって元日は何の宗教的な意味もないのだ。

日本人にとっての年末年始をもう一度考えてみよう。日本では年末は冬だ。日照時間が短くなり、光が弱まる。気温が下がる。寒い。人間の活動は低下する。木々は葉を落とし、動物たちは姿を隠す。農業の実りは途絶える。電気や暖房のない文明発達以前の人間にとって、冬は生存の危機だったはずだ。凍死するかもしれない。餓死するかもしれない。その命を脅かす危機は、すべて、太陽の光が弱まるせいなのだ。

ここに暦が登場すると、どうなるか。日付が大晦日に近づくにつれ、まるで年齢を重ね、寿命が尽きていくかのように光が弱くなっていく。ちなみに大晦日の「晦日」の原義は「月隠」（つごもり）のことだ。これは月が隠れて見えなくなる太陰暦の月の最終日を意味する。すなわち完全な闇が夜

▶うがや・ひろみち▶こないだ、フジの『お台場ストックマーケット』ってのに出演依頼が来たんで面白半分で出たら、これがワンダフルみたいなイケイケ番組で、小生完全に場違い。おまけにサンプラザ中野に「難しい名前ですねー！どう読むんですか一体？」とかツッコミ入れられて思わず「すみません」とか謝っちゃった。俺の青春を返せ。

CamScannerでスキャン

を支配する時なのだ。

つまり日本人にとって年末とは「古い年が死んでいく季節」なのではないか。そう考えると、大晦日の夜の厳粛さは、どこか葬送の儀式に似てはいないか。静まりかえった街に、重い除夜の鐘の音が響く。押し黙って参拝に向かう人々の列。ファイナルカウントダウンの百八回の鐘が尽きたところで、古い年はついに死を迎える。

元日の意味は、もう言うまでもないだろう。新しい年が生まれる日である。というより「一度死んだ古い年が新しく蘇る日」と言った方がいい。

これは当て推量ではない。日本人が今も「再生した新しい年」に大きな宗教的な価値を見いだしている証拠がある。「初日の出」である。厳かな元旦を迎える人は、今も昇る太陽に手を合わせる。そこまでしなくても、年賀状の絵柄として初日の出は不動の地位を占める。いやそれどころか、今でも日本の国旗は朝日そのものだし、新聞社やビール会社など数々の企業がその聖性にあやかろうと今でもアサヒを名乗っているではないか。日本人が有り難がる「朝日」は初日の出しかない。

元日を折り返し点として、季節は春に向かう（旧暦では元日は平均すると立春ころに来た）。太陽の光は回復し、生命と豊穣の季節が戻ってくる。つまり、元日とは「太陽の再生の祝祭」であり、初日の出とは「一度死んで再生した生命」のシンボルに他ならない。そう考えると、年末の厳粛さが葬列に似ている一方、正月の晴れやかさが生命の誕生の祝いに似ているのも納得が行く。これが自然信仰でなくて何だろう。

世界の危機を救った、大らかで、生命力に溢れた女神

前置きが長くなった。アメノウズメにご登場願おう。神話「古事記」から引用する。

アマテラスオオミカミは太陽の女神であり、古代神道では天上の神界「高天原」を主宰する最高神である。ある日、彼女がハタを織っていたところ、弟のスサノオノミコトが馬の死体を逆剥ぎにして投げ込む悪戯をした。驚いたハタオリ女がハタオリ機で陰部を突いて死んでしまった。怒ったアマテラスは洞窟（天の岩屋戸）の中に隠ったため、天地が常闇となり、災いが世に満ちた。困った神々は相談して、アメノウズメノミコトに踊りを頼んだ。

彼女は、サガリゴケをタスキにかけ、ツルマサキの蔦を頭にかぶり、笹を手に、空の桶の上で歌い、踊った。胸をはだけ、腰紐を陰部まで下げた彼女が、足を踏みならす音が大きく響いたので、神々はどっと笑った（『日本書紀』ではペニスを模したホコを掲げて踊る）。その楽しげな声を訝しんだアマテラスは、戸を細目に開けて、なぜそんなに喜んでいるのか問うた。「あなたより素晴らしい神様がいることが分かったので、喜んでいるのです」とアメノウズメは機転を効かせる。好奇心に駆られたアマテラスが身を乗り出したところを、力持ちの神タジカラオが手を掴んで引き出したため、この世に光が戻った。

この有名な「天の岩屋戸隠り」神話が何の寓意か、もうお分かりだろう。太陽の光が死に、再生するプロセスである。ここでは、アメノウズメが裸で踊った祭礼が、光の再生をもたらすことに注意してほしい。何と、ストリップが世界の危機を救うのだ。しかも最高神アマテラスにウソまでついている。裸、歌と踊り、そして笑い。何ともユーモラスで、大らかで、生命力に溢れた女神ではないか。

これは脱線だが、こうした「死と再生」は世界の原始宗教や神話によく出てくるテーマである。その儀式化されたものを文化人類学や宗教学、心理学では「通過儀礼（イニシエーション）」と呼ぶ。厳しい試練をくぐり抜けて社会の成員としての資格を得る成人儀礼がその代表例である。この「危機に遭遇して古い自己が死に、克服することで新しい自己が再生する」という主題は、ギリシア神話から「ドラゴンボール」、村上春樹の「羊をめぐる冒険」に至るまで脈々と受け継がれている。

さて、どういうわけか、日本人は年末を音楽的な季節だと考えている。思い出してほしい。なぜ日本人は狂いも狂って年末になると「喜びの歌」を歌うのだろう。

ポピュラー音楽でも、冒頭のユーミンを筆頭に、恒例になった年末コンサートは実に多い。イエロ

CamScannerでスキャン

ヒットチャート"トップ30"シングル作品

text▶栗原裕一郎

順位	作品タイトル	アーティスト	レコード会社	発売日	寸評
1	Everything	Misia	アリスタジャパン	10.25	小柳ゆきで疲れた耳にはさすがに心地よい。あちらこちら既聴感があるものの売れるのはわかる。カラオケで歌おうってのは理解できないが。
2	AUDIENCE (30万枚完全限定生産)	浜崎あゆみ	エイベックス・トラックス	11.1	コムロか!?と思ったら違った、D.A.Iだそうな。こうしてコムロという遺伝子は、乗り物を換え次世代へ生き残ってゆく。古い?(笑)
3	この青い空、みどり ～BLUE IN GREEN～	サザンオールスターズ	ビクターエンタテインメント	11.1	まさかここまでチャートに復活してくるとは……。こうなると日本人のハートをがっちり掴んでいるだけに強いですな。金鳥の夏。
4	Treasure	hiro	トイズファクトリー	10.25	これもコムロっぽいなぁ。葉山拓亮だそうな。知らん。そういや「ミーム」に結めた音楽評論って見あたらないが、あざとすぎるから?
5	BRILLIANT WORLD	THE YELLOW MONKEY	ファンハウス	11.1	都立大の学祭でタナソウ氏がイエモンを「ホスト・ロック」といっていた。不覚にもウケてしまった。最高な世界へって福永法源かいっ!
6	さよなら大好きな人／愛する人よ	花＊花	ワーナーミュージック・ジャパン	10.25	前回「よくわからない」と書いたけれど、新曲を聴いてさらにわからなくなりました。黒っぽい血が入ってるのはわかった。でも何故?
7	LOVE OR LUST	平井堅	デフスターレコード	10.18	黒い血が流れていないおれとしては全然心経がないので興味が湧かないが、和製R&Bって歳食ったらキツそうだとかつい考えてしまう。
8	飛べない鳥	ゆず	SENHA & Co.	10.18	飛べない鳥、ね……。こういうわかりやすいJポップ的メタファーって、もう大分蓄積されたはず。そろそろ誰か、データベース化しない?
9	サウダージ	ボルノグラフィティ	ソニーレコード	9.13	前号のレビューでハルイチをヴォーカルと書いてしまいました。ギターです。板橋区のウサギちゃん♥他、皆さんご指摘どうもでした。
10	CHANGE THE WORLD	V6	エイベックス・トラックス	10.25	作家が変わろうとタレントが変わろうと、通奏低音のように漂うジャニーズ・テイスト。音を決定するブランドの呪縛。
11	Last Smile	LOVE PSYCHEDELICO	ビクターエンタテインメント	11.1	おっ、カッコいいじゃん。手持ちのカード、少なそうだけど。日英チャンポンの詞は評価の分かれるところか。日本語を大切にしよう。
12	HEY!	福山雅治	ユニバーサルミュージック	10.12	一流どころを取り揃えたバックはさすが。それにしても、どーということのない歌だねえ。こういうの売れるうちがJポップの華といえ。
13	ボーイフレンド	aiko	ポニーキャニオン	9.20	ヘンな歌。A～Cメロがバラバラで統一感ない。歌詞もしっちゃかめっちゃか。それはそうと、PVで足出してんのはウリってことなのか?
14	雲のカケラ	Every Little Thing	エイベックス・トラックス	10.18	2つ入ってるリミックスの方がオリジナルよりは面白いかな、そこそこ。しかし、こういうバンドル・リミックスってみんな聴いてる?
15	らいおんハート	SMAP	ビクターエンタテインメント	8.30	叶姉妹がゲストの「スマスマ」は面白かった。底もなく舞い上がるスマップに叶姉妹の底力を…見ねえって。

CamScannerでスキャン

試聴&ランダムノーツ

○チャートは、「"オリコン"ウィーク　the Ichiban」11月20日号より

順位	作品タイトル	アーティスト	レコード会社	発売日	寸評
16	月光	鬼束ちひろ	東芝EMI	8.9	「何を隠そう私は部屋に電話を引いてないのです。嫌いなんです」。オフィシャルBBSの本人の書き込み。隠すも何も、意外性がないって。
17	my sweet darlin'	矢井田瞳	東芝EMI	10.4	c/wがシニード・オコナーのカヴァーかあ。やるなあ。あんだけ叩かれてんのに根性ある……、あ、無謀なだけ?
18	Why I'm Me	RIZE	エピック レコード	11.1	うーむ、ある意味ドラゴン・アッシュよりも強力かもしれない。c/w〈でも　たまには飲もうぜ日本酒　So〉、とうとう、ここまで来たか。
19	恋はスリル、ショック、サスペンス	愛内里菜	GIZA studio	10.25	これがウワサの愛内里菜ですか。初めて聴きました。想像していたとおりの音でした。歌詞の下世話さがポイントでしょうか。パラパラだし。
20	ふれていたい	GRAPEVINE	ポニー キャニオン	11.1	新境地?　ミョーにノー天気な歌詞でどこを目指す?　〈レノンがパーでぼくはグー〉って……。音は相変わらず。
21	アイモカワラズ	藤井隆	アンティノス・レコード	11.1	藤井隆のキャラクターと「です・ます」歌詞のマッチングが妙。ペット・ショップ・ボーイズみたいな大ゲサなオケもヤケに座りがいいなあ。
22	if...	DA PUMP	エイベックス・トラックス	9.27	「トガシさん、このラップダサくないっスか?」「ボンバヘッ!（これがイマじゃん?）」「そーっスかぁ?」「ボンバヘッ!（うん）」
23	LOVE JUNKIE	布袋寅泰	東芝EMI	10.25	PVにノックダウン。前回はナマいってすみませんでした。このカッコよさわかんねーボンクラとは金輪際口なんかききません。
24	秋風の狂詩曲	Raphael	フォーライフ	11.1	ご冥福をお祈りいたします。
25	LOVE IS ENERGY!	EE JUMP	トイズ ファクトリー	10.18	う〜ん、子供をこういう風に組み合わせて（女×男）歌謡ラップやらせて、どこを狙ってんでしょ?　曲は好きかも。正しいって気がする。
26	慎吾ママのおはロック	慎吾ママ	ビクター エンタテイン メント	8.18	JBがゲストの「スマスマ」は面白かった。「オッハー」を気に入り訳もわからず繰り返すJBにエンターティナーの魂を……見ねえってば。
27	グロウアップ	Hysteric Blue	ソニー レコード	10.25	〈教えてよ　まだ知らないメロディー〉のとこがちょっとツボにハマった。ありきたりだって? うん。でも、ポップスってそういうもんでしょ?
28	PLEASE SMILE AGAIN (TK Original mix)	安室奈美恵	エイベックス・トラックス	10.4	PVを観たときは「おおっ、カッコいい!」って思ったんだけど……。「日経エンタ!」の「TK通信」も終わったし。もうじき21世紀か。
29	friends (「purple(friends他4曲A面)」)	shela	エイベックス・トラックス	10.18	突然、便所の芳香剤の匂いがした。不審に思い匂いの元を探すとジャケットに染み込ませてあったのだった。人騒がせな。
30	Fall Again	TRICERATOPS	エピック レコード	10.25	サビはいいね。でもそれだけ。どうもやっぱり、ロックと呼ぶには色気みたいなものが決定的に欠けていると思う。このバンドには。

CamScannerでスキャン

07▶「日吉」

KAB.

谷亜ヒロコ［作詞家］

今の世の中、複雑なようでいて保守的。もっとキャラに合った分かりやすい曲を

「日吉」（マクセル・イーキューブ）
収録曲▶①すべてのはじまり（「日吉」盤上にて）②生活③本当は泣きたいクセに④青空パス⑤Realize!?⑥雨の遊園地⑦夢など見るひまはない⑧擦り切れても青いあの頃⑨散歩道他全12曲

KAB.が自分のホームページ上で「戸籍上は女だけど、心は男なんです」と告白していた。自分は男だと思っているのに、体を見ると女。とりあえず門外漢である私が言うのも何なんだが、これはかなりつらいことなのではないだろうか？　そんなことを思いながら、アルバムを聞くと分かるのは、KAB.はかなり繊細で傷つきやすい人間、ということ。誰かが言った何気ない言葉に心を痛め、ちょっとした優しさに触れるだけで感動出来る人。ほら、あなたの周りにもいたでしょう。そういう人って、ナイーブだと気付かれたくないために、いろんなことで武装していたりしませんでした？　私の友達で絵や詞を書く天才肌のあるアーティストは、人の1万倍くらいナイーブだったために、女なのに「まさ」ろ」と戸籍上の名前まで改名してしまいました。ま、それはいいんだけど、KAB.の場合は、モヒカン頭と半ズボンという姿で武装している。

でもねー、このルックスは彼には合っているんでしょうが、どうにもこうにも音楽とマッチしない。音楽的には、ニューミュージックって言うんでしょうか。フォークギターにエレキギターがむせび泣いてます。そして詞の方は、4畳半フォークっぽい世界がぶんぶん漂う。誰でもが見たことのある風景。たとえば夕暮れや人ごみの雑踏から生活感たっぷりに浮かび上がる想い。悩み、切なさを素直に歌い上げているってとこなのでしょうか。

それなのに実際に歌うKAB.は、モヒカンと半ズボン。「男なの？女なの？」と聞かれたら、自分を男です、と言う。おまけにテキヤのアンちゃんみたいな入れ墨Tシャツを好んで着ている。そのすべてが結びついていかない。例えて言うなら、もしミスチルのボーカルが女だったら。宇多田ヒカルが40歳だったら。浜崎あゆみの体重が100kgあったら、そんな違和感かも。よう分からんが。

本人達は比較されるのを死ぬほどイヤだと思うけど、昔GAOが歌っていたヒット曲ってあったでしょう。あれって、とっても中性的な魅力を出していたと思う。もちろん、GAOは「むちゃくちゃ女だって！」ってテレビで言っていた覚えがあるんだけど、あの時はルックスと歌と声と楽曲のイメージがピッタリとしていたと思う。

資料的には「そのルックスとモヒカンからは到底想像がつかないPOPでキャッチーなメロディ」うんぬんと書いてありました。でも、到底想像がつかない、ってよりか、今の世の中、複雑なようでいて保守的。超難しいよりも簡単じゃないと、私のようなオバカさんには付いていけません。もうカミングアウトしてしまったようなんで、KAB.のそのルックスで、男らしさと優しさがかみしめられて、生活感がない詞の曲。そんないろんなことが重なりピッタリとした瞬間。もしかしたら、KAB.の大ヒット曲が生まれるかもね。っていうか、シングルの「本当は泣きたいクセに」は割とこの辺をもう意識しているような……？

★極言2行情報★
アルバムタイトルとなっている「日吉」は、KAB.が生まれ育った街。え？これまた意外でしょう。そしてKAB.という名前は小さい時からのニックネーム。これは、もしやザリーちゃんの弟から？ってのはピンポンだと思う。多分。

CamScannerでスキャン

スーパーカー

「割り算ができない個性」なんていらない!?

三田格［ライター］

クラブ音楽を取り入れた今作は、変貌する日本を映し出す鏡？

14 ▼「Futurama」

5作目なのにサード。「フジヤマ」ならぬ「フチュラマ」。サウンドはいきなりRSW「サンダーII」だけど、歌詞では相変わらず気がない振りを続けまくり。〝自分がないこともない、意見がないこともない〟〝いいさ、どうせいい案ないし〟〝これはどう、だなんてまだとうぶんは言わなくたっていいか〟〝俺はそう、いい加減なんだ〟と（自己顕示の伊勢湾台風状態と化しているヒップホップ・ムーヴメントを鼻でバカにしているというのか）かつての〝あいまいな日本の私〟に回帰するべく〝投げやり〟に〝スネた響き〟まで盛り込んで〝この時期〟ならではのロック的な皮肉に磨きをかけている。

彼らと同じく東北出身の流行作家・恩田陸が渋谷に集まってくる若年層を評して次のように書いている一節がある。〝人待ち顔、営業の顔、暇潰しの顔とさまざまな表情――だがそれでいて兄弟ではないかと思うほど似ている顔の群れ／俺は違う人とは違うあいつとは違う／あたしを見てあたしの方が可愛いあの子より可愛い／俺にやらせろ・あたしを選んで・みんなの中から・僕だけに奇跡を・あたしだけに幸運を／どの目もそう言ってる。だからこそ皆同じ顔に見えるのだ〟（『新・D坂の殺人事件』、初出『青春と読書』）

面と向かって自分の意見を述べないことでは定評のあった日本人がいつの頃からか個人の尊厳をありとあらゆる価値に優先し、自分は絶対であり、必要があっても自分を抑えなくなってきたことは、とりあえずおたくというタームがキーになっていたりするんだろうけれど、その感覚がさらに「割り算ができないのも個性だ」という〝一般化〟にまで流れ着いた結果、〝人と違う〟はあまりにもありふれた自意識の保ち方となり、だからこそスーパーカーも前作で〝今はまだ流されていよう〟とか〝誰かと同じが僕には幸せだから〟、もしくは〝長いものには巻かれたい〟と歌ってそれらを牽制し、〝この時期〟ならではのロックであること＝ありふれた気運に流されていないことを標榜できたのだろう。しかし、〝俺は違う人とは違うあいつとは違う〟という意識をより強く持っていたからこそ、それを安直には表現しないというだけで、実際にはスーパーカーも、では、それを（〝誰かと同じが僕には幸せ…ではない〟ということを）そうはいわずして音楽で表すことができるのかということになっていく。

恩田陸は続ける。〝批判するな。腹を立てるな。眉をひそめるな。見下すな〟（ここまではスーパーカーそのまま）〝批判は心身を緊張させ、軽蔑は感情を摩耗させる。この猛スピードで疾走する大都市の中で自分を擦り切れさせないためには、全てをそのまま受け入れることが大切だ。しかも、ただ受け入れるだけで

CamScannerでスキャン

[illegible]

新たなと思った（川久保由香）みたいなパターンだ（ちなみに、あの氷川きよしにも似たエピソードがある）。

また、演歌に興味を持ったきっかけも、祖父母や両親の影響が大半で、中には永井みゆきや黒木梨花のように14、15歳で内弟子経験を持つ者も珍しくない。要するに、彼女たちは総じて感激屋で、肉親や恩人、あるいは町のお年寄りといったものとの関係が濃く愛着を抱きやすいのである。

そのあたりを象徴するのが、田川寿美の「赤いひざかけ」（「こぼれ月」C／W曲）だ。本人の詞になるこの作品は、祖母への思いを歌ったもので〈こんど何日テレビに出るの〉と電話をかけてくる祖母に〈歌の仕事はいろいろよ　助けて欲しいときもある〉と心の中でよびかけたりする。これほど素朴で泣ける心情吐露というものは、Jポップ系アイドルではちょっとお目にかかれないだろう。

本気でお姫様になりきる女の子

さて、アイドルといえば、一風変わった存在がいる。山本智子――デビュー2年目だが、その魅力を強烈に印象づけられたのは、今秋『歌うヘッドライト』（TBSラジオ）の木曜早朝に登場してからだ。例えば、CMの合間に本人が考案したというこんな自己紹介が流れる。〝今朝のお相手は、お姫様に憧れるちょっと不思議な山satoこと山本智子です〟――今どき、こんなキャッチフレーズはあまり流行らない。にもかかわらず、それをやっているところに本物のアイドル魂を感じてしまったのである。

そこで翌日、小豆島から大分の中津に移動し、コンサートに出かけた。氷川きよし、川久保由香とのジョイントだったが、筆者にとっては前日以上の〝桃源郷〟だ。いや〝山sato〟風にいえば〝おとぎの国〟か。つまりはそれくらい、純白のドレスでステージに立った彼女は〝お姫様〟していた。ルックスや高音の澄み切った歌声はもとより、仕草一つ一つに清潔な媚態というものがあり、これは教えられてできるものではない。幼い頃、松田聖子に憧れ「お人形になりたいと思い続けてる」ゆえの才能だろう。さらに「憧れはだれにもあるもので、夢見ることは自然なこと」だとも。それゆえ、彼女は憧れがドレスを着て歌っているようなオーラを放ち、幸せな気分を醸し出すのだ。

終了後の即売会では、ファンとおぼしき若者が数人、記念撮影をせがんだり手紙を渡したりしていた。それもまた、かつてのアイドルのイヴェントでは日常的に見られたが、今では絶滅寸前の光景だ。この手のふれあい戦略を得意にしてきた芸映が、広末涼子ではほとんどイヴェントをやらなかった事実が示すように、アイドル業界はこういう作業を切り捨ててきた。もっといえば、涙も、素朴な心情吐露も、憧れも、お姫様ドレスも、即売会も、現代にあってはちょっと〝恥ずかしい〟ものだろう。

しかし、本気でお姫様になりきる女の子には、本気で騎士（ナイト）になりたがる男が集まり、その構図がさらにヒロインを輝かせる。ファンとのふれあいを大事にしつつも、虚構性にこだわる演歌には、そんな古きよきアイドルの形がまだ成立し得るのではないか。

演歌ルネッサンスのヒントは、案外そんなところにも隠れているかもしれない。

▶地元にも溶け込んでいた秋月ひかり。昔の佐野星子みたいな性格と関西弁の喋りがいとおかし。

▶星子風ぶりっこスタイルに演歌で出会うとは。客に「可愛い？」と問うケレン味のなさも王道的。

▲旅情演歌＋橋モノの組み合わせが完璧なデビュー曲（左）。第2弾（右）はより本格志向に。

今月の山本智子（今月の冠二郎、はお休みです。冠さん、すみません）

▼11月9日放送分の『歌うヘッドライト』では、肌の調子がよくないからと「今日から山satoはお菓子を食べません。皆さんとお約束します」と宣言。こんな話もさりげなくネタにできるのが、アイドル性の高さだ。現在の髪型はもう少し短く、一時期の安倍なつみに匹敵するピュア・ビューティ。

▼ほうせん・かおる▼プロフィールは31P参照

「赤いひざかけ」作詞／田川寿美・補作詞／林紀彦・作曲／大谷明裕・編曲／前田俊明

CamScannerでスキャン

栗原　でも、音楽ってそういう時代の空気からはワンテンポずれるでしょ。80年代的相対化を実践するのが渋谷系だったみたいに。だから80年代ってロック的にはむしろベタな時代で、ブルーハーツだけが突出していたとも感じないんですけど、確かに、オザキに比べると、なんかこう、乾いてましたよね。

Jの黙示録

――話変わりますけど、最近、音楽番組が増えてますけど、テレビ局の人たちって意外にこの雑誌結構チェックしてるんですねえ。著者の連絡先教えて欲しいという連絡、よくあるんですよ。

栗原　でも、あの言説をそのままテレビで流すわけにはいかんでしょ。おれに富澤一誠になれというのか、とか（笑）。

下井草　富澤一誠になれたらいいですよねえ（笑）。あんな面白いの、ないですよ。

栗原　『Mの黙示録』（テレビ朝日）、欠かさず録画しちゃうもんな（笑）。

下井草　あれは観ますよねえ。「いま、漢字の曲名が流行っています」――、なんだと思いましたもん（笑）。

栗原　「いま、数字のアーティスト名が流行っています」とかね（笑）。

下井草　そうそうそう。何でも言えるんですよね、ああなるともう。「これまで英語のタイトルの流行っていた反動で……」とか、あの人みんな「反動」ですから（笑）。

鈴木　『カノッサの屈辱』じゃないんだからっていう（笑）。

――あれ、本人は大マジでやってるんですかねぇ？

下井草　いやあ、あくまでも「仕事」だからと醒めてる気はするんですけど、言ってることに関しては結構マジじゃないかなと思いますよ。

栗原　なんたって東大だしね。

下井草　あの人ぐらい東大出身を売りにしている人もいないですよね。しかも、中退というところに過剰な意味というかロマン（笑）を置いてる。

――あの番組観たときに、「こういう打ち出しもありだよなあ」って正直思いました（笑）。もう雑誌、全部あのノリに変えちゃってもいいかなって。でも、あれは音楽評論家の大御所の「ご託宣」という打ち出しが、実は面白いわけですけど。

下井草　大御所は大御所ですよねえ。昔はメディアが少なかったから、そのなかで政治力持っちゃったところはあるでしょうね。「偏差値40からの音楽ライター予備校」にも、「富沢一誠への道」ってサブタイトルつけようかな（笑）。

鈴木　『Mの黙示録』、そのまま単行本にしたら結構売れるんじゃない？

下井草　したいですねえ。あの人のコーナーだけをねえ、こうギュッと（笑）。

――ところで、強引にまとめに入りますが、来世紀は「Jポップ」はどうなるでしょう？

栗原　「Jポップ」に限らないけど、ナップスターの影響は無視できないかなあと。回線が太くなる来年あたり、ひとつ山がありそう。

鈴木　回線が太くなればCDの売り上げは確実に減る。マニア向けアイテムになっちゃう。

下井草　物に対してフェティッシュにこだわる人だけがCDを買うことになるよね。ネット配信普及が大勢を占めるという大方の予測に対しては、いや、レコード屋の雰囲気を味わうことにこそ醍醐味があるのだっていう反論があるけど。でも、今やどのレコード屋行ってもおんなじような品ぞろえで、そんならネット購入でいいやって感じ。

栗原　オンライン書店が伸してきたのも、本屋が金太郎飴で本がないって現実の要請からだし。データ配信よりブツのネット通販が伸びると思う。

鈴木　そしてより均質化が行き渡って「Jポップ」の恥ずかしさもなくなると。未来はとりあえず明るい……のか？

下井草　あとは個々が思う「Jポップ」の定義次第かな。でもロックみたいに思想ばっかり云々するようになったら、この雑誌も『ロッキング・オン』になるでしょう（笑）。

栗原　富澤一誠になれれば、「Jポップ」なんてどうでもいいや、おれは（笑）。

ピンクパンクぽん太④

▶しもいぐさ・しゅう▶プロフィールは65P参照

CamScannerでスキャン